昭和十年七月十五日印刷
昭和十年七月二十日發行
昭和十三年六月十日再版

國譯一切經 阿含部 二

【改正定價壹圓廿五錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

製本所　兩角製本所

す。是の如く廣說し乃至聖戒も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四三) 一三九五(九〇四)[九四](聲聞第一經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『諸の世間の衆生、彼の一切は皆地に依りて建立することを得るが若く、是の如く一切の諸の衆には、如來聲聞衆を最も第一なりと爲す。是の如く廣說し乃ち聖戒に至る』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。[九五]

【九四】 巴になし。一切の闡譬の中、聲聞の集團を以て第一とす。

【九五】 新第二十八(原第三十一)卷終る原第三十一卷收る所二百七十一經原第三十一

く說く。

佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二—二〇）二三九〇四—二三九二二（外六入處經）內六入處の如く、是の如く外六入處、乃至五陰も亦た是の如く說く。

（二一）二三九二三（九〇〇）[九〇]（味著經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、眼に於て味著せば則ち上煩惱を生ず、上煩惱を生ぜば諸の染汚心に於て欲を離るることを得ず、彼の障礙も亦た斷ずることを得ず、乃至意入處も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二二—三〇）二三九二四—二三九三二（外六入處經）內六入處の如く、是の如く外六入處乃至五陰も亦た是の如く說く。

（三一）二三九三三（九〇一）[九一]（善法建立經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば世間の所作は皆地に依りて建立することを得るが如く、是の如く一切の善法は皆內六入處に依りて建立することを得』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三二—四〇）二三九三四—二三九四二（外六入處經）內六入處の如く、是の如く外六入處乃至五陰も亦た是の如く說く。

（四一）二三九四三（九〇二）[九二]（如來第一經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し衆生の無足・二足・四足・多足・色・無色・想・無想・非想・非非想・一切に於て如來最も第一なり。乃至聖戒も亦た是の如く說く』と。

（四二）二三九四四（九〇三）[九三]（離貪法第一經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『諸の世間の衆生の所作、彼の一切は皆地に依りて建立することを得るが若く、是の如く一切法の有爲無爲は貪欲を離るる法を最も第一なりと爲

【九〇】　巴になし。內の六入處に於て味著せば上煩惱を生じ、染汚心に於て欲を離れず、

【九一】　巴になし。一切善法は皆內の六入處に依りて建立し得。

【九二】　S. 45. 139. Tathāgata etc, A. IV. 34. Pasāda の前分。增、二一、一（大正二、六〇一c）如來は一切有情の中にて最第一人者なり。

【九三】　巴になし。一切法の中離貪法を第一となす。

まへり。時に尊者羅睺羅、佛の所に來詣し、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、云何が知り、云何が見ば、我れ此の識身及び外境界、一切の相を憶念せずして其の中間に於て諸の有漏を盡くすや』と。佛、羅睺羅に告げたまはく『內六入處有り、何等をか六と爲す。謂ゆる眼入處・耳・鼻・舌・身・意入處なり。此れ等の諸法を正智もて觀察せば、諸の有漏を盡くし正智にして心善く解脫す。是れを阿羅漢の諸の有漏を盡くし、所作已に作し、已に重擔を捨て、已利を逮得し、諸の有結を盡くし、正智にして心解脫することを得たりと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三一〇)二三九四—二三九二(外六入處經 等)內六入處の如く、是の如く外六入處、乃至五陰も亦た是の如く說く。

(第十三品)*

(一)二三九三(八九八)(眼已斷經)[八八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、眼に於て欲貪斷じ、欲貪斷ぜば是れを眼已に斷ずと名づく。已に知りて其の根本を斷ずること多羅樹の頭を截るが如く、未來世に於て不生法を成ず。眼の如く、是の如く耳・鼻・舌・身・意も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三一一〇)二三九四—二三九三(外六入處經等) 內六入處の如く、是の如く外六入處、乃至五陰も亦た是の如く說く。

(二)二三九三(八九九)(眼生經)[八九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、眼生じ住し成就し顯現せば、苦生じ病住し老死顯現す。是の如く乃至意も亦た是の如く說く。若し眼滅し息み沒せば、苦則ち滅し、病則ち息み、老死則ち沒す。乃至意も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、

---

*この四十三經は比丘相應 Bhikkhu Saṃyutta

【八八】已になし。眼に於て欲貪斷ずるを眼已に斷ずと名づく。耳等も然なり。

【八九】已になし。老病死苦の生ずるも滅するも內の六入處の生住と滅沒による。

道跡、世間の集、世間の滅、世間の集道跡、世間の滅道跡、世間の集、世間の滅、世間の味、世間の患、世間の出、世間の集、世間の滅、世間の集道跡、世間の滅道跡、世間の味、世間の患、世間の出なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（第十一品）*

（一）一三八〇三（八九五）（三愛經）[八五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三愛有り、何等をか三と爲す。謂ゆる欲愛・色愛・無色愛なり。此の三愛を斷ぜんが爲の故に當に大師を求むべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二―五〇）一三八〇四―一三八五二（次師經等）大師を求むるが如く、是の如く次師・敎師・廣導師・度師・廣度師・說師・廣說師・隨說師・阿闍梨・同伴・眞知識の善友・哀愍・慈悲・欲義・欲安・欲樂・欲觸・欲通・欲者・精進者・方便者・出者・堅固者・勇猛者・堪能者・攝者・常者・學者・不放逸者・修者・思惟者・憶念者・覺想者・思量者・梵行者・神力者・智者・識者・慧者・分別者・念處・正勤・根・力・覺・道・止觀・念身・正思惟求も亦た是の如く說く。

（五一）一三八五三（八九六）（三有漏經）[八六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三有漏有り。何等をか三と爲す。謂ゆる欲の有漏、有の有漏、無明の有漏なり。此の三有漏を斷ぜんが爲の故に當に大師を求むべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（五二―一〇〇）一三八五四―一三九〇二（正思惟經）大師を求むる如く、是の如く乃至正思惟を求むるも亦た是の如く說く。

（第十二品）*

（一）一三九〇三（八九七）（羅睺羅經）[八七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりた

---

* この百經は大師相應 Satthā Samyutta

【八五】巴になし。三愛を斷ぜんが爲に大師を求むべし。

【八六】巴になし。欲、有、無明の有漏を斷ぜんが爲に大師を求むべし。

* この十經は羅睺羅相應 Rāhula Samyutta

【八七】巴になし。內の六入處を觀察すれば漏を盡し阿羅漢果を得。

（第九品）

（一）三七九〇（八九三）[八二]（五種種子經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五種の種子の生ずる有り。何等をか五と爲す。謂ゆる根の種子莖の種子、節の種子、壞の種子、種の種子なり。此の諸の種子は斷ぜず破れず、腐らず傷まず、堅を穿たず。新に地界を得るも水界を得ずんば彼の諸の種子は生長增廣することを得ず、水界を得るも地界を得ずんば彼の諸の種子は生長增廣することを得ざるなり。要らず地界水界を得て彼の諸の種子は生長增廣することを得、是の如く業、煩惱は愛・見・慢・無明有りて行を生ず。若し業有るも煩惱・愛・見・無明無くんば行則ち滅す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二―一一）三七九一―三八〇一（識名色經等）行の如く是の如く識・名色・六入處・觸・受・愛・取・有・生・老死も亦た是の如く說く。

（第十品）*

（一）三七九一―三八〇〇（八九四）[八三]（如實知經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我が世間に於て世間及び世間の集に於て、是の如く知らずんば我れ終に諸天・魔・梵・沙門・婆羅門・及び諸の世間に於て解脫を爲し、出を爲し、離を爲し、顚倒の想より離るることを得ず、亦た阿耨多羅三藐三菩提と名づけざるなり。我れ世間及び世間の集に於て實の如く知れるを以つての故に、是の故に我れ諸天・世人・魔・梵・沙門・婆羅門及び餘の衆生に於て解脫することを得と爲し、出を爲し、離を爲し、心顚倒より離れ具足して住し、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）三八〇二[八四]（如實知經）　是の世間、世間の集の如く世間の滅、世間の集、世間の出、世間の集、世間の滅、世間の味、世間の患、世間の出、世間の集、世間の滅、世間の出、世間の集、世間の滅

---

* この十一經は種子相應 Bija Samyutta

【八二】巴になし。五種の種子地を得るも水無くんば生長せざるが如く、煩惱、愛、見、無明なくんば業有るも行は滅す。

* この二經は世間相應 Loka Samyutta

【八三】cf. A. IV. 23. 凡夫世間の實狀及其の原因を實の如くに知る故に解脫し、出離し、正覺を成じ得となす。

【八四】巴になし。

正見具足なる世尊の弟子は眞諦の果を見ること正しく無間等なり。彼れ爾の時に於て已に斷じ已に知りて其の根本を斷ずること多羅樹の頭を截るが如く更に復た生ぜず。斷ずる所の諸の苦は甚だ多く無量にして大湖水の如く、所餘の苦は毛端の滴水の如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二)二二七九(草籌經等)　毛端の滴水の如く、是の如く草籌の端の滴水も亦た是の如し。湖池の水の如し、是の如く薩羅多吒伽・恒水・耶扶那・薩羅溲・伊羅跋提・摩醯・大海も亦た是の如く說く。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(第八品)*

(一)二二八〇(八九二)[八二](六內處經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『內六入處有り。云何が六と爲す。謂ゆる眼內入處・耳・鼻・舌・身・意內入處なり。此の六法に於て忍を觀察するを名づけて信行と爲す。超昇して生より離れ、凡夫地より離れ、未だ須陀洹果を得ず、乃至未だ命終せざるも要ず須陀洹果を得。若し此の諸法增上し忍を觀察せば、名づけて法行と爲す。超昇して生より離れ、凡夫地より離れ、未だ須陀洹果を得ず、乃至未だ終らざるも要ず須陀洹果を得。若し此の諸法に實の如く正智もて觀察せば三結已に盡き已に知る。謂ゆる身見・戒取・疑なり。是れを須陀洹と名づく。決定して惡趣に墮ちず、定んで三菩提に趣き、七有の天人に往生し苦邊を究竟す。此れ等の諸法を正智もて觀察し、諸漏を起さず欲を離れて解脫するを阿羅漢と名づく。諸漏已に盡き、所作已に作し、諸の重擔を離れ、已利を逮得し、諸の有結を盡くし、正智にして心善く解脫す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二―一〇)　二二八一―二二八九　(外六入處經等)　內六入處の如く、是の如く外六入處・六識身・六觸身・六受身・六想身・六思身・六愛身・六界身・五陰も亦た上の如く說く。

---

* この十經は六入相應 Saḷā-yatana Saṃyutta

【八二】巴になし。內六入處に於て忍を觀察せば凡夫地を離れ須陀洹果を得、なほ進んでは阿羅漢果を得。

益し、戒・聞・捨・慧増益するなり、是れを増益すと爲す。名字を増益すと爲すには非ざるなり』と。爾の時婆羅門、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し坐より起ちて去りにき。

（六）二三七五六（八八九）（等起經）[七七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に異婆羅門有り、佛の所に來詣し安否を問訊し、問訊し已つて退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、我れを等起すと名づく』と。佛、婆羅門に告げたまはく『夫れ等起すとは謂ゆる信を起こし、戒・聞・捨・慧を起こすなり、是れを等起すと爲す。名字を等起すと爲すには非ざるなり』と。爾の時婆羅門、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し坐より起ちて去りにき。

（第六品）*

（一）二三七五七（八九〇）（無爲法經）[七八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に汝が爲に無爲法及び無爲道跡を說くべし。諦かに聽き善く思へ。云何が無爲法なる。謂ゆる貪欲永く盡き、瞋恚愚癡永く盡き、一切の煩惱永く盡きなば是れ無爲法なり。云何が無爲道跡と爲す。謂ゆる八聖道分の正見・正智・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり。是れを無爲道跡と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二—二）二三七五八—二三七七七（難見經等）[七九]無爲の如く、是の如く難見、不動・不屈・不死・無漏・覆蔭・洲渚・濟度・依止・擁護・不流轉・離熾焰・離燒然・流通・淸涼・微妙・安隱・無病・無所有・涅槃も亦た是の如く說く。

（第七品）*

（一）二三七七八（八九一）（毛端經）[八〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば湖池廣長にして五十由旬、深さも亦た是の如くなるに若し士夫有り、一毛の端を以つて彼の湖水に滴らすが如し。云何が比丘彼の湖水多しと爲すや、士夫の毛端の一滴水多しと爲すや』と。比丘、佛に白さく『世尊、士夫の毛端は尠少なるのみ。湖水は無量千萬億倍にして比を爲すを得ず』と。佛、比丘に告げたまはく『具足して眞諦を見、

【七七】已になし。信戒を起こすが眞の等起なり。名字に非ず。

＊二十一經を無爲相應 Asaṅkhata Saṃyutta とす。

【七八】S. 43. 12. Maggena. 無爲法とは貪、瞋、癡及び一切の煩惱盡きたるをいふ。八正道はそれに至るの道なり。

【七九】S. 43. 13—43. Antaṃ etc.

＊この二經湖水相應 Samudda Saṃyutta

【八〇】cf. S. 13. Abhisamaya Saṃyutta. 眞諦を見、正見具足せる世尊の弟子の斷ずる所の苦は無量にして湖水の如く、斷ぜざる苦は少きこと毛端の水の如し。

の本末、此の五種の記に悉く皆通達し、容色端正なり。是れを瞿曇、婆羅門の三明と名づく』と。佛、婆羅門に告げたまはく『我れは名字言說を以ては三明と爲さざるなり。賢聖の法門は眞にして要ず實の三明を說く。謂ゆる賢聖は賢聖の法律の眞實の三明を知見す』と。婆羅門、佛に白さく『云何が瞿曇、賢聖は賢聖の法律に說く所の三明を知見するや』と。佛、婆羅門に告げたまはく『三種の無學の三明有り。何等をか三と爲す。謂ゆる無學の宿命智證明、無學の生死智證明、無學の漏盡證明なり』と。上の經の如く廣說す。

　爾の時世尊卽ち偈を說いて言はく

『一切法は無常なり　持戒は寂靜にして禪は　一切の宿命の、已に　天惡趣に生ぜしを
知り　生を斷じて漏盡を得　是れを牟尼の通と爲す　悉く心一切の貪恚癡　より解脫
せるを知る　我れは是れを三明と說く　言語もて說く所に非ず

婆羅門、是れを聖法律に說く所の三明と爲す』と。婆羅門、佛に白さく『瞿曇、是れ眞の三明なり』と。爾の時婆羅門、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し坐より起ちて去りにき。

(四)〔三七五四〕(八八七)(信經)[七五]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に異婆羅門有り、佛の所に來詣し世尊と面に相慰勞し、慰勞し已つて退きて一面に坐し、佛に白さく『瞿曇、我れを信ずと名づく』と。佛、婆羅門に告げたまはく『所謂信とは增上の戒、施、聞、捨、慧を信ずるなり是れ則ち信と爲す。名字を是れ信ずるには非ざるなり』と。時に婆羅門、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し坐より起ちて去りにき。

(五)〔三七五五〕(八八八)(增益經)[七六]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に異婆羅門有り、佛の所に來詣し面に相慰勞し、慰勞し已つて退きて一面に坐し、佛に白して言さく『瞿曇、我れを增益すと名づく』と。佛、婆羅門に告げたまはく『所謂增益とは、信增

【七五】 已になし。信は名字に非ず、戒、施、聞、捨、慧等の實際生活の上に現はれるものなり。

【七六】 已になし。增益とは名字にあらず、信、戒、聞、捨、慧の增益するをいふ。

命の事を受くるを皆悉く了知す。是れを宿命智證明と名づく。云何が生死智證明なる。謂ゆる聖弟子は天眼淨の人眼に過ぐるをもて、諸の衆生の死時・生時・善色・惡色・上色・下色・惡趣に向ひ業に隨つて生を受くるを見て實の如く知る。「此の如きの衆生は身の惡行成就し、口の惡行成就し、意の惡行成就し、聖人を謗り邪見もて邪法の因緣を受くるが故に、身壞命終して惡趣の[七三]泥犂の中に生ず」と。「此の衆生は身に善行あり、口に善行あり、意に善行あり、聖人を謗毀せず、正見成就し身壞命終して善趣の天人の中に生ず」と。是れを生死智證明と名づく。云何が漏盡智證明なる。謂ゆる聖弟子は此れは苦なりと實の如く知り、此れは苦の集なり、此れは苦の滅なり、此れは苦の滅道跡なりと實の如く知る。彼れ是の如く知り、是の如く見ば欲の有漏より心解脫し、有の有漏より心解脫し、無明の漏より心解脫し解脫知見す。我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると。是れを漏盡智證明と名づく』と。爾の時世尊卽ち偈を說いて言はく、

『觀察して宿命を知り、　天惡趣に生ずるを見　　生死の諸の漏盡きなば　　是れ則ち牟尼の明なり　　心一切の諸の貪愛より　　解脫し得たるを知り　　三處悉く通達す　　故に說いて三明と爲す』

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三)　三七五三(八八六)[七四](三明經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に異婆羅門有り、佛の所に來詣し、世尊と面に相慰勞し、慰勞し已つて退きて一面に坐し、而かも是の說を作せり『此れは則ち婆羅門の三明なり、此れは則ち婆羅門の三明なり』と。爾の時世尊、婆羅門に告げて言はく『云何が名づけて婆羅門の三明と爲す』と。婆羅門、佛に白して言さく『瞿曇、婆羅門の父母は相を具して諸の瑕穢無く、父母は七世相承して諸の譏論無く、世世相承して常に師長と爲り。辯才具足して諸の經典を誦し、物類の名字、萬物の差品、字類の分合、歷世

【七三】niraya 地獄。

【七四】巴になし。婆羅門は傳承文字言說の上の三明を說くに對して、佛の所說は眞實體驗の三明なり。

善を擧げ、正受善を擧ぐるに非ざる有り、禪に正受善を擧げ、三昧善を擧ぐるに非ざる有り、禪に、三昧善を擧げ、亦た正受善を擧ぐる有り、禪に、三昧善を擧ぐるに非らず、亦た正受善を擧ぐるに非らざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善を捨て、正受善を捨つるに非らざる有り、禪に、正受善を捨て、三昧善を捨つるに非らざる有り、禪に、三昧善を捨て、亦た正受善を捨つる有り、禪に、三昧善を捨つるに非らず、亦た正受善を捨つるに非らざる有り』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（第五品）*[六七]

（一）一三五一（八八四）（無學三明經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『無學に三明有り[六八]。何等をか三と爲す。無學の宿命智證通、無學の生死智證通、無學の漏盡智證通なり』と、爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

　[六九]觀察して宿命を知り、天惡趣の生ずるを見、生死の諸の漏盡きなば、是れ則ち牟尼の明なり
　其の心一切の貪愛より、解脫することを得、三處悉く通達す、故に說いて三明と爲す」

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）一三五二（八八五）（無學三明經）[七〇]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、[七一]諸の比丘に告げたまはく『無學三明有り。何等をか三と爲す。謂ゆる無學の宿命智證通、無學の生死智證通、無學の漏盡智證通なり。云何が無學の宿命智證通なる。謂ゆる聖弟子は種種の宿命の事を知り一生より百千萬億生に至り、乃至劫數の成壞、我れ及び衆生の更たる所の是の如きの名、是の如きの生、是の如きの[七二]姓、是の如きの食、是の如きの苦樂を受け、是の如く長壽し、是の如く久住し、是の如きの分齊を受け、我れ及び衆生の此處に於て死して餘處に生じ、餘處に於て死して此處に生じ、是の如きの行、是の如きの因、是の如きの信有りて種種の宿

＊ 六經を三明相應 Tevijjā Saṃyutta とす。

【六七】 無學の三明を說く。

【六八】 阿羅漢の異名。

【六九】 Pubbenivāsaṃ yo vedi saggāpāyañ ca passati, Atho jātikkhayaṃ patto abhiññāvosito muni, Etāhi tīhi vijjāhi tevijjo hoti brāhmaṇo, Taṃ ahaṃ vadāmi tevijjaṃ nāññaṃ lapitalāpanan ti,

【七〇】 A. III. 58. 59. 無學の三明を詳說す。

【七一】 巴には婆羅門（Tikaṇṇo brāhmaṇo）が婆羅門の三明を說きたるに對して佛は佛敎の三明を說かる。

【七二】 正藏に「性」とあるも三等の如く、「姓」とせり。

味善に處するに非ざる有り、禪に三昧善に處し、亦た正受善に處する有り、禪に、三昧善に處するに非らず、亦た正受善に處するに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善を迎へ、正受善を迎ふるに非ざる有り、禪に、正受善を迎へ、三昧善を迎ふるに非ざる有り、禪に、三昧善を迎へ、亦た正受善を迎ふる有り、禪に、三昧善を迎ふるに非らず、亦た正受善を迎ふるに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善を念じ、正受善を念ずるに非ざる有り、禪に、正受善を念じ、三昧善を念ずるに非ざる有り、禪に、三昧善を念じ、亦た正受善を念ずる有り、禪に、三昧善を念ずるに非らず、亦た正受善を念ずるに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善を念じ念ぜず、正受善を念じ念ぜざるに非ざる有り、禪に、正受善を念じ念ぜず、三昧善を念じ念ぜざるに非ざる有り、禪に、三昧善を念じ念ぜず、亦た正受善を念じ念ぜざる有り、禪に、三昧善を念じ念ぜざるに非らず、亦た正受善を念じ念ぜざるに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善に來り、正受善に來るに非ざる有り、禪に、正受善に來り、三昧善に來るに非ざる有り、禪に、三昧善に來り、亦た正受善に來る有り、禪に、三昧善に來るに非らず、亦た正受善に來るに非らざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善を惡み、正受善を惡むに非らざる有り、禪に、正受善を惡み、三昧善を惡むに非らざる有り、禪に、三昧善を惡み、亦た正受善を惡む有り、禪に、三昧善を惡むに非らず、亦た正受善を惡むに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善に方便し、正受善に方便するに非ざる有り、禪に、正受善に方便し、三昧善に方便するに非ざる有り、禪に、三昧善に方便し、亦た正受の善に方便する有り、禪に、三昧善に方便するに非らず、亦た正受善に方便するに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善を止め、正受善を止むるに非ざる有り、禪に、正受善を止め、三昧善を止むるに非ざる有り、禪に、三昧善を止め亦た正受善を止むる有り、禪に、三昧善を止むるに非らず、亦た正受の善を止むるに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧

ば一切衆生の無足・兩足・四足・多足・色・無色・想・無想・非想・非無想には如來爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に説けるが如し、乃至涅槃す。譬へば所有る諸法の有爲無爲には貪欲を離るるが爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に説けるが如し、乃至涅槃す。譬へば一切の諸法の衆には如來衆爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に説けるが如し、乃至涅槃す。譬へば一切の所有る諸界の苦行、梵行には聖界爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に説けるが如し、乃至涅槃す』と。佛此の經を説き已りたまひしに諸の比丘、佛の説かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(第四品)*[六五]

(一) 三七五〇(八二三)(四種禪經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四種禪あり。[六六]禪に三昧善にして正受善に非ざる有り、禪に正受善にして三昧善に非ざる有り、禪に三昧善にして亦た正受善なる有り、禪に三昧善に非らず正受善に非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に三昧善に住し、正受善に住するに非ざる有り、禪に正受善に住し三昧善に住するに非ざる有り、禪に三昧善に住し亦た正受善に住する有り、禪に三昧善に住するに非らず亦た正受善に住するにも非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に三昧善を起こし、正受善を起こすに非ざる有り、禪に正受善を起こし、三昧の善を起こすに非ざる有り、禪に三昧善を起こし、亦た正受善を起こすあり、禪に三昧の善を起こすに非らず、亦た正受善を起こすに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に三昧の時に善にして、正受の時に善なるに非ざる有り、禪に正受の時に善にして、三昧の時に善なるに非ざる有り、禪に三昧の時に善にして、亦た正受の時に善なる有り、禪に、三昧の時に善なるに非らず、亦た正受の時に善なるに非ざる有り。復た次に四種禪あり、禪に、三昧善に處し、正受善に處するに非ざる有り、禪に、正受善に處し、三

---

* この一經は四禪相應 Jhāna Saṃyutta にて第四品とす。

【六五】 S. 34. 1—55. Samādhi Samāpatti etc.

禪に三昧善と正受善とにより て四種あり。之を種々に分別詳說す。

【六六】 巴利註釋には左の如くあり。

Samādhikusalo ti paṭhamajjhānaṃ pañcaṅgikan ti evam aṅgavavatthānakusalo. Na samāpattikusalo ti cittaṃ hāsetvā kallaṃ katvā jhānaṃ samāpajjituṃ na sakkoti. Samāpajjitum na sakkoti i- minā nayena sesapadāni veditabbāni.

如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば焰摩天の中には宿焰摩天王爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば兜率陀天には兜率陀天王を以て第一と爲すが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば化樂天には善化樂天王を以て第一と爲すが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば他化自在天には善他化自在天子を以て第一と爲すが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば梵天には大梵王爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば閻浮提の一切の衆の流れは皆大海に順趣するが如く、其の大海は最も爲れ第一たり、容受するを以ての故に。是の如く一切の善法は皆不放逸に順ふ、上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば一切の雨滴皆大海に歸するが如く、是の如く一切の善法は皆不放逸の海に順趣す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば一切の薩羅には阿耨大薩羅爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を第一と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば閻浮提の一切の河には四大河爲れ第一なるが如く、謂ゆる[六三]恒河・新頭・搏叉・司陀なり。是の如く一切の善法には不放逸を第一と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば衆星の光明には月爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を第一と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば諸の大身の衆生には[六四]羅睺羅阿修羅最も爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば諸の五欲を受くる者は頂生王爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば欲界の諸の神力には天魔波旬爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へ

【六三】 四大河なり。Gaṅgā, Sindhu, Śitā Vakṣu?

【六四】 Rāhu 阿修羅の王。

を根本と爲し、乃至涅槃す。譬へば陸地に生ずる華は[五六]摩利沙華爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲し、乃至涅槃す。譬へば比丘、一切の畜生の跡の中には、象の跡爲れ上なるが如く、是の如く一切の諸の善法は不放逸を最も根本と爲す、上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば一切の畜生には師子爲れ第一にして所謂畜生の主なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば一切の屋舍堂閣には棟を以て第一と爲すが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。譬へば一切の[五七]閻浮の果には唯だ[五八]閻浮の名を得るものの果、最も爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。

是の如く一切の[五九]俱毘陀羅樹には薩婆耶旨羅俱毘陀羅樹爲れ第一なり、是の如く一切の善法には不放逸を根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば諸山には須彌山王を以て第一と爲すが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば一切の金には[六〇]閻浮檀金を以て第一と爲すが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば一切の衣の中には[六一]伽尸細氎爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば一切の色の中には白色を以て第一と爲すが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば衆鳥には[六二]金翅鳥を以て第一と爲すが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し、乃至涅槃す。譬へば諸王には轉輪聖王爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば一切の天王には四大天王爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法には不放逸を其の根本と爲す。上に說けるが如し乃至涅槃す。譬へば一切の三十三天には帝釋を以て第一と爲すが如く、是の

【五六】Mallikā 鬘花？。

【五七】Jambuvipa 閻浮洲卽ち此の世界にある全ての果實の中にて。

【五八】Jambu (rose apple) 閻浮と名づけられる果實が第一なり。

【五九】kovidāra.

【六〇】Jambunadasvarṇa. 正藏に「閻浮提金」とあるも三に從つて檀金と改めたり。音近きが故に。

【六一】Kāsi 地方より產する毛織物なり。

【六二】garuḍa 八部衆の一、迦樓羅と音譯す。翅金色にして、兩翅の廣さ三百六萬里、須彌山の下層に住し、常に龍を捕りて食とす。

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六一—一三)一二七三五—一二七四二(四如意足經等)四念處の如く、是の如く四正斷、四如意足、五根・五力・七覺支・八道支・四道・四法句の正觀修習も亦た是の如く說く。

(一四)一二七四三(八八〇)(不放逸經)[52] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば人有りて世間に建立を作すには、彼れ一切皆地に依るが如く、是の如く比丘の禪法を修習するには一切皆不放逸に依るを根本と爲す。不放逸の集、不放逸の生、不放逸の轉なり。比丘不放逸とは能く四禪を修するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五)一二七四四(八八一)(斷三經)[53] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、是の如く比丘、能く貪欲・瞋恚・愚癡を斷ずるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき、

(一六—一九)一二七四五—一二七四八(調伏經等)貪欲・瞋恚・愚癡を斷ずるが如く、是の如く貪欲・瞋恚・愚癡を調伏し、貪欲の究竟・瞋恚・愚癡の究竟・出要・遠離・涅槃も亦た是の如く說く。

(二〇)一二七四九(八八二)(不放逸根本經)[54] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば百草藥木皆地に依りて生長することを得るが如く、是の如く種種の善法は皆不放逸に依るを本と爲す。上に說けるが如く乃至涅槃す。譬へば黑き沈水香是れ衆香の上なるが如く、是の如く種種の善法には不放逸最も爲れ其の上なり。譬へば堅固の香は赤栴檀爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法は一切皆不放逸を根本と爲し。乃至涅槃す。譬へば水陸の諸の華は[55]優鉢羅華(うはつらけ)爲れ第一なるが如く、是の如く一切の善法は皆不放逸

【五二】巴になし。禪法を修習するの根本は不放逸にあり。

【五三】巴になし。不放逸によりて能く貪瞋痴の三毒を斷ず。

【五四】S. 49. 13-22. Appamāda 種々の善法は皆不放逸を本となすことを廣く譬喩を以て說く。

【五五】utpala 青蓮華。

法は斷ずる欲を生じ、方便精勤して心に攝受する。是れを斷斷と爲す。云何が律儀斷なる。未だ起らざる惡不善法は起さざる欲を生じ、方便精勤して攝受する。是れを律儀斷と名づく。云何が隨護斷なる。未だ起らざる善法は起らしむる欲を生じ、方便精勤して攝受する。是れを隨護斷と名づく。云何が修斷なる。已に起りし善法は增益し修習する欲を生じ方便精勤して攝受する。是れを修斷と名づく』と。爾の時世尊卽ち偈を說いて言はく

『斷斷及び律儀　隨護と修習と　此の如き四正斷は　諸佛の所說なり』

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（五）〔三七四〕（八七九）(四正斷經)[49]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四正斷有り。何等をか四と爲す。一には斷斷、二には律儀斷、三には隨護斷、四には修斷なり。云何が[50]斷斷なる。若し比丘、已に起りし惡不善法は斷ずる欲を生じ、方便精勤して攝受し、未だ起らざる惡不善法は起さざる欲を生じ、方便精勤して攝受し、未だ生ぜざる善法は起らしむる欲を生じ、方便精勤して攝受し、已に生ぜし善法は增益し修習する欲を生じ、方便精勤して攝受する、是れを斷斷と名づく。云何が律儀斷なる。若し比丘、善く眼根を護り、隱密に調伏して進向し、是の如く耳・鼻・舌・身・意根を善く護り、隱密に調伏して進向せば、是れを律儀斷と名づく。云何が隨護斷なる。若し比丘、彼彼の眞實三昧相に於て、善く守護し持つ。所謂青瘀相・脹相・膿相・壞相・食[51]不淨相を修習し守護して退沒せしめざるなり。是れを隨護斷と名づく。云何が修斷なる。若し比丘、四念處等を修せば、是れを修斷と名づく』と。爾の時世尊卽ち偈を說いて言はく

『斷斷　律儀斷　隨護、修習斷　此の四種の正斷は　正覺の所說なり　比丘勤め方便せば　諸の漏を盡くすことを得』

【四九】巴になし。四正斷の一々の說明前二經と異れり。比較すべし。これは斷斷等の術語出來上りたる後、その術語に適する樣に內容を盛りたる如く見ゆ。

【五〇】此の經にては斷々の中に前經の四正斷を含めたり。

【五一】正藏に「不盡相」とあるも元・明の如く「不淨相」に改む。

まへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく[四三]『四正斷有り。何等をか四と爲す。一には斷斷、二には律儀斷、三には隨護斷、四には修斷なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) 三七三一(八七六)(四正斷經)[四四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四正斷有り何等をか四と爲す。一には斷斷、二には律儀斷、三には隨護斷、四には修斷なり』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

『斷斷及び律儀、　隨護と修習と　此の如き四正斷は　諸佛の所說なり』

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 三七三二(八七七)(四正斷經)[四五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四正斷有り。何等をか四と爲す。一には[四六]斷斷、二には律儀斷、三には隨護斷、四には修斷なり。云何が斷斷と爲す。謂ゆる[四七]比丘の已に起りし惡不善法は斷ずる欲を生じ、方便精勤して心に攝受する。是れを斷斷と爲す。云何が律儀斷なる。未だ起らざる惡不善法は起さざる欲を生じ、方便精勤して攝受する。是れを律儀斷と名づく。云何が隨護斷なる。未だ起らざる善法は起らしむる欲を生じ、方便精勤して攝受する。是れを隨護斷と名づく、云何が修斷する。已に起りし善法は增益し修習する欲を生じ、方便精勤して攝受する。是れを修斷と爲す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) 三七三三(八七八)(四正斷經)[四八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四正斷有り。何等をか四と爲す。一には斷斷、二には律儀斷、三には隨護斷、四には修斷なり。云何が斷斷と爲す。謂ゆる比丘の已に起りし惡不善

【四三】北方には正斷(Samyak-prahāṇa)と言ふも南方にては正勤(Sammappadhāna)とせり。南方の方が正しく、北方にては雅語に戻す時誤りたるなるべし。
【四四】前經參照。
【四五】S.49. 1-12 Sammappadhāna 四精勤を詳說す。
【四六】巴には斷斷等の術語なし。
【四七】正藏に「比丘亦已起惡不善法」とあるも(三)より亦字除く。
【四八】前經參照。

た然(しか)なる　是れを名づけて善衆と爲す、日光の自ら照すが如し、若し則ち善好の僧ならば、
是れ則ち僧中の好なり、是の法は僧をして好からしむること。日光の自ら照すが如し』
と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一七―二四)一三六六―一三七三(辯柔和經等)　調伏の如く、是の如く辯・柔和・無畏・多聞・通達法・說法・法次法向・隨順法行も亦た是の如く說く。

(二五)一三七四(八七四)[三八](三種子經)是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三種の子有り。何等をか三と爲す。[三九]隨生子有り、勝生子有り、下生子有り。何等をか隨生子と爲す。謂ゆる子の父母、[四〇]不殺・不盜・不婬・不妄語・不飲酒なるに子も亦た隨ひ學して不殺・不盜・不婬・不妄語・不飲酒なる。是れを隨生子と名づく。何等をか勝生子と爲す。若し子の父母、不殺・不盜・不婬・不妄語・不飲酒の戒を受けざるに子は則ち能く不殺・不盜・不婬・不妄語・不飲酒の戒を受くる。是れを勝生子と名づく。云何が下生子なる。若し子の父母、不殺・不盜・不婬・不妄語・不飲酒の戒を受けしに、子は能く不殺・不盜・不婬・不妄語・不飲酒の戒を受けざる。是れを下生子と名づく』と。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

[四一]『生じて隨ひ及び生じて上なるは　智ある父の欲する所、　生じて下なるは須(もち)ふる所に非ず
紹繼せざるを以ての故に　人、法の子たらんには　當に優婆塞と作るべし　佛法僧
の寶に於て、　勤めて淸淨の心を修せよ　雲除(のぞ)こらば月光顯はる　光榮ある眷屬の衆なり』。

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二六―三〇)一三七五―一三七九(信戒施經等)五戒の如く是の如く信・戒・施・聞・慧の經も亦た是の如く說く

(第三品)

(一)一三八〇(八七五)[四二](四正斷經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりた

---

sārado ca bahussuto dhammadharo ca hoti
Dhammassa hoti anudhammacā.i sa tādiso vuccati saṅghasobh.no
Bhikkhu ca sīlasampanno bhikkhunica bahussutā
Upāsakoca yo saddho yāca saddhā upāsikā
Ete kho saṅgham sobhenti ete hi saṅghasobhanā ti.

【三八】 Itiv. 74. putto.
親に勝る子なり、親に準ずる子あり、親に劣る子あり。

【三九】 atijāto, anujāto, avajāto.

【四〇】 巴には五戒の前に三歸を加へたり。

【四一】 atijātaṃ anujātaṃ puttamicchanti, paṇḍitā, avajātaṃ na icchanti yo hoti kulagandhano, ete kho puttā loksiṃ yeca bhavanti upāsakā, saddhāsilena sampannā vadaññū vītamacchara.

【四二】 cf S. 49. 1—12. Sammadhāna.
cf. A. IV. 13.
A. 69. IV.

＊ 以下二十經、正斷相應 Sammappadhāna Saṃyutta.

たまふも亦た是の如く說く。

（一五）一二七一四（八七二）[28]（傘蓋覆燈經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、夜闇の中に於て天時に小雨ありて電の光焰照せしに、佛、阿難に告げたまはく『汝傘蓋を以て燈を覆ひて持ち出づ可し』と。尊者阿難即ち敎を受け傘蓋を以て燈を覆ひ、佛の後に隨ひ行きて一處に至りしに世尊微笑したまへり。尊者阿難、佛に白して言さく『世尊は無因緣を以ては笑ひたまはず。世尊は今日何の因、何の緣もて而かも微笑を發したまへるや審にせず』と。佛、阿難に告げたまはく『是の如し是の如し、如來は無因緣を以ては笑はず。汝今傘蓋を持ちて燈を覆ひ我れに隨ひて行きしに、我れ梵天を見たり。亦復た是の如く傘蓋を持ちて燈を覆ひ　拘隣[29]比丘の後に隨ひて行けり。[30]釋提桓因も亦復た傘蓋を持ちて燈を覆ひ、摩訶迦葉の後に隨ひて行けり。[31]袟栗帝羅色吒羅天王も亦た傘蓋を持ちて燈を覆ひ、舍利弗の後に隨ひて行けり。[32]毘樓勒迦天王も亦た傘蓋を持ちて燈を覆ひ、大目揵連の後に隨ひて行けり。[33]毘樓匐叉天王も亦た傘蓋を持ちて燈を覆ひ、摩訶拘絺羅の後に隨ひて行けり。[34]毘沙門天王も亦た傘蓋を持ちて燈を覆ひ、摩訶劫賓那の後に隨ひて行けり』と。佛の經を說き已りたまひしに尊者阿難、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一六）一二七一五（八七三）[35]（四種調伏經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[36]四種の善好く調伏せる衆あり。何等をか四と爲す。謂ゆる比丘の調伏、比丘尼の調伏、優婆塞の調伏、優婆夷の調伏なり。是れを四衆と名づく』と。爾の時世尊即ち偈を說いて言はく、

[37]『若し才辯ありて畏れ無く　多聞にして法に通達し　法次、法向を行じなば　是れ則ち
善衆と爲す　比丘の淨戒を持ち　比丘尼の多聞なる　優婆塞の淨信なる　優婆夷も亦

【二八】巳になし。闇夜に雷雨あり、阿難傘を以て燈を覆ひ佛に隨ふ。其の時帝釋天及四天王等各〻傘を以て諸大弟子に隨ふを見て佛微笑せらる。
【二九】Aññā-koṇḍañña　五比丘の一人なる阿若憍陳如なり。
【三〇】Śakro devendraḥ 帝釋天。
【三一】Dhṛtarāṣṭraḥ 持國天、四天王の一巳して東方を領す。
【三二】Virūḍhakaḥ 四天王の一なる增長天、南方を領す。
【三三】Virūpākṣaḥ 同じく廣目天、西方を領す。
【三四】Vaiśravaṇaḥ 同じく四天王の一、多聞天とも云ふ。北方を領す。
【三五】A. IV. 7.
【三六】Cattāro'ma bhikkhave vyattā vinītā visradā bahussutā dhammadharā dhammānudhammapaṭipannā saṅghaṃ sobhanti.
【三七】Yo hoti vyattoca vi=

まへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、是の如き行、是の如き形、是の如き相に貪喜を離れ捨に住せば、正念正智もて身樂を覺り、聖人の能く說き能く捨する念に樂住し、第三禪具足して住す。若し爾らずんば、是の如き行、是の如き形、是の如き相を以て、受・想・行・識の法に於て病の如く、癰の如く、刺すが如く、殺すが如く思惟し、乃至上流たり。若し爾らずんば彼の法の欲、法の念、法の樂を以て[二〇]遍淨天に生ず。若し爾らずんば[二一]無量淨天に生じ、若し爾らずんば[二二]少淨天に生ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七) 一三七〇六(八七〇)[二三](第四禪經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、是の如き行、是の如き形、是の如き相に、苦を離れ樂を息め、前の憂喜已に滅せば、不苦不樂捨、淨念一心にして第四禪具足して住す。若し是の如く憶念せざるも而かも色・受・想・行・識に於て病の如く、癰の如く、刺すが如く、殺すが如く思惟し、乃至上流般涅槃す。若し爾らずんば或は[二四]因惟果實天に生じ、若し爾らずんば[二五]福生天に生じ、若し爾らずんば[二六]少福天に生ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八—一二)一三七〇七—一三七二〇(四無色定經) 四禪の如く、是の如く四無色定も亦た是の如く說く。

(一三) 一三七二一(八七一)[二七](風雲天經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『風雲天有り、是の念を作さく「我れ今神力を以て遊戲せんと欲す」と。是の如く念ずる時、風雲則ち起れり。風雲天の如く、是の如く焰電天・雷震天・雨天・晴天・寒天・熱天も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一三—一四)一三七二二—一三七二三(風雲天經) 說くこと是の如し、異比丘の佛に問ひ、佛の諸の比丘に問ひ

【二〇】 Śubhakṛtsnāḥ
【二一】 Apramāṇaśubhāḥ
【二二】 Parittaśubhāḥ
【二三】 巴になし。第四禪の精神狀態と、その果報を說く。
【二四】 Bṛhatphalāḥ
【二五】 Puṇya prasavāḥ
【二六】 Anabhrakāḥ ?
【二七】 cf S. 32. 1. Devanā. 風雲、焰電、雷震、雨、晴、寒、熱の諸天ありと說く。

身天の中に生ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) 一三七〇三(八六七)[13](第二禪經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の是の如き行、是の如き形、是の如き相にして、有覺有觀を息め、內淨一心にして、無覺無觀、定に喜樂を生じ、第二禪具足して住す。若し是の如き行、是の如き形、是の如き相を憶念せず、而かも色受想行識の法に於て、病の如く、癰の如く、刺すが如く、殺すが如く、無常・苦・空・非我を思惟し。此等の法に於て心厭離を生じて怖畏し防護し、厭離し防護し已つて甘露の法界に於て以て自ら饒益せば、此れ則ち寂靜なり。此れ則ち勝妙なり。所謂一切の有餘を捨離し愛盡きて欲無く。滅盡涅槃す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五) 一三七〇四(八六八)[14](解脫經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、彼れ是の如く知り、是の如く見ば、欲の有漏より心解脫し、有の有漏より心解脫し、無明の漏より心解脫し、解脫知見す、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると。若し解脫せざるも而かも彼の法の欲、法の念[15]法の樂を以て中般涅槃を取る。若し爾らずんば生般涅槃を取り、若し爾らずんば有行般涅槃を取り、若し爾らずんば無行般涅槃を取り、若し爾らずんば上流般涅槃を取り、若し爾らずんば彼れ法を欲し、法を念じ、法を樂ふを以ての故に[16]自性光音天に生ず。若し爾らずんば[17]無量光天に生じ、若し爾らずんば[18]少光天に生ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六) 一三七〇五(八六九)[19](第三禪經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりた

【一三】巴になし。第二禪を具足して住せばやがて愛盡き欲なく滅盡涅槃を得。

【一四】巴になし。第二禪を具足して住する者の受くる果報。

【一五】正藏に「法樂法」とあるを(三)により後の「法」字を取る。

【一六】Ābhāsvarāḥ
【一七】parīttābhāḥ
【一八】Apramāṇābhāḥ

【一九】巴になし。第三禪の精神狀態とその果報を說く。

問ひたまふ六經も亦た是の如く說く。

（第二品）*

（一）三七〇〇（八六四）（初禪經）[七] 是の如く我れ聞きぬ、一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の若しは行、若しは形、若しは相に欲惡不善の法を離れ、有覺有觀、離に喜樂を生じ、初禪具足して住せば、彼れは是の如き行、是の如き形、是の如き相を憶念せず、然かも彼の色・受・想・行・識の法に於て、病の如く、癰の如く、刺すが如く、殺すが如く、無常・苦・空・非我の思惟を作す。彼の法に於て厭を生じて怖畏し防護し已つて甘露門を以て而かも自ら饒益す、是の如く寂靜に是の如く勝妙に、所謂餘の愛を捨離して盡し、欲無く滅盡涅槃す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふを聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）三七〇一（八六五）（解脫經）[八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば是の如く知り、是の如く見已らば、欲の有漏より心解脫し、有の有漏より心解脫し、無明の漏より心解脫し、解脫知見す。我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三）三七〇二（八六六）[九]（中般涅槃經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、若し解脫することを得ずんば法を欲し、法を念じ、法を樂ふを以ての故に中般涅槃を取る、若し是の如くならずんば或は生般涅槃し。若し是の如くならずんば或は有行般涅槃し。若し是の如くならずんば或は無行般涅槃し、若し是の如くならずんば或は上流般涅槃し、若し是の如くならずんば或は復た卽ち此の法を欲し、法を念じ、法を樂ふ功德を以て[一〇]大梵天の中に生じ、或は[一一]梵輔天の中に生じ、或は[一二]梵

---

* 以下三十經是形相應 Tad-rūpa saṃyutta.

【七】 巴になし。初禪に住すればやがて愛盡き涅槃を得。

【八】 巴になし。初禪を得ればやがて欲、有、無明の三有漏より解脫す。

【九】 巴になし。初禪を得ればやがて現法に般涅槃を得べく、若し得ざれば不還の五種涅槃により涅槃す。

【一〇】 Mahābrahmāṇāḥ

【一一】 Brahmapurohitāḥ

【一二】 Brahmakāyikāḥ

（第五道誦、*諸相應原第三十一卷）

◎（第一品）

（一）一二六六五（八六一）[1]（兜率天經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『人間の四百歳は是れ[2]兜率陀天上の一日一夜なり。是の如く三十日を一月、十二月を一歳として、兜率陀天の壽は四千歳なり。愚癡無聞の凡夫は彼れに於て命終して地獄・畜生・餓鬼の中に生じ、多聞の聖弟子は彼れに於て命終するも地獄・畜生・餓鬼の中には生ぜざるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）一二六六六（八六二）[3]（化樂天經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『人間の八百歳は是れ[4]化樂天上の一日一夜なり。是の如く三十日を一月、十二月を一歳として、化樂天の壽は八千歳なり。愚癡無聞の凡夫は彼れに於て命終して地獄・畜生・餓鬼の中に生じ、多聞の聖弟子は彼れに於て命終するも、地獄・畜生・餓鬼の中には生ぜざるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三）一二六六七（八六三）[5]（他化自在天經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『人間の千六百歳は是れ[6]他化自在天の一日一夜なり。是の如く三十日を一月、十二月を一歳として他に他化自在天の壽は一萬六千歳なり。愚癡無聞の凡夫は彼れに於て命終して、地獄・畜生・餓鬼の中に生じ、多聞の聖弟子は彼れに於て命終するも地獄・畜生・餓鬼の中には生ぜざるなり』と。

（四―一五）一二六六八―一二六七九　佛の說きたまふ六經の如く、是の如く異比丘の問ふ六經、佛の諸の比丘に

＊原第三十一卷にして天相應以下十三相應とすべきか、今品を以て區別す。

◎天相應の十五經 Deva Saṃyutta

【一】A. III. 70. の一部。兜率天上の長壽なるも、愚癡無聞の凡夫は、あたら此の長壽を空しく過して三惡趣に墮す。

【二】Tusita 欲界天の一。

【三】同前。

【四】Nirmāṇarataya 欲界天の一。

【五】同前。

【六】Paranirmitavaśavartin

る不壞淨を成就せり。此の功德に緣りて、身壞命終して今天上に生ぜり』と。一天子、佛に白して言さく『世尊、我れ法に於て不壞淨成就せり。此の功德に緣りて、身壞命終して今天上に生ぜり』と。一天子、佛に白して言さく『世尊、我れ僧に於て不壞淨成就せり。此の功德に緣りて、身壞命終して今天上に生ぜり』と。一天子、佛に白して言さく『世尊、我れ聖戒に於て成就せり。此の功德に緣りて、身壞命終して今天上に生ぜり』と。時に四十の天子各、佛の前に於て自ら須陀洹果を記說し已り卽ち沒して現れず。四十天子の如く是の如く四百天子、八百天子、十千の天子、二十千の天子、三十千の天子、四十千の天子、五十千の天子、六十千の天子、七十千の天子、八十千の天子、各各佛の前に於て自ら須陀洹果を記說し已り卽ち沒して現れざりき。[三三]

【三三】以上原第四十一卷より。

就するは、福德を潤澤にし、善法を潤澤にし、安樂の食たり。法に於て不壞淨ならば、諸の聞法に於て意し愛し念ず可し。聖戒成就せば福德を潤澤にし善法を潤澤にして安樂の食たり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四六) 一二六〇二 (一一三三)(潤澤經[二八]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく、上に說くが如し。差別せば『佛に於て不壞淨成就するは福德を潤澤にし、善法を潤澤にして安樂の食たり。[二九] 若しは法[三〇] 若しは慳垢、衆生の所を纏ふも心慳垢を離れて衆多く住して解脫施を行じ、常に施して捨を樂しみ、等心もて施を行じ、聖戒成就せば、福德潤澤し善法潤澤して安樂に食す』と。佛、此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四七) 一二六〇三 (一一三四)(潤澤經[三一]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく、上に說けるが如し。差別せば『是の如きの四種は、福德を潤澤にし善法を潤澤にして安樂の食たり。彼の聖弟子の功德果報は稱量す可からず。「爾所の福、爾所の果報を得」と。然かも彼の多福は大功德積聚數に墮すること前の五河譬經に說くが如し』と。乃至偈を說きたまへり。佛、此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四八) 一二六〇四 (一一三五)(四十天子經[三二]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、四十天子有り。極妙の色もて、夜過ぎて晨朝に佛の所に來詣し、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐せり。爾の時世尊、諸の天子に告げたまはく、『善き哉善き哉、諸の天子、汝等佛に於ける不壞淨、法僧に於ける不壞淨を成就し、聖戒成就せり』と。時に天子、座より起ち衣服を整へ、佛の足に稽首したてまつり合掌して佛に白して言さく『世尊我れ佛に於け

【二八】 S. 55. 32. Abhisanda(2) 佛、法、僧に不壞の淨信を起し、平等の心もて施を行ずれば福德豐かに、安樂を長養す。

【二九】 巴には「若は法に於て……。若は僧に於て……」。

【三〇】 巴には第四は左の如し。Puna ca paraṃ bhikkhave ariyasāvako vigatamalamaccherena cetasā agāraṃ ajjhāvasati muttacāgo payatapāṇi vossaggarato yācayogo dānasaṃvibhāgarato, ayaṃ catuttho puññābhisando kusalābhisando sukhassāhāro.

【三一】 S. 55. 33. Abhisanda(3) 前經參照。

【三二】 S. 55. 20. Devacārika (3) Candropama S. (Hoernle Vol. I. p. 40—44) 月喩經 (大二、五四四 b) 別雜六、五(大二、四一四 a)、四十天子、乃至八萬の天子佛所に至つて四不壞淨によりて身壞命終して天子として生れたることを自ら證明す。

を須陀洹果と名づく。何等をか斯陀含果と爲す。謂ゆる三結斷じて、貪恚癡薄らげる。是れを斯陀含果と名づく。何等をか阿那含果と爲す。謂ゆる五下分結斷ずる、是れを阿那含果と名づく。何等をか阿羅漢果と爲す。若し彼の貪欲永く盡き、瞋恚永く盡き、愚癡永く盡き、一切の煩惱永く盡くれば是れを阿羅漢果と名づく』と。佛、此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一六)一三六五二(一二三〇)[二五](經行處經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し彼の處に於て比丘有り、彼の處に經行し四沙門果の中にて一一の果を得ば、彼の比丘は其の形壽を盡すまで常に彼處を念ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一七—一九)一三六五三—一三六五五(住處經等)　經行處の如く是の如く住處・坐處・臥處も亦た是の如く說く。

(二〇—四三)一三六五六—一三六七九(比丘尼經等)　是の比丘の如く、是の如く比丘尼、式叉摩尼、沙彌、沙彌尼、優波塞・優婆夷の一一の四經も上に說くが如し。

(四四)一三六八〇(一二三一)[二六](四食經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく『四食は四大に於けるが如く衆生安立し饒益し攝受す。何等をか四と爲す。謂ゆる摶食・觸食・意思食・識食なり。是の如き四種は、福德潤澤し、善法潤澤して安樂の食なり。何等をか四と爲す。謂ゆる佛に於て不壞淨成就するは、福德潤澤し、善法潤澤して、安樂の食なり。法僧の不壞淨、聖戒成就するは福德潤澤し善法潤澤して、安樂の食なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四五)一三六八一(一二三二)[二七](潤澤經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく、上に說くが如し。差別せば『佛に於て不壞淨成

【二五】巴になし。沙門果を得ば心歡喜し終世その所證の處を忘れず。

【二六】S. 55. 31. Abhisanda(1) 四大、四食が衆生を長養する如く、四不壞淨は衆生の福德を潤澤にし、安樂を長養する食となる。上の一二六一四參照。

【二七】S. 55. 32. Abhisanda(2) 前經參照。

かせたまふ所を聞きて歡喜し奉行しき。

(六) 三六四二 (一二六)[16](須陀洹經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、[17]『四須陀洹分有り。何等をか四と爲す。謂ゆる佛に於ける不壞淨、法僧に於ける不壞淨、聖戒の成就なり。是れを須陀洹分と名づく』と。佛、此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七) 三六四三 (一二七)[18](四法經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく、『若し四法を成就する者有らば當に知るべし、是れ須陀洹なりと。何等をか四と爲す。謂ゆる佛に於ける不壞淨、法僧に於ける不壞淨、聖戒の成就なり。是れを四法成就者と名づく。當に知るべし是れ須陀洹なりと』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所と聞きて歡喜し奉行しき。

(八―一三) 三六四四―三六四九[19] (四法經) 不分別說の如く是の如く分別せば、比丘比丘尼・式叉摩尼[20]・沙彌[21]沙彌尼・優婆塞・優婆夷にして四法を成就する者も當に知るべし是れ須陀洹なりと。一一の經は上に說くが如し。

(一四) 三六五〇 (一二八)[22](四果經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく、『[23]四沙門果有り。何等をか四と爲す。謂ゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五) 三六五一 (一二九)(四果經)[24] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたまはく『四沙門果有り。何等をか四と爲す。謂ゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果なり。何等をか須陀洹果と爲す。謂ゆる三結斷するなり。是れ

【一六】 S. 55. 46. Bhikkhu. 須陀洹の具有すべきものは四不壞淨なり。
【一七】 巴には「諸比丘、四種の法を具足せる聖弟子は須陀洹なり。不墮法にして決定して正覺に趣向す」とあり。
【一八】 S. 55. 2. Ogadha. 前經參照。
【一九】 前經參照。
【二〇】 sikkhamānā 學法女、正學女と譯す。沙彌尼にして具足戒を受けんと欲する者、十八才より二十才に至る二年間別に六法を學ばしめて行の眞因を試む。
【二一】 śrāmaṇera, śrāmaṇerikā 小沙門、勤策、求寂男女と譯す、善男子出家して十戒を受けしもの。
【二二】 cf. S. 55. 55—58. Caturo phalā (1—4)
【二三】 沙門 (śramaṇa) は勤勞と譯す。專心修行に勵む者にして、出家をいふ。佛の敎に專精せば、其の程度に應じて四種の果報を受く。
【二四】 前經參照。四沙門果とその斷惑の差別を說く。

所を聞きて、歡喜し隨喜し禮を作して去りにき。

(三)〔三六三九〕(一一二三)(菩提經)[一三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、迦毘羅衞國の尼拘律園の中に住まりたまへり。時に釋氏有り名けて菩提と曰ふ。佛の所に來詣して佛の足に稽首したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『善き哉世尊、我れ等快く善利を得たり。世尊の親屬と爲ることを得たればなり』と。佛、菩提に告げたまはく、「是の語を作す莫れ。「我れ善利を得たり。世尊と親り屬することを得たればなり」と。故は然なり。菩提、所謂善利とは佛に於ける不壞淨、法僧に於ける不壞淨、聖戒の成就なり。是の故に菩提、當に是の學を作すべし。「我れ當に佛に於て不壞淨、法僧に於て不壞淨、聖戒成就すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに釋氏菩提、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し禮を作して去りにき。

(四)〔三六四〇〕(一一二四)(往生經)[一四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、迦毘羅衞國の尼拘律園の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、『若し聖弟子、佛に於て不壞淨成就することを得ん時、若し彼の諸天、先に、佛に於て不壞淨、戒成就せし因緣もて往生することを得たる者ならば皆大いに歡喜して歎じて言はん、「我れ佛に於て不壞淨、成就することを得たる因緣を以つての故に此の善趣天上に來生せり。彼の聖弟子も、今佛に於て不壞淨、成就することを得たり。是の因緣を以つて亦た當に復た此の善趣天の中に來生すべし」と。法僧に於ける不壞淨、聖戒成就も亦是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五)〔三六四一〕(一一二五)(須陀洹經)[一五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四種の須陀洹道分有り。善男子に親近し、正法を聽き、內に正思惟し、法次法向するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說

【一三】 S. 55. 48. Bhaddiya. 世尊に親屬するが故に善利を得るに非ず。佛法僧を信じ聖戒を具足することによりて善利を得。

【一四】 S. 55. 36. Sabhāgata-p. 佛法僧に淨信を起し聖戒具足せば、此の因緣もて先に天上に生ぜし諸先輩は必ず天上往生を記說せん。

【一五】 S. 55. 55. Caturo phalā (1) S. 55. 50. Aṅga. 須陀洹を證するに役立つ四種の法あり。

尊に請問したてまつる。若し智慧ある優婆塞、餘の智慧ある優婆塞、優婆夷有りて疾病困苦せんに云何が教化し教誡し說法せん』と。佛、難提に告げたまはく『若し智慧ある優婆塞有らば、當に餘の智慧ある優婆塞、優婆夷の疾病もて困苦せる者の所に詣り、三種の[九]蘇息處を以つて之れに教授して言ふべし「仁者、汝當に佛に於ける不壞淨(ふえじやう)、法僧に於ける不壞淨を成就すべし」と。是の三種の蘇息處を以て教授し已らば當に復た問うて言ふべし。「汝父母を顧戀するや不や」と。彼れ若し父母を顧戀すること有らば當に教えて捨てしむべし。當に彼れに語りて言ふべし。[一〇]「汝父母を顧戀して活を得ば顧戀す可きのみ。既に顧戀するに由りて活を得ざれば顧戀を用ふるを爲さん」と。彼れ若し父母を顧戀せずと言はば當に善しと歎じて隨喜すべし。當に復た問うて言ふべし。「汝、妻子奴僕錢財諸物に於て顧念有りや不や」と。若し顧念すと言はば當に捨つること、父母を顧戀する法を捨つるが如くすべし。若し顧念せずと言はゞ善しと歎じて隨喜し、當に復た問うて言ふべし「汝、人間の五欲に於て顧念するや不や」と。若し顧念すと言はば當に爲に說きて言ふべし。[一一]「人間の五欲は惡露不淨敗壞臭處にして天上の勝妙の五欲には如かず」と。教へて人間の五欲を捨離せしめ、教へて天上の五欲を志願せしめよ。若し復た彼れ心、已に人間の五欲を遠離(をんり)し先に已に天の勝妙の欲を顧念すと言はば善しと歎じて隨喜し、復た彼れに語りて言へ、「天上の妙欲は無常・苦・空・變壞の法なり。諸の天上の[一二]有身勝天の五欲あり」と。若し已に天欲顧念するを捨て、有身勝欲を顧念すと言はば善しと歎じて隨喜し、當に復た教えて言ふべし、「有身の欲も亦復た無常變壞の法なり。行滅涅槃出離の樂有り。汝當に有身の顧念を捨離すべし。涅槃寂滅の樂を樂ふを上と爲し勝と爲す」と。彼の聖弟子、已に能く有身の顧念を捨離して涅槃を樂はば善しと歎じて隨喜せよ。是の如く難提、彼の聖弟子、先後次第して教誡教授し起こらざる涅槃を得ること猶ほ比丘の百歲の壽命もて、解脫涅槃するが如くならしめよ』と。佛此の經を說き已りたまひしに釋氏難提等、佛の說かせたまふ

【九】 assāsaniyehi dhammehi. 息を吸ひ込むを蘇息(assāsa)といふ。息を吸ひ込ませる法、即ち平易に言へば元氣づける法なり。佛法僧に對する淨信を喚び起す時は、自ら精神に力を得るなり。

【一〇】 病中に父母、妻子、財物等に戀着せば心の平靜を失ひ、却つて病を增長せしむるのみなればなり。

【一一】 此の世の欲樂に心を奪はれて死を恐れなば心の平靜を失ふべし。死して天上の勝れたる欲樂ありと信ずれば心勇むべし。

【一二】 身體を具へたる諸天の中の勝れたる天をいふ。巴には四大王、三十三天、化樂天、他化自在天、梵世と順次上位の天界を欣求せしめて最後に涅槃を求めしむ。

者有り、諂はず、幻はず。我れ彼の人に於て十年教化せんに、是の因緣を以て彼の人則ち能く百千萬歲、一向に喜樂し心樂みて多く禪定に住すとせば、斯れ是の處有り。復た十年を置き、若しは九年八年乃至一年十月九月、乃至一月十日九日乃至一日一夜我れ教化せんに、其の明旦に至り能く勝進せしめ、晨朝に教化せんに乃至日暮に至りて能く勝進せしめば、是の因緣を以て百千萬歲一向に喜樂し心樂みて多く禪定に住することを得、二果を成就す。或は斯陀含果、阿那含果なり。彼の士夫は先に須陀洹を得たるを以ての故に』と。釋氏、佛に白さく『善き哉世尊、我れ今日より諸の齋日に於て當に齋戒を修すべし。乃至八支、神足月に於て齋戒を受持し力に隨つて惠施して諸の功德を修せん』と。佛、釋氏に告げたまはく『善き哉瞿曇、眞實の要と爲す』と。佛此の經を說き已りたまひし時、諸の釋種、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し禮を作して去りにき。

(二) 三六三八 (一一三二)(疾病經)[七] 是の如く我れ聞きぬ、一時、佛、迦毘羅衞國の尼拘律園の中に住まりたまへり。時に衆多の[八]釋氏有り、論議堂に集りて是の如き論議を作せり。時に釋氏有り、釋氏難提に語るらく『我れ時に、如來のみもとに詣りて恭敬供養し得ること有り、時に得ざること有り。時に知識比丘に親近して供養し得ること有り、時に得ざること有り。又復た、諸の智慧ある優婆塞有りて、餘の智慧ある優婆塞、智慧ある優婆夷有り。疾病困苦せるに、復た云何が教化し、教誡し、說法すべきかを知らず。今當に共に世尊の所に往詣して此の如き義を問ふべし。世尊の教の如く當に受け奉行すべし』と。爾の時難提、諸の釋氏と倶に佛の所に詣り稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に住まり、佛に白して言さく『世尊、我れ等諸の釋氏論議堂に集りて是の如き論議を作せり「諸の釋氏有り、我れに語りて言はく、難提、我れ等或る時如來を見たてまつりて恭敬し供養し、或る時は見たてまつらず。或る時は往いて諸の知識比丘を見て親近し供養し、或る時は得ず。是の如く廣說す。乃至、佛の教誡したまふ所の如く當に受け奉行すべし」と。我れ等、今日世

無常なれば必ず苦を伴ふべく、一向に樂を享けて住することは十年はおろか一日半夜も得ざるなり。

【六】財に反して、佛の教へに從つて熱心に修行するものは預流等の果を得て永恒の樂を享く。

【七】S. 55. 54. Gilāyanam. 世尊病中の優婆塞を見舞つて如何に教ゆべきかを說かる。

【八】巴には世尊遊行に出立せられんとして、諸比丘衣服の繕ひをなしつつあるを、釋氏の摩訶男が聞きつけて、別れを惜しみ、佛去られて後優婆塞、優婆の病まん時は如何に教ゆべきかを問へりとなす。

卷の第二十八*

（第五道誦、第八不壞淨相應第二部（原第四十一卷の始））

（第二品）

（二）一三六三七（一二二）（釋氏經）[1] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、迦毘羅衛國の尼拘律園に住まりたまへり。時に衆多の釋氏有り。佛の所に來詣し、稽首して足に禮したてまつり退きて一面に坐しぬ。爾の時、世尊、諸の釋氏に告げたまはく、『汝等諸の瞿曇[2]、法齋日[3]及び神足月[4]に於て齋戒を受持し功德を修するや不や』と。諸の釋氏、佛に白して言さく、『世尊、我れ等諸の齋日に於て時に齋戒を受くるを得ること有り、時に得ざること有り。神足月に於て時に、齋戒して諸の功德を修すること有り、時に得ざること有り』と。佛、諸の釋氏に告げたまはく『瞿曇、汝等、善利を獲ず。汝等は是れ憍慢者なり、煩惱人なり、憂悲人なり、惱苦人なり。何が故に諸の齋日に於て或は齋戒を得、或は得ず、神足月に於て或は齋戒して諸の功德を作すことを得、或は得ざるや。諸の瞿曇、譬へば人の利を求むるに日日に增長し一日に一錢、二日に兩錢、三日に四錢、四日に八錢、五日に十六錢、六日に三十二錢なり。是の如く士夫日常に增長し、八日九日乃至一月ならんに、錢財轉增廣する耶』と。長者、佛に白さく『是の如し世尊』と。佛、釋氏に告げたまはく、『云何が瞿曇、是の如く士夫の錢財轉增さば、當に自然に錢財增廣することを得べし。復た[5]我れをして十年中に於て一向に喜樂し、心樂みて多く禪定に住せしめんと欲するに寧ろ得るや不や』と。釋氏答へて言はく『不なり世尊』と。佛、釋氏に告げたまはく、『若しは九年八年七年六年五年四年三年二年一年、喜樂し心樂みて多く禪定に住し得るや不や』と。釋氏答へて言はく、『不なり世尊』と。佛、釋氏に告げたまはく、『且く年歲を置き寧ろ十月九月八月乃至一月、喜樂し心樂みて多く禪定に住し得るや不や。復た一月を置き寧ろ十日九日八日乃至一日一夜、喜樂し心樂みて禪定に多く住し得るや不や』と。釋氏答へて言はく『[6]不なり世尊』と。佛、釋氏に言げたまはく、『我れ今汝に語らん。我が聲聞中に直心の

＊新卷の二十八は原第四十一の始め、正藏九九の二九七bより二九九の○に至る部分具略四十八經を原三十一卷の首に加へ、不壞淨の第二品とす、多く S. 55 に合するによる。原本もと此にありて第五誦の七とせしかは定め難し。

【一】A. X. 46. Sakka. 釋迦族の人々法齋日、神足月に於て齋戒を受持せざるを誡めて、世間の欲、譬へば巨萬の富を得とも常に樂しみを享け得ざるべく、佛の教に從つて修行せば永恒の樂を享くと說く。

【二】巴には「釋迦族の者等よ」とあり。

【三】aṭṭhaṅgasamannāgatam uposatham 不殺、不盜、不婬、不妄語、不飮酒、身を塗飾香鬘せず、自ら歌舞し又歌舞を觀聽せず、高廣牀座に坐眠せず。以上を八關齊戒、又は八支齊法といひ、在家の者は布薩の日に之を持して修養す。

【四】又神變月といふ。正、五、九の三長齋月の異名なり。此の月は諸天神足を以て四天下を巡行すれば神足月或は神變月と言ふ。

【五】此の如く蓄財巧みにして巨富を得ると雖も、欲樂は

に攀づ。象の坂を上る時は後なる者は我が頸を抱へ、前なる者は我が衿に攀づ。彼の諸の婇女は王を娛樂せしめんが爲の故に、繒綵の衣を衣、衆の妙なる香を著け、瓔珞もて莊嚴し我れと與に同じく遊ぶも常に三事を護る。一には象を御して正道を失ふを恐れ、二には自ら心を護るも染著を生ずるを恐れ、三には自ら護持するも其の顚墜せんことを恐る。世尊、我れ爾の時に於て王の婇女に於て、一刹那も正しく思惟せざること無し』と。佛、長者に告げたまはく『善い哉善い哉、能善く心を護る』と。長者、佛に言さく『我れ家中に在る所有る財物は常に世尊及び諸の比丘・比丘尼・優波塞・優波夷と與に等しく受用し我所なりと計せず』と。佛、長者に告げたまはく『善い哉善い哉、汝、拘薩羅國に錢財の巨富なる、汝と等しき者有ること無し。而かも能く財に於て我所なりと計せず』と。爾の時世尊、彼の長者の爲に種種に說法して示敎照喜し、示敎照喜し已つて[七四]座より起ちて去りたまひぬ。[七五]

【七四】正藏に「從座而去」とあるも(三)の如く「從座起去」とせり。
【七五】新二十七(原第三十)此に終る。

したまはんと言へるを聞けり。聞き已つて一士夫に語つて言はく『汝今當に世尊の所に往詣して世尊を瞻視したてまつるべし。若し必ず去りたまはば、速かに來つて我れに語りたまへ』と。時に彼の士卽ち敎勅を受けて一處に往到し世尊の出でたまへるを見、卽ち速かに來り還つて梨師達多及び富蘭那に白せり『世尊は已に來りたまへり、及び諸の大衆も』と。時に梨師達多及び富蘭那、往いて世尊を迎へまつれり。世尊、遙かに梨師達多及び富蘭那の路に隨ひて來れるを見そなはし、卽ち路邊に出で尼師壇を敷き身を正しく端坐したまへり。梨師達多及び富蘭那は佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、我れ今四體支解は四方易顧して憶念せし所の事に今悉く迷妄せり。何れの時にか當に復た世尊及び諸の知識比丘を見たてまつることを得べき。世尊は今出でたまひて[65]拘薩羅に至り、拘薩羅より[66]伽尸に至り、伽尸より[67]摩羅に至り、摩羅より[68]摩竭陀に至り、摩竭陀より[69]殃伽に至り、殃伽より[70]修摩に至り、修摩より[71]分陀羅に至り、分陀羅より[72]迦陵迦に至りたまふ。是の故に我れ今、極めて憂苦を生ず、何れの時にか當に復た世尊及び諸の知識比丘を見たてまつることを得べき』と。佛、梨師達多及び富蘭那に告げたまはく『汝、如來を見るも、及び如來を見ざるも、諸の知識比丘を見るも、及び見ざるも、汝且らく隨時に六念を修習せよ。何等をか六と爲す。汝當に如來の事を念ずべし。廣說し乃至――天を念ぜよ。[73]然るに其れ長者、在家は憒撓し、在家は染著するも、出家は空閑なり。俗人の非家に處り一向鮮潔に、純一滿淨にして梵行淸白なる可きこと難し』と。長者、佛に白さく『奇なる哉世尊、善く此の法を說きたまへり。在家は憒撓し、在家は染著するも、出家は空閑なり。俗人の非家に處り一向鮮潔に、純一滿淨にして梵行淸白なる可きこと難しと。我れは是れ波斯匿王の大臣なり。波斯匿王、園觀に入らんと欲せば我れをして大象に乘らしめ、王の第一の宮女を載すに、一は我が前に在り、一は我が後に在りて我れ其の中に坐す。象の坂を下る時、前なる者は我が項を抱へ、後なる者は我が背

[65] Kosala.
[66] Kāsi
[67] Malla
[68] Magadha
[69] Aṅga
[70] Sambha
[71] Puṇḍarika ?
[72] Kaliṅga
[73] Tasmā ti ha thapatayo sambādho gharāvāso rajāpatho abbhokāso pabbajā alañ ca pana vo thapatayo appamādāya.

時に衆多の比丘、食堂に集りて世尊の爲に之を縫ひ、而かも是の言を作せり『如來久しからずして衣を作り竟りなば衣を著け鉢を持ちて人間に遊行したまはん』と。時に釋氏難提、衆多の比丘の食堂に集りて、如來久しからずして衣を作り竟りなば衣を著け鉢を持ちて人間に遊行したまはんと言へるを聞き、聞き已つて佛の所に來詣し、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に住し、佛に白して言さく『世尊、我れ今四體支解け四方易顚し、先きに受けし所の法に、今悉く迷妄せり。我れ聞きぬ「世尊は人間に遊行したまふ」と。我れ何れの時にか當に復た更らに世尊、及び諸の知識比丘を見たてまつるべき』と。佛、釋氏難提に告げたまはく『若しは如來を見るも、若しは見ざるも、若しは知識比丘を見るも、若しは見ざるも、汝當に時に隨ひて六念を修すべし。何等をか六と爲す。當に如來・法・僧の事、自ら持つ所の戒、自ら行ずる所の施を念じ及び諸天を念ずべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに釋氏難提、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し禮を作して去りにき。

(二七) 一二六五 (八五九)(梨師達多經)[六二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり、前に三月夏安居を結びたまへり。前に說けるが如し、差別せば時に長者有り、梨師達多及び富蘭那と名づくる兄弟二人なり、聞きぬ。衆多の比丘、食堂に集りて世尊の爲に衣を縫ひ、上の難提修多羅に廣說せるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに梨師達多長者及び富蘭那、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し座より起ち禮を作して去りにき。

(二八) 一二六六 (八六〇)(田業經)[六三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。前に三月夏安居を結び竟りたまひぬ。衆多の比丘、食堂に集りて世尊の爲に衣を縫へり。時に長者[六四] 梨師達多及び富蘭那の兄弟二人有り、鹿徑澤の中に於て田業を修治し、衆多の比丘の食堂に在りて世尊の爲に衣を縫ひ、如來久しからずして衣を作り竟りなば衣を著け鉢を持ちて人間に遊行

【六二】 巴になし。前經參照。

【六三】 S. 55. 6. Thapataya. 長者の梨師達多、富蘭那の二人、佛の去らるるに當つて惜別す佛爲に六法を說かる。兩人在家生活の煩はしく儘ならぬを述べ、而も佛の敎によりて在家にありてよく修養につとめつつある實際を詳かに告白す。

【六四】 Isidatta, Purāṇa 波斯匿王の臣下なり。サードカといふ村に住せり。

からずして、衣を作り竟りなば、當に衣を著け鉢を持ち精舍より出でて人間に遊行したまふべし。時に釋氏難提、衆多の比丘、食堂に集りて佛の爲に衣を縫ひ、如來久しからずして衣を作り竟りなば、衣を著け鉢を持ちて人間に遊行したまふといふを聞けり。釋氏難提聞き已つて佛の所に來詣し稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、我れ今四體支解け四方易顚し先きに聞きし所の法に念悉く迷妄せり。衆多の比丘、食堂に集り、世尊の爲に衣を縫ひ、如來、久しからずして衣を作り竟らば衣を著け鉢を持ちて人間に遊行したまはんと言へるを聞けり。是の故に我れ今心、大苦を生ず。何れの時にか當に復た世尊及び諸の知識比丘を見たてまつることを得べき』と。佛、釋氏難提に告げたまはく『汝、佛を見るも、若しは佛を見ざるも、若しは知識比丘を見るも、若しは見ざるも、汝當に時に隨つて五種の歡喜の處を修習すべし。何等をか五と爲す。汝當に時に隨つて如來の事たる如來應等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊、法の事、僧の事を念ずべし。自ら戒の事を持ち、自ら世の事を行じ、時に隨ひて憶念せよ「我れ已利を得たり、我れ慳垢の衆生の所に於て當に多く慳垢を離れて住することを修習し、解脱施・捨施・常熾然施を修し、捨の平等惠施を樂ひ常に施の心を懷くべし」と。是の如く釋氏難提、此の五支の定、若しは住、若しは行、若しは坐、若しは臥、乃至妻子倶ふも常に當に心を此の三昧の念に繫ぐべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに釋子難提、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し禮を作して去りにき。

(一六) 一二六三四 (八五八)[六一](難提經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり、前に三月夏安居したまへり。時に釋氏難提有り、佛の舍衛國の祇樹給孤獨園に於て前に三月、夏安居を結びたまへりと聞き、聞き已つて是の念を作さく『我れ當に彼(かしこ)に往き、并びに復た彼れに於て、衆に供養する事を造作し、如來及び比丘僧に供給すべし』と。卽ち彼に到りて三月竟れり。

[六一] A. XI 14. Nandiya. 難提釋經(大二、五〇五)佛夏安居中難提の供養を受けて、安居を竟へて遊行せんとせらる。難提惜別の情轉た切なり。佛卽ち六法を說かる。六法とは前經所說の五法に、「諸天を念ずる」ことを加へたるなり。

れ說く「此れ等は爲れ凡夫の數なり」と。若し聖弟子、成就せずんば放逸と爲し不放逸に非ず』[五八]と。『難提、若し聖弟子、佛に於て不壞淨成就して而かも上求せざるは、空閑林の中若しは露地に於て坐し、晝夜に禪思し、精勤し修習するも、勝妙に出離し、饒益し隨喜せず。隨喜せずして已らば歡喜生ぜず。歡喜生ぜずして已らば身猗息せず。身猗息せずして已らば苦覺則ち生ず。苦覺生じ已らば心定まることを得ず。心定まることを得ずんば是の聖弟子を名づけて放逸と爲す。法、僧に於ける不壞淨、聖戒の成就も亦た是の如く說く。是の如く難提、若し聖弟子、佛に於て不壞淨を成就して知足の想を起さざるは、空閑林の中の樹下、露地に於て晝夜に禪思し、精勤方便するに能く勝妙の出家、隨喜を起こす。隨喜し已らば歡喜を生ず、歡喜を生じ已らば身猗息す。身猗息し已らば覺の樂を受く。覺の樂を受け已らば心則ち定まる。若し聖弟子、心定まらば不放逸と名づく。法、僧の不壞淨、聖戒の成就も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに難提優婆塞、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し座より起ち、佛の足に禮したてまつりて去りにき。

(一四) 一二六三 (八五六)(難提經)[五九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたへり。時に釋氏難提有り、佛の所に來詣して佛の足に稽首し退きて一面に坐し、佛に白して言さく、『世尊、若し聖弟子、四不壞淨に於て一切時に成就せずんば是の聖弟子は是れ放逸なりと爲すや、不放逸なりと爲すや』と。佛、釋氏難提に告げたまはく『若し四不壞淨に於て一切時に成就せずんば我れ說く「是れ等は爲れ外凡夫の數なり」と。釋氏難提、若し聖弟子の放逸、不放逸を今當に說くべし』と。廣說すること上の如し。佛此の經を說き已りたまひしに釋氏難提、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五) 一二六三 (八五七)(難提經)[六〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。前に三月、夏安居し竟れり。衆多の比丘有り。食堂に集りて佛の爲に衣を縫へり。如來久し

【五八】 正藏には「爲放逸爲不放逸」とあれども(元・明)の如く「爲放逸非不放逸」に改む。

【五九】 S. 55. 47. Nandiya. 前經參照。

【六〇】 巴になし。難提、佛の遊行に出立せらるゝに當り別れを惜む。佛ために五種の心の歡びの因を說かる。五種とは、佛、法、僧を念じ、戒を持ち、施を念ずるなり。

丘に告げたまはく『彼の罽迦舍等は已に五下分結を斷じて阿那含を得たり、天上に於て般涅槃し復た還つて此の世に生ぜず』と。諸の比丘、佛に白さく『世尊、復た二百五十に過ぐる優婆塞の命終する有り、復た五百の優婆塞有りて此の那梨迦聚落に於て命終せり。皆五下分結盡き阿那含を得て彼れ天上に於て般涅槃し復た還つて此の世に生ぜざるや。復た二百五十に過ぐる優婆塞の命終せる有り。皆三結盡きて貪恚癡薄らぎ斯陀含を得て當に一生を受けて苦邊を究竟すべきや。此の那梨迦聚落に復た五百の優婆塞有り、此の那梨迦聚落に於て命終せり。三結盡きて須陀洹を得、惡趣の法に墮ちず、決定して正しく三菩提に向ひ、七有の天人に往生して苦邊を究竟せるや』と。佛、諸の比丘に告げたまはく、汝等は彼の命終に隨へり。彼の命終して而かも問はんは徒勞のみ。是れ如來の樂ふ（ねが）一答ふる所のものに非らず。夫れ生ずる者には死有り、何ぞ奇と爲るに足らん。[五四]如來の出世するも及び出世せざるも法性は常住なり。彼れを如來は自ら知りて等正覺を成じ顯現し演說し、分別し開示す。所謂是の事有るが故に是の事有り、是の事起るが故に是の事起る。無明を緣じて行有り、乃至生を緣じて老病死憂悲惱苦有り、是の如く苦陰集まる、無明滅すれば則ち行滅し、乃至生滅すれば則ち老病死憂悲惱苦滅す、是の如く苦陰滅す。今當に汝が爲に法鏡經を說くべし。諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。何等をか法鏡經と爲す。謂ゆる聖弟子、佛に於て不壞淨・法・僧に於て不壞淨、聖戒成就せるなりと』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三三）【二六三】（八五五）（難提經）[五五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[五六]舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に難提（なんだい）優婆塞有り、佛の所に來詣して佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、若し聖弟子、此の[五七]五根に於て一切時に成就せざる者は放逸なりと爲すや、不放逸なりと爲すや』と。佛、難提に告げたまはく『若し此の五根に於て一切時に成就せずんば我

【五四】 以下法鏡まで巴になし。

【五五】 S. 55. 40. Nadiya. 四不壞淨を一切時に有せざれば放逸と爲し凡夫なりとす。有せば不放逸となす。

【五六】 巴には kapilavatthusmiṃ Nigrodhārāme

【五七】 巴には「四入流分」とあり。

の命終し、[43]難陀比丘尼の命終し、[44]善生優婆塞の命終し、[45]善生優婆夷の命終せしを聞けり。乞食し已つて精舍に還へり、衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて佛の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、我れ今晨朝に、舍衞城に入りて乞食し、難屠比丘・難陀比丘尼・善生優婆塞・善生優婆夷の命終せしを聞けり。世尊、彼の四人命終して應に何處にか生ずべき』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『彼の難屠比丘・難陀比丘尼は諸の漏已に盡きて漏無く心解脫し、慧解脫し、現法に自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知れり。善生優婆塞、善生優婆夷は五下分結盡きて阿那含を得、天上に生じて般涅槃し、復た還つて此の世に生ぜず』と。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ今當に汝が爲に法鏡經を說くべし。佛に於て不壞淨、乃至聖戒成就せば是れを法鏡經と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三二) 一三六九 (八五三)(法鏡經)[46] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。上に廣說せるが如し、差別せば『異比丘・異比丘尼・異優婆塞・異優婆夷の命終せる有り。亦た上に說けるが如し』。

(三三) 一三七〇 (八五四)(那梨迦經)[47] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[48]那梨迦聚落の繁耆迦精舍に住まりたまへり。爾の時那梨迦聚落の多人命終せり。時に衆多の比丘有り、衣を著け鉢を持ち、那梨迦聚落に入りて乞食し、那梨迦聚落の[49]罽迦舍優婆塞命終し、[50]尼迦吒・[51]佉楞迦羅迦多・梨沙婆闍露・優婆闍露・梨色吒・阿梨色吒・[52]跋陀羅・[53]須跋陀羅・耶舍耶輸陀・耶舍欝多羅、悉く皆命終せるを聞き、聞き已つて精舍に還へり、衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて佛の所に詣り、佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、我れ等衆多の比丘、晨朝に那梨迦聚落に入りて乞食し、罽迦舍優婆塞等の命終せるを聞けり。世尊、彼れ等命終して當に何處にか生ずべき』と。佛、諸の比

【四三】 Nanda
【四四】 Sudatta?
【四五】 Sujātā.
【四六】 前經參照。
【四七】 S. 55. 10. Giñjakāvasatha (3)
那梨迦聚落の多くの優婆塞死したるに、一々についてその所趣を佛に問ふ。佛斯く一々問ふは徒勞のみ、宜しく法鏡に照して自ら知るべしと敎へらる。
【四八】 Ñātike Giñjakāvasatha
【四九】 Kakkaṭa.
【五〇】 Nikaṭa.
【五一】 Kaliṅga kālakata.
【五二】 Bhadda.
【五三】 Subhadda.

し」と。是の如く法・僧・聖戒の成就も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一八）一三六二六（八五〇）[三六]（天道經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四種の諸天の天道有り。未だ淨からざる衆生は淨からしめ、已に淨き者は其の淨を增す。何等をか四と爲す。謂ゆる聖弟子、如來の事を念ずること是の如し。「如來・應・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊なり」と。彼の聖弟子、如來の事を念じ已らば心に貪欲纏し、瞋恚、愚癡纏するも其の心を正直にす。如來の事を念ずれば是の聖弟子は法の流水を得、義の流水を得て、如來を念ずることの饒益を隨喜することを得。隨喜し已らば歡悅を生ず。歡悅し已らば身猗息す。身猗息し已らば覺受樂し、覺受樂しみ已らば三昧定まる。三昧定まり已らば是の聖弟子、是の如き學を作す、「何等をか諸天の天道と爲す」と。復た是の念を作さく「我れ聞く恚無きは諸天に上る天道と爲す」と。「我れ今日より諸の世間に於て瞋恚を起さず、純一滿淨にして諸天の天道たらん」と。是の如く法・僧・聖戒の成就も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一九）一三六二七（八五一）[三七]（法鏡經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[三八]舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ今當に[三九]法鏡經を說くべし。諦かに聽き善く思へ。當に汝が爲に說くべし。何等をか法鏡經と爲す。謂ゆる聖弟子の佛に於て不壞淨、法・僧に於て不壞淨、聖戒成就せば是れを法鏡經と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二〇）一三六二八（八五二）[四〇]（法鏡經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[四一]舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り、衣を著け鉢を持ち。舍衛城に入りて乞食せり。乞食せし時[四二]難屠比丘

【三六】前々經參照。

【三七】S.59.9.Giñjakāvasatha. 四不壞淨は法の鏡にして、此れに照されれば衆生の境涯一目瞭然たり。

【三八】巴にはÑātike Giñjakā=vasathe とあり。「ニャテイカ（村）の煉瓦の家にて」。

【三九】dhammādāsa.

【四〇】S.55.8. Giñjakāvasatha(1) 四人の在家出家の弟子の死に當つて其等の所趣を問ふ。佛之に答へられ、四不壞淨は法鏡なれば之によりて照して見るべしと敎へらる。

【四一】巴利本の說所前經に同じ。

【四二】Sāḷha?

より諸の世間に於て、若しは怖れ若しは安きに瞋恚を起さず、我れ但だ當に純一滿淨にして諸天の天道を受持すべし」と。是れを第三の諸天の天道と名づく。

復た次に比丘、謂ゆる聖弟子は自ら所有る戒事を念じ、憶念に隨つて言はく「我れ此に於て缺戒せず、汚戒せず、雜戒せず、明智は戒を歎ずる所、智者は戒を厭はず」と。是の如き等の戒事に於て正しく憶念し已らば心に隨喜を生ず。隨喜し已らば歡悅す。歡悅し已らば身猗息す。身猗息し已らば覺受樂し。覺受樂しみ已らば三昧定まる。三昧定まり已らば聖弟子、是の念を作す「何等をか諸天の天道と爲す」と。復た是の念を作さく「我れ聞く諸天は恚無くして上れりと爲す」と。「我れ今日より諸の世間に於て若しは怖れ若しは安きに瞋恚を起さず、我れ常に純一滿淨にして諸天の天道を受持すべし」と。是れを第四の諸天の天道の未だ淨からざる衆生は淨からしめ、已に淨き者は重ねて淨からしむと名づく」と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一七）一三六三五（八四九）[三五]（天道經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四種の諸天の天道有りて未だ淨からざる衆生は淨からしめ、已に淨き者は其の淨を增す。何等をか四と爲す。謂ゆる聖弟子の如來の事を念ずること是の如し。「如來・應・等正覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊なり」と。彼れ是の如く如來の事を念じ已らば則ち惡貪を斷じ及び心の惡不善の過を斷ず、如來を念ずるが故に、心に隨喜を生ず、心隨喜し已らば則ち歡悅す。歡悅し已らば身猗息す。身猗息し已らば覺受樂し、覺受樂しみ已らば三昧定まる。三昧定まり已らば聖弟子、是の如き學を作す「何等をか諸天の天道と爲す」と。復た是の念を作さく「我れ聞く恚無きは諸天に上る天道と爲す」と。「我れ今日より諸の世間に於て若しは怖れ若しは安きに瞋恚を起さず、但だ當に純一滿淨にして諸天の天道を受持すべ

【三五】前經參照。

へり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四種の諸天の天道有り。何等をか四と爲す。謂ゆる聖弟子、如來の事を念ずること是の如し「如來應等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊なり」と。此の如來の事に於て隨喜の心を生じ、隨喜し已つて心歡悅す。心歡悅し已らば身猗息す。身猗息し已らば覺受樂し。覺受樂しみ已らば三昧定まる。三昧定まり已らば聖弟子、是の如き學を作す「何等をか諸天の天道と爲す」と。復た是の念を作す[三四]「我れ聞く恚無くんば諸天に上る天道と爲す」と。是の念を作さく「我れ今日より世間に於て、若しは怖れ若しは安きに瞋恚を起さず、我れ但だ當に自ら純一滿淨にして諸天の天道を受くべし」と。是れを第一の諸天の天道の未だ淨からざる衆生は淨からしめ、已に淨き者は重ねて淨からしむと名づく。

復た次に比丘、聖弟子は法事を念ず「謂ゆる如來、正法律を說きたまふに現法に諸の熾然を離れ、時節を待たずして涅槃に通達し、身に卽して緣を觀察して自ら覺知す」と。是の如く法事を知り已らば心隨喜を生ず、隨喜し已らば身猗息す。身猗息し已らば覺受樂し、覺受樂しみ已らば三昧定まる。三昧定まり已らば聖弟子、是の如き學を作す「何等をか諸天の天道と爲す」と。復た是の念を作さく「我れ聞く恚無きは諸天に上る天道と爲す」と。「我れ今日より此の世間に於て若しは怖れ、若しは安きに瞋恚を起さず、我れ當に純一滿淨なる諸天の天道を受持すべし」と。是れを第二の諸天の天道と名づく。

復た次に比丘、若しは僧の事に於て正念を起す「謂ゆる世尊の弟子僧は正直に等向し、恭敬し尊重し供養すべき所なり、無上の福田なり」と。彼れ是の如く諸の僧事に於て正しく憶念し已らば心隨喜を生ず、心隨喜し已らば歡悅することを得、歡悅し已らば身猗息す。身猗息し已らば覺受樂し、覺受樂しみ已らば三昧定まる。三昧定まり已らば彼の聖弟子、是の如き學を作す「何等か諸天の天道なる」と。復た是の念を作さく「我れ聞く諸天の恚無きは諸天に上る天道と爲す」と。「我れ今日

【三四】 Abyāpajjha parame khvāham etarahi deve suṇāmi na kho panāhaṃ kiñci byābādhemi tasaṃ vā thāvaraṃ vā.
「無瞋は此の世に於ける最上天なるを我は聞く。されば我は動物も植物も害せざらん。」

法に於て決定して疑惑を離れ、聖意に於て實の如く知見せば是の聖弟子は自ら、我れ地獄盡き、畜生餓鬼の惡趣盡き、須陀洹を得、惡趣の法に墮ちず、決定して正しく三菩提に趣き、七有の天人に往生して苦邊を究竟せりと記說し能ふ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一四) 一三六二 (八四六)(恐怖經)[三一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、何等をか聖道を實の如く知見すと爲す。謂ゆる八聖道の正見乃至正定なり』と。次經も亦た是の如く說く。差別せば、『何等をか聖道を實の如く知見すと爲す。謂ゆる十二支緣起を實の如く知見するなり。所說の如きは是の事有るが故に是の事有り、是の事起るが故に是の事起ること無明を緣じて行あり、行を緣じて識あり、識を緣じて名色あり、名色を緣じて六入處あり。六入處を緣じて觸あり、觸を緣じて受あり、受を緣じて愛あり、愛を緣じて取あり、取を緣じて有あり、有を緣じて生あり、生を緣じて老、病死憂悲苦惱あるが如し。是れを聖弟子、實の如く知見すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五) 一三六三 (八四七)(天道經)[三二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四種の諸天の天道有り、未だ淨からざる衆生は淨からしめ、已に淨き者は重ねて淨からしむ。何等をか四と爲す。謂ゆる聖弟子の佛に於ける不壞淨、法に於ける不壞淨、僧に於ける不壞淨、聖戒の成就なり。是れを四種の諸天の天道の、未だ淨からざる衆生は淨からしめ、已に淨き者は重ねて淨からしむと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一六) 一三六四 (八四八)(天道經)[三三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたま

【三一】 S. 55. 28. Duvera(3) 聖道を如實に知るとは八聖道、十二支緣起を實の如く知るなり。

【三二】 S. 55.34. Devapada(1) 四不壞淨は衆生を淸淨ならしめ諸天に上るの道たり。

【三三】 S. 55.35. Devapada(2) 四不壞淨が諸天へ上る道なる所以を詳說す。

をか四と爲す。謂ゆる聖弟子、佛に於て信住せずんば則ち已に斷じ已に知りて佛に於て不壞淨を成就し、法僧に於て信ぜず惡戒ならば彼れ則ち已に斷じ已に知りて、法僧に不壞淨を、及び聖戒就成す。是の如く四法斷じて四法成就せば、如來應等正覺は知られ見られて彼の人に、須陀洹を得、惡趣の法に墮ちず、決定して正しく三菩提に向ひ、七月の天人に往生して苦邊を究竟すと記說したまふと。尊者阿難、尊者舍利弗に[29]語るらく『是の如く是の如く四法斷じて四法成就せば、如來應等正覺は知られ見られて彼の人に、須陀洹を得、決定して正しく三菩提に向ひ、七有の天人に往生して苦邊を究竟すと記說したまふなり』と。時に二正士、共に論議し已つて展轉して隨喜し、座より起ちて去りにき。

(三) 一三六二 (八四五)(恐怖經)[30] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊。諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、五の恐怖・怨對に於て休息し、三事決定せば、疑惑を生ぜず、實の如く賢聖の正道を知見し、彼の聖弟子は能く自ら記說せん、「地獄・畜生・餓鬼の惡趣已に盡き、須陀洹を得、惡趣に墮ちず決定して正しく三菩提に向ひ、七有天人に往生して苦邊を究竟す」と。何等をか五の恐怖・怨對休息すと爲す。若しは殺生因緣の罪の怨對には恐怖生ず。若し殺生を離れなば、彼の殺生罪の怨對の因緣より生ずる恐怖休息す。若しは偸盜・邪婬・妄語・飲酒罪あらば、怨對の因緣もて恐怖を生ず。彼れ若し偸盜・邪婬・妄語・飲酒罪の怨對を離れなば、因緣する恐怖休息す。是れを罪の怨對の因緣より生ずる五の恐怖休息すと名づく。何等をか三事決定せば疑惑を生ぜずと爲す。謂ゆる佛に於て決定して疑惑を離れ、法、僧に於て決定して疑惑を離るるなり。是れを三法決定せば疑惑を離ると名づく。何等をか名づけて聖道を實の如く知見すと爲す。謂ゆる此の苦聖諦を實の如く知り、此の苦集聖諦、此の苦滅聖諦、此の苦滅道跡聖諦を實の如く知るなり。是れを聖道に實の如く知見すと名づく。若し此の五の恐怖罪の怨對に於て休息し、三

【二九】正藏には「語」の字なけれども(三)に順じて挿入す。

【三〇】S. 55. 29. Bhaya. 殺生乃至飲酒の五惡を離れ、三寶に於て疑惑なく、四聖諦を如實に知見せば須陀洹を得て惡趣に墮ちず、

（二一）　三六一九（八四三）（舍利弗經）[二五]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、尊者舍利弗に告げたまはく『所謂流れとは何等をか流れと爲す』と。舍利弗、佛に白して言さく『世尊の說かせたまふ所の流れとは謂ゆる八聖道なり』と。復た問ひたまはく『舍利弗、謂ゆる入流分とは何等をか入流分と爲す』と。舍利弗、佛に白して言さく『世尊、四種の[二六]入流分有り。何等をか四と爲す。謂ゆる善男子に親近し、正法を聽き、內に正しく思惟し、[二七]法に次ひ法に向ふなり』と。復た問ひたまはく、舍利弗『入流者は幾法を成就するや』と。舍利弗、佛に白して言さく『四分有りて成就せば入流者なり。何等をか四と爲す。謂ゆる佛に於ける不壞淨、法に於ける不壞淨、僧に於ける不壞淨、聖戒の成就なり』と。佛、舍利弗に告げたまはく『汝の所說の如し、流れとは謂ゆる八聖道なり。入流分には四種有り、謂ゆる善男子に親近し、正法を聽き、內に正しく思惟し法に次ひ法に向ふなり。入流者は四法を成就す。謂ゆる佛に於ける不壞淨、法に於ける不壞淨、僧に於ける不壞淨、聖戒の成就なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者舍利弗、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二二）　三六二〇（八四四）（舍利弗經）[二八]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者舍利弗、尊者阿難の所に詣り、問訊し慰勞し已つて退きて一面に住しぬ。尊者舍利弗、尊者阿難に語るらく『所問有らんと欲す。寧ろ閑暇有りて記說を爲すや不や』と。尊者阿難、舍利弗に語るらく『意に隨つて問はれよ、知れるものは當に答ふべし』と。舍利弗、尊者阿難に問はく『幾法を斷ぜば如來應等正覺、知られ見られて彼の人に、須陀洹を得、惡趣の法に墮ちず決定して正覺に向ひ、七有の天人に往生して苦邊を究竟すと記說したまふと爲すや』と。尊者阿難、尊者舍利弗に語るらく『四法を斷じ、四法を成就せば如來應等正覺は彼の人に、須陀洹を得、惡趣の法に墮ちず、決定して三菩提に向ひ、七有の天人に往生して苦邊を究竟すと記說したまふなり。何等

【二五】 S. 55.5. Sāriputta.(2) 佛、舍利弗との問答によりて四不壞淨と、四入流分と、流(八聖道)との關係を說く。

【二六】 sotāpattiyaṅga 八聖道はよく涅槃に趣流するが故に流れといふ。八聖道の流れに入るための補助をなすが入流分なり。

【二七】 dhammānudhammapaṭipatti 新に法隨法行と譯す。

【二八】 S. 55.4. Sāriputta.(1) 舍利弗阿難の問に應へて、佛、法、僧、聖戒に不信を斷じ淨信を成就せば如來須陀洹を記說し給ふと說く。

德潤澤にして善法を潤澤にし攝受する功德を稱量するも爾所の果福、爾所の果、爾所の福果集まるかを稱量す可からず。然かも彼れは衆多の福利を得。是れ大功德聚の數なり。譬へば五河の合流するが如し、謂ゆる〔二三〕恒河・耶菩那・薩羅由・伊羅跋提・摩醯なり。彼の諸水に於て能く度量する無し、百瓶千瓶百千萬瓶なるも然かも彼の水多し。是れ大水聚の數なればなり。是の如く聖弟子四功德を成就するものの潤澤は能く其の福の多少を度量する無し。然かも彼れは福多し、是れ大功德聚の數なり。是の故に諸の比丘、當に是の學を作すべし。我れ當に佛に於て不壞淨、法・僧に於て不壞淨を成就し、聖戒成就すべし』と。爾の時世尊卽ち偈と說いて言はく、

『衆生の巨海は　自ら淨まり能く彼れを淨め　汪洋として平流す　實に諸れ百川の長
一切の諸の江河　群生の依る所　悉く大海に歸す　此の身も亦復た然なり　施戒の功
德を修せば　百福の流れの歸する所たり』と。

〔一〇〕一三六八（八四二）（婆羅門經）〔二四〕是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『婆羅門は虛僞の道を說き、愚癡惡邪にして正しく趣向せず。智等覺して涅槃に向ふに非ず。彼れは是の如きを作して諸の弟子を化す。十五日に於て胡麻の屑、菴羅摩羅の屑を以て身體を沐浴し新しき劫貝を著け、頭には長き縷を垂れ、牛屎を地に塗り而かも上に臥して言はく「善男子、晨朝に早く起き、衣を脫ぎて一處に擧著し、其の形體を躶にし東方に向つて馳走せよ。正使ひ道路に兇象・惡馬・狂牛・猘狗・棘刺・叢林・坑澗・深水に逢はんも直前して避くること莫れ。害死に遇はば必ず梵天に生ぜん」と。是れを外道は愚癡邪見にして智等覺して涅槃に向ふに非ずと名づく。我れは弟子の爲に平正の路を說く。愚癡に非ず、智慧等覺に向ひ、涅槃に向ふ。謂ゆる八聖道の正見乃至正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

〔二三〕Gaṅgā, Yamunā, Aciravatī, Sarabhū, Mahī.

〔二四〕S.55.12. Brāhmaṇā. 婆羅門の愚說邪道を難じ、涅槃等覺の道は八聖道なりと示す。

して久しく正法の中に住することを得ざらんと。是れを人を敬信するが故に生ずる第五の過患と名づく。是の故に諸の比丘、當に是の如く學すべし。我れ當に佛に於て不壞淨を、法・僧に於て不壞淨を成就し、聖戒成就すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六)　**一三六四**（八三八）（食經）[一九]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四種食有り。衆生を長養して四大增長し攝受す。何等をか四と爲す。謂ゆる摶食・觸食・意思食・識食なり。是の如く福德潤澤にして安樂の食と爲る。何等をか四と爲す。謂ゆる佛に於ける不壞淨、法僧に於ける不壞淨、聖戒成就するなとり。是の故に諸の比丘、當に是の學を作すべし。我れ當に佛に於て不壞淨を、法・僧に於て不壞淨を成就し、聖戒成就すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七)　**一三六五**（八三九）（戒經）[二〇]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、佛に於て不壞淨成就せば、法を聞きて衆僧の念ずる所の聖戒は成就せりと爲す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八)　**一三六六**（八四〇）（戒經）[二一]　次經も亦た上に說けるが如し、差別せば、『若し佛に於て不壞淨成就せば、法・僧に慳垢(けんく)纒ふとも衆生は慳垢の心を離れ、在家するも而かも解脫に住し、心施常に行じ、樂施常に樂み、捨に於て平等施を行じ、聖戒成就す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九)　**一三六七**（八四一）（潤澤經）[二二]　次經も亦た上に說けるが如し。差別せば、『是の如く聖弟子、四種は福

【一九】　S. 55.31. Abhisanda(1) 四食衆生を長養する如く、四不壞淨は福德を潤澤にし、安樂を增長する食となる。下の一二六八〇參照

【二〇】　巴になし。先づ佛に於て淨信を有すれば、法を聞くべく、僧の所念の戒を成就すべし。

【二一】　S. 55.32. Abhisanda(2) 佛に不壞の淨信あれば、法僧に對しても信を起し、喜んで施をなす。

【二二】　S. 55.41—42.Abhisanda. 四不壞淨の功德は量り知る可からず。下の一二六八一は下參照

塔寺に入らずして已らば、衆僧を敬はざらん。僧を敬はずして已らば、法を聞くことを得ざらん。法を聞かずして已らば、善法を退失し、久しく正法の中に住することを得ざらんと。是れを人を信敬して生ずる初めの過患と名づく。復た次に人を敬信せんには、敬ふ所の人、戒を犯し律に違ひ、衆僧爲に不見擧を作さん。彼の人を敬信せし者は當に是の念を作すべし。此れは是れ我が師なり。我が敬重する所なるを而かも今衆僧、不見擧を作せり。我れ今何の縁もて復た塔寺に入らん。塔寺に入らずして已らば、衆僧を敬はざらん、衆僧を敬はずして已らば、法を聞くことを得ず。法を聞くことを得ず。法を聞かずして已らば、善法を退失し、久しく正法の中に住することを得ざらんと。是れを、人を敬信するが故に生ずる第二の過患と名づく。復た次に彼の人若し衣鉢を持ちて餘方に遊行せんに、彼の人を敬せし者は、而かも是の是の念を作さん。我が敬ふ所の人、衣を著け鉢を持ちて人間に遊行せり。我れ今何の縁もて彼の塔寺に入らん、塔寺に入らずして已らば、衆僧を恭敬することを得ざらん。衆僧を敬はずして已らば、法を聞くことを得ず。法を聞かずして已らば、善法を退失し、久しく正法の中に住することを得ざらんと。是れを、人を敬信するが故に生ずる第三の過患を生ずと名づく。復た次に彼の信敬せらるる人戒を捨てて俗に還へらんに、彼の人を敬信せし者は而かも是の念を作さん。彼れは是れ我が師なり。我が敬重せし所なりしに戒を捨てて俗に還へれり。我れ今彼の塔寺に入るべからず、寺に入らずして已らば、衆僧を敬はず。僧を敬はずして已らば、法を聞くことを得ず。法を聞かずして已らば、善法を退失し、久しく正法の中に住することを得ざらんと。是れを、人を敬信するが故に生ずる第四の過患と名づく。復た次に彼の信敬せらるる人身壞命終せんに、彼の人を敬信せし者は而かも是の念を作せ。彼れは是れ我が師なり。我が敬重せし所なるを今已に命終せり。我れ今何の縁もて彼の塔寺に入らん。寺に入らざるが故に僧を敬ふことを得ず。僧を敬はずして已らば、法を聞くことを得ず。法を聞かざるが故に、善法を退失

て四天下に王となり、身壞命終せば天上に生ずることを得と雖も、然かも猶ほ未だ地獄・畜生・餓鬼の惡趣の苦を斷ぜず。所以は何ん。轉輪王は佛に於て不壞淨を、法僧に不壞淨を得ず、聖戒成就せざるを以ての故なり。多聞の聖弟子は糞掃衣を持ち、家家乞食し、草蓐の臥具なるも而かも彼の多聞の聖弟子は地獄・畜生・餓鬼の惡趣の苦より解脫せり。所以は何ん。彼の多聞の聖弟子は佛に於て不壞淨を、法、僧に不壞淨を、聖戒成就せるを以ての故なり。是の故に諸の比丘、當に是の學を作すべし。佛にて於て不壞淨を、法、僧に不壞淨を、聖戒成就せん』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) 一三六二 (八三六)(四不壞淨經)[一七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『汝等當に哀愍心して慈悲心を起すべし。若し人有りて汝等の所說に於て樂聞し樂受せば、汝當に爲に四不壞淨を說いて入らしめ、住せしむべし。何等をか四と爲す。佛に於て不壞淨、法に於て不壞淨、僧に於て不壞淨、聖戒に於て成就するなり。所以は何ん。若し四大の地水火風は變易增損有るも、此の四不壞淨は未だ嘗て增損變異せざればなり。彼の增損變異無く、謂ゆる聖弟子の佛に於て不壞淨成就せるに、若し地獄・畜生・餓鬼に墮つること是の處有ること無し。是の故に諸の比丘、當に是の學を作すべし。我れ當に佛に於て不壞淨を、法、僧に不壞淨を成就し聖戒成就すべしと。亦た當に餘人を建立して成就せしむべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五) 一三六三 (八三七)(過患經)[一八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し人を信ぜば五種の過患を生ず。彼の人或る時は戒を犯し律に違ひて衆の棄つる所と爲れば、其の人を恭敬せし者は、當に是の念を作すべし。此れは是れ我が師なり。我が重敬する所なるを衆僧棄てて薄し。我れ今何の緣もて彼の塔寺に入らん。

【一七】 S. 55. 16—17. Mitte-nāmaccā (1—2) S. 56. 26. Mitta. 自ら四不壞淨を得ると共に、他人若し聞かば之に四不壞淨を得しむべし。

【一八】 巴になし。人を信ずる者、若し其の人期待に背きて戒律を犯さば信仰鈍り心に煩悶を生ぜん。故に佛、法、僧、戒を信ずべし。

[一三]淨を成就して壽命を求めんと欲せば卽ち壽命を得、好色・力・樂・辯を求めば自在に卽ち得るなり。何等をか四と爲す。謂ゆる佛の不壞淨の成就、法・僧の不壞淨、聖戒の成就なり。我れ是の聖弟子を見るに、此に於て命終して天上に生じ、天上に於て十種の法を得。何等をか十と爲す。天の壽、天の色、天の名稱、天の樂、天の自在、天の色・聲・香・味・觸を得るなり。若し聖弟子、天上に於て命終して人中に來生せば、我れ彼の十事の具足せるを見る。何等をか十と爲す。人間の壽命、人の好色・名稱・樂・自在・色・聲・香・味・觸なり。我れ、彼れは多聞の聖弟子にして他信に由らず、他欲に由らず、他聞に從はず、他意を取らず、他思に因らずと說き、我れ、彼れは實の如き正慧知見を有すと說く』と。爾の時難陀に、從者有りて難陀に白して言さく『浴時已に到れり。今去る可し』と。難陀答へて言はく『我れ今人間の澡浴を須ひず、我れ今此の勝れたる妙法に於て以て自ら沐浴せん。所謂世尊の所に於て淸淨の信樂を得ん』と。爾の時離車の調象師難陀、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ち禮を作して去りにき。

(二) 一二六〇 (八三四)[一四](不貧經) 是の如し我れ聞きぬ。一時、佛、毘舍離國の獼猴池の側なる重閣講堂に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し聖弟子、四不壞淨を成就せば、人中に於て貧しき活(くらし)をせず、而かも活すに寒乞せずして自然に富足らん。何等をか四と爲す。謂ゆる佛の不壞淨に於て成就し、法・僧・聖戒の不壞淨に成就するなり。是の故に比丘、當に是の如く學すべし。我れ當に佛に於て不壞淨を、法僧に不壞淨を成就し、聖戒成就すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき

(三) 一二六一 (八三五)[一五](轉輪王經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『轉輪王は七寶具足し、人中の四種の神力を成就して[一六]四天下に王たり。身壞命終せば天上に生ず。復た轉輪聖王は七寶具足し、人間の神力を成就し

【一三】 淨とは純粹なる信仰なり。

【一四】 S. 55. 44-5. Mahaddhana(1—2) 佛、法、僧、戒に不壞の信を有すれば衣食自ら足る。

【一五】 S. 55. 1. Rājā. 四天下を領有し、七寶を有し、四種の神力ある轉輪聖王と雖も、佛、法、僧、戒に淨信なくんば三惡趣に墮すことあるべし。衣食乏しくとも淨信ある聖弟子は三惡趣に墮することなし。

【一六】 東南西北の四大洲なり。

重んぜず、餘の比丘の初め學戒を樂ひ、戒を重んじ、制戒を讃歎するを見ては、彼れ亦た時に隨つて讃歎せざらん。我れ此れ等の比丘の所に於ては亦た讃歎せず。其の初始より學戒を樂はざるを以ての故に。所以は何ん。若し大師、彼れを讃歎せば、餘人當に復た習近し親重して其の所見を同うすべし。其の所見を同うするを以ての故に、長夜に當に不饒益の苦を受くべし。是の故に我來れ彼の長老・中年・少年に於ても亦復た是の如し。學戒を樂ふは、前に說けるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三)一三五九六(八三二)(三學經)[七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[八]三學有り。何等をか三と爲す。謂ゆる[九]增上戒學・增上意學・增上慧學なり。何等をか增上戒學と爲す。[一〇]若し比丘、戒の波羅提木叉に住し、威儀行處を具足し、微細の罪を見るも則ち怖畏を生じて學戒を受持す。何等をか增上意學と爲す。若し比丘、諸の惡不善法を離れ、有覺有觀、離に喜樂を生じ、初禪具足して住し、乃至第四禪具足して住せば、是れる增上意學と名づく。何等をか增上慧學と爲す。若し比丘、此の苦聖諦に實の如く知り、此の苦集聖諦、此の苦滅聖諦、此の苦滅道跡聖諦に實の如く知らば、是れを增上慧學と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四—一五)一三五九七—一三六〇八 ◇三學の餘經は前の念處に說けるが如し。禪の如く是の如く無量無色、四聖諦の如く是の如く四念處、四正斷・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道・四道・四法句・止觀修習も亦た是の如く說く。

(第五道誦、*第八不壞淨相應、第一部(原第三十卷の末))

◎(第一品)[一一]

(一)一三五九九(八三三)(離車經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、毘舍離國の獼猴池の測なる重閣講堂に住まりたまへり。時に善き調象師の[一二]離車有り、名を難陀と曰ふ。佛の所に來詣し佛の足に稽首したてまつり、退きて一面に坐しぬ。爾の時世尊、離車難陀に告げて言はく『若し聖弟子、四不壞

【七】 A. III. 88. Sikkha. 戒定慧の三學を說く。
【八】 tisso sikkhā.
【九】 adhisīlasikkhā, adhicittasikkhā, adhipaññāsikkhā.
【一〇】 Bhikkhu sīlavā hoti pātimokkhasaṃvarasaṃvuto viharati ācāragocarasampanno aṇumattesu vajjesu bhayadassāvī samādāya sikkhati sikkhāpadesu.
◇略經數明かならず、次行列目により十二經とす。
*四不壞淨 Aveccapasāda に關する諸經を輯む。S. 55 Sotāpatti Saṃyutta に當る。二品。
◎當卷終に至る二十八經。
【一一】 S. 55. 30. Licchavi. 佛と法と僧と聖戒とに不壞の淨信を有するものは命終して人天に生るれば十種の勝れたる法を得ると說かる。
【一二】 跋耆國の毘舍離城に住する種族の名にして刹帝利族なり。

の法を說き是の戒を讚歎したまへり。我れ爾の時世尊の所に於て心忍びず歡喜せざるを得、心欣樂せずして是の言を作せり「是の沙門は極めて是の戒を制し是の戒を讚歎す」と。世尊、我れ今日、自ら罪を知りて悔ゆ。自ら罪を見て悔ゆ。唯だ願くは世尊、我が過ちを悔ゆるを受けたまへ、哀愍の故に』と。佛、迦葉氏に告げたまはく『汝自ら悔ゆるを知れり。愚癡にして善からず辨ぜず、我れ諸の比丘の爲に戒相應の法を說き制戒を讚歎せしを聞きて我が所に於て忍びず喜ばず、心欣樂せずして而かも是の言を作せり「是の沙門は極めて是の戒を制し極めて是の戒を歎ず」と。汝今迦葉、自ら悔ひを知り自ら悔ひを見已らば[五]未來世に於て律儀戒生ぜん。戒は今汝に授く、哀愍の故に。迦葉氏、是の如く悔ひなば善法增上して終ひに退滅せず。所以は何ん。若し自ら罪を知り自ら罪を見る有りて而かも過を悔ひなば未來世に於て律儀戒生じ善法增長して退滅せざるが故なり。正使迦葉上座爲るもの學戒を欲せず、戒を重んぜず、制戒を歎ぜざらん。是の如き比丘は我れ讚歎せず。所以は何ん。若し大師に讚歎せらるれば餘人則ち復た與に相習近し恭敬親重せん。若し餘人與に相習近し親重せば則ち與に見を同うし彼の所作を同うせん。彼の所作を同うせば長夜に當に不饒益の苦を得べし。是の故に我れ彼の長老に於て初め讚歎せざりしなり。其の初始より學戒を樂はざりしを以ての故に。長老の如く中年少年も亦是の如し。若し是の上座長老、初始より戒學を重んじ、制戒を讚歎せば是の如き長老は我が讚歎する所なり。其の初始より戒學を樂へるを以ての故に。大師に讚歎せらるれば餘人も亦た當に與に相習近親重して其の所見を同うすべし。其の所見を同うするが故に未來世に於て彼れ當に長夜に義を以て饒益すべし。是の故に彼の長老比丘に於て常に當に讚歎すべし。初始より學戒を樂へるを以ての故に。中年少年も亦復た是の如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) 三五九五 (八三一)(戒經)[六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し諸の上座長老比丘、初始より學戒を樂はず、戒を

【五】 āyatiṃ saṃvaraṃ āpajjati.

【六】 同上の中。

卷の第二十七*

(第五道誦、第七學相應の續き、第二部(原第三十卷の始))

(第二品)◎

(一) 三五四(八三〇)(崩伽闍經[一]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、崩伽闍の崩伽耆[二]林の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘の爲に戒相應の法を説き制戒法を讃歎したまへり。爾の時、尊者迦葉氏[三]、崩伽聚落に於て住まり、世尊の戒相應[四]の法を説き是の戒を讃歎したまへるを聞き、極めて心忍びず喜ばずして言はく『此の沙門は極めて是の戒を讃歎し極めて是の戒を制す』と。爾の時世尊、崩伽聚落に於て樂む所に隨ひ住まり已つて舍衞國に向つて去りたまひ、次第に遊行して舍衞國の祇樹給孤獨園に至りたまへり。時に尊者迦葉氏、世尊の去りたまひて後久しからずして、心卽ち悔ひを生ぜり『我れ今利を失へり、大不利を得たり。世尊の所に於て、戒相應の法を説き、制戒を讃歎したまひし時、心忍びず喜ばず、心歡喜せずして而かも是の言を作せり「沙門は極めて是の戒を制し極めて是の戒を讃歎す」と』。時に迦葉氏、夜過ぎて晨朝に衣を著け鉢を持ち、崩伽聚落に入りて乞食し、食し已つて精舍に還へり、臥具を付屬し、自らは衣鉢を持ち舍衞城に向ひて次第に遊行せり。舍衞國に至りて衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて、世尊のみもとに詣り稽首して足に禮したてまつり、佛に白して言さく『過を悔ひたてまつる世尊、過を悔ひたてまつる善逝、我れ愚我れ癡にして善からず辨ぜず。我れ世尊の、諸の比丘の爲に戒相應の法を説き制戒を讃歎したまへるを聞きし時、世尊の所に於て忍びず喜ばず、心欣樂せずして而かも是の言を作せり「是の沙門は極めて是の戒を制し、是の戒を讃歎す」と』と。佛、迦葉氏に告げたまはく『汝何なる時我が所に於て心忍びず喜ばず欣樂を生ぜずして是の言を作せるや「此の沙門は極めて是の戒を制し是の戒を讃歎す」と』と。迦葉氏、佛に白して言さく『時に、世尊、崩伽闍聚落の崩伽耆林の中に於て諸の比丘の爲に戒相應

---

* 新卷の二十七(原第三十)前に例するに第五誦道品第六たるべし。二品四十三經。

◎具(三)略(十二)合して十五經を以て第二品とす。

【一】 A. III. 90. Paṅkadhāya 迦葉比丘、はじめ世尊の戒相應法を説かるるを喜ばざりしが、後悔ゆる所ありて世尊に告白す。世尊爲に戒の重要なる所以を説き、上座比丘にして學戒を重んぜざるものは之を讃嘆せずと說かる。

【二】 Paṅkadhā

【三】 Kassapagotta

【四】 sikkhāpadapaṭisaṃyuttāya dhammiyā kathāya bhikkhū sandasseti.

げたまはく『汝能く時に隨ひて三學を學するに堪ふるや不や』と。跋耆子、佛に白して言さく『堪能す、世尊』と。佛、跋耆子に告げたまはく『汝當に時に隨ひて戒學を增し、意學を增上し、慧學を增上すべし。時に隨ひて精勤し戒學を增上し、意學を增上し、慧學を增上し已らば、久しからずして當に諸の有漏を盡くすことを得て漏無く心解脫し、慧解脫し、現法に自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知るべし』と。爾の時尊者跋耆子、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し禮を作して去りにき。

　爾の時尊者跋耆子、佛の敎誡敎授を受け已つて獨一靜處にて專精に思惟し、上に說くが如く、乃至心善く解脫して阿羅漢を得たり。[五九]

【五九】新卷の二十六（原第二十九卷）此に終る。四十五經なり。

の時節に隨ひて自から諸の漏を起さず心善く解脱することを得』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一六）〔三五九二〕（八二八）（驢經）[五七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば驢・群牛に隨ひて行き、而かも是の念を作せり「我れ牛聲を作さん」と。然るに其れ彼の形亦た牛に似ず、色も亦た牛に似ず、聲の似ざるを出し、大群牛に隨ひて已に是れ牛なりと謂ひ而かも牛鳴を作すも、而も牛を去ること實に遠きが如く、是の如く一愚癡の男子有り、律に違ひ戒を犯し、大衆に隨逐して言はく「我れは是れ比丘なり、我れは是れ比丘なり」と。而かも欲に勝ち增上戒學・增上意學・增上慧學を學習せずして大衆に隨逐し、自ら我れは是れ比丘なり、我れは是れ比丘なりと言ふも其れ實に比丘を去ること大いに遠し』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

『蹄を同うして角無き獸　四足にして聲口を具ふ　太群牛に隨逐し　常に以て等侶と爲す　形も亦た牛の類に非ず　牛聲をも作す能はず　是の如く愚癡の人　隨ひて心念を善逝の敎誡に繫けず　勤め方便するを欲する無く　懈怠にして心輕慢せば　無上道を獲ざること　驢の群牛に在るが如し　牛を去ること常に自ら遠し　彼れ大衆に隨ふと雖も　內行常に自ら乖く』

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一七）〔三五九三〕（八二九）（跋耆子經）[五八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、跋耆聚落に住まりたまへり。尊者跋耆子、佛の左右に侍せり。爾の時尊者跋耆子、佛の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり退きて一面に住し、佛に白して言さく『世尊、佛は二百五十戒に過ぐるを說きたまひ、族姓子をして欲に隨つて學せしめたまふ。然るに今世尊、我れ能く隨學して學するに堪えず』と。佛、跋耆子に告

【五七】 A. III. 8 Samaṇa 三學なきは比丘に非ず、驢の牛に異るに似たり。

【五八】 A. III. 83 Vajjiputta

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

[五五] 尸婆迦修多羅は後に佛當に說くべきが如し。

(二一四) 一二五八―一二五〇 (學經) 是の如く阿難陀比丘、及び異比丘の所問、佛の諸の比丘に問ひたまふ三經も亦た上の如く說く。

(一五) 一二五九一 (八二七)(耕磨經)[五六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば田夫の三種に田を作る有るに時に隨つて善く作るが如し。何等をか三と爲す。謂ゆる彼の田夫、時に隨つて耕磨し、時に隨つて漑灌し、時に隨つて種を下すなり。彼の田夫、時に隨つて耕磨し漑灌し種を下し已つて是の念を作さず「今日生長し、今日果實なり、今日成熟せしめんと欲す。若しは明日後日ならん」と。諸の比丘、然るに彼の長者は田を耕し漑灌し種を下し已つて是の念を作さず「今日生長し果實なり成熟せん若しは明日若しは復た後日ならん」と、而かも彼の種子已に地中に入らば則ち自から時に隨つて生長し、果實なり成熟す。是の如く比丘、此の三學に於て時に隨つて善く學し、謂ゆる戒學を善くし、意學を善くし、慧學を善くし已つて是の念を作さず「我れ今日諸の漏を起さず心善く解脫することを得せしめんと欲す。若しは明日、若しは後日ならん」と。是の念を作さざるも自然の神力、能く今日若しは明日後日諸の漏を起さず、心善く解脫せしめん。彼れ已に時に隨つて戒學を增上し、意學を增上し、慧學を增上し已らば、彼の時節に隨つて自から諸の漏を起さず心善く解脫することを得るなり。譬へば比丘、伏せし鷄の卵を生ずるに若しは十乃至十二、時に隨つて消息し、冷暖愛護するも彼の伏せし鷄は是の念を作さず「我れ今日若しは明日後日、當に口を以て啄み、若しは爪を以て刮り、其の兒をして安隱に生ずることを得せしめん」と。然るに其の伏せし鷄、善く其の子を伏せて愛護するに時に隨つて其の子自然に安隱に生ずることを得るが如く、是の如く比丘の善く三學を學するに其

【五五】雜阿三十五(九九の九七六と九七七)に尸婆の二經あり、前經は三學を說き今云ふ所なり、彼に錄して今算入せず。

【五六】A. III. 82 Sukhetta 耕田時に從ふ如く三學次第す。

り。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば諸の比丘、何等をか學戒には福利隨ふと爲す。謂ゆる大師は、諸の聲聞の爲に戒を制したまふ。所謂攝僧、極攝僧なり。信ぜざる者は信じ、信ぜし者は其の信を增し、惡人を調伏し、慚愧する者は樂住することを得、現法には有漏を防護することを得、未來には正しく對治すること得て梵行をして久住せしむ。大師已に聲聞の爲に戒を制したまふ、謂ゆる攝僧なり。乃至梵行久住するが如く、是の如く是の如く戒を學する者は、堅固戒・恒戒・常行戒を行じて學戒を受持す。是れを比丘、戒の福利と名づく。何等か智慧を上と爲す。謂ゆる大師、聲聞の爲に法を說きたまふには大悲もて哀愍し、義を以て饒益し若しは安慰し、若しは安樂し、若しは安慰安樂したまふ。是の如く是の如く大師は諸の聲聞の爲に法を說きたまふには大悲もて哀愍し、義を以て饒益して安慰安樂したまふと、是の如く是の如く、彼れ彼れの法、彼れ彼れの處に於て智慧もて觀察する。是れを比丘、智慧を上と爲すと名づく。何等をか解脫堅固と爲す。謂ゆる大師、諸の聲聞の爲に法を說きたまふには大悲もて哀愍し、義を以て饒益して安慰安樂したまふ。是の如く是の如く、彼れ彼れの法を說きたまふに、是の如く是の如く、彼れ彼れ彼れの處にて解脫の樂みを得る。是れを比丘の堅固に解脫せりと名づく。何等をか比丘の念增上すと爲す。未だ戒身を滿足せざる者は專心に念を繫けて安住し、未だ觀察せざる者は彼れ彼れの處に於て智慧もて念を繫けて安住し、已に觀察せる者は彼れ彼れの處に於て念を重ねて安住し、未だ法に觸れざる者は彼れ彼れの處に於て解脫の念に安住し、已に法に觸れし者は彼れ彼れの處に於て解脫の念に安住す。是れを比丘の正念にして增上すと名づく』と。爾の時世尊即ち偈を說いて言はく、

『學戒には福利隨ふ　三昧禪に專思する　智慧爲れ最上なり。　現生の最後邊なり　牟尼は後邊を持ち　魔を降して彼岸に度る』

漏心解脫し、解脫知見し、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る。是れを增上慧學と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九) 三五八五 (八二四)[五二](學經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三學有り。何等をか三と爲す。謂ゆる上戒學・上威儀學・上波羅提木叉學なり』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

『學者戒を學する時　直道に隨順して行じ　專審に勤め方便して　善く自ら其の身を護らば　初めの漏盡智を得。　次に無知を究竟して　無知解脫を得、　知見悉く已に度し
不動解脫を成じ、　諸の有結滅盡し　彼の諸根具足し　諸根寂靜にして樂し　此の後邊身を持たば　衆の魔怨を摧伏す』

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一〇) 三五八六 (八二五)[五三](學經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『學戒は福利多く、智慧に任せば上解脫を爲し、念を堅固にせば增上を爲す。若し比丘、學戒もて福利し、智慧もて上解脫を爲し、堅固の念もて增上し已らば三學をして滿足せしむるなり。何等をか三と爲す。謂ゆる增上戒學・增上意學・增上慧學なり』と。爾の時世尊卽ち偈を說いて言はく、

學戒には福利隨ふ　三昧禪に專思する　智慧は爲れ最上なり　現生の最後なり。　牟尼は後邊を持ち　魔を降して彼岸に度る』

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一一) 三五八七 (八二六)[五四](學經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへ

【五二】 cf A. III. 84 Sekha Itiv. 46 Sikkhā

【五三】 cf Itiv. 45 Sikkhā

【五四】 大師利益するを明す。

く見て五下分結の謂ゆる身見・戒取・疑・貪欲・瞋恚を斷ずるなり。此の五下分結を斷ぜば生般涅槃を得、阿那含にして復た還つて此の世に生ぜず。是れを增上意學と名づく。何等をか增上慧學と爲す。是の比丘は學戒滿足し、定滿足し、慧滿足し、是の如く知り是の如く見て欲の有漏心解脱し、有の有漏心解脱し、無明の有漏心解脱し、解脱知見し、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る。是れを增上慧學と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（八）【三五八四】（八二三）[五二]（涅槃經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、具足戒に住せば善く波羅提木叉を攝し威儀行處を具足し微細の罪を見るも能く怖畏を生じ學戒を受持して住し、三學を滿足す。何等をか三と爲す。謂ゆる增上戒・增上意・增上慧なり。何等をか增上戒と爲す。是の比丘は戒滿足し、少定少慧にして彼れ彼れの分たる細微の戒に於ても乃至學戒を受持し、是の如く知り是の如く見て三結を斷じ、貪恚癡薄らぎて一種子道を得るなり。彼の地の若き未だ等覺ならざれば斯陀含を得、彼の地未だ等覺ならざれば家家と名づけ、彼の地未だ等覺ならざれば須陀洹を得、彼の地未だ等覺ならざれば隨法行を得、彼の地未だ等覺ならざれば隨信行を得。是れを增上戒學と名づく。何等をか增上意學と爲す。是の比丘は戒滿足し定滿足して慧少く、彼れ彼れの分たる細微の戒に於て乃至學戒を受持し、是の如く知り是の如く見て五下分結の謂ゆる身見・戒取・疑・貪欲・瞋恚を斷ず。此の五下分結を斷ぜば中般涅槃を得、彼れに於て未だ等覺ならざれば生般涅槃を得、彼れに於て未だ等覺ならざれば無行般涅槃を得、彼れに於て未だ等覺ならざれば有行般涅槃を得、彼れに於て未だ等覺ならざれば上流般涅槃を得。是れを增上意學と名づく。何等をか增上慧學と爲す。是の比丘は學戒滿足し、定滿足し、慧滿足し、是の如く知り是の如く見て欲の有漏心解脱し、有の有漏心解脱し、無明の有

【五二】三學により斷結得果の諸涅槃を明す。

隨信行と名づく。是れを增上戒學と名づく。何等をか增上意學と爲す。是の比丘は戒を重んじて戒增上し、定を重んじて定增上し、慧を重んぜずして慧增上せず、彼れ彼れの分たる細微の戒學に於て、乃至學戒を受持し、是の如く知り是の如く見て、五下分結の謂ゆる身見・戒取・疑・貪欲・瞋恚を斷ず。此の五下分結を斷ずれば能く中般涅槃を得るなり。彼の地未だ等覺ならざれば生般涅槃を得、彼の地未だ等覺ならざれば無行般涅槃を得、彼の地未だ等覺ならざれば有行般涅槃を得、彼の地未だ等覺ならざれば上流般涅槃を得るなり。是れを增上意學と名づく。何等をか增上慧學と爲す。是の比丘は戒を重んじて戒增上し、定を重んじて定增上し、慧を重んじて慧增上し、是の如く知り是の如く見て欲の有漏心解脫し、有の有漏心解脫し、無明の有漏心解脫し、解脫知見し、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る。是れを增上慧學と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七)〔三五八三〕(八二三)(涅槃經)[五一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘具足戒に住せば、善く波羅提木叉を攝持して威儀行處を具足し、細微の罪を見るも能く怖畏を生ず。比丘の具足戒に住し、善く波羅提木叉を攝持し、威儀行處を具足し、細微の罪を見るも能く怖畏を生ずるに學戒を受くるに等しきは三學をして修習し滿足せしめよ。何等をか三と爲す。增上戒學・增上意學・增上慧學なり。何等をか增上戒學と爲す。是の比丘は戒もて滿足すと爲し少定少慧にして、彼れ彼れの分たる細微の戒に於て乃至、戒學を受持するなり。彼れは是の如く知り、是の如く見て、三結の謂ゆる身見・戒取・疑を斷ず。此の三結を斷ぜば須陀洹を得て、惡趣に墮ちず、決定して正しく三菩提に趣き、七有の天人に往生して苦邊を究竟するなり。何等をか增上意學と爲す。是の比丘は定滿足し、三昧滿足して慧に少く、彼れ彼れの分たる細微の戒にても犯さば則ち隨つて悔ゆ、乃至學戒を受持し。是の如く知り是の如

【五一】三學は怖罪に始まつて能く不受後有に至る。

是の如く比丘、戒堅固に、戒師常住し、戒に常に隨順生じ、受持して學せば、是の如く知り、是の如く見て、三結の謂ゆる身見・戒取・疑を斷ず。此の三結を斷ぜば須陀洹を得て惡趣の法に墮ちず、決定して正しく三菩提に趣き、七有の天人に往生して苦邊を究竟す。是れを增上戒を學すと名づく。何等をか增上意學と爲す。是の比丘は戒を重んじて戒增上し、定を重んじて定增上し、慧を重んぜずして慧增上せず、彼れ彼れの分たる細微の戒に於て、乃至學戒を受持し、是の如く知り、是の如く見て、五下分結の謂ゆる身見・戒・取・疑・貪欲・瞋恚を斷ずるなり。此の五下分結を斷ずれば生般涅槃を受け、阿那含にして此の世に還らず。是れを增上意學と名づく。何等をか增上慧學と爲す。是の比丘は戒を重んじて戒增上し、定を重んじて定增上し、慧を重んじて慧增上す。彼れは是の如く知り、是の如く見て欲の有漏心解脫し、有の有漏心解脫し、無明の有漏心解脫し、解脫知見し我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る。是れを增上慧學と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（六）二五八二（八二二）（學經）[五〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『二百五十戒に過ぐるを隨次半月に、來りて波羅提木叉修多羅を說くに、若し彼の善男子自ら意の欲する所に隨つて學せば、我れ爲に三學を說かん。若し此の三學を學せば則ち一切の學戒を攝受す。何等をか三と爲す。謂ゆる增上戒學・增上意學・增上慧學なり。何等をか增上戒學と爲す。是の比丘は戒を重んじして戒增上し、定を重んぜずして定增上せず、慧を重んぜずして慧增上せず、彼れ彼れの分たる細微の戒に於て、乃至學戒を受持し是の如く知り是の如く見て三結の謂ゆを身見・戒取・疑を斷じ貪恚癡薄らぎて一種子道を成ずるなり。彼の地未だ等覺ならざれば斯陀含と名づけ、彼の地未だ等覺ならざれば家家と名づけ、彼の地未だ等覺ならざれば七有と名づけ、彼の地未だ等覺ならざれば隨法行と名づけ、彼の地未だ等覺ならざれば

【五〇】A. III. 85 Sekha 經當
同上。

行處具足し、微細の罪を見るも則ち怖畏を生じて戒學を受持するなり。何等をか增上意學と爲す。若し比丘、欲惡不善法を離れ乃至第四禪具足して住するなり。何等をか增上慧學と爲す。是れ比丘の此の苦聖諦を實の如く知り、集・滅・道聖諦を實の如く知るなり。是れを增上慧學と名づく』と。爾の時世尊卽ち偈を說きたまふこと上の所說の如しと。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 一二五七九 (八一八)(學經)[四七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『比丘の增上戒學にして增上意・增上慧學に非ざる有り、增上戒・增上意學にして增上慧學に非ざる有り。聖弟子、增上慧に方便隨順し成就して住せば、增上戒增上意の修習滿足す。是の如く聖弟子、增上慧に方便隨順し成就して住せば無上慧に壽(いのちながく)して活く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) 一二五八〇 (八一九)(學經)[四八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『二百五十戒に過ぐるを、隨次半月に來りて、波羅提木叉修多羅を說き彼の自ら求めて學する者をして學せしむるに、三學を說かば能く諸戒を攝す。何等をか三と爲す。謂ゆる增上戒學・增上意學・增上慧學なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五) 一二五八一 (八二〇)(學經)[四九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、何等をか增上戒學と爲す。謂ゆる比丘の戒を重んじて戒增上し、定を重んぜずして定增上せず、慧を重んぜずして慧增上せず。彼れ彼れの分たる細微の戒に於ても犯さば則ち隨つて悔ゆるなり。所以は何ん。我れ彼れに、若し戒もて梵行に隨順するに堪え能はずんば、梵行を饒益し、久しく梵行に住すと說かざればなり。

【四七】巴に見ず。增上慧學を主とするを說く。

【四八】A. III. 87 Sikkhā 半月說戒に二百五十戒を用ゐるも三學を說けば足る。

【四九】A. III. 86 Sekha 三學堅固なれば結を斷じて得果するを說く。

慈心を修して瞋恚を斷じ、無常想を修して我慢を斷じ、安那般那の念を修して覺想を斷ぜる有ればなり。云何が比丘、安那般那の念を修して覺想を斷ずる。是の比丘は、聚落に依止し、乃至出息を滅するを觀じて、出息を滅するを觀ずるが如く學するなり。是れを安那般那の念を修して覺想を斷ずと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(第五道品誦、第七[四三] 學相應、第一部(原第二十九卷の末))

(第　一　品)[四四]

(一) **一三五七** (八一六)[四五](學經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三學有り。何等をか三と爲す。謂ゆる增上戒學・增上意學・謂ゆる增上慧學なり』と。爾の時世尊卽ち偈を說いて言はく

『三學具足せば　是れ比丘の正行なり　增上の戒心慧　三法を勤め精進し　勇猛堅固の城に
常に諸根を守護すること　晝の如く其の夜の如く　夜の如く亦た晝の如く
前の如く其の後の如く　後の如く亦た前の如く　上の如く其の下の如く　下の如く亦た上の如し
無量の諸の三昧　一切諸方に映ずる　是れを說いて覺跡と爲す　第一清涼の集たり
無明の諍を捨離し　其の心善く解脫せば　我れ世間の覺　明行悉く具足せりと爲す
正念もて忘れずして住せば　其の心解脫することを得　身壞して命終すること
燈盡きて火の滅ゆるが如くならん』

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) **一三五八** (八一七)[四六](學經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『亦復た三學有り。何等をか三と爲す。謂ゆる增上戒學・增上意學・增上慧學なり。何等をか增上戒學と爲す。若し比丘、戒の波羅提木叉に住し、律儀威儀、

【四三】 三學、增上戒心慧に關する經を輯む。多くは增支部にあり。二品、三十二經。

【四四】 當卷の十七經を第一品とす。

【四五】 A. III. 89 bikkhn 比丘の三學を讃じて偈を說く。

【四六】 A. III. 88 sikkhn 三學を解說し、戒は律儀罪を怖れ、定は四禪、慧は四諦に就て明す。

或は上座の乃至六十人を受くる有りき。爾の時世尊、十五日の布薩の時、大衆の前に於て座を敷きて坐したまへり。爾の時世尊、諸の比丘を觀察し已つて比丘に告げたまはく『善い哉善い哉、我れ今諸の比丘の諸の正事を行ずるを喜ぶ、是の故に比丘、當に勤め精進すべし』と。此の舍衞國に於て、[四二]滿迦低月に、諸處の人間に遊行する比丘、世尊の舍衞國に於て安居したまへるを聞けり。滿迦低月滿じ已つて、衣を作り竟り衣鉢を持ち、舍衞國に於て人間に遊行し、漸く舍衞國に至り、衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて世尊の所に詣り。稽首して足に禮したてまつり已つて退きて一面に坐せり。爾の時世尊、人間比丘の爲に種種に說法し、示教照喜し已つて默然として住したまへり。爾の時人間比丘、佛の說法を聞きて歡喜し隨喜し、座より起ち禮を作して去り、上座比丘の所に往詣し、稽首して足に禮し、退きて一面に坐しぬ。時に諸の上座、是の念を作さく『我れ等當に此の人間比丘を受くべし、或は一人にて一人を或は二三乃至多人を受けん』と。即便ち之れを受くるに一人にて一人を受け、或は二三乃至六十人を受くる者有りき。彼の上座比丘、諸の人間比丘を受けて教誡教授するに善く先後次第を知れり。爾の時世尊、月の十五日の布薩の時、大衆の前に於て座を敷きて坐し、諸の比丘衆を觀察して諸の比丘に告げたまはく『善い哉善い哉、諸の比丘、我れ汝等の行ずる所正事なるを欣び、汝等の行ずる所正事ならんことを樂ふ。諸の比丘、過去の諸佛にも亦た比丘衆の行ずる所正事なること今此の衆の如き有りき。未來の諸佛の所有る諸の衆も亦た當に是の如く行ずる所正事なること今此の衆の如くなるべし。所以は何ん。今此の衆の中には、諸の長老比丘の初禪・第二禪・第三禪・第四禪の慈悲喜捨・空入處・識入處・無所有入處・非想非非想入處を得、具足して住せる有り。比丘の三結盡きて須陀洹を得、惡趣の法に墮せず、決定して正しく三菩提に向ひ、七有の天人に往生して苦邊を究竟せる有り。比丘の三結盡きて貪・恚・癡薄らぎて斯陀含を得たる有り。比丘の五下分結盡きて阿那含を得、般涅槃に生じて復た還つて此の世に生ぜざる有り。比丘の無量神通なる境界の天耳・他心智・宿命智・生死智・漏盡智を得たる有り。比丘の不淨觀を修して貪欲を斷じ、

【四二】滿迦低月、磨伽陀月とも云ひ十一月を云ふとす。

るに多く修習し已らば身疲倦せず。眼も亦た患へ樂まず、觀に隨順して樂に住し、覺知して樂に染著せず。云何が安那般那の念を修するに身疲倦せず、眼も亦た患へ樂まず、觀に隨つて樂に住し、覺知して樂に染著せざる。是の比丘、聚落に依止し、乃至出息を滅するを觀ずる時、出息を滅するが如く學す。是れを安那般那の念を修し身疲倦せず眼も亦た患へ樂まず、觀に隨つて樂に住し、覺知して樂に染著せずと名づく。是の如く安那般那の念を修せば大果大福利を得。是の比丘惡不善法を欲するを離れ、有覺有觀、離に善樂を生じ、初禪具足して住するを求めんと欲せば、是の比丘は當に安那般那の念を修すべし。是の如く安那般那の念を修せば大果大福利を得。是の比丘第二第三第四禪の慈悲喜捨、空入處・識入處・無所有入處・非想非非想入處具足し、三結盡きて須陀洹果を得、三結盡き貪・恚・癡薄らぎて斯陀含果を得、五下分結盡きて阿那含果を得、無量種の神通力なる天耳・他心智・宿命智・生死智・漏盡智を得るを求めんと欲せば、是の如く比丘、當に安那般那の念を修すべし。是の如き安那般那の念は大果大福利を得』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を[四一]聞きて、歡喜し奉行しき。

（一八）一三五六（八一五）（布薩經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりて夏安居したまへり。爾の時衆多の上座聲聞の世尊の左右の樹下の窟中に於て安居せり。時に衆多の年少比丘有り、佛の所に詣りて佛の足に稽首したてまつり、退きて一面に坐しぬ。佛、諸の年少比丘の爲に種種に說法し、示敎照喜したまへり。示敎照喜し已つて默然として住したまへり。諸の年少比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し座より起ち禮を作して去りにき。諸の年少比丘、上座比丘の所に往詣し諸の上座の足に禮し、一面に於て坐しぬ。時に諸の上座比丘、是の念を作さく『我れ等當に此の諸の年少比丘を攝受すべし、或は一人にて一人を受け、或は一人にて二三多人を受けん』と。是の念を作し已つて卽便ち攝受し、或は一人にて一人を受け、或は二三多人を受け、

【四一】過去未來諸佛の比丘の如く今の比丘も正事を行じて安般を修し覺想を斷ぜり。

り顚沛として來るが如し。爾の時に當つて諸の土堆壠を踐蹈するや不や』と。阿難、佛に白さく『是の如し、世尊』と。佛、阿難に告げたまはく『是の如く聖弟子の入息を念ずる時は、入息念の如く學し、是の如く乃至善く內に思惟す。若し爾の時聖弟子、喜を覺知し乃至意行息を覺知し學せば、聖弟子、受の受觀念に住す。聖弟子、受の受觀念に住し已らば是の如く知りて善く內に思惟す、譬へば人有りて車輿に乘じ南方より顚沛として來るが如し。云何が阿難、當に土堆壠を踐蹈すべきや不や』と。阿難、佛に白さく『是の如し、世尊』と。佛、阿難に告げたまはく『是の如く聖弟子、受の受觀念に住せば、知りて善く內に思惟す、若し聖弟子、覺知心・欣悅心・定心・解脫心の入息ならば、解脫心の入息の如く學し。解脫心の出息ならば解脫心の出息の如く學するなり。爾の時聖弟子は心の心觀念に住す。是の如く聖弟子、心の心觀念に住し已らば、知りて善く內に思惟す。譬へば人有り車輿に乘じて西方より來るが如し。彼れ當に土堆壠を踐蹈すべきや不や』と。阿難、佛に白さく『是くの如し世尊』と。佛、阿難に告げたまはく『是の如く聖弟子、覺知心乃至心解脫出息ならば心解脫出息の如く學するなり。是の如き聖弟子は爾の時、心の心觀念に住し、知りて善く內に思惟し、善く身・受・心に於て貪憂滅捨す。爾の時聖弟子、法の法觀念に住す。是の如く聖弟子、法の法觀念に住し已らば、知りて善く內に思惟す。阿難、譬へば四衢道に土堆壠有るに人有り車輿に乘じて北方より顚沛として來るが如し、當に土堆壠を踐蹈すべきや不や』と。阿難、佛に白さく『是の如し、世尊』と。佛、阿難に告げたまはく『是の如く聖弟子、法の法觀念に住せば、知りて善く內に思惟す。阿難、是れを比丘の精勤方便して、四念處を修すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに尊者阿難、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一七）**一三五七五**（八二四）[40]（不疲經）　是の如く我れ聞きぬ。一時佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に安那般那の念を修すべし。安那般那の念を修す

【四〇】cf. S. 54. 8. Dīpo. 安般を修すれば疲倦せざるを說く。

滿足するや』と。佛、阿難に告げたまはく『若し比丘、念覺分を修すれば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。念覺分を修し已らば明、解脫を滿足す。乃至捨覺分を修すれば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。是の如く捨覺分を修し已らば明、解脫を滿足す。阿難、是れを法法相類し法法相潤すと名づく。是の如く十三法は、一法增上と爲らば、一法は門と爲り次第に增進して修習滿足す』と。佛此の經を說き已りたまひしに尊者阿難、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一四―一五）一三五七二―一三五七三[38]（八二一―八二二）（比丘經）　是の如く異比丘の所問、佛の諸の比丘に問ひたまふも亦た上の如く說く。

（一六）一三五七四（八二三）[39]（金毘羅經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、金毘羅聚落の金毘林の中に住まりたまへり。爾の時世尊、尊者金毘羅に告げたまはく『我れ今當に精勤して四念處を修習するを說くべし。諦かに聽き善く思へ。當に汝が爲に說くべし』と。爾の時尊者金毘羅、默然として住せり。是の如くすること再三なりき。爾の時尊者阿難、尊者金毘羅に語るらく『今大師汝に告げて是の如く三たび說きたまへり』と。尊者金毘羅、尊者阿難に語るらく『我れ已に知れり、尊者阿難。我れ已に知れり、尊者瞿曇』と。爾の時尊者阿難、佛に白して言さく『世尊、是れ時なり、世尊、是れ時なり。善逝、唯願くは諸の比丘の爲に精勤して四念處を修するを說きたまへ。諸の比丘聞き已りなば、當に受け奉行すべし』と。佛、阿難に告げたまはく『諦かに聽き善く思へ。當に汝が爲に說くべし。若し比丘、入息念の時は、入息の如く學し、乃至出息を滅する時は、出息を滅する如く學す。爾の時聖弟子は入息を念ずる時、入息を念ずるが如く學し、乃至身行の止息出息の時は、身行の止息出息の如く學す。爾の時聖弟子は身の身觀念に住す。爾の時聖弟子、身の身觀念に住し已つて是の如く知りて善く內に思惟す』と。佛、阿難に告げたまはく『譬へば人有り車輿に乘じ東方よ

【三八】S. 54. 15. 16. Bhikkhu.

【三九】S. 54. 10. Kimbila. 四念處を修習して入出息に正觀すべきを說く。

喜を覺知し樂を覺知し心行を覺知し心行息を覺知すること有らば、入息念の時、心行息入息念の如く學し、心行息出息念の時、心行息出息念の如く學す。是の聖弟子は爾の時受の受觀念に住す。若し復た受に異ならば、彼も亦た受を身に隨つて比べ思惟す。時に聖弟子の心を覺知し、心悅・心定・心解脫を覺すること有らば、入息念の時、入息念の如く學し、心解脫出息念の時、心解脫出息念の如く學す。是の聖弟子は爾の時心の心觀念に住す。若し心に異ること有らば彼れも亦た心に隨つて比べ思惟す。若し聖弟子、時に無常の斷じ無欲の滅するを觀ずること有らば、無常の斷じ無欲の滅する觀に住するが如く學するなり。是の聖弟子は爾の時の法觀念に住す。法に異らば亦た法に隨つて比べ思惟す。是れを安那般那を修せば四念處を滿足すと名づく』と。阿難、佛に白さく『是の如く安那般那の念を修習せば四念處をして滿足せしむ。云何が四念處を修しなば七覺分をして滿足せしむるや』と。佛、阿難に告げたまはく『若し比丘、身の身觀念に住し、念に住し已つて、念を繫け住して忘れずんば、爾の時方便して念覺分を修するなり。念覺分を修し已らば念覺分滿足す、念覺分滿足し已らば、法に於て選擇思量す。爾の時方便して擇法覺分を修するなり。擇法覺分を修し已らば、擇法覺分滿足し、法に於て選擇し、分別思量し已つて、精勤方便することを得、爾の時方便して精進覺分を修習するなり。精進覺分を修し已らば、精進覺分滿足す。方便精進し已らば則ち心歡喜す。爾の時方便して喜覺分を修す。喜覺分を修し已らば、喜覺分滿足す。歡喜し已らば、身心猗息す。爾の時方便して猗覺分を修す。猗覺分を修し已らば、猗覺分滿足す。身心樂み已らば三昧を得。爾の時定覺分を修す。定覺分を修し已らば、定覺分滿足す。定覺分滿足し已らば、貪憂則ち滅し、平等捨を得。爾の時方便して捨覺分を修するなり。捨覺分を修し已らば捨覺分滿足す。受・心・法の法の念處も亦た是の如く說く。是れを四念處を修せば七覺分を滿足すと名づく』と。阿難、佛に白さく『是れを四念處を修せば七覺分を滿足すと名づく。云何が七覺分を修すれば明、解脫を

るなり。阿難、何等をか微細住を多く修習し、隨順して開覺せば已に起りし、未だ起らざる惡不善法を能く休息せしむと爲す。謂ゆる安那般那の念に住するなり』と。阿難、佛に白さく『云何が安那般那の念に住するを修習し、隨順して開覺せば、已に起りし、未だ起らざる惡不善法を能く休息せしむるや』と。佛、阿難に告げたまはく『若し比丘の聚落に依止し、前に廣說せるが如し、乃至、出息の念を滅するが如く而かも學するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者阿難、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一三)【三五七】(八一〇)(阿難經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、金剛の跋求摩河の側なる薩羅梨林の中に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、獨一靜處にて思惟禪思して是の如き念を作さく『頗し一法有りて修習し多く修習せば四法をして滿足せしめ、四法滿足し已らば七法滿足し、七法滿足し已らば二法滿足す』と。時に尊者阿難、禪より覺め已つて佛の所に往詣し、稽首して足に禮したてまつり退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、我れ獨一靜處にて思惟禪思して是の念を作さく「頗し一法有りて多く修習し已らば四法をして滿足せしめ、乃至二法滿足す」と。我れ今世尊に問ひたてまつる。寧ろ一法有りて多く修習し已らば能く乃至二法をして滿足せしむるや』と。佛、阿難に告げたまはく『一法有りて修習し已らば乃至能く二法をして滿足せしむ。何等をか一法と爲す。謂ゆる安那般那の念を多く修習し已らば能く四念處をして滿足せしむ。四念處滿足し已らば七覺分滿足し、七覺分滿足し已らば明、解脫滿足す。云何が安那般那の念を修すれば四念處滿足するや。是の比丘、聚落に依止し乃至出息の念を滅するが如く學するなり。阿難、是の如く聖弟子は入息を念ずる時、入息の念の如く學し。出息を念ずる時、出息の念の如く學し。身行の休息、入息念の時、身行の休息入息念の如く學し。身行の休息出息念の時、身行の休息出息念の如く學す。聖弟子は爾の時、身の身觀念に住す。身に異らば彼も亦た是の如く身に隨つて比べ思惟す。若し時に聖弟子の

【三五七】 S. 54. (13—14) Ānanda. 安那般那念を修すれば七覺支を滿足し、從つて明、解脫を滿足す。

雜物悉く皆汝に屬せり』と。時に鹿林梵志子、讃歎を聞き已つて惡邪見を增し是の念を作さく『我れ今眞實に大なる福德を作せり。沙門釋子の持戒功德者をして、未だ度せざる者は度し、未だ脫せざる者は脫し、未だ蘇息せざる者は蘇息することを得せしめ、未だ涅槃せざる者は涅槃することを得せしめ、衣鉢雜物悉く皆我れに屬せり』と。是に於て手に利刀を執りて諸の房舍、諸の經行處、別房、禪房を循り、諸の比丘を見れば是の如き言を作せり『何等の沙門か持戒有德なる。未だ度せざる者は我れ能く度せしめん。未だ脫せざる者は脫せしめん、未だ蘇息せざる者は蘇息すること得せしめて、未だ涅槃せざる者は涅槃することを得せしめん』と。時に諸の比丘有りて身を厭患し皆房舍より出でて鹿林梵志子に語つて言はく『我れ未だ度することを得ず、汝當に我れを度すべし。我れ未だ脫することを得ず、汝當に我れを脫すべし。我れ未だ蘇息することを得ず、汝當に我れをして蘇息することを得ぜしむべし。我れ未だ涅槃することを得ず、汝當に我れをして涅槃することを得せしむべし』と。時に鹿林梵志子卽ち利刀を以て彼の比丘を殺し次第に乃至六十人を殺せり。爾の時世尊、十五日の說戒の時に至り衆僧の前に於て坐し尊者阿難に告げたまはく『何の因、何の緣もて諸の比丘、轉た少く轉た減じ轉た盡くるや』と。阿難、佛に白して言さく『世尊、諸の比丘の爲に說きたまふに不淨觀を修し、不淨觀を讃歎したまへり。諸の比丘、不淨觀を修し已つて極めて身を厭患し、廣說し乃至、六十比丘を殺せり。世尊、是の因緣を以ての故に諸の比丘をして轉た少く轉た減じ轉た盡きしむるなり。唯だ願くは世尊、更らに餘の法を說いて諸の比丘をして聞き已つて、智慧を勤修し、正法を樂受し、正法に樂住せしめたまへ』と。佛、阿難に告げたまはく『是の故に我れ今次第に說かん。微細住に住し隨順して開覺せば、已に起りし、未だ起らざる惡不善法は速かに休息せしむ、天の大いに雨ふるに、起りし、未だ起らざる塵を能く休息せしむるが如く、是の如く比丘、微細住を修しなば、諸の起りし、未だ起らざる惡不善法は能く休息せしむ

（二一）一三五六九（八〇八）[三二]（迦磨經）　是の如く我れ聞きぬ、一時、佛、迦毘羅越の尼拘律樹園の中に住まりたまへり。爾の時釋氏の[三三]摩訶男[三四]・尊者迦磨比丘の所に詣り迦磨比丘の足に禮し已つて退きて一面に坐し、迦磨比丘に語つて言はく『云何が尊者迦磨、學住とは即ち是れ如來住と爲すや、學住異り如來住異ると爲すや』と。迦磨比丘答へて言はく『摩訶男、學住異り如來住異る。摩訶男、學住とは五蓋を斷じて多く住するなり。如來住とは五蓋に於て已に斷じ已に知りて其の根本を斷ずること多羅樹の頭を截るが如く、更に生長せず、未來世に於ては不生法を成ずるなり。一時、世尊、一奢能伽羅林の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく「我れ此の一奢能伽羅林の中に於て二月坐禪せんと欲す。汝、諸の比丘、往來せしむること勿れ、唯だ食を送る比丘及び布薩の時をば除く」と、廣說すること前の如く乃至無學は現法に樂住す。是を以ての故に知る、摩訶男、學住異り如來住異ると』と。釋氏摩訶男、迦磨比丘の所說を聞きて歡喜し、座より起ちて去りにき。

（二二）一三五七〇（八〇九）[三五]（金剛經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[三六]金剛聚落の跋求摩河の側なる薩羅梨林の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘の爲に不淨觀を說き、不淨觀を讚歎して言はく『諸の比丘、不淨觀を修するに多く修習せば、大果大福利を得ん』と。時に諸の比丘、不淨觀を修し已つて、極めて身を厭患し、或は刀を以て自殺し、或は毒藥を服し、或は繩にて自ら絞れ、巖より投じて自殺し、或は餘の比丘をして殺さしむ。異比丘の極めて厭患を生じ、不淨を露はすを惡むもの有り、鹿林梵志子の所に至り、鹿林梵志子に語つて言はく『賢首、汝能く我れを殺さば衣鉢は汝に屬せん』と。時に鹿林梵志子即ち彼の比丘を殺し、刀を持ちて跋求摩河の邊に至り刀を洗ひし時、魔天有り、空中に住して鹿林梵志子を讚めて言はく『善い哉善い哉、賢首、汝無量の功德を得たり、能く諸の沙門釋子持戒の有德をして未だ度せざる者は度し、未だ脫せざる者は脫し、未だ蘇息せざる者は蘇息することを得せしめ、未だ涅槃せざる者は涅槃することを得せしめたり。諸の長利・衣鉢・

【三二】 S. 54.12. Kaṅkheyya. 學住と如來住との異る所以を前經を引用して說く。

【三三】 Mahānāma 世尊の叔父。

【三四】 巴には Lomasavaṅgisa とあり。

【三五】 S. 54. 9. Vesālī 世尊諸比丘のために不淨觀を說き給ひしに、多くの比丘身を厭離して自殺し、或は他に殺されたり此に於て佛更に微細なる法として安那般那念を說かる。

【三六】 巴には Vesāliyaṃ mahāvane Kūṭāgārasālāyaṃ

ること勿れ唯だ食を送る比丘及び布薩の時をば除く』と。爾の時世尊、是の語を作し已つて卽ち二月坐禪したまふに一の比丘も敢へて往來する者無し。唯だ食を送り及び布薩の時を除くのみ。爾の時世尊坐禪したまひて二月過ぎ已つて禪より覺め、比丘僧の前に於て坐し、諸の比丘に告げたまはく『若し諸の外道の出家、來りて汝等に、沙門瞿曇は二月中に於て云何が坐禪せしと問はば、汝應に答へて言ふべし。如來は二月、安那般那の念を以て坐禪し思惟して住したまへりと。所以は何ん。我れ此の二月に於て安那般那を念じ多く住して思惟せり。入息の時、入息を念じて實の如く知り、出息の時、出息を念じて實の如く知り、若しは長き若しは短き、一切の身の入息を覺する念を實の如く知り、一切の身の出息を覺する念を實の如く知り、身行の休息、入息の念を實の如く知り乃至出息を滅する念を實の如く知れり。我れ悉く知り已つて我れ時に是の念を作さく「此れ則ち麁なる思惟に住せるなり。我れ今此の思惟に於て止息し已つて、當に更らに餘の微細に修住して而かも住すること修すべし』と。爾の時我れ麁なる思惟を息止し已つて卽ち更らに微細の思惟に入り、多く住して而かも住せり。時に三天子の極上妙色なる有り、夜を過ぎて我が所に來至せり。一天子、是の言を作さく「沙門瞿曇、時到れり」と。復た一天子有りて言はく「此れ時の到れるに非ず、是れ時の至るに向へるなり」と。第三天子の言はく「時到れりと爲すに非ず、亦た時の至るに向へるにも非ず、此れ則ち修に住せるなり、是れ阿羅訶の寂滅せるのみ」と』と。佛、諸の比丘に告げたまはく[三二]『若し正說せば、聖住・天住・梵住・學住・無學住・如來住有り。學人得ざる所は當に得べし、到らざるは當に到るべく、證せざるは當に證すべし。無學人は現法に樂住すとは謂ゆる安那般那の念なり。此れ則ち正說なり。所以は何ん、安那般那の念とは是れ聖住・天住・梵住・乃至無學の現法樂住なればなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【三二】巴には「若し正說せば、安那般那念を聖住とも梵住とも如來住とも言ふべし。」とあり。

佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九) 一三五六七 (八〇六)(罽賓那經)[27] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、晨朝の時に於て衣を著け、鉢を持ち舍衞城に入りて乞食したまへり。食し已つて精舍に還へり、衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて[28]尼師檀を持ち、安陀林に入りて一樹の下に坐し晝日禪思したまへり。時に尊者罽賓那も亦た晨朝の時、衣を著け鉢を持ち、舍衞城に入りて乞食し、還りて衣鉢を擧げ、足を洗ひ已つて尼師檀を持ちて安陀林に入り、樹下に於て坐禪し、佛を去ること遠からず、身を正しくして動ぜず、身心正直に勝妙に思惟せり。爾の時衆多の比丘、哺時に禪より覺め、佛の所に往詣し、稽首して佛の足に禮したてまつり、退きて一面に坐しぬ。佛、諸の比丘に語りたまはく『汝等尊者罽賓那を見るや不や、我れを去ること遠からず、身を正しくして端坐し、身心動ぜずして勝妙住に住せり』と。諸の比丘、佛に白さく『世尊、我れ等數ば彼の尊者の身を正しくして端坐し、善く其の身を攝して傾かず動ぜず、勝妙に專心なるを見たり』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の三昧を修習するに、身心安住して傾かず動ぜず、勝妙住に住せば、此の比丘は此の三昧を得、勤め方便せざるも欲に隨つて卽ち得』と。諸の比丘、佛に白さく『何等の三昧もて、比丘、此の三昧を得て身心動ぜずして勝妙住に住するや』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、聚落に依止し、晨朝に衣を著け鉢を持ち、村に入りて乞食し已つて精舍に還へり、衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて林中に入り若し閑房に露坐し、思惟して念を繫け、乃至息滅するを、觀察し善く學せば、是れを三昧と名づく。若し比丘、端坐思惟せば身心動ぜずして勝妙住に住す』と。佛此の經を說き已りたまひしに[29]諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一〇) 一三五六八 (八〇七)(一奢能伽羅經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[30]一奢能伽羅林の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ二月坐禪せんと欲す。諸の比丘、復た往來す

【二七】 S. 54. 7. Kappina. 罽賓那比丘の端坐不動專心に修行するに因みて諸比丘に教誡して安那般那念を修すべしと說かる。

【二八】 坐具。

【二九】 S. 54. 11. Icchānaṅgala. 世尊二ケ月間諸人を却けて安那般那念を修せられ、禪より出でて其の所證を告げられ、無學人の現法樂住とはこれ安那般那念なりと說かる。

【三〇】 Icchānaṅgala 憍薩羅國の婆羅門村なり。

まへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に安那般那の念を修すべし。安那般那の念を修習するに多く修習せば諸の覺想を斷ず。云何が安那般那の念を修習するに多く修習せば諸の覺想を斷ずる。若し比丘の聚落城邑に依止して住し、上に廣說せるが如く、乃至出息の滅に於て善く學する。是れを安那般那の念を修習するに多く修習せば、諸の覺想を斷ずと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五—七) 一三五六三—一三五六五[二五](果報經) 覺想を斷ずるが如く、是の如く動搖せずして大果大福利を得、是の如く甘露を得て甘露を究竟し、二果・四果・七果を得る一一の經も亦た上の如く說く。

(八) 一三五六六 (八〇五)[二六](阿梨瑟吒經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我が所說の如き安那般那の念は汝等修習せるや不や』と。時に比丘有り。阿梨瑟吒と名づく衆中に於て坐せり。卽ち座より起ちて衣服を整へ、佛の爲に禮を作し、右の膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく『世尊、世尊の說かせたまひし所の安那般那の念は我れ已に修習せり』と。佛、阿梨瑟吒比丘に告げたまはく『汝、云何が我が說きし所の安那般那の念を修習せし』と。比丘、佛に白さく『世尊、我れ過去の諸行に於て顧念せず、未來の諸行に欣樂を生ぜず、現在の諸行に於て染著を生ぜず、內外の對礙想に於て善く正して除滅せり。我れ已に是の如く世尊の說かせたまひし所の安那般那の念を修せり』と。佛、阿梨瑟吒比丘に告げたまはく『汝實に我が說きし所の安那般那の念を修せり、修せざるには非ず。然かも其れ比丘の、汝の修せし所の安那般那念の所より更らに勝妙にして其の上に過ぐるもの有り。何等か是れ勝妙にして、阿梨瑟吒の修せし所の安那般那の念に過ぐるものなる。是の比丘、城邑聚落に依止し、前に廣說せるが如く、乃至出息の滅に於て觀察し善く學する。是れを阿梨瑟吒比丘より勝妙にして、汝の修せし所の安那般那の念に過ぐるものと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、

【二五】 cf. S. 54.(2—5) Bojjhaṅga-Phalā(2) 安那般那念を修することにより得る果報。

【二六】 S. 54. 6. Ariṭṭha 阿梨瑟吒は佛所說の安那般那念の目的成就せるを以て、佛所說の如く修したりと言へるに對し、佛はそれも可なれども眞の安那般那念は行住坐臥、一息々々を念じ、乃至息の滅を觀察し善學するにありとて不斷の實踐の上に立つて教誡せらる。

りたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『安那般那の念を修習せよ。若し比丘の安那般那の念を修習するに多く修習せば身心止息することを得て有覺、有觀、寂滅、純一にして明分なる想を修習滿足す。何等をか安那般那の念を修習するに多く修習し已らば身心止息し、有覺、有觀、寂滅、純一にして明分なる想を修習滿足すと爲す。是の比丘、若し聚落城邑に依りて止住し、晨朝に衣を著け鉢を持ち、村に入りて乞食するに善く其の身を護り、諸の根門を守り善く心を繫けて住し、乞食し已つて住處に還へり、衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて或は林中の閑房の樹下、或は空露地に入りて端身正坐し、念を繫けなば面前、世の貪愛を斷じ欲を離れて清淨に、瞋恚・睡眠・悼悔・疑・斷じ、諸の疑惑を度り、諸の善法に於て心決定することを得、五蓋の煩惱の心に於て慧力をして羸らしめ、障礙の分と爲り、涅槃に趣かざるを遠離し、[九]内息を念じては念を繫けて善く學し、[一〇]外息を念じては念を繫けて善く學し、[一一]息の長き息の短き、[一二]一切の身の入息を覺知して一切の身の入息に於て善く學し、一切の身の出息を覺知して一切の身の出息に於て善く學し、[一三]一切の身の行息・入息を覺知して、一切の身の行息・入息に於て善く學し、一切の身の行息・出息を覺知して一切の身の行息・出息に於て善く學し、[一四]喜を覺知し、[一五]樂を覺知し、身行を覺知し、[一六]心の行息・入息を覺知して心の行息・入息を覺知するに於て善く學し、心の行息・出息を覺知して、心の行息・出息を覺知するに於て善く學し、心を覺知し、[一七]心悅を覺知し、[一八]心定を覺知し、[一九]心の解脫入息を覺知して、心の解脫入息を覺知するに於て善く學し、心の解脫出息を覺知して、心の解脫出息を覺知するに於て善く學し、[二〇]無常を觀察し、[二一]斷を觀察し、[二二]無欲を觀察し、[二三]滅入息を觀察して、滅入息を觀察するに於て善く學し、滅出息を觀察して、滅出息を觀察するに於て善く學する。是れを安那般那の念を修するに身止息し心止息し、有覺、有觀ならば寂滅、純一にして明分なる想の修習滿足せりと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四）三五六二（八〇四）（斷覺想經）　[二四]是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりた

【九】assasati
【一〇】passasati
【一一】dīghaṃvā assasanto dīghaṃ assasāmi ti pajānāti.
【一二】sabbakāyapaṭisaṃvedī assasissāmīti sikkhati.
【一三】sabbakāyapaṭisaṃvedī ass°……
【一四】pītipaṭisaṃvedī ass°…
【一五】sukhapaṭisaṃ vedī ass°
【一六】cittasaṅkhārapaṭisaṃ=vedī……
【一七】abhippamodayaṃ ci=ttaṃ ass°……
【一八】samādahaṃ cittaṃ ass°……
【一九】vimocayaṃ cittaṃ ass°……
【二〇】aniccānupassī ass°……
【二一】paṭinissaggānupassī ass°……
【二二】virāgānupassī ass°
【二三】nirodhānupassī ass°.
【二四】S. 54. 3—5. Suddhaka. 前經の略說。

(四—一〇) 一三五二—一三五八[四] (八〇〇)(婆羅門經) 是の如く婆羅門法・婆羅門・婆羅門義・婆羅門果・梵行法・梵行者・梵行義・梵行果も亦た上の如く說く。

(第五道誦、第六安那般那相應)

(安般品)

(一) 一三五九 [五](八〇一)(五法經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、五法有り。饒益する所多ければ[六]安那般那念もて修せよ。何等をか五と爲す。淨戒なる波羅提木叉の律儀、威儀に住し行處具足し、微細の罪に於て能く怖畏を生じ學戒を受持する。是れを第一と名づく。饒益する所多ければ安那般那念もて修習せよ。復た次に比丘、少欲、少事、少務なる。是れを二法と名づく。饒益する所多ければ安那般那念もて修習せよ。復た次に比丘、飲食するに量を知り、多少の中を得、飲食を爲して求欲の想を起さずして精勤思惟する。是れを三法と名づく。饒益する所多ければ安那般那念もて修せよ。復た次に比丘、初夜後夜に睡眠に著せずして精勤思惟する。是れを四法と名づく。饒益する所多ければ安那般那念もて修せよ。復た次に比丘、空閑なる林中にて諸の憒閙(くわいとう)を離るる。是れを五法と名づく。饒益する多種なれば安那般那念もて修習せよ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。[七]

(二) 一三六〇 (八〇二)(安那般那念經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に安那般那の念を修すべし。若し比丘安那般那の念を修習するに、多く修習せば身止息し及び心止息することを得て、有覺、有觀ならば、寂滅、純一、明分なる想修習滿足す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 一三六一[八] (八〇三)(安那般那念經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住ま

【四】 S. 45.37—40. Brahmaññaṃ, Brahmacariyaṃ

【五】 巴になし。戒律を持ち、少欲にして、食過少過多ならず、睡眠を食らず、閑處に在りて一息々々を念じて修行するは饒益する所多し。

【六】 入出息念。(ānāpāna-sati)。

【七】 巴になし。出入息を念じて修すれば、心身落着きて迷はざる正しき考へを生ず。

【八】 S. 54. 1. Ekadhamma. 出入息念の修習を詳說す。

卷の第*二十六

（第五道誦、第五聖道相應の續き第二部（原第二十九卷））

（第 二 品）

（一）三五四九（七九七）[一]（沙門法沙門果經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『沙門法及び沙門果有り。諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。何等をか沙門法と爲す。謂ゆる八聖道の正見乃至正定なり。何等をか沙門果と爲す。謂ゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果なり。何等をか須陀洹果と爲す。謂ゆる三結斷ずるなり。何等をか斯陀含果と爲す。謂ゆる三結斷じ、貪、恚、癡薄（うす）らげるなり。何等をか阿那含果と爲す。謂ゆる五下分結盡くるなり。何等をか阿羅漢果と爲す。謂ゆる貪、恚、癡永く盡き一切の煩惱永く盡くるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）三五五〇（七九八）[二]（沙門法沙門義經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『沙門法・沙門・沙門義有り。諦かに聽き善く思へ。當に汝が爲に說くべし。何等をか沙門法と爲す。謂ゆる八聖道の正見乃至正定なり。何等をか沙門と爲す。謂ゆる此の法を成就せる者なり。何等をか沙門義と爲す謂ゆる貪欲永く斷じ、瞋、恚、癡永く斷じ一切の煩惱永く斷ずるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三）三五五一（七九九）[三]（沙門果經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば沙門果有り。何等をか沙門果と爲す。謂ゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

＊新卷の第二十六（原第二十九卷）原本逸するも第五誦道品第五とあるべし。本卷には聖道相應第二品（十經）と安般相應（十八經）三學相應第一品（十七經）合して四十五經を收む。

【一】 S. 45. 35. Sāmañña（1）八聖道は沙門の修すべき法なり、これによりて斷惑の程度に應じて沙門の四果あり。

【二】 S. 45. 36. Sāmañña（2）沙門法、沙門、沙門義を說く。

【三】 前々經參照。

へ。當に汝が爲に說くべし。何等をか沙門法と爲す。謂ゆる八聖道の正見乃至正定なり。何等をか沙門果と爲す。謂ゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。[九八]

【九八】此に新第二十五（原第二十八卷）終る。

行しき。

(九四) 一三五四二(七九三)[九〇](順流逆流經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『順流道[九一]有り、逆流道[九二]有り。諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。何等をか順流道と爲す。謂ゆる邪見乃至邪定なり。何等をか逆流道と爲す。謂ゆる正見乃至正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九五)―(九七) 一三五四三―一三五四五[九三](順流逆流經) 順流逆流の如く、是の如く退道勝道、下道上道及び三經の道跡も亦た上の如く說く。

(九八) 一三五四六(七九四)[九四](沙門及沙門果經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『沙門及び沙門法有り。諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。何等をか沙門法と爲す。謂ゆる八聖道の正見乃至正定なり。何等をか沙門と爲す。若し此の法を成就せば是れ沙門と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九九) 一三五四七(七九五)[九五](沙門法沙門義經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『沙門法、沙門義あり。何等をか沙門法と爲す。謂ゆる八聖道の正見乃至正定なり。何等をか沙門義[九六]と爲す。謂ゆる貪欲永く盡き、瞋恚、愚癡永く盡き、一切の煩惱永く盡くる。是れを沙門義と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一〇〇) 一三五四八(七九六)[九七](沙門法沙門果經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『沙門法及び沙門果有り。諦かに聽き善く思

【九〇】巴になし。八邪道は生死の流れに順じ、八聖道は之に逆らふ。

【九一】生死の流れに順ふをいふ。

【九二】生死の流れに逆ひ、之より脫するをいふ。

【九三】巴になし。

【九四】cf S. 45. 36. Sāmaññaṃ (2) 八聖道は沙門法なり。之を具足せるものは沙門なり。

【九五】S. 45. 36. Sāmaññaṃ (2) 八聖道は沙門たる者の修すべき法なり。三毒を盡すは沙門たる者の目的なり。

【九六】沙門の目的。(sāmaññattha)。

【九七】S. 45. 35. Sāmaññaṃ (1) 八聖道は沙門の修すべき法なり。その果報は預流等の四果なり。

佛の説かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ちて去りにき。

(八四)—(九〇)一二五三二—一二五三八[八六](生聞經)　正見の如く、是の如く正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定の一一の經も、上の如く說く。

(九一)　一二五三九(七九〇)[八七](邪正經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、邪及び邪道有り、正及び正道有り。諦かに聽き善く思へ。當に汝が爲に說くべし。何等をか邪と爲す。謂ゆる地獄・畜生・餓鬼なり。何等をか邪道と爲す。謂ゆる邪見乃至邪定なり何等をか正と爲す。謂ゆる人・天・涅槃なり。何等をか正道と爲す。謂ゆる正見乃至正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九二)　一二五四〇(七九一)[八八](邪正經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『邪有り、邪道有り。正有り、正道有り。諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。何等をか邪と爲す。謂ゆる地獄・畜生・餓鬼なり。何等をか邪道と爲す。謂ゆる殺・盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪・恚・邪見なり。何等をか正と爲す。謂ゆる人・天・涅槃なり。何等をか正道と爲す。謂ゆる不殺・不盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・無貪・無恚・正見なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九三)　一二五四一(七九二)[八九](邪正經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、何等をか惡趣道と爲す。謂ゆる父を殺し母を殺し阿羅漢を殺し、僧を破り惡心もて佛身より血を出すなり。餘は上の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉

【八六】　巴になし。

【八七】　巴になし。邪とは三惡趣。邪道とは邪見乃至邪定。正とは人、天、涅槃、正道とは八聖道なりと說く。

【八八】　巴になし。邪とは三惡趣。邪道とは十不善業道。正とは人、天、涅槃。正道とは十善業道なりと說く。

【八九】　巴になし。五逆罪を惡趣道といふ。

人ならば身業も所見の如く、口業も所見の如く、若しは思、若しは欲、若しは願、若しは爲、悉く皆隨順するに、彼の一切は愛す可く念ず可く意す可き果を得。所以は何ん、善見は謂ゆる正見なればなり。正見は能く正志乃至正定を起こす。是れを正に向はば法を樂ひ、法に違はずと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八〇)—(八二)一二五二八—一二五三〇[八四](邪見正見經)　世間、出世間も亦た是の如く說くこと上の三經の如し。亦た皆偈を說いて言はく、

『鄙法には近づくべからず　放逸は行ずべからず　邪見を習ふべからず　世間を增長せん
假使(たとひ)世間に有らんも　正見增上せば　復た百千生ずと雖も　終に惡趣に墮ちず

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八三)一二五三一(七八九)[八五](生聞經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に生聞婆羅門有り、佛の所に來詣して佛の足に稽首したてまつり、世尊と面に相問訊し慰勞し已つて退きて一面に坐し、佛に白して言さく『瞿曇、所謂正見とは、何等をか正見すと爲す』と。佛、婆羅門に告げたまはく『正見に二種有り、正見の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向する有り。正見の是れ聖出世間にして無漏不取にして正しく苦を盡くし苦邊に轉向する有り。何等をか正見の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向すと爲す。謂ゆる正見せば施有り說有り齋有り、乃至自ら後有を受けざるを知る。婆羅門、是れを正見の世俗にして有漏有取にして佛趣に向ふと名づく。婆羅門、何等をか正見の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと爲す。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟し、無漏思惟に相應し、法に於て選擇分別して覺を求め巧便黠慧もて觀察す。是れを正見の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、生聞婆羅門、

【八四】巴になし。

【八五】巴になし。(七六八)(七八五)參照、正見に有漏有取なると無漏不取なるとあり。

の人は身業も所見の如く、口業も所見の如く、若しは思、若しは欲、若しは願、若しは爲、彼れ皆隨順すれば、一切愛せざる果、念ぜず意す可からざる果を得。所以は何ん。見惡なるを以ての故に謂ゆる邪見なればなり。邪見は邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定を起こす。是れ邪に向はば法に違ひて法を樂はざるなり。何等をか正に向はば、法を樂ひ法に違はずと爲す。謂ゆる正見の人若しは身業所見に隨ひ、若しは口業、若しは思、若しは欲、若しは願、若しは爲、悉く皆隨順すれば、愛す可く念ず可く意す可き果を得。所以は何ん。見正なるを以ての故に謂ゆる正見なればなり。正見は能く正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定を起こす。是れを正に向はば、法を樂がひ法に違がはずと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七九）一三五二七（七八八）[八二]（邪見正見經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『邪に向はば法に違ひ法を樂はず、正に向はば法を樂ひ法に違はず。何等をか邪に向はば法に違ひ法を樂はずと爲す。若し邪見の人ならば、身業は所見の如く、口業も所見の如く、若しは思、若しは欲、若しは願、若しは爲、彼れ皆隨順すれば、一切愛せざる果、念ぜず意す可からざる果を得。所以は何ん。惡見は謂ゆる邪見なればなり。邪見ならば能く邪志乃至邪定を起こす。是れを邪に向はば法に違ひ、法を樂はずと名づく。何等をか正に向はば法を樂ひ、法に違はずと爲す。若し正見の人ならば、身業も所見の如く、口業も所見の如く、若しは思、若しは欲、[八三]若しは願、若しは爲、悉く皆隨順するに、彼の一切愛す可く念ず可く意す可き果を得。所以は何ん。善見は謂ゆる正見なればなり。正見ならば能く、正志乃至正定を起こす。譬へば甘蔗・稻・麥・蒲桃の種を地中に著き、時に隨ひて漑灌するに、彼れ地味・水味・火味・風味を得、彼の一切の味悉く甜美なるが如し。所以は何ん、種子甜きを以ての故なり。是の如く正見の

【八二】前經參照。

【八三】「若願」の二字〈三〉に從つて挿入す。

く善趣に向ふと名づく。[七七]何等をか正念の是れ聖出世間にして無漏不取にして苦邊に轉向すと爲す。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟して無漏思惟に相應し、若し念に隨ひ念を重んじ念を憶念するに妄れず虚しからずんば是れを正念の是れ聖出世間にして無漏不取にして苦邊に轉向すと名づく。何等をか正定と爲す。正定に二種有り。正定の世俗にして有漏取にして善趣に轉向する有り。正定の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向する有り。[七八]何等をか正定の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向すと爲す。若し心、不亂不動に住して攝受し三昧一心に寂止せば、是れを正定の世俗にして有漏取にして善趣に轉向すと名づく。[七九]何等をか正定の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと爲す。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟し、無漏思惟に相應し心法もて、不亂不散に住し攝受して三昧一心に寂止する、是れを正定の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七七）[八〇]一二五三（七八六）（向邪經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の心邪に向はば、法に違背して法を樂はざるなり。若し正に向はば心、法を樂ひ、法に違はざるなり。何等をか邪と爲す。謂ゆる邪見乃至邪定なり。何等をか正と爲す。謂ゆる正見乃至正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七八）[八一]一二五六（七八七）（邪見正見經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『邪に向かはば法に違ひて法を樂はず、正に向かはば法を樂ひて法に違はざるなり。何等をか邪に向かはば法に違ひて法を樂はずと爲す。謂ゆる邪見

【七七】出世間の正念。四諦を思惟し、無漏思惟に相應する點が異る。

【七八】世俗の正定。心不亂不動、三昧一心に住す。

【七九】出世間の正定。四諦を思惟し、無漏思惟に相應して、不亂不動、乃至一心に住す。

【八〇】A. X. 103. 心八聖に向へば法を樂ひ、法に違背せず。心八聖道に向はざれば之に反す。

【八一】A. X. 104. 邪見は身、口、意の三業悉く邪に向はしめ、邪志乃至邪定を起す。正見は身、口、意の三業悉く正に向はしめ、八聖道を起す。

く苦を盡くし苦邊に轉向すと名づく。何等をか正命と爲す。正命に二種有り。正命の是れ世俗にして有漏有取にして善趣に轉向する有り。正命の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向する有り。[七二]何等をか正命の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向すと爲す。謂ゆる法の如く衣食・臥具・病に隨つて湯藥を求め、法の如くならざるに非らず。是れを正命の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向すと名づく。[七三]何等をか正命の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと爲す。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟し、諸の邪命に於て漏無く、著して固守するを樂はず、執持して犯さず、時節を越えず、限防を度らざる。是れを正命の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと名づく。何等をか正方便と爲す。正方便に二種有り。正方便の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向する有り。正方便の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向する有り。[七四]何等をか正方便の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向すと爲す。謂ゆる精進方便して超出せんと欲し、堅固に建立し、造作精進するに堪能し、心法もて攝受して常に休息せざる、是れを正方便の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向すと名づく。[七五]何等をか正方便の是れ聖出世間にして無漏不取にして、苦を盡くし苦邊に轉向すと爲す。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟し、無漏憶念に相應し、心法もて精進方便して勤踊し起出せんと欲して建立し堅固に造作し精進するに堪能し、心法もて攝受して常に休息せざる。是れを正方便の是れ聖出世間にして無漏不取にして正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと名づく。何等をか正念と爲す。正念に二種有り。世俗にして有漏有取にして善趣に轉向する有り。正念の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向する有り。[七六]何等をか正念の世俗にして有漏取にして善趣に轉向すと爲す。若し念に隨ひ念を重んじ念を憶念するに妄れず虛しからずんば是れを正念の世俗にして有漏有取にして正し

【七二】世俗の正命。如法に衣食臥具湯藥を求む。

【七三】出世間生命。四諦を思惟し、無漏思惟に相應するが異る。

【七四】世俗の正方便。精進を方便とす。

【七五】出世間の正方便。四諦を思惟し、無漏思惟に相應する點が異る。

【七六】世俗の正念。念に隨ひ、念を重んじ、念を憶念するに知れず虛しからず。

[六六]何等をか正志の世俗にして有漏有取にして善趣に向ふ有りと爲す。謂ゆる正志は出要の覺、恚無き覺、害せざる覺あり。是れを正志の世俗にして有漏有取にして善趣に向ふと名づく。[六七]何等をか正志の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと爲す。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟し、無漏思惟に相應して心法もて分別し、自ら決し意に解し數を計して意を立つるなり。是れを正志の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと名づく。何等をか正語と爲す。正語に二種有り。正語の世俗にして有漏有取にして善趣に向ふ有り。正語の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向する有り。[六八]何等をか正語の世俗にして有漏有取にして善趣に向ふと爲す。謂ゆる正語は妄語・兩舌・惡口・綺語を離るるなり。是れを正語の世俗にして有漏有取にして善趣に向ふと名づく。[六九]何等か正語の是れ出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向する。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟し、邪命の口の四念行、諸の餘の口の惡行を貪るを除き、彼れより離れて漏無く遠離し、著して固守せず、攝持して犯さず、時節を度らず、限防を越えざる。是れを正語の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと名づく。何等をか正業と爲す。正業に二種有り。正業の世俗にして有漏有取にして善趣に向ふ有り。正業の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向する有り。[七〇]何等をか正業の世俗にして有漏有取にして善趣に轉向すと爲す。謂ゆる殺・盜・婬より離るるなり。是れを正業の世俗にして有漏取にして善趣に轉向すと名づく。[七一]何等をか正業の是れ聖出世間にして無漏不取にして正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと爲す。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟し、邪命の身の三惡行、諸の餘の身の惡行數を貪るを除き、漏無く心著して固守するを樂はず、執持して犯さず、時節を度らず、限防を越えざる。是れを正業の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正し

【六六】世俗の正志。出要の覺、無恚覺、不害覺。
【六七】出世間の正志。四諦を思惟し、分別し、計畫を立て意を立てるなり。
【六八】世俗の正語、妄語、兩舌、惡口、綺語を離る。
【六九】出世間の正語。四諦を思惟し、無漏思惟に相應するが異る。
【七〇】世俗の正業。殺、盜、婬より離る。
【七一】出世間の正業。四諦を思惟し、無漏思惟に相應するが異る。

世有り、自ら證を作せるを知り具足して住し、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると說くなり。何等をか正志と爲す。謂ゆる出要の志、恚無き志、害せざる志なり。何等をか正語と爲す。謂ゆる妄語を離れ、兩舌を離れ、惡口を離れ、綺語を離るるなり。何等をか正業と爲す。謂ゆる殺盜、婬を離るるなり。何等をか正命と爲す。謂ゆる法の如く衣服・飮食・臥具・湯藥を求め、法の如くならざるに非ざるなり。何等をか正方便と爲す。精進方便して出離せんと欲し勤競して常に不退を行ずるに堪能するなり。何等をか正念と爲す。謂ゆる念に隨順するに、念妄れず虛しからざるなり。何等をか正定と爲す。謂ゆる心を不亂に住め、堅固に攝持して三昧一心に寂止するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七六）一三五四(七八五)[63](廣說八聖道經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、何等をか正見と爲す。謂ゆる正見に二種有り。正見有り、是れは世俗、有漏有取にして善趣に轉向す。正見有り是れは聖、出世間、無漏無取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向す。[64]何等をか正見の有漏有取にして善趣に向ふと爲す。若し彼れ、施有り說有るを見、乃至世間に阿羅漢有りて後有を受けずと知らば、是れを世間に正見の世俗にして有漏有取にして善趣に向ふと名づく。[65]何等をか正見の是れ聖出世間にして無漏不取にして正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと爲す。謂ゆる聖弟子は苦は苦なりと思惟し、集・滅・道は道なりと思惟し無漏思惟に相應し、法に於て選擇し分別推求し、黠慧を覺知して開覺し觀察す、是れを正見の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向すと名づく。何等をか正志と爲す。謂ゆる正志に二種あり。正志の世俗にして有漏有取にして善趣に向ふ有り。正志の是れ聖出世間にして無漏不取にして、正しく苦を盡くし苦邊に轉向する有り。

【六三】 cf. M. 177. Cattarisaka-sutta. 世俗の八聖道と、出世間の八聖道とを說く。世俗の八聖道は善趣に轉向し、出世間の八聖道は苦邊に向ふ。

【六四】 世俗の正見。施と說と阿羅漢とを見る。

【六五】 出世間の正見。四聖諦を思惟し覺る。

應去法・不去法の一一の經も皆上の如く說く。

(六四) 一五二二(七八三)[六一](斷貪經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。爾の時尊者阿難も亦た彼れに在りて住まれり。異婆羅門有り、尊者阿難の所に來詣し、尊者阿難と共に相問訊し慰勞せり。問訊し慰勞し已つて退きて一面に坐し尊者阿難に白さく『所問有らんと欲す、寧ろ閑暇有らば記說を爲すや不や』と。阿難答へて言はく『汝の所問に隨ひ、知れるものは當に答ふべし』と。婆羅門問はく『尊者阿難、何が故ぞ沙門瞿曇の所に於て出家して梵行を修せるや』と。阿難答へて言はく『婆羅門、斷ぜんが爲の故なり』と。復た問はく『何等をか斷ずる』と。答へて言はく『貪欲斷じ、瞋恚・愚癡斷ず』と。又た問はく『阿難、道有り跡有りて能く、貪欲・瞋恚・愚癡を斷ずるや』と。阿難答へて言はく『有り謂ゆる八聖道の正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり』と。婆羅門言はく『阿難、賢なる哉之れ道、賢なる哉之れ跡、修習し多く修習せば能く斯れ等の貪欲・恚・癡を斷ず』と。尊者阿難、是の法を說く時彼の婆羅門、其の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ちて去りにき。

(六五)―(七四)一五二三―一五三二(調伏經等)　貪・恚・癡を斷ずるが如く、是の如く貪・恚・癡を調伏し、及び涅槃及び厭離を得、及び涅槃及び沙門の義及び婆羅門の義及び解脫及び苦斷じ及び苦邊を究竟し及び正しく苦を盡くすに趣かさる一一の經も皆上の如く說く。

(七五) 一五三三(七八四)[六二](邪正經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『邪有り正有り。諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。何等をか邪と爲す。謂ゆる邪見乃至邪定なり。何等をか正となす。謂ゆる正見乃至正定なり。何等をか正見と爲す。謂ゆる施有り說有り齋有り、善行有り惡行有り、善惡行の果報有り、此の世有り他の世有り、父母有り衆生の生ずる有り、阿羅漢の善く到り善く向ふ有り、此の世他の

【六一】 cf. S. 45. 5. Kimattha. 佛教中にて出家するは三毒を斷ぜんが爲なり。八聖道は其の道なり。

【六二】 S. 45. 21. Micchattam. 八正道經(大、二、五〇四)邪見乃至邪定は邪なり。正見乃至正定は正なりとて八聖道を詳說す。

りたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『內法の中に於て、我れ一法として、能く未だ生ぜざる惡不善法は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜず、已に生ぜしは退せしむる、不正思惟を說ぶが如きを見ず。諸の比丘、不正思惟は、能く未だ生ぜざる邪見をして生ぜしめ、已に生ぜし邪見は重ねて生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる正見は生ぜず、已に生ぜし正見は退せしむ。諸の比丘、內法の中に於て我れ一法として、能く未だ生ぜざる惡不善法は生ぜざらしめ、已に生ぜし惡不善法は滅せしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜしめ、已に生ぜし善法は重ねて生じて增廣せしむる、正思惟を說ぶが如きを見ず。諸の比丘、正思惟は、能く未だ生ぜざる邪見は生ぜざらしめ、已に生ぜしは滅せしめ、未だ生ぜざる正見は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしむ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三八)—(五二)一二四八六—一二五〇〇[五八](正不正思惟經)　邪見、正見を說くが如く、是の如く邪志・正志、邪語・正語、邪業・正業、邪命・正命、邪方便・正方便、邪念・正念、邪定・正定の七經も上の如く說き、內法の八經の如く、[五九]是の如く外法の八經も亦た是の如く說く。

(五三)　一二五〇一(七八二)(非法是法經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『非法、是法有り。諦らかに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。何等をか非法是法と爲す。謂ゆる邪見は非法なり。正見は是法なり。乃至邪定は非法なり。正定は是法なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五四)—(六三)一二五〇二—一二五一一[六〇](非法是法經)　非法、是法の如く、是の如く非律・正律、非聖・是聖、不善法・善法、非習法・習法、非善哉法・善哉法、黑法・白法、非義・正義、卑法・勝法、有罪法・無罪法、

【五八】前經參照。

【五九】巴になし。邪見乃至邪定は非法なり、正見乃至正定は是法なり。

【六〇】巴になし。

正見は重ね生じて增廣せしむ。是の如く未だ生ぜざる正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしむ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三六) 一二四八四(七八〇)[五六](善惡知識經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『外法の中に於て我れ一法として、能く未だ生ぜざる惡不善法は生ぜしめ、已に生ぜし惡不善法は重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜず、已に生ぜし善法は滅せしむる、惡知識・惡伴黨・惡隨從を說ぶが如きを見ず。諸の比丘、惡知識・惡伴黨・惡隨從は能く、未だ生ぜざる邪見をして生ぜしめ、已に生ぜし邪見は重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる正見は生ぜず、已に生ぜし正見は退せしむ。是の如く未だ生ぜざる邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定は生ぜざらしめ、已に生ぜしは退せしむ。諸の比丘、外法の中に於て我れ一法として、能く未だ生ぜざる惡不善法は生ぜざらしめ、已に生ぜし惡不善法は滅せしめ未だ生ぜざる善法は生ぜしめ、已に生ぜし善法は重ね生じて增廣せしむる、善知識・善伴黨・善隨從を說ぶが如きを見ず。諸の比丘・善知識・善伴黨・善隨從は能く、未だ生ぜざる邪見をして生ぜざらしめ、已に生ぜし邪見は滅せしめ、未だ生ぜざる正見は生ぜしめ、已に生ぜし正見は重ね生じて增廣せしむ。是の如く未だ生ぜざる邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定は生ぜざらしめ、已に生ぜしは滅せしめ、未だ生ぜざる正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしむ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて歡喜し奉行しき。

(三七) 一二四八五(七八一)[五七](正不正思惟經) 是の如く我れ聞きぬ、一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住ま

【五六】 前々經參照。

【五七】 cf. S. Y45.76,83 oniso.

らしめ、已に生ぜし邪見は滅せしめ、未だ生ぜざる正見は生ぜしめ、已に生ぜし正見は重ねて生じて増廣せしむ。是の如く未だ生ぜざる邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定は生ぜざらしめ、已に生ぜしは滅せしめ、未だ生ぜざる正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定は生ぜしめ、已に生ぜしは重ねて生じて増廣せしむ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三四) 一二四八二(七七八)(善惡知識經)[五四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『外法の中に於て我れ一法として、未だ生ぜざる惡不善法は生ぜしめ、已に生ぜし惡不善法は重ね生じて増廣せしむる、惡知識・惡伴黨・惡隨從を說ぶ(よろこ)が如きを見ず。諸の比丘、惡知識・惡伴黨・惡隨從は、能く未だ生ぜざる邪見をして生ぜしめ、已に生ぜし邪見は重ね生じて増廣せしめ、是の如く未だ生ぜざる邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて増廣せしむ。諸の比丘、外法の中にて、我れ一法として、未だ生ぜざる惡不善法は生ぜざらしめ、已に生ぜし惡不善法は滅せしむる、善知識・善伴黨・善隨從を說ぶが如きを見ず。諸の比丘、善知識・善伴黨・善隨從は能く、未だ生ぜざる邪見は生ぜざらしめ、已に生ぜし邪見は滅せしめ、未だ生ぜざる邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定は生ぜず、已に生ぜしは滅せしむ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三五) 一二四八三(七七九)(善知識經)[五五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『外法の中に於て我れ一法として、能く未だ生ぜざる善法は生ぜしめ、已に生ぜし善法は重ね生じて増廣せしむる、善知識・善伴黨・善隨從を說ぶが如きを見ず。諸の比丘、善知識・善伴黨・善隨從は能く未だ生ぜざる正見をして生ぜしめ、已に生ぜし

【五四】 S. 45. 77, 84. Kalyāṇa-mitta. 惡友は不善法を生ぜしめ八邪道を生ぜしむ。善友は善法を生ぜしめ八正道を生ぜしむ。

【五五】 前經參照。

〔三二〕 一二四八〇[五二](七七六)(正不正思惟經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『内法の中に於て我れ一法として未だ生ぜざる善法は生ぜず、已に生ぜし善法は退せしむる不正思惟を説ぶ者の如きを見ず。諸の比丘、不正思惟は未だ生ぜざる正見は生ぜざらしめ、已に生ぜし正見は退せしむ。是の如く未だ生ぜざる正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定は生ぜざらしめ、已に生ぜしは退せしむ。諸の比丘、内法の中に於て我れ一法として未だ生ぜざる善法をして生ぜしめ、已に生ぜし善法は重ね生じて增廣せしむる、正思惟を説ぶ者が如きを見ず。諸の比丘、正思惟は未だ生ぜざる正見は生ぜしめ、已に生ぜし正見は重ね生じて增廣せしむ。是の如く未だ生ぜざる正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしむ』と。佛此の經を説き已りたまひしに、諸の比丘、佛の説かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

〔三二〕 一二四八一[五三](七七七)(正不正思惟經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『内法の中に於て我れ一法として、未だ生ぜざる惡不善法は生ぜしめ、已に生ぜし惡不善法は重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜず、已に生ぜしは退せしむる、所謂不正思惟(の如き)を見ず。諸の比丘、不正思惟は、未だ生ぜざる邪見は生ぜしめ、已に生ぜしは重ねて生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる正見は生ぜず、已に生ぜしは退せしむ。是の如く未だ生ぜざる邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定は生ぜしめ、已に生ぜしは重ねて生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定は生ぜず、已に生ぜしは退せしむ。諸の比丘、我れ内法の中に於て、一法として、未だ生ぜざる惡不善法は生ぜざらしめ、已に生ぜし惡不善法は滅せしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜしめ、已に生ぜし善法は重ねて生じて增廣せしむる、正思惟を説ぶが如きを見ず。諸の比丘、正思惟は、未だ生ぜざる邪見は生ぜざ

【五二】 前經參照。

【五三】 前々經參照。

へり。時に生聞婆羅門有り、佛の所に來詣して世尊と面に相問訊し慰勞せり。問訊し慰勞し已つて退きて一面に坐し、佛に白して言さく『瞿曇、謂ゆる彼岸に非らざると、彼岸とは、瞿曇、云何が彼岸に非らず、云何が彼岸なるや』と。佛、婆羅門に告げたまはく『邪見は彼岸に非らず、正見は是れ彼岸なり。邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定は彼岸に非らず。正見は是れ彼岸なり、正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定は是れ彼岸なり』と。爾の時世尊卽ち偈を說いて言はく、

『希れに諸の人民の　能く彼岸に度る有り　一切の諸の世間は　徘徊して此岸に遊ぶ
此の正法律に於て　善く隨順して能ふ者は　斯れ等は能く彼の　生死の度り難き岸を度る』

と。時に生聞婆羅門、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ちて去りにき。

(二八―三〇) 一二四七六―一二四七八 (七七二―七七四)(彼岸經) 是の如く異比丘の尊者阿難に問ひ、佛に問ひ、諸比丘に問ふ此の三經も亦た上の如く說く。

(三一) 一二四七九(七七五)[五一](正不正思惟經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『內法の中に於て我れ一法として能く未だ生ぜざる惡不善法は生ぜしめ、已に生ぜしものは重ね生じて增廣せしむる、不正思惟を說ぶ者の如きを見ず。諸の比丘、不正思惟は、未だ起らざる邪見は起らしめ、已に起りしは重ね生じて增廣せしむ。是の如く邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定も亦た是の如く說く。諸の比丘、內法の中に於て我れ一法として未だ生ぜざる惡不善法は生ぜざらしめ、已に生ぜし惡不善法は滅せしむる、正思惟を說ぶが如きを見ず。諸の比丘、正思惟は、未だ生ぜざる邪見は生ぜざらしめ、已に生ぜしものは滅せしむ。邪見の如く邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【五一】 cf. S. 45. 76. 83. Yoniso. 正思惟せざれば一切の不善法を生ぜしめ增長せしめ、八邪道を生ぜしむ。之に反して正思惟せば八邪道を生ぜしめ增長せしめず。

て能く煩惱の軍を調伏するものと爲す。謂ゆる八聖道の正見乃至正定なり。阿難、是れを正法律乘・天乘・梵乘・大乘にして能く煩惱の軍を調伏するものと名づく』と。爾の時世尊即ち偈を說いて言はく。

『信戒を法軛と爲し　慚愧を長縻と爲し　正念もて善く護持せば　以て善く御する者と爲す　捨三昧を轅と爲し　智慧精進を輪とし　無著忍辱を鎧とせば　安隱にして法の如く行ず　直進して退還せず　之を示せば憂ひ無き處　智士は戰車に乘じ　無智の怨を摧伏す』と。

(二六) 一二四七四(七七〇)(邪經)[四九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『應に邪見を離るべし、應に邪見を斷ずべし。若し邪見斷ずべからずんば、我れ終に邪見を離斷すべしと說かず。邪見斷ず可きを以ての故に、我れ比丘に當に邪見を離るべしと說く。若し邪見を離れずんば、邪見は當に非義もて、不饒益の苦を作すべし。是の故に我れ、當に邪見を離るべしと說く。是の如く邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定も亦た是の如く說く。諸の比丘、邪見を離れ已つて當に正見を修すべし。若し正見を修することを得ずんば、我れ終に正見を修習せよと說かず、正見を修するを得るを以ての故に、我れ比丘に應に正見を修すべしと說く。若し正見を修せずんば當に非義もて、不饒益の苦を作すべし。正見を修せざるを以て非義もて不饒益の苦を作すが故に、是の故に我れ當に正見を修すべしと說く。義もて饒益するを以て常に安隱なることを得ん。是の故に比丘、當に正見を修すべし。是の如く正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二七) 一二四七五(七七一)(彼岸經)[五〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたま

【四九】 S. 45. 21. Micchatto. 八邪道は非義もて五不饒益の苦を作す。故に當に離斷すべし、八正道は義もて饒益するを以て修すべし、

【五〇】 S. 45. 34. pāraṅgama. 邪見等の八邪道は彼岸に非ず、正見等の八聖道は彼岸なり。

聞きて、歡喜し奉行しき。

(二四)一二四七二(七六八)(半經)[四二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の[四三]山谷精舍に住まりたまへり。時に尊者阿難、獨一靜處にて是の如き念を作せり『[四四]半梵行とは謂ゆる善知識・善伴黨・善隨從なり』と。乃至佛、阿難に告げたまはく『[四五]純一滿淨にして梵行を具する者は謂ゆる善知識なり。所以は何ん。我れ善知識と爲りしが故に、諸の衆生をして正見を修習せしめしに、遠離に依り、無欲に依り滅に依りて捨に向ひ、乃至正定を修し、遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ひたればなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者阿難、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二五)一二四七三(七六九)(婆羅門經)[四六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、晨朝に衣を著け鉢を持ち、舍衞城に入りて乞食せり。時に[四七]生聞婆羅門有り、白き馬車に乘り、衆多の年少翼從せり。白馬・白車・白控・白鞭、頭に白帽・白傘蓋を著け、手には白拂を執り、白き衣服、白き瓔珞を著け、白香を身に塗れり、翼從皆白し、舍衞城より出で林中に至りて敎授し讀誦せんと欲せり。衆人之れを見て咸(みな)言はく『善く乘れり、善く乘れり、謂ゆる婆羅門乘なり』と。時に尊者阿難、婆羅門、眷屬の衆具の一切皆白きを見、見已つて城に入りて乞食し、精舍に還へり衣鉢を擧げ、足を洗ひ已つて佛の所に往詣し、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、今日晨朝に衣を著け鉢を持ち、舍衞城に入りて乞食せしに、生聞婆羅門の白き馬車に乘り眷屬・衆具一切皆白きを見たり。衆人唱へて言はく「善く乘れり、善く乘れり、謂ゆる婆羅門乘なり」と。云何が世尊、正法律に於て是れ世人乘なりと爲し、是れ婆羅門乘なりと爲すや』と。佛、阿難に告げたまはく『是れは世人乘なり。我が法律の婆羅門乘には非ざるなり。阿難、我が正法律乘・天乘・婆羅門乘・[四八]大乘は能く煩惱の軍を調伏するものなり。諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。阿難、何等をか正法律乘・天乘・婆羅門乘・大乘にし

【四二】S. 45. 2. upaḍḍhaṃ 梵行は全く善知識の導きによる。
【四三】Giribbaja 王舍城の古城。
【四四】善知識は梵行を修するためには缺くべからざるものにして、實にその半ばは善知識の力によるとの意なり。
【四五】巴には佛これを否定して、半ばはをろか、全て善知識によると說かる。
【四六】S. 45. 4. Brāhmaṇa. 佛の正法律に於ては、能く煩惱の軍を調伏するものを正法律乘、天乘、婆羅門乘、大乘となす。
【四七】jānussoṇi brāhmaṇo.
【四八】巴になし。

りて捨に向ひ、正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定を修せば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。是れを八聖道を修すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二〇）**一二四六八**（七六五）[34]（修經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ今當に比丘の過去に已に八聖道を修し、未來に當に八聖道を修すべきを說くべし。乃至諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二一）**一二四六九**（七六六）[35]（清淨經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、正見淸淨鮮白ならば諸の過患無く、諸の煩惱を離れ、未だ起らざるは[36]起る。[37]唯だ佛の調伏せられしをば除く。乃至正定も亦た是の如く若し正見淸淨鮮白ならば諸の過患無く、諸の煩惱を離れ、未だ起らざるは能く起こる。乃至正定も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二二）**一二四七〇**（淸淨經）[38]　佛の[39]調へられしを除くが如く、善逝の[39]調へられしを除くも亦た上の如く說く。

（二三）**一二四七一**（七六七）[40]（聚經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『不善聚を說くとは謂ゆる五蓋なり、是れを正說すと爲す所以は何ん。純一の不善聚とは所謂五蓋なればなり。何等をか五と爲す。謂ゆる貪欲蓋・瞋恚・[41]睡眠・掉悔・疑蓋なり。善法聚を說くとは所謂八聖道なり。是れを正說すと名づく。所以は何ん。純一滿淨の善聚とは謂ゆる八聖道なればなり。何等をか八と爲す。謂ゆる正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を

【三四】　巴になし。眞の比丘は過去にても八聖道を修したり、未來にも修すべし。八聖道は永遠の正道なりと說く。

【三五】　S. 45. 16. Parisudhha. 八聖道淸淨鮮白なるときの利益を說く。

【三六】　正藏に「未起不起」とあるも意義通ぜず。巴には「未起能起」(anuppannā uppajjati)とあるを以て上の如く改む。八聖道を修することにより、未だ曾て起らざりし智の生ずるを言ふなるべし。

【三七】　巴には此の處次の如し。nāññatra tatpāgatassa patu=bhāvā arahato sammāsam bu=ddhassa.「如來應正等覺の出現する以外（の時）にはあらず」。

【三八】　S. 45. 17. Parisadda(2)

【三九】　正藏には「說」に作るも三本及び巴によりて「調」と改む。

【四〇】　A. V. 52. Rāsi. 不善聚とは五蓋なり。善聚とは八聖道なり。

【四一】　正藏に「眠睡」とあるを「睡眠」に改む。

諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一四) 一二四六〇(七六一)(學經)[26] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ當に學[27]及び無學[28]を說くべし。諦らかに聽き善く之れを思念せよ。何等をか學と爲す。謂ゆる學とは正見の成就[29]なり。學とは正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定の成就なり。是れを名づけて學と爲す。何等をか無學と爲す。謂ゆる無學とは正見の成就なり。無學とは正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定の成就り。是れを無學と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五)―(一六) 一二四六三―一二四六四(正士經)[30] 學無學の如く、是の如く正士、是の如く大士も亦た是の如く說く

(一七) 一二四六五(七六二)(漏盡經)[31] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ當に聖漏盡を說くべし。云何が聖漏盡と爲す。謂ゆる無學にして正見成就し、乃至無學にして正定成就せるなり。是れを聖漏盡と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一八) 一二四六六(七六三)(八聖道分經)[32] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ今當に八聖道分を說くべし 何等をか八と爲す。謂ゆる正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一九) 一二四六七(七六四)(修經)[33] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ今當に八聖道を修するを說くべし。諦かに聽き善く思へ、何等をか八聖道を修すと爲す。是れ比丘、正見を修せば遠離に依り、無欲に依り、滅に依

【二六】 S. 45. 13. Sekha. 有學も無學も八聖道を具足せる者なり。
【二七】 有學 (sekha) に同じ、修學の途上にある者。預流、一來、不還をいふ。
【二八】 修學の完成せる者。阿羅漢をいふ。
【二九】 成就とは巴の samannāgata なり。具足の義なり。
【三〇】 巴になし。
【三一】 巴になし。聖漏盡とは無學にして八正道を成就せる者をいふ。
【三二】 巴になし。八聖道あり。
【三三】 巴になし。八聖道を修することによりて遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。捨とは涅槃の異名。

（二二）一二六〇（七五九）（受經）[二三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三受有り、無常有爲の心緣ぜられて生ず。何等をか三と爲す。謂ゆる樂受、苦受、不苦不樂受なり』と。諸の比丘、佛に白さく『世尊、道有り跡有りて修習するに多く修習せば此の三受を斷ずるや不や』と、佛、比丘に告げたまはく[二四]『道有り跡有りて修習するに多く修習せば此の三受を斷ず』と。『何等をか道と爲し、何等をか跡と爲して修習するに多く修習せば、此の三受を斷ずるや』と。佛、比丘に告げたまはく『謂ゆる八聖道の正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二三）一二六一（七六〇）（三法經）[二五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『世に三法有り、喜ぶ可からず、愛す可からず、念ず可からず。何等をか三と爲す。謂ゆる老・病・死なり。此の三法は喜ぶ可からず、愛す可からず、念ず可からず。世間に若し此の三法の喜ぶ可からず、愛す可からず、念ず可からざる無くんば、如來應等正覺の世間に出でたまふこと有ること無し。世間も亦た如來の說法・教誡・教授有るを知らざらん。世間に此の三法の喜ぶ可からず、愛す可からず、念ず可からざる有るを以ての故に、如來應等正覺は世間に出でたまひ、世間は如來の說法・教誡・教授有るを知るなり』と。諸の比丘、佛に白さく『道有り跡有りて、此の三法の喜ぶ可からず、愛す可からず、念ず可からざるものを斷ずるや不や』と。佛、比丘に告げたまはく『道有り跡有りて修習するに多く修習せば、此の三法の喜ぶ可からず、愛す可からず、念ず可からざるを斷ずるなり。何等をか道と爲し、何等をか跡と爲して修習するに多く修習せば此の三法の喜ぶ可からず、愛す可からず、念ず可からざるを斷ずるや。謂ゆる八聖道の正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、

【二三】S. 45. 29. Vedanā. 苦、樂、不苦不樂三受あり。是れは無常有爲の心を生ずる緣たり。三受を斷ずるの道は八聖道なり。

【二四】巴には Imesaṃ kho bhikkhave tissannaṃ vedanānaṃ pariññāya ariyo aṭṭhaṅgiko maggo bhāvetabbo.「諸比丘、此等三受を完全に知（遍知）らんが爲には八聖道を修すべし」。

【二五】A. X. 76. 雜一四、四三法、參照。世間に老病死あるが故に如來出でて法を說く。八正道は老病死を斷ずる道なり。

是れを第一の母子有る畏れと名づく。愚癡無聞の凡夫は說いて、母子無き畏れと名づくるなり。復た次に大火卒かに起こり城邑聚落を焚燒するに人民馳走して母子相失ふも、或は復た相見ゆ。是れを第二の母子有る畏れと名づく。愚癡無聞の凡夫は說いて、母子無き畏れと名づくるなり。復た次に山中大いに雨ふり、洪水流出して聚落を漂沒するに此の人馳走して母子相失ふも、或は尋ねて相見ゆ。是れを第三の母子有る畏れと名づく。愚癡無聞の凡夫は說いて母子無き畏れと名づくるなり。比丘、[三]三種の母子無き畏れ有り。是れ、我れ自覺し三菩提を成じて記說せし所なり。何等をか三と爲す。若し比丘、子の若し老ひし時、母の能く子に汝老ゆること莫れ、我れ當に汝に代るべしと語ること無く、其の母の老いし時も亦た子の、母に老ゆること莫らしめん、我れ之れに代りて老ひんと語ること無し。是れを第一の母子無き畏れと名づく。我れ自覺し三菩提を成じて記說せし所なり。復た次に比丘、時有りて子の病めるに母の、子に病ふこと莫らしめん、我れ當に汝に代るべしと語ること能はず。母の病の時子も亦た、母に病ふこと莫れ、我れ當に母に代るべしと語ること能はず。是れを第二の母子無き畏れと名づく。我れ自覺し三菩提を成じて記說せし所なり。復た次に子の若し死せし時、母の能く子に、死すること莫らしめん、我れ今汝に代らんと語ること無く、母の若し死せし時、子の能く母に、死すること莫らしめん、我れ當に母に代るべしと語ること無し。是れを第三の母子無き畏れと名づく。我れ自覺し三菩提を成じて記說せし所なり』と。諸の比丘、佛に白さく、道有り跡有りて修習するに多く修習せば前の三種の母子有る畏れを斷じ、後の三種の母子無き畏れを斷ずるや不や』と。佛、比丘に告げたまはく『道有り跡有りて彼の三畏を斷ず。何等をか道と爲し、何等をか跡と爲して修習するに多く修習せば前の三種の母子有る畏れを斷じ、後の三種の母子無き畏れを斷ずるや。謂ゆる八聖道分の正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【三】jarābhayaṃ vyādhibhayaṃ maraṇabhayaṃ 老畏、病畏、死畏。

（七）一二四五（七五四）（舍利弗經）[15] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者舍利弗、佛の所に詣りて佛の足に稽首したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、所謂賢聖の等三昧・根本・衆具とは云何が賢聖の等三昧・根本・衆具と爲す』と。佛、舍利弗に告げたまはく『謂ゆる七正道分を賢聖の等三昧と爲し根本と爲し、衆具と爲す、何等をか七と爲す。謂ゆる正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念なり。舍利弗、此の七道分に於て基業を爲し已らば其の心を一にすることを得るなり。是れを賢聖の等三昧・根本・衆具と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（八）―（一〇）一二四六―一二四八（七五五―七五七）（比丘經） 上の三經の如く、是の如く佛、諸の比丘に問ひたまふ三經も亦た是の如く說く。

（一一）一二四九（七五八）（畏經）[16] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく[17]『母子無き畏れ、母子有る畏れは愚癡無聞の凡夫の所說にして而かも母子無き畏れ、母子有る畏れを知ること能はず、諸の比丘、三種の母子無き畏れ有り愚癡無聞の凡夫の所說なり。何等をか三と爲す。諸の比丘、時有りて[18]兵の兇亂起こり國土を殘害するに流れに隨ひて波逆り、子は其の母を失ひ、母は其の子を失ふ。是れを第一の母子無き畏れと名づく。愚癡無聞の凡夫の所說なり。復た次に比丘、時有りて[19]大火卒かに起こり城邑聚落を焚燒するに人民馳走し、母子相失ふ。是れを第二の母子無き畏れと名づく。愚癡無聞の凡夫の所說なり。復た次に比丘、時有りて山中[20]大いに雨ふり、洪水流出し、聚落を漂沒するに、人民馳走して母子相失ふ。是れを第三の母子無き畏れと名づく。愚癡無聞の凡夫の所說なり。然るに此等の畏れは是れ[21]母子有る畏れなり。愚癡無聞の凡夫は說いて母子無き畏れと名づくるなり、彼の時有りて兵の兇亂起こり、國土を殘害するに流れに隨つて波逆り母子相失ふも、或る時は彼の母子に於て相見ゆ、

【一五】 巴になし。八正道の中前の七は後の正定の基業たり。

【一六】 A. III. Bhaya 世間所說の三種の母子無怖畏は、實は母子有怖畏なり。眞の母子無怖畏は、老畏、病畏、死畏なり。之を斷ずるの道は八聖道なり。

【一七】 amātāputtikāni bhayāni.

【一八】 aṭavi-saṅkhepo cakkasamārūḷhā jānapadā pariyānti.

【一九】 mahā-aggidāho vuṭṭhāti.

【二〇】 mahāmegho vuṭṭhāti.

【二一】 samātāputtikaṃ bhayaṃ.

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五) 一二四三(七五二)[11](迦摩經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時迦摩比丘、佛の所に詣りて佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し佛に白して言さく『世尊、所謂欲とは云何が欲と爲す』と。佛、迦摩に告げたまはく『欲とは謂ゆる五欲の功德なり。何等をか五と爲す。謂ゆる眼識もて明色の愛す可く意す可く念ず可きに欲樂を長養し、是の如く耳・鼻・舌・身識もて觸の愛す可く意す可く念ず可きに欲樂を長養するなり。是れを名づけて欲と爲す。然かも彼れは欲に非らず、彼れに於て貪著せば是れる名づけて欲と爲す』と。爾の時世尊即ち偈を說いて言はく、

『世間の雜五色　彼れ愛欲を爲すに非ず　貪欲の覺想は　是れ則ち士夫の欲なり　衆色は常に世に住まる　行者心の欲を斷ぜよ』

と、迦摩比丘、佛に白して言さく『世尊、寧ろ道有り跡有りて此の愛欲を斷ずるや不や』と。佛、比丘に告げたまはく『八正道有りて能く愛欲を斷ず、謂ゆる正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、迦摩比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六) 一二四四(七五三)[12](阿梨瑟吒經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に比丘有り、[13]阿梨瑟吒と名づく、佛の所に詣りて佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、所謂甘露とは云何が名づけて甘露と爲す』と。佛、阿梨瑟吒に告げたまはく『甘露とは[14]界の名なりと說く。然かも我れ有漏盡くる者の爲に、現に此の名を說く』と。阿梨瑟吒比丘、佛に白して言さく『世尊、道有り跡有りて修習するに多く修習せば甘露法を得るや不や』と。佛、比丘に告げたまはく『有り、所謂八聖道分なり、謂ゆる正見乃至正定なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【一一】cf. S. 45. 30. Uttiya. 八聖道を修習すれば五欲を斷ず。

【一二】cf. S. 45. 7. Aññataro bhikkhu (2). 甘露法とは涅槃界の異名なり。八正道によりて得らる。

【一三】Ariṭṭha (Ariṣṭa)。

【一四】nibbānadhātuyā kho etam bhikkhu adhivacanaṃ.... 「比丘、此れは涅槃界の異名なり」。

（三）二四五一（七五〇）（無明經）[五]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の諸の[六]惡不善法生ずるは、一切皆無明を以て根本と爲す。無明の集、無明の生、無明の起なり。所以は何ん。無明とは無知なり。善、不善法に於て實の如く知らず、有罪無罪・下法上法・染汚不染汚・分別不分別・緣起非緣起に實の如く知らざるなり。實の如く知らざるが故に邪見を起こす。邪見を起こし已らば能く邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定を起こす。若し諸の善法の生ずるは一切皆、明を以て根本と爲す。明の集、明の生、明の起なり。明とは善、不善法に於て實の如く知り、[七]有罪無罪・親近不親近・卑法勝法・穢汚白淨・有分別無分別・緣起非緣起に悉く實の如く知るなり。實の如く知らば是れ則ち正見なり。正見せば能く正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定を起こす。正定起り已らば聖弟子、正しく貪恚癡より解脫することを得るなり。貪恚癡より解脫し已らば是れ聖弟子にして正しき智見を得、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四）二四五二（七五一）[八]（起經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若しは在家、若しは出家にして[九]邪事を起こさば我が說かざる所なり。所以は何ん、若し在家出家にして邪事を起こさば則ち正法を樂はざればなり。何等をか邪事と爲す。謂ゆる邪見乃至邪定なり。若し在家出家にして正事を起こさば我が讚歎する所なり。所以は何ん。正事を起こさば則ち正法を樂ひ、正法を善しとすればなり。何等をか正事と爲す。謂ゆる正見乃至正定なり』と。爾の時世尊卽ち偈を說いて言はく、

[一〇]『在家及び出家にして　邪事を起こさば　彼は則ち終に　無上の正法を樂はず　在家及び出家にして　正事を起こさば　彼は則ち常に心に　無上の正法を樂ふ』

【六】　正藏に「不善法比丘」とあるも三本の如く「比丘」の代りに「生」の字を以てす。

【七】　正藏に「如實知者、罪無罪」とあるも三本に依りて「如實知有罪無罪」と改む。

【八】　S. 45. 24. Paṭipadā. 邪道を起さば正法を樂はず、聖道を起さば正法を樂ふ。

【九】　巴には邪道 (micchāpaṭipadā) とあり。

【一〇】　巴に此の偈なし。

巻の第二十八

(第五道誦、第五聖道相應)

(第一品)

(一) 三四四九(七四八)[二](日出經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『日出の前相は謂ゆる明相初めて光るが如く、是の如く比丘の正しく苦邊を盡くし、苦邊を究竟する前相は所謂[三]正見なり。彼の正見は能く正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定を起こす。定の正受を起こすが故に聖弟子の心正しく貪欲・瞋恚・愚癡より解脫す。是の如し心善く解脫せば聖弟子、正しく知見することを得、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると』と。佛の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) 三四五〇(七四九)[四](無明經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し無明前相と爲るが故に諸の惡不善法を生じ、時には隨つて無慚、無愧を生ず。無慚、無愧生じ已らば隨つて邪見を生ず、邪見生じ已らば能く邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定を起こす。若し明を起こして前相と爲らば諸の善法を生じ、時に慚愧隨つて生ず。慚愧生じ已らば能く正見を生ず、正見生じ已らば、正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定を起こすに次第して起こる。正定起こり已らば聖弟子正しく貪欲・瞋恚・愚癡より解脫することを得。是の如く聖弟子、正しく解脫することを得已らば正しく知見することを得、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

※新第二十五(原第二十八卷)全部聖道經なり。原本逸するも第五誦道品第四とあるべし。今本卷全部具(四十七)略(五十三)合して一百經を第一品とし次卷の始の十經を第二品とす。

【一】 S. 45. Magga-saṃyutta に相當す、八聖道を說く經を輯めたり。

【二】 S. 45. 55. Yoniso. A. X. 201. 正見は正志乃至正定を起し、解脫し、解脫知見生ず。

【三】 巴には「如理作意」に作る。

【四】 S. 45. 1. Avijjā. 無明を前相とするときは八邪道生じ、明を前相とすれば八聖道生ず。

【五】 巴になし、無明は一切不善法の根本、明は一切善法の根本なり。

分を得ば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四〇―五八) 一三四〇―一三四八(無常想) 無常想の如く、是の如く、[七九] 無常苦想・[八〇] 苦無我想・觀食想・一切世間不可樂想・盡想・[八一] 斷想・[八二] 無欲想・滅想・患想・不淨想・青瘀想・膿潰想・膖脹想・壞想・食不盡想・血想・分離想・骨想・空想の一一の經も上の如く說く。[八三]

【七九】S. 46. 72. Dukkha.
【八〇】S. 46. 73. Anattā.
【八一】S. 46. 74. Pahāna
【八二】S. 46. 75. Virāga.
【八三】覺支相應第二品終り、新第二十四(原第二十七)卷終る。

無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三四）一三四四（七四五）[七五]（空經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の空入處を修するに多く修習し已らば大果、大福利を得ん。云何が比丘、空入處を修するに多く修習し已らば大果、大福利を得る。是の比丘心と空入處と倶ひて念覺分を修せば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。乃至捨覺分を修せば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三五―三七）一三四五―一三四七（滅經） 空入處を修するが如く、是の如く識入處、無所有入處、非想非非想入處の三經も亦た上の如く說く。

（三八）一三四八（七四六）[七六]（安那般那念經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、[七七]安那般那念を修習するに多く修習し已らば大果、大福利を得ん。云何が安那般那念を修習するに多く修習し已らば大果、大福利を得る。是の比丘、心と安那般那念と倶ひて念覺分を修せば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ乃至捨覺分を修せば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三九）一三四九（七四七）[七八]（無常經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、無常想を修するに多く修習し已らば大果、大福利を得ん。云何が比丘、無常想を修するに多く修習し已らば大果、大福利を得る。是の比丘、心口と無常想と倶ひて念覺分を修せば、遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。乃至捨覺

【七五】巴になし。空入處を修習すれば大果あり。
【七六】S. 46. 66. Ānāpāna. 入出息念を修すれば大果あり。
【七七】入出息念。
【七八】S. 46. 71. Anicca. 無常想を修すれば大果あり。

障礙の分と爲りて涅槃に趣かず。盡く其の心を攝して四念處に住せば心慈と倶ひ、怨無く嫉無く亦た瞋恚無く、廣大無量にして善修四方に充滿せん。四維上下、一切世間に心慈と倶ひ、怨無く嫉無く亦た瞋恚無く廣大無量にして善修習充滿せん。是の如き修習は悲・喜・捨の心の倶ふも亦た是の如く說く」と。我れ等も亦復た諸の弟子の爲に是の如き說を作せり。我れ等と彼の沙門瞿曇と何等の異りか有る。所謂倶に能く法を說けり』と。時に衆多の比丘、諸の外道の出家の所說を聞きて心喜悅せざりしも默然として呵せず座より起ちて去りぬ。黃枕邑に入りて乞食し已つて精舍に還へり、衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて佛の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し、彼の外道の出家の所說を以て廣く世尊に白せり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『彼の外道の出家の所說の如き、汝等應に問ふべし「慈心を修習するに何所をか勝れりと爲し、悲・喜・捨の心を修習するに何所をか勝れりと爲す」と。是の如く問ふ時は、彼の諸の外道の出家は心則ち駭散し、或は外の異れる事を說き、或は瞋慢毀呰し、違背して忍びず、或は默然として萎熟し、頭を低れ辯を失ひ思惟して住せん。所以は何ん。我れ諸天・魔・梵・沙門・婆羅門・天・人衆の中に我が所說を聞きて隨順し樂ふ者を見ざればなり。唯だ如來及び聲聞衆の者をば除く。比丘の心慈と倶ひて多く修習し、淨き最勝の悲心に於て修習するに多く修習せば、空入處最勝なり、喜心を修習するに多く修習せば識入處最勝なり捨心を修習するに多く修習せば無所有入處最勝なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三三）一二四三（七四四）（慈經）[七四]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の慈心を修習するに多く修習し已らば大果、大福利を得ん。云何が比丘の慈心を修習するに大果、大福利を得る。是の比丘心と慈と倶ひて念覺分を修せば遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。乃至捨覺分を修習せば、遠離に依り、

【七四】S. 46. 62. Mettā.
慈心を修習すれば大果あり。

分結盡きて中般涅槃を得るなり。若し爾らずんば生般涅槃を得。若し爾らずんば無行般涅槃を得、若し爾らずんば有行般涅槃を得、若し爾らずんば上流般涅槃を得』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三〇) 一二四〇(七四一)(不淨觀經)[六八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく[六九]『當に不淨觀を修すべし。多く修習し已らば當に大果大福利を得べし。云何が不淨觀を修し多く修習し已らば大果大福利を得る、是の比丘の不淨觀は念覺分を俱ひ遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。擇法・精進・喜・猗・定・捨覺分を修し、『遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三一) 一二四二(七四二)(死念經)[七〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく[七一]『若し比丘、隨死念を修習するに多く修習し已らば大果大福利を得ん。云何が比丘隨死念を修習するに多く修習し已らば大果大福利を得る。是の比丘の隨死念を修するは念覺分を俱ひ遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。乃至捨覺分も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三二) 一二四三(七四三)(慈經)[七二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[七三]釋氏の黃枕邑に住まりたまへり。時に衆多の比丘晨朝に衣を著け鉢を持ち、黃枕邑に入りて乞食せり。時に衆多の比丘、是の念を作さく、『今日太だ早く乞食の時未だ至らず、我れ等外道の精舍を過ぎる可し』と。爾の時衆多の比丘卽ち外道の精舍に入り諸の外道の出家と共に相問訊し慰勞し已つて一面に於て坐しぬ。諸の外道の出家言はく『沙門瞿曇は諸の弟子の爲に是の如き法を說けり「五蓋を斷ぜざれば惱みて心慧の力羸り、

【六八】 S. 46. 67. Asubha. 不淨觀を修すれば大果あり。
【六九】 asubhasaññā 取着を離れる方便なり。
【七〇】 S. 46. 68. Maraṇa. 隨死念を修習すれば大果あり。
【七一】 maraṇasaññā.
【七二】 S. 46. 54. Mettā. 諸比丘、外道が佛所說の四無量心を盜みて自說と異らずといふを聞くも辯駁する能はず。然る時佛、諸比丘に告げて、然る時は外道に斯々反間して、試すべしと試問法を授けらる。
【七三】 Koliya.

れ身の身觀念に住し已つて專心に念を繫けて忘れず。爾の時に當つて方便して念覺分を修するなり。方便して念覺分を修し已らば修習滿足す。謂ゆる念覺分を修し已つて法に於て選擇す。爾の時に當つて擇法覺分の方便を修す。擇法覺分の方便を修し已らば、修習滿足す。是の如く精進・喜・猗・定・捨覺分も亦た是の如く說く。內身の如く、是の如く外身、內外身、受・心・法の法觀念に住し、專心に念を繫けて忘れざるなり。爾の時に當りて方便して念覺分を修す。方便して念覺分を修し已らば修習滿足す。乃至捨覺分も亦た是の如く說く。是れを比丘の七覺分漸次に起り、漸次に起り已つて修習滿足すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二七）一二四一七（七三八）[六五]（果報經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば此の七覺分を修習するに多く修習せば當に二の果を得べし。現法に智の有餘涅槃、及び阿那含果を得ん』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二八）一二四一八（七三九）[六六]（果報經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、若し比丘の七覺分を修習するに多く修習し已らば當に四果を得べし。何等をか四と爲す。謂ゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二九）一二四一九（七四〇）[六七]（果報經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。上に說けるが如し、差別せば若し比丘の此の七覺分を修習するに、多く修習し已らば當に七果を得べし。何等をか七と爲す。謂ゆる現法に智有餘涅槃す。命終の時に及びて若し爾らずんば五下

【六五】（二三）（七三四）參照。

【六六】（二四）（七三五）參照。

【六七】（二五）（七三六）參照。

し已らば當に二種の果を得べし。現法に漏盡きて無餘涅槃を得、或は阿那含果を得ん』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二四)一二四四(七三五)(果報經)[55] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。上に說けるが如し、差別せば是の如く比丘、七覺分を修習し已り、多く修習し已らば四種の果、四種の福利を得ん。何等をか四と爲す。謂ゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、異比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二五)一二四五(七三六)(七種果經)[56] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。上に說けるが如し、差別せば、若し比丘、七覺分を修習するに多く修習し已らば當に七種の果、七種の福利を得べし。何等をか七と爲す。是の比丘は[57]現法の智證の樂、[58]若しくは命終時(の智證の樂)を得ん。若し現法の智證の樂、及び命終時(の智證の樂)を得ざらんも、而かも五下分結盡くるを得て[59]中般涅槃せん。若し中般涅槃を得ざらんも而かも、[60]生般涅槃を得ん。若し生般涅槃を得ざらんも、而かも[61]無行般涅槃を得ん。若し無行般涅槃を得ざらんも、而かも[62]有行般涅槃を得ん。若し有行般涅槃を得ざらんも、而かも[63]上流般涅槃を得ん』と。佛此の經を說き已りたまひしに異比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二六)一二四六(七三七)[64](七道品經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『所謂覺分とは何等をか覺分と爲す』と。諸の比丘、佛に白さく『世尊は是れ法根・法眼・法依なり。唯だ願くは爲に說きたまへ。諸の比丘聞き已りなば當に受け奉行すべし』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『七覺分とは謂ゆる七道品の法なり。諸の比丘、此の七覺分は漸次に起る。漸次に起り已つて修習滿足す』と。諸の比丘、佛に白さく『云何が七覺分は漸次に起り、漸次に起り已つて修習滿足するや』と。『若し比丘身の身觀念に住せば、彼

【五五】 cf. S. 48. 12. Saṅkhitta. 七覺分の四果を說く。
【五六】 S. 46. 3. Sīla (12—19) 七覺支を修すれば七種涅槃の果報あり。
【五七】 diṭṭhe dhamme paṭihacca aññam ārādheti. 阿羅漢を得て現實肉身の上に涅槃證果を得。
【五八】 maraṇakāle aññam ārādheti. 死の刹那に涅槃を得。
【五九】 antarāparinibbāyī 以下五種不還を說く。欲界に死して色界に生ずる中間に涅槃を得。
【六〇】 upahaccaparinibbāyī 色界に生じて久しからずして涅槃を得。
【六一】 asaṅkhāraparinibbāyī 色界に生じて久しく修行して涅槃を得。
【六二】 sasaṅkhāraparinibbāyī 色界に生じて修行せず、長時を經て涅槃を得。
【六三】 uddhaṃsoto 色界に於て天下より上天へ進み、色究竟天に亘つて涅槃を得。
【六四】 巴になし。(二二)(七三三)參照。

（二一）一二四一（七三二）[五二]（起經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば未だ起らざるは起らず。善逝の調伏し敎授したまへるをば除く。未だ起らざるは而かも起る。是れ則ち善逝の調伏し敎授したまへるなり。餘には非ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二二）一二四二（七三三）[五三]（七道品經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に異比丘有り、佛の所に來詣し、稽首して足に禮したてまつり退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊の謂ゆる覺分とは、世尊、云何が覺分と爲すや』と。佛、比丘に告げたまはく『所謂覺分とは謂ゆる七道品の法なり、然かも諸の比丘、七覺分は漸次に而かも起り、修習し滿足す』と。異比丘、佛に白さく『世尊、云何が覺分は漸次に而かも起り、修習し滿足するや』と。佛、比丘に告げたまはく『若し比丘、內身の身觀に住せば、彼れ內身の身觀に住する時、心を攝し念を繫けて忘れず。彼れ爾の時に當つて念覺分を方便して修習す。方便して念覺分を修習し已らば、修習滿足す。念覺分を滿足し已らば法に於て選擇し、分別し思量す。爾の時に當つて擇法覺分の方便を修するなり。方便を修し已らば修習滿足す。是の如く乃至捨覺分の修習滿足す。內身の身觀念に住するが如く、是の如く外身・內外身・受・心・法の法觀念に住せば、爾の時に當つて專心に念を繫けて忘れず。乃至捨覺分も亦た是の如く說く。是の如く住せば漸次に覺分起る。漸次に起り已らば修習滿足す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二三）一二四三（七三四）[五四]（果報經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊・彼の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し。差別せば是の如く七覺分を修習

【五二】 S. 46. 10. Uppannā. 前經參照。

【五三】 巴になし。七覺支の漸次起り、修習し、滿足するを說く。

【五四】 cf. 46. 57. (2) Aññā-antivā; S. 48. 65. Dve phalā. 七覺分の二種果報を說く。

(一七) 一二四七(七二八)[46](說經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『七覺分有り、何等をか七と爲す。謂ゆる念覺分、乃至捨覺分なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一八) 一二四八(七二九)[47](滅經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に七覺分を修すべし。何等をか七覺分を修すと爲す。謂ゆる念覺分乃至捨覺分なり。若し比丘念覺分を修せば、遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて[48]捨に向ふ。是の如く擇法・精進・喜・猗・定・捨覺分を修せば、遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一九) 一二四九(七三〇)[49](分經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[50]上に說けるが如し、差別せば、諸の比丘、過去に已に是の如く七覺分を修せり。未來にも亦た當に是の如く七覺分を修すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二〇) 一二五〇(七三一)[51](支節經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘念覺分清淨鮮白ならば支節有ること無く、諸の煩惱を離れ、未だ起らざるは起らず、佛の調伏し教授したまひしをば除く。乃至捨覺分も亦た是の如く說く。諸の比丘、念覺分、清淨鮮白ならば支節有ること無く、諸の煩惱を離れ、未だ起らざるは而かも起る。佛の調伏し教授したまふ所にして餘に非ず。乃至捨覺分も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【四六】S. 46. 22. Desanā. 七覺分を說く。

【四七】S. 46. 27. Nirodha. 七覺支を修せば涅槃に向ふ。

【四八】vossaggapariṇāmiṃ. 此の場合の捨は涅槃の異名なり。

【四九】S. 46. 41. Vidhā 眞の沙門婆羅門は過去にも未來にも常に七覺支を修す。

【五〇】巴には「過去にても三種を捨てたる沙門婆羅門は全て覺支を修習し多く修習したり。未來にても…。現在にも…。」とあり。然して三種とは註釋によれば慢を分別せるものとある。

【五一】cf. S. 46. 10. Uppannā: S. 46. 49. Aṅga. 七覺分清淨鮮白なる時は如何なる利益ありやを說く。

世尊、自ら覺りて等正覺を成じ、遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふと說きたまへり。擇法・精進・喜・猗・定・捨覺分は世尊、自ら覺りて等正覺を成じて遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふと說きたまへり』と。佛、阿難に告げたまはく『汝精進を說けるや』と。阿難、佛に白さく『我れ精進を說けり世尊、精進を說けり善逝』と。佛、阿難に告げたまはく『唯だ精進のみ修習し多く修習するも阿耨多羅三藐三菩提を得』と。是の語を說き已りたまひて、正しく坐し身を端しうして繫念したまへり。時に異比丘有り卽ち偈を說いて言はく、

『美妙の法を樂聞せん　疾を忍び人に告げて說かしめたまふ　比丘卽ち法を說き　七覺分を轉ず　善い哉尊阿難　明なる解、巧便の說。　勝白淨の法有り　垢を離るゝ微妙の說。　念・擇法・精進、　喜・猗・定・捨覺なり　此れ則ち七覺分　微妙の善き說なり　七覺分を說くを聞かば　深く正覺味に達せん　身大苦患を嬰ふるも　疾を忍び端坐して聽かん　觀じて正法の王と爲り　常に人の爲に演說するすら　猶ほ所說を樂聞す　況んや餘の未だ聞かざる者をや　第一の大智慧　十力もて禮せらるゝ者　彼れも亦た疾く疾く　來りて正法を說くを聽くべし　諸の多聞にして　契經阿毘曇に通達し　善く法律に通ぜる者も　聽くべし況んや餘の者をや　如實の法を說くを聞くに　專心黠慧もて聽かば　佛の說かるゝ法に於て　欲を離れて歡喜を得　歡喜して身猗息す　心自ら樂むも亦た然なり　心樂まば正受することを得　正觀に事行有りて　三趣を厭惡せば　欲を離れて心解脫す　諸有の趣を厭惡せば　人天に集まらず　餘無きこと猶ほ燈の滅するがごとく　般涅槃を究竟せん　法を聞くは福利多し　最勝の說かるゝを　是の故に當に專思し　大師の說かるゝを聽くべし』

と。異比丘、此の偈を說き已つて、座より起ちて去りにき。

るも阿耨多羅三藐三菩提を成ずと說くなり。巴には王舍城迦蘭陀竹園とあり。

【四一】 十六大國の一つなる Malla

【四二】 Kusinārā マツラの首府なり。

【四三】 Hiraññavatī

【四四】 巴には Maha-cunda.

【四五】 上衣。

(一五) 一二四〇五(七二六)(善知識經)[三六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[三七]王舍城の夾谷精舍に住まりたまへり。爾の時、尊者阿難も亦た彼れに在りて住まれり。時に尊者阿難、獨一靜處にて禪思し思惟して是の如き念を作せり『[三八]半梵行者は所謂善知識・善伴黨・善隨從にして惡知識・惡伴黨・惡隨從に非ず』と。時に尊者阿難、禪より覺めて佛の所に往詣し、稽首して足に禮したてまつり退きて一面に坐し佛に白して言さく『世尊、我れ獨一靜處にて禪思思惟して是の念を作せり、半梵行者は所謂善知識・善伴黨・善隨從にして惡知識・惡伴黨・惡隨從に非ず』と。佛、阿難に告げたまはく『是の言を作すこと莫れ、半梵行者は謂ゆる善知識・善伴黨・善隨從にして惡知識・惡伴黨・惡隨從に非ずと。所以は何ん。[三九]純一滿淨にして梵行淸白なるは謂ゆる善知識・善伴黨・善隨從にして惡知識・惡伴黨・惡隨從に非ざればなり、我れ善知識と爲れるが故に、衆生有りて我所に於て念覺分を取り、遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。是の如く擇法覺分・精進・喜・猗・定・捨覺分は遠離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。是を以ての故に當に知るべし阿難、純一滿淨にして梵行淸白なるは謂ゆる善知識・善伴黨・善隨從にして、惡知識に非ず、惡伴黨に非ず、惡隨從に非ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一六) 一二四〇六(七二七)(拘夷那竭經)[四〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[四一]力士聚落に在して人間に遊行し、[四二]拘夷那竭城と[四三]希連河の中間に於て住まりたまへり。聚落の側に於て[四四]尊者阿難に告げたまはく『四重に襞疊して世尊の[四五]鬱多羅僧を敷かしめよ、我れ今、背疾む。小らく臥息せんと欲す』と。尊者阿難即ち敎勅を受け、四重に襞疊し、鬱多羅僧を敷き已つて佛に白して言さく『世尊、已に四重に襞疊して鬱多羅僧を敷けり、唯だ世尊時を知りたまへ』と。爾の時世尊、厚く僧伽梨を襞みて頭に枕し、右脇にして臥し、足足相累ね、念を明相に繫け、正念正智もて起覺想を作して尊者阿難に告げたまはく『汝七覺分を說け』と。時に尊者阿難即ち佛に白して言さく『世尊、所謂念覺分は

【三六】 S. 45. 2. Upaḍḍham. 阿那、善知識は梵行の半ばなりと言へるを否定して、佛は善知識は梵行の全てなりと說かる。

【三七】 巴には Sakyesu Sakkaraṃ nāma Sakyānaṃ nigamo.

【三八】 Upaḍḍham idam bhante brahmacariyassa yad idaṃ kalyāṇamittatā kalyāṇasahāyatā kalyāṇasampavaṅkatā ti 「此の善知識、善伴黨、善隨從なるものは、大德よ、梵行の半ばなり。」

【三九】 正藏に「純一滿靜」とあるを三本により「純一滿淨」とす。文巴利には Mā hevam Ānanda mā havam Ānanda. Sakalam eva hidam Ānanda brahmacariyaṃ yadidaṃ kalyāṇamittatā kalyāṇasahāyatā kalyāṇasampavaṅkatā...... 「阿難、是の言を作すこと勿れ。善知識、善伴黨、善隨從なるものは斯れ梵行の全てなればなり。」

【四〇】 cf. D. 16. 5. 1. S. 46. 16. Gilāna. 七覺の事增三九、六(大二、七三一a)參照佛病臥して阿難をして七覺分を說かしめ、就中精進のみ修習し多く修習す

尊、長老供養し奉事す。所以は何ん、年少比丘、長老比丘に供養し奉事せば時時、深妙の法を聞くことを得ればなり。深法を聞き已らば二の正事成就す。身の正及び心の正なり。爾の時、念覺分を修す。念覺分を修し已らば念覺分滿足す。念覺滿足し已らば法に於て選擇し、法を分別し、法を思量す。爾の時、方便して擇法覺分を修す。乃至捨覺分の修習滿足す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一三) 一二四〇三(七二四)[二三四](奉事果報經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘戒を持ち德を修して慚愧し眞實の法を成ずるに、此の人を見ば多くの果報を得ん。若しは復た聞かば、若しは隨つて憶念せば、隨つて出家せば、多くの功德を得ん、況んや復た親近して恭敬奉事せんをや。所以は何ん、是の如きの人に親近し奉事せば、時時に深妙の法を聞くことを得ればなり。深法を聞くことを得已らば二正を成就す。身の正及び心の正なり。方便して定覺分を修習し、修習し已つて修習滿足す。乃至捨覺分の修習滿足す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一四) 一二四〇四(七二五)[二三五](不善聚經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『不善積聚を說くとは所謂五蓋なり、是れを正しく說くと名づく。所以は何ん、純一の不善聚とは謂ゆる五蓋なるが故なり。何等をか五と爲す。謂ゆる貪欲蓋・瞋恚蓋・睡眠蓋・掉悔蓋・疑蓋なり。善積聚を說くとは謂ゆる七覺分なり。是れを正しく說くと爲す。所以は何ん、純一滿淨とは是れ七覺分なるが故なり。何等をか七と爲す、謂ゆる念覺分・擇法覺分・精進覺分・喜覺分・猗覺分・定覺分・捨覺分なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【二三四】 S. 46. 3. Sīla の初半。賢聖に親近し奉事すれば二正を成就し、七覺支を滿足す。

【二三五】 S. 46 24. Ayoniso. 五蓋は不善聚なり。七覺支は善聚なり。

を出し、口鼻より息を出すに優鉢羅の香と作る、後に臥し先きに起き、王の意色を瞻て宜しきに隨つて奉事し、軟言愛語にして端心正念なり。王の道の意を發すに心違越すること無し、況んや復た身口をや。是れを轉輪聖王の寶女と爲す。云何が轉輪聖王の主藏臣寶と爲す。謂ゆる轉輪聖王の主藏大臣は本施を行ぜしが故に、生じては天眼を得て能く伏藏を見る。主有り主無き、若しは水に若しは陸に、若しは遠き若しは近き、悉く能く之れを見る。轉輪聖王の珍寶を須ひんとして即便ち告勅するに王の所須に隨つて輒ち以て奉上す。是に於て聖王、時有りて彼の大臣の其の能ふ所を觀んと試み、船に乘りて海に遊び、彼の大臣に告ぐらく「我れ寶物を須ひん」と。臣、王に白して言さく「小しく岸邊に住まりたまへ、當に以て奉上すべし」と。王彼の臣に告ぐらく「我れ今岸邊の寶を須ひず、且の盡我れに與へよ」と。是に於て大臣即ち水中に於て四の金瓮を出すに金寶中に滿てり。以て聖王に奉るに王須ふる所は即ち取りて之れを用ふ。若し取りて足り已らば餘は則ち水中に還歸せり。聖王世に出づれば則ち此の如き主藏の臣有りて世間に現ずるなり。云何が聖王世に出興せば主兵の臣有りて世間に現ずる。謂ゆる兵を主る臣有りて聰明にして智辯あり、譬へば世間の善く思量の成就せる者の如し、聖王の宜しとする所は彼れ則ち悉く從ひ、去るに宜く、住するに宜く、出づるに宜く、入るに宜し。聖王の四種の兵、道里を行くも頓止して疲勌せしめず。悉く聖王の宜しとして作すべき所の現法後世の功德の事を知り以て聖王に白せり。轉輪聖王世に出興せば是の如き主兵の臣有り。是の如く如來應等正覺、世に出興したまはば七覺分有りて世間に現ず。何等をか七と爲す。謂ゆる念覺分・擇法覺分・精進覺分・喜覺分・猗覺分・定覺分・捨覺分なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一二）〔三四三〕（七三三）（年少經）[三二]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『善い哉比丘、[三三]人に依り法を聞くに諸の年少比丘は諸

【三二】巳になし。年少の比丘は長老に奉事して深妙の法を聞かば二正を成じ七覺支を成滿することを得。
【三三】正藏には「僧人聞法」とあるも(三二)によりて「依人聞法」と改む。

て七支にて地に拄へらるるを聖王見已らば心則ち欣悅す「今此の寶象來りて我れに應ず」と。善き調象師に告ぐらく「速に此の寶象を調へしめ、調へ已らば送り來れよ」と。象師命を受け、一日に盈たざるに象卽ち調伏し、一切の調伏相悉く皆具足せり。猶ほ餘象の年を經て調へしものの如し。今此の象寶の一日にして調伏せるも亦復た是の如し。調へ已つて王の所に送詣し大王に上白せり。此の象已に調へり。唯だ王自ら時を知りたまへと。爾の時聖王、此の象の調相已に備はれるを觀察し卽ち寶象に乘じ晨旦の時に於て四海に周行し、日中の時に至りて王宮に還歸せり。是れを轉輪聖王、世に出興せば此の如き象寶世間に現ずと名づく。何等をか轉輪聖王世に出興せば馬寶世間に現ずと爲す。轉輪聖王の有する所の馬寶は純一青色にして烏頭澤尾なり、聖王馬を見て心に欣悅を生ず「今此の神馬來りて我れに應ずるが故に。調馬師に付し、速かに之れを調へしむ。調へ已らば送り來れ」と。馬師敎を奉じ、一日に盈たざるに其の馬卽ち調へり。猶ほ餘馬の年を經て、調ひしものの如し。馬寶の調伏も亦復た是の如し。馬の調へるを知り已り還りて王に奉送し白して言さく「大王、此の馬已に調へり」と。爾の時聖王、寶馬の調相已に備はれるを觀察し、晨旦の時に於て此の寶馬に乘じて四海に周行し、日中の時に至りて王宮に還歸せり。是れを轉輪聖王、世に出興せば馬寶世間に現ずと名づく。何等をか轉輪聖王、世に出興せば、摩尼珠寶世間に現ずと爲す。若し轉輪聖王の有する所の寶珠は其の形八楞にして光澤明照に諸の[三一]瑕隙無く、王宮内に於て常に燈明と爲る。轉輪聖王、寶珠を察試せんとして陰雨の夜、四種の兵を將ひて園林に入り珠を持ちて前導するに光明の面を照耀すること一由旬なり。是れを轉輪聖王、世に出興せば摩尼寶珠・世間に現ずと爲す。何等をか轉輪聖王、世に出興せば賢玉女寶、世間に現ずと爲す。轉輪聖王の有するの玉女は黑からず白からず、長からず短からず、麁ならず細ならず、肥えず瘦せず、支體端正にして寒き時は體暖かく、熱き時は體涼し。身體柔軟にして迦陵伽の衣の如く、身の諸の毛孔より旃檀の香

【三一】正藏に「類隙」とあるも(元)(明)の如く「瑕隙」と改む。

（二）二四〇二（七三）[二七]（轉輪王經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『轉輪聖王の世に出づる時は七寶有りて世間に現ず。云何が轉輪聖王の世に出づる時、金輪寶の現ずる時かある。[二八]刹利の灌頂せる聖王、月の十五日に沐浴し清淨にして齋戒を受持し、樓閣上に於て大臣に圍遶せらるるに金輪寶有りて東方より出づ。輪に千輻有り、齊轂圓輞にして、輪相具足し、天の眞金の寶なり。古昔より傳へ聞く「刹利の灌頂せる大王、月の十五日布薩の時、沐浴し清淨にして福善を受持せしに[二九]輪寶ありて現ぜり」と。今既に古の如く斯の吉瑞あり。當に知るべし、我れは是れ轉輪聖王なりと。卽ち兩手を以て金輪寶を承けて左手の中に著き、右手に旋轉して是の言を作さく「若し是れ轉輪聖王の金輪寶ならば當に復た轉輪聖王の古道を而かも去るべし」と、是の語を作し訖れるに是に於て輪寶卽ち王の前に從ひ、虛に乘じて逝き、東方に向ひ、古の聖王の正直の道に遊ぶに王及び四兵輪に隨つて去住せり。東方諸國の處處の小王、聖王の來れるを見、皆善哉と稱し「善く來りたまへり大王、此れは是れ王の國なり、此の國は安隱にして人民豐樂なり。願くは中に於て止まり國人を教化せられんことを、我れ則ち隨從したてまつらん」と。聖王答へて言はく「諸の聚落の主、汝今但だ當に善く國人を化すべし。順はざる者有らば當に來つて我れに白すべし。當に法の如く化すべし。非法を作すこと莫れ、亦た國人をして善く非法を化せしめよ。若し是の如くせば則ち我が化に從ふなり」と。是に於て聖王東海より度り古の聖王の道に乘じて南海に至り、[三〇]古の聖王の道に乘じて南海を度りて西海に至り、古昔の聖王の道に乘じて西海を度りて北海に至るに、南西北方の諸の小國の王の奉迎し啓請すること亦た東方に廣說せるが如し。是に於て金輪寶、聖王に隨從して北海を度り還りて王宮の正治殿上に至りて虛空の中に住せり。是れを轉輪聖王、世に出興せば金輪寶世間に現ずと爲す。云何が轉輪聖王、世に出興せば白象寶世間に現ずと爲す。若し刹利の灌頂せる大王あり、純色の象の其の色鮮好にし

一代に二王あることなし。四種の兵及び七寶を有し、刀劍を捨てゝ法を以て蒼生を安んずと考へらるる印度の理想王なり。

【二五】出立すべし。

【二六】眞直に古聖の通られた道を歩む。先づ東向するは前方なればなり。

【二七】同前。特に轉輪聖王の七寶の偉德を詳說し、以て佛所說の七覺支に譬ふ。

【二八】kṣatriya (khattiya) 刹帝利。士族印度の支配階級なり。

【二九】正藏のまゝにては意義通じ難ければ三本(三)に從ふ。

【三〇】正藏に「至於南海」とあるを三本(三)によりて改む。

者・方便して七覺分を修するを知る時樂住を生ずるや不や』と。尊者阿那律、諸の比丘に語つて言はく『我れ比丘の方便して七覺分を修する時樂住を生ずるを知る』と。諸の比丘、尊者阿那律に問はく『云何が比丘の方便して七覺分を修する時樂住を生ずるを知るや』と。尊者阿那律、諸の比丘に語るらく『比丘の方便して念覺分を修し善く思惟して、我が心善く解脱せり、善く睡眠を害せり、善く掉悔を調伏せりと知る。此の如く念覺分處法を思惟し已つて精勤方便して心懈怠ならずんば身猗息して動亂せず、心を繫して住せしめ、亂念を起さず一心に正受す。是の如く擇法・精進・[三二]喜・猗・定・捨覺分も亦た是の如く說く。是れを比丘の方便して七覺分を修する時樂住を生ずるを知ると名づく』と。時に衆多の比丘、尊者阿那律の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ちて去りにき。

(二〇) 一四〇〇(七二一)(轉輪王經)[三三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[三四]轉輪聖王出世の時は七寶有りて世間に現ず、金輪寶・象寶・馬寶・神珠寶・玉女寶・主藏臣寶・主兵臣寶なり。是の如く如來出世したまふも亦た七覺分の寶有りて現ず。齋戒して樓觀上に處し大臣に圍遶せらるるに、金輪寶有りて東方より出づ。輪に千輻有り、齋穀圓輞にして輪相具足す。「此の吉瑞有らば必ず是れ轉輪聖王なり。我れ今決定して轉輪王と爲らん」と。卽ち兩手を以て金輪寶を承けて左手の中に著き、右手にて旋轉して是の言を說く「若し是れ轉輪聖王の金輪寶ならば當に復た轉輪聖王の古道を而かも[三五]去るべし」と。是に於て輪寶卽ち發し王の蕃となりて前に隨ひ、而かも東方に於て虛に乘じて逝き、東方に向ひて古の聖王の[三六]正直の道に遊ぶ。王輪寶に隨へば四兵も亦た從ふ。若し至れる方に輪寶住せば王彼れに於て住し、四兵も亦た住す。東方諸國の處處の小王、聖王の來るを見、悉く皆歸伏す。如來の世に出興したまふには七覺分有りて世間に現ず、所謂念覺分・擇法覺分・精進覺分・喜覺分・猗覺分・定覺分・捨覺分なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

---

kho āvuso Sāriputta jāneyya paccattam yonisomasikārā evaṃ susamāraddhā me satta bojjhaṅgā phāsuvihārāya saṃvattantiti.
「友よ、比丘念覺支を修する時、『我が心は善く解脫せり、我が睡眠はよく滅されたり、我が掉悔はよく調伏されたり、發したる精進は役立ちて下劣なる思惟を作さず、…乃至…。』舍利弗よ、斯の如く自ら正しく思惟して知るならば、斯く完全に發されたる七覺支は樂住に導く。」

【三〇】 正藏に「不害睡眠」二回出づ、(三)の如く役者削除。

【三一】 巴になし。經意前經に同じ。

【三二】 (三)に從ひ「喜」を加ふ。

【三三】 S. 46. 42. Cakkavatti. D.17. Mahāsudassana S. (8-17)中、五八、七寶經(大、一、四九三)增三九、七(大、二、七三一b)輪王七寶經(大、一、八二一)轉輪聖王世に出づるに七寶ある如く、如來世に出づる時は七覺支の寶あり。

【三四】 Cakkavatti-rāja 世界を統一して正法によりて治むと考へられる王にして、普通その轉ずる輪の別により、金輪、銀輪、銅輪、鐵輪の四種に分たれ、金輪を最上とす。

此の七覺分は決定して得、勤めずして得、意に隨つて正受す。我が此の念覺分は淸淨純白にして起る時起るを知り、滅する時滅するを知り、沒する時沒するを知り、已に起らば已に起れるを知り、已に滅せば已に滅せるを知る。是の如く擇法・精進・喜・猗・定・捨覺分も亦た是の如く說く』と。尊者舍利弗、此の緣を說き已りたまひしに諸の比丘、其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

（八）三三九八（七一九）（優波摩經）[15] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[16]巴連弗邑に住まりたまへり。爾の時尊者優波摩、尊者[17]阿提目多、巴連弗邑の鷄林精舍に住まれり。爾の時、尊者阿提目多、晡時に禪より覺め尊者優波摩の所に詣り、共に相問訊し慰勞し已り、退きて一面に坐し、尊者優波摩に問はく[18]『尊者能く七覺分の方便を知りて是の如く樂住を正受し、是の如く苦住を正受するや』と。優波摩答へて言はく『尊者阿提目多、比丘の善く方便を知りて七覺分を修すれば是の如く樂住を正受し、是の如く苦住を正受するなり』と。復た問はく『云何が比丘は、善く方便もて七覺分を修するを知るや』と。優波摩答へて言はく[19]『比丘の方便して念覺分を修する時思惟するも、彼の心善く解脫せず、[20]睡眠を害せず、善く掉悔を調伏せずと知らんには、我が如く念覺處法を思惟し、精進方便するも平等なることを得ざるなり。是の如く擇法・精進・喜・猗・定・捨覺分も亦た是の如く說く。若し比丘、念覺分の方便の時先に思惟して心善く解脫せり、正しく睡眠を害せり、掉悔を調伏せりと、我が如く此の念覺處法に於て思惟して已らば方便を勤めずして平等なることを得るなり。是の如く阿提目多、比丘の方便して七覺分を修するを知らば是の如く樂住を正受し、是の如く不樂住を正受す』と。時に二正士共に論議し已つて、各座より起ちて去りにき。

（九）三三九九（七二〇）[21]（阿那律經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者阿那律も亦た舍衞國の松林精舍に住まれり、時に衆多の比丘有り、阿那律の所に詣り、共に相問訊し慰勞せり。問訊し慰勞し已つて退きて一面に坐し尊者阿那律に語るらく『尊

【一五】 S. 46. 8. Upavāṇa. 七覺支を修する時、五蓋は滅して心能く解脫せりと知る時は、心に落着を生ず。

【一六】 巴には Kosambiyaṃ Ghositārāme.

【一七】 Adhimutta 巴になし。巴には舍利弗に作る。

【一八】 Jāneyya nu kho āvuso Upavāṇa bhikkhu paccattaṃ yonisomanasikārā evaṃ susamāraddhā me sattabojjhaṅgā phāsuvihārāya saṃvattantīti.

「ウパヴーナ、若し比丘自ら正思惟によりて知るならば、斯く完全に發されたる此等七覺支は樂住に導くや。」

【一九】 Satisambojjhaṅgaṃ āvuso bhikkhu ārambhamāno va jānāti cittañ ca me suvimuttaṃ thīnamiddhañ ca me susamūhataṃ uddhaccakukkuccañ ca me suppaṭivinītaṃ āraddhañ ca me viriyaṃ aṭṭhikatvā manasikaromi no ca līnan ti,…… pe…… evaṃ

て、歡喜し奉行しき。

（六）[三三九六（七一七）[一二]（一法經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『外法の中に於て我れ一法も、未だ生ぜざる惡不善法は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜざらしめ、已に生ぜしは退せしむる惡知識、惡伴黨の如きを見ざるなり。惡知識、惡伴黨は未だ生ぜざる貪欲蓋は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる念覺分は生ぜざらしめ、已に生ぜしは退せしむるなり。諸の比丘、我れ一法も未だ生ぜざる惡不善法は生ぜざらしめ、已に生ぜしは斷ぜしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしむる、所謂善知識・善伴黨・善隨從者（の如き）を見ざるなり。若し善知識・善伴黨・善隨從者ならば、未だ生ぜざる貪欲蓋は生ぜざらしめ、已に生ぜしは斷ぜしめ、未だ生ぜざる瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋は生ぜざらしめ、已に生ぜしは斷ぜしめ、未だ生ぜざる念覺分は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる擇法・精進・喜・猗・定・捨覺分は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしむるなり』と。佛の此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七）[三三九七（七一八）[一三]（舍利弗經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者舍利弗、諸の比丘に告ぐらく『七覺分有り、何等をか七と爲す。謂ゆる念覺分・擇法覺分・精進覺分・喜覺分・猗覺分・定覺分・捨覺分なり。[一四]此の七覺分は決定して得、勤めずして得、我が欲する所に隨つて覺分正受す。若し晨朝の時、日中の時、日暮の時、若し正受せんと欲せば、其の欲する所に隨つて多く正受に入るなり。譬へば王大臣の種種の衣服有りて箱簏の中に置くに其の須ふる所に隨ひ、日中に須ふる所、日暮に須ふる所、欲に隨ひて自在なるが如く、是の如く比丘、

[一二] cf. S. 45. 84. Kalyāṇamittatā 惡友の害、善友の利を說く前經の如し。

[一三] S. 46. Vatta. 舍利弗は七覺支に於て自在を得たりと說く。

[一四] 七覺分のうち何れをも、何時にても、意の如くに得るとの意。

を喜覺分の食と名づく。何等をか猗覺分の食と爲す。身猗息、心猗息の思惟有り、未だ生ぜざる猗覺分は起らしめ、已に生ぜし猗覺分は重ね生じて增廣せしむ。是れを猗覺分の食と名づく。何等をか定覺分の食と爲す。謂ゆる四禪の思惟有り、未だ生ぜざる定覺分は生起せしめ、已に生ぜし定覺分は重ね生じて增廣せしむ。是れを定覺分の食と名づく。何等をか捨覺分の食と爲す。三界有り、何等か三なる。謂ゆる斷界・無欲界・滅界なり。彼を思惟せば、未だ生ぜざる捨覺分は起らしめ、已に生ぜし捨覺分は重ね生じて增廣せしむ。是れを捨覺分の食と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（五）二三九五（七一六）[七]（一法經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『內法の中に於て、[八]我れ一法として、未だ生ぜざる要不善法は生ぜしめ、已に生ぜし惡不善法は重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜず、已に生ぜしは則ち退するは、所謂不正思惟（の如き）を見ざるなり。諸の比丘、正思惟せずんば、未だ生ぜざる貪欲蓋は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる念覺分は生ぜず、已に生ぜしは退せしめ、未だ生ぜざる捨法・精進・喜・猗・定・捨覺分は[九]生ぜざらしめ、[一〇]已に生ぜしは退せしむ。我れ一法として能く、未だ生ぜざる惡不善法は生ぜざらしめ、已に生ぜしは斷ぜしめ、未だ生ぜざる善法は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしむる。[一一]所謂正思惟（の如き）を見ざるなり。比丘、正思惟せば、未だ生ぜざる貪欲蓋は生ぜざらしめ、已に生ぜしは斷ぜしめ、未だ生ぜざる瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋は生ぜざらしめ、已に生ぜしは斷ぜしめ、未だ生ぜざる念覺分は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしめ、未だ生ぜざる擇法・精進・喜・猗・定・捨覺分は生ぜしめ、已に生ぜしは重ね生じて增廣せしむ』と。佛、此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞き

【七】 cf S. 45. 83. Yoniso. cf S. 46. 29. Ekadhamma. 不正思惟は四正勤（又は四正斷）を起さず、五蓋を生ぜしめ七覺支を生ぜざらしむ。正思惟は四正勤を起し、五蓋を生ぜしめず、七覺支を生ぜしむ。

【八】 Nāham bhikkhave aññam ekadhammam pi samanupassāmi yatkayidam.

正藏のまゝにて意義通ぜざるを以て巴本によりて（を外にしては）を挿入す。

【九】 正藏には「令生」とあるも、（三）の如く「令不生」とす。

【一〇】 正藏に「重生令增廣」とあるも、（三）の如く「令退」に改む。

【一一】 （三）の如く「所謂」の二字を加ふ。（一一）を見よ。

生ざざる猗覺分は起らず、已に起りし猗覺分は退せしむ。是れを猗覺分食せずと名づく。何等をか定覺分食せずと爲す。四禪有り、彼れに於て思惟せずんば、未だ起らざる定覺分は起らず、已に起りし定覺分は退せしむ。是れを定覺分食せずと名づく。何等をか捨覺分食せずと爲す。三界有り、謂ゆる斷界・無欲界・滅界なり。彼れに於て思惟せずんば、未だ起らざる捨覺分は起らず、已に起りし捨覺分は退せしむ。是れを捨覺分食せずと名づく。何等をか貪欲蓋食せずと爲す。謂ゆる不淨觀なり。彼れに於て思惟せば、未だ起らざる貪欲蓋は起らず已に起りし貪欲蓋は斷ぜしむ。是れを貪欲蓋食せずと名づく。何等をか瞋恚蓋食せずと爲す。彼の慈心の思惟は、未だ生ぜざる瞋恚蓋は起らず、已に生ぜし瞋恚蓋は滅せしむ。是れを瞋恚蓋食せずと名づく。何等をか睡眠蓋食せずと爲す。彼の明照の思惟は、未だ生ぜざる睡眠蓋は起らず、已に生ぜし睡眠蓋は滅せしむ。是れを睡眠蓋食せずと名づく。何等をか掉悔蓋食せずと爲す。彼の寂止思惟は、未だ生ぜざる掉悔蓋は起らず、已に生ぜし掉悔蓋は滅せしむ。是れを掉悔蓋食せずと名づく。何等をか疑蓋食せずと爲す。彼の緣起法の思惟は、未だ生ぜざる疑蓋は起らず、已に生ぜし疑蓋は滅せしむ。是れを疑蓋食せずと名づく。

譬へば身の食に依りて住し、食に依りて立つが如く、是の如く七覺分は食に依りて住し、食に依りて立つなり。何等をか念覺分の食と爲す。謂ゆる四念處を思惟し已らば、未だ生ぜざる念覺分は起らしめ、已に生ぜし念覺分は轉生して增廣せしむ。是れを念覺分の食と名づく。何等をか擇法覺分の食と爲す。擇善法有り、擇不善法有り、彼れを思惟し已らば、未だ生ぜざる擇法覺分は起らしめ、已に生ぜし擇法覺分は重ね生じて增廣せしむ。是れを擇法覺分の食と名づく。何等をか精進覺分の食と爲す。彼の四正斷を思惟せば、未だ生ぜざる精進覺分は起らしめ、已に生ぜし精進覺分は重ね生じて增廣せしむ。是れを精進覺分の食と名づく。何等をか喜覺分の食と爲す。喜有り、喜處有り、彼れを思惟せば未だ生ぜざる喜覺分は起らしめ、已に生ぜし喜覺分は重ね生じて增廣せしむ。是れ

れを欲愛蓋の食と名づく。何等をか瞋恚蓋の食と爲す。謂ゆる障礙相なり。彼れに於て正思惟せずんば、未だ起らざる瞋恚蓋は起らしめ、已に起こりし瞋恚蓋は能く增廣せしむ。是れを瞋恚蓋の食と名づく。何等をか睡眠蓋の食と爲す。五法有り。何等をか五と爲す。微弱・不樂・缺呿・多食・懈怠なり。彼れに於て正思惟せずんば、未だ起らざる睡眠蓋は起らしめ、已に起りし睡眠蓋は能く增廣せしむ。是れを睡眠蓋の食と名づく。何等をか掉悔蓋の食と爲す。四法有り、何等をか四と爲す。謂ゆる親屬覺・人衆覺・天覺・本經し所の娯樂覺なり。自ら憶念し他人に憶念せしめて覺を生ず。彼れに於て不正の思惟を起こさば、未だ起らざる掉悔は起らしめ、已に起りし掉悔は其れをして增廣せしむ。是れを掉悔蓋の食と名づく。何等をか疑蓋の食と爲す。三世有り。何等をか三と爲す。謂ゆる過去世・未來世・現在世なり。過去世の猶豫、未來世の猶豫、現在世の猶豫に於て彼れに於て不正の思惟を起こさば、未だ起らざる疑蓋は起らしめ、已に起りし疑蓋は能く增廣せしむ。是れ疑蓋の食と名づく。譬へば身の食に依りて長養することを得、食せざるに非ざるが如く、是の如く七覺分は食に依りて住し、食に依りて長養し食せざるに非らず。何等をか念覺分食せずと爲す。謂ゆる四念處を思惟せずんば、未だ起らざる念覺分は起らず、已に起りし念覺分は退せしむ。是れを念覺分食せずと名づく。何等をか擇法覺分食せずと爲す。謂ゆる善法に於て選擇し、不善法に於て選擇するなり。彼れに於て思惟せずんば未だ起らざる擇法覺分は起らざらしめ、已に起りし擇法覺分は退せしむ。是れを擇法覺分食せずと名づく。何等をか精進覺分食せずと爲す。謂ゆる四正斷なり。彼れに於て思惟せずんば、未だ起らざる精進覺分は起らざらしめ、已に起りし精進覺分は退せしむ。是れを精進覺分食せずと名づく。何等をか喜覺分食せずと爲す。喜有り、喜處法有り、彼れに於て思惟せずんば、未だ起らざる喜覺分は起らず、已に起りし喜覺分は退せしむ。是れを喜覺分食せずと名づく。何等をか猗覺分食せずと爲す。身猗息及び心猗息有り、彼れに於て思惟せずんば、未だ

豫せるに爾の時擇法覺分、精進覺分、喜覺分を修すべからず。所以は何ん。掉心起こり、掉心猶豫せるに此の諸法を以てせば能く其れをして增さしむればなり。譬へば熾なる火の其れをして滅せしめんと欲して其れに乾ける薪を足すが如し。意に於て云何。豈に火をして增す熾燃たらしめざる耶』と。比丘、佛に白さく『是の如し世尊』と。佛、比丘に告げたまはく『是の如く掉心を生じ、掉心にして猶豫せるに、擇法覺分・精進覺分・喜覺分を修せば其の掉心を增さん。諸の比丘、若し微劣の心生じ、微劣にして猶豫せば是の時は擇法覺分・精進覺分・喜覺分を修すべし。所以は何ん、微劣の心生じ微劣にして猶豫せるに此の諸法を以てせば示敎照喜す。譬へば小火の其れをして燃えしめんと欲し、其れに乾ける薪を足すが如し。云何が比丘、此の火寧ろ熾燃たるや不や』と。比丘、佛に白さく『是の如し世尊』と。佛、比丘に告げたまはく『是の如く微劣の心生じ、微劣にして猶豫せるに爾の時に當つて擇法覺分・精進覺分・喜覺分を修せば示敎照喜す。若し掉心生じ、掉心にして猶豫せば猗覺分・定覺分・捨覺分を修せよ。所以は何ん。掉心生じ、掉心にして猶豫せるに此れ等の諸法は能く內住の一心をして攝持せしむればなり。譬へば、燃ゆる火の其れをして滅せしめんと欲し、其れに燋炭を足すに彼の火則ち滅するが如し。是の如く比丘、掉心にして猶豫せるに擇法覺分・精進・喜を修するは則ち非時なり。猗・定・捨覺分を修するは自ら此れ非時なり。此れ等の諸法、內住の一心念覺分攝持せば一切兼助す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四）【三三四】（七一五）（食經）[六]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五蓋、七覺分の有食、無食あり。我れ今當に說くべし。諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。譬へば身は食に依りて立ち食せざるに非ざるが如く、是の如く五蓋は食に依りて立ち食せざるに非ず。貪欲蓋は何を以てか食と爲す。謂ゆる觸相なり。彼れに於て正思惟せずんば、未だ起らざる貪欲は起らしめ、已に起りし貪欲は能く增廣せしむ。是

【六】 S. 46. 51. Āhāra. 譬へば身體は食よつて支へられ成長する如く、五蓋にも七覺支にも之を存在せしめ增長せしめるもの、卽ち食が存在する。此の食を食せざれば衰滅す。五蓋は食せざれ、七覺支は食せしむべし。

身猗息は卽ち是れ猗覺分なり、是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。彼の心猗息は卽ち是れ猗覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり能く涅槃に轉趣す。定有り、定相有り。彼の定は卽ち是れ定覺分なり、是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。彼の定相は卽ち是れ定覺分なり、是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。捨善法有り、捨不善法有り、彼の善法の捨は卽ち是れ捨覺分なり、是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。彼の不善法の捨は卽ち是れ捨覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。是れを七覺分を說いて十四と爲すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに衆多の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 一三九三(七一四)(火經)[三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り。上に說けるが如し、差別せば『諸の外道の出家有りて是の如き說を作さば當に復た問うて言ふべし。「若し[四]心微劣にして猶豫せば爾の時應に何等の覺分をか修すべき。何等か修する時に非ずと爲す。若し復た[五]掉心なる者、掉心にして猶豫せば、爾の時復た何等の覺分をか修せん、何等をか非時と爲さん」と。是の如く問はば彼の諸の外道の心則ち駭散せん。諸の異法を說くに、心に忿恚・憍慢・毀呰・嫌恨・不忍を生じ、或は默然として頭を低れ、辯を失して潛思せん。所以は何ん、我れ諸天・魔・梵・沙門・婆羅門・天・人衆の中に我が所說を聞きて、歡喜し隨喜する者を見ざればなり。唯だ如來及び聲聞衆の此に於て聞ける者をば除く。諸の比丘、若し爾の時其の心微劣にして其の心猶豫せば猗覺分・定覺分・捨覺分を修すべからず、所以は何ん、微劣の心生じ微劣にして猶豫せるに此の諸法を以てせば其の微劣を增すが故なり。譬へば小火の其れをして燃えしめんと欲し增すに燋炭を以てするが如し。云何が比丘、炭を增し火をして滅せしめんとするに非ずや』と。比丘、佛に白さく『是の如し世尊』ど。是の如く比丘、微劣にして猶豫せるに若し猗覺分、定覺分、捨覺分を修せば此れ則ち非時なり。懈怠を增すが故に。若しは掉心起こり、若しは掉心猶

【三】 S. 46. 53. Aggi 心の萎微せる時は七覺支の中何を修し、何を修すべからざるや、心のはづみたる時は何を修し何を修すべからざるやを問へば外道の心駭散すべし。萎微せる時は擇法、精進、喜覺支修すべく、心はづみたる時は猗、定捨覺支修すべし。
【四】 līnaṃ cittaṃ 心の萎微沈滯せる。
【五】 uddhataṃ cittaṃ 心のはづみたる。

はば、彼の諸の外道は則ち自ら駭散せん。諸の外道に法を説かば瞋恚・憍慢・毀呰・嫌恨忍びざる心生じ、或は默然として頭を低れ、辯を失ひて潛思せん。所以は何ん、我れ諸天・魔・梵・沙門・婆羅門・天・人衆の中に我が所説を聞きて歡喜し隨順する者を見ざればなり、唯だ如來及び聲聞衆の此に於て聞ける者をば除く。諸の比丘、何等をか五蓋の十と爲す。謂ゆる內貪欲有り、外貪欲有り。彼の內貪欲とは卽ち是れ蓋なり、智に非ず、等覺に非ず、涅槃に轉趣せざるなり。彼の外貪欲とは卽ち是れ蓋なり、智に非ず、等覺に非ず、涅槃に轉趣せざるなり。謂ゆる瞋恚は瞋恚相有り。若し瞋恚及び瞋恚相あらば卽ち是れ蓋なり。智に非ず、等覺に非ず、涅槃に轉趣せざるなり。睡有り眠有り、彼の睡、彼の眠は卽ち是れ蓋なり。智に非ず、等覺に非ず、涅槃に轉趣せさるなり。掉有り悔有り。彼の掉彼の悔は卽ち是れ蓋なり。智に非ず、等覺に非ず、涅槃に轉趣せざるなり。疑善法有り、疑不善法有り。彼の善法の疑、不善法の疑は卽ち是れ蓋なり。智に非ず、等覺に非ず、涅槃に轉趣せざるなり。是れを五蓋に十を説くと名づく。何等をか七覺分に十四を説くと爲す。內法の心念住有り、外法の心念住有り。彼の內法の心念住は卽ち是れ念覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり。能く涅槃に轉趣す。彼の外法の念住は卽ち是れ念覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。擇善法、擇不善法有り、彼の善法の擇は卽ち是れ擇法覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。彼の不善法の擇は卽ち是れ擇法覺分なり。是れ智なり是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。精進の不善法を斷ずる有り、精進の善法を長養する有り、彼の不善法を斷ずる精進は卽ち是れ精進覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。彼の善法を長養する精進は卽ち是れ精進覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。喜有り、喜處有り。彼の喜は卽ち是れ喜覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。彼の喜處も亦た卽ち是れ喜覺分なり。是れ智なり、是れ等覺なり、能く涅槃に轉趣す。身猗息有り、心猗息有り。彼の

卷の第二十四*

（※第五道誦、第四菩提分相應の續き、第二部（原第二十七卷））

（第二品）

（一）［三三九一（七二三）（無畏經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の耆闍崛山に住まりたまへり。『上に說けるが如し。差別せば、沙門婆羅門有りて是の如き見、是の如き說を作せり。因無く緣無くして衆生は無智無見なり、因無く緣無くして衆生は智見あり』と。是の如く廣說し乃至無畏王子、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し佛の足に禮したてまつりて去りにき。

（二）［三三九二（七一三）（轉趣經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に衆多の比丘、晨朝に衣を著け鉢を持ち舍衞城に入りて乞食せり。時に衆多の比丘、是の念を作さく『今日太だ早くして乞食の時未だ至らず、我れ等且らく諸の外道の精舍を過ぎらん』と。衆多の比丘卽ち外道の精舍に入りて諸の外道と共に相問訊し慰勞せり。問訊し慰勞し已つて一面に於て坐し已りぬ。諸の外道、比丘に問うて言はく『沙門瞿曇は諸の弟子の爲に說法して五蓋を斷ぜよ、心を覆はば慧力羸り、障礙の分と爲りて涅槃に轉趣せん、四念處に住せよ、七覺意を修せよといふや。我れ等も亦復た諸の弟子の爲に五蓋を斷ぜよ、心を覆はば慧力羸らん。善く四念處に住せよ、七覺分を修せよと說く。我れ等と彼の沙門瞿曇と何等の異りか有る。俱に能く說法せり』と。時に衆多の比丘、外道の所說を聞きて、心喜悅せず反つて呵罵し座より起ちて去り、舍衞城に入り乞食し已つて精舍に還へり、衣鉢を擧げ、足を洗ひ已つて佛の所に往詣し、佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し、諸の外道の所說を以て具さに世尊に白せり。爾の時世尊、衆多の比丘に告げたまはく『彼の外道の是の語を說く時、汝等應に反問して言ふべし「諸の外道、五蓋とは種、十有るべし。七覺とは種、十四有るべし。何等をか五蓋の十、七覺の十四と爲す」と。是の如く問

---

*新第二十四、（原第二十七卷）は覺支第二品具（三十六）略（二十二）五十八經を攝む。

※原本逸文を補へば第五誦道品第三とあるべし。

【一】S. 46. 56. Abhayo 前經參照。

【二】S. 46. 52. Pariyāya 諸比丘外道の精舍を訪ひたるに、外道も亦五蓋七覺支を說く、瞿曇の說に異らずと言へるを聞きて歸りて世尊に告ぐ。外道若し斯く云はば五蓋は十種、七覺支は十四種なるべしとて其の上に出でなば外道駭散すべしとて、廣說せらる。

滿足す。彼れ選擇分別して法を思量し已らば則ち精進方便す。精進覚支此に於て修習するなり。精進覚支を修め已らば精進覚支滿足す。彼れ精進方便し已らば則ち歡喜生じて諸の食想を離れ、喜覚支を修す。喜覚支を修め已らば則ち喜覚支滿足す。喜覚支滿足し已つて身心猗息せば、則ち猗覚支を修むるなり。猗覚支を修め已らば猗覚滿足す。身猗息し已らば則ち愛樂す。愛樂し已つて心定まらば則ち定覚支を修むるなり。定覚支を修め已らば定覚滿足す。定覚滿足し已つて貪憂滅せば則ち捨心生じて捨覚支を修むるなり。捨覚支を修め已らば捨覚支滿足す。是の如く無畏、此の因、此の縁もて衆生は清淨なり』と。無畏、瞿曇に白さく『若し一分にても滿足せば衆生をして清淨ならしむ。況んや復た一切ならんをや』と。無畏、佛に白さく『瞿曇、當に何んが此の經を名づくべく云何が奉持せん』と。佛、無畏王子に告げたまはく『當に此れを名づけて覚支經と爲すべし』と。無畏、佛に白さく『瞿曇、此れを最勝の覚分と爲す。瞿曇、我れは是れ王子なり。安樂なるも亦た常に安樂を求む。希れに出入するのみ。今來りて山に上り四體疲るること極まれるも瞿曇の覚支經を說きたまふを聞き得て悉く疲勞を忘れたり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、王子無畏、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ち稽首して佛の足に禮したてまつりて去りにき。

(二六)新第二十三(原第二十六)此に終る、根(二十七)力(五十六)覚支(八)九十一經を攝む。

慧解脱せば是れを比丘の愛・縛・結・慢を斷じ無間等にして苦邊を究竟せりと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八) 〔三三九〇〕(七二一)(無畏經)[一二三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の耆闍崛山の中に住まりたまへり。時に[一二四]無畏王子有り、日日步涉彷徉し遊行せり。佛の所に來詣して世尊と面に相問訊し、慰勞し已つて退きて一面に坐し佛に白して言さく『世尊、[一二五]沙門婆羅門有りて是の如き見を作し、是の如き說を作せり「因無く緣無くして衆生は煩惱あり、因無く緣無くして衆生は淸淨なり」と。世尊復た云何』と。佛、無畏に告げたまはく『沙門婆羅門の其の說を爲すは思はずして說けるなり。愚癡にして不善を辨ぜず。知思に非ず、知量せずして是の如き說を作すならん「因無く緣無くして衆生は煩惱あり、因無く緣無くして衆生は淸淨なり」と。所以は何ん。因有り緣有りて衆生は煩惱あり、因有り緣有りて衆生は淸淨なるが故なり。何の因、何の緣もて衆生は煩惱あり、何の因、何の緣もて衆生は淸淨なる。謂ゆる衆生は貪欲增上し、他の財物、他の衆具に於て貪を起して言はく、「此の物は我れに於て有るものなり」と。好みて離れずして愛樂し、他の衆生に於て而かも恨心、兇心を起し、計挍して打たんと欲し、縛せんと欲し、伏せんと欲し、諸の不道を加へ、衆難を造ると爲して瞋恚を捨てず、身睡眠し、心懈怠し、心掉動し、內に寂靜ならずして心常に疑惑し、過去の疑、未來の疑、現在の疑あり。無畏、是の如き因、是の如き緣もて衆生は煩惱あり、是の如き因、是の如き緣もて衆生は淸淨なり』と。無畏、佛に白さく『瞿曇、一分の蓋すら心を煩惱するに足る。況んや復た一切ならんをや』と。無畏、佛に白さく『瞿曇、何の因、何の緣もて衆生は淸淨なるや』と。佛、無畏に告げたまはく『若し婆羅門、一勝念有りて決定して成就し、久時の所作、久時の所說、能く隨つて憶念せば爾の時に當つて念覺支を習ふなり。念覺支を修め已らば念覺滿足す。念覺滿足し已らば則ち選擇分別に於て思惟す。爾の時擇法覺支を修習す。擇法覺支を修め已らば擇法覺支

【一二三】cf. S 46. 56. Abhaya. 無畏王子、富蘭迦葉の無因說を述べて佛の意見を問ふ。佛五蓋は煩惱の因なり、七覺支は淸淨の因なりとて無因論の誤りなるを說かる。

【一二四】Abhayo rājakumāro 頻婆娑羅王の子、阿闍世の弟初め尼乾子に歸し、後佛に歸す。

【一二五】巴には富蘭迦葉(pūraṇa Kassapa)とあり。

阿濕波他樹・優曇鉢羅樹・尼拘留他樹なり。是の如き五種の心樹は、種子至つて微なるも而かも漸漸に長大して諸節を蔭覆し能く諸節をして蔭覆墮臥せしむ。何等をか五と爲す。謂ゆる貪欲蓋、漸漸に增長するなり。睡眠・掉悔・疑蓋漸漸に增長するなり。增長するを以ての故に善心をして蔭覆墮臥せしむ。若し七覺支を修習し多く修習し已らば轉じて不退を成ず。何等をか七と爲す。謂ゆる念覺支・擇法・精進・猗・喜・定・捨覺支なり。是の如き七覺支を修習し多く修習し已らば轉じて不退轉を成ずるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（六）【三八八】（七〇九）[一二]（七覺支）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。若し比丘其の心を專一にし側ら正法を聽き、能く五法を斷じ、七法を修習せば、其れをして轉進し滿足せしむ。何等をか五法を斷ずと爲す。謂ゆる貪欲蓋・瞋恚蓋・睡眠蓋・掉悔蓋・疑蓋なり。是れを五法斷ずと名づく。何等か七法を修習する、謂ゆる念覺支・擇法覺支・精進覺支・猗覺支・喜覺支・定覺支・捨覺支なり。此の七法を修せば轉進し滿足す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七）【三八九】（七一〇）[一三]（聽法經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『聖弟子、淸淨の信心もて專精に聽法せば、能く五法を斷じ、七法を修習し其れをして滿足せしむるなり。何等をか五と爲す。謂ゆる貪欲蓋・瞋恚・睡眠・掉悔・疑なり。此の蓋則ち斷ずるなり。何等か七法なる謂ゆる念覺支・擇法・精進・猗・喜・定・捨覺支なり。此の七法を修習し滿足せる淨信者は、心解脫と謂ひ、智者は慧解脫と謂ふ。貪欲、心に染まば樂はざるを得ず、無明、心に染まば慧、淸淨ならず、是の故に比丘、貪欲を離れなば心解脫し、無明を離れなば慧解脫す。若し彼の比丘、貪欲を離れ心解脫して身に證を作すを得、無明を離れて

【一二】cf. S 46. 23. Thānā. 五蓋を斷じ、七覺支を修すべし。

【一三】巴になし。專精に法を聽く者は五蓋を斷じ七覺支を滿足せしむ。貪欲を離れて七覺支を滿足せるものを心解脫といひ、更に無明を離れたる者を慧解脫といふ。

悔蓋・疑蓋なり。此の如き五蓋は覆と爲り、蓋と爲りて心を煩惱し智慧をして羸らしめ障閡の分と爲る、明に非ず等覺に非ず涅槃に轉趣せざるなり。若し七覺支あらば覆に非ず蓋に非ず心を惱さずして智慧を增長し、明と爲り正覺と爲りて涅槃に轉趣す。何等をか七と爲す。謂ゆる念覺支等上に說けるが如し。乃至捨覺支なり。此の如き七覺支は翳に非ず蓋に非ず心を惱さずして智慧を增長し、明と爲り正覺と爲りて涅槃に轉趣す』と。爾の時世尊卽ち偈を說いて曰はく、

[一〇八]『貪欲、瞋恚の蓋　睡眠・掉悔・疑　此の如き五種の蓋は　諸の煩惱を增長す　此の五は世間を覆ひ　深く著して度す可きこと難し　衆生を障蔽して　正道を見ざらしむ　若し七覺支を得ば　則ち能く照明と爲る　唯だ此れのみは眞諦の言　等正覺の所說なり　念覺支を首とし　擇法は正しき思惟なり　精進猗喜覺　三昧捨覺支　此の如き七覺支は　牟尼の正道なり　大仙人に隨順せば　生死の怖畏より脫せん』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五)　[三三八七](七〇八)(樹經)[一〇九]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し族姓子、諸の世務を捨て出家して道を學ぶには、鬚髮を剃除し袈裟を著け正信より非家出家して道を學ぶ。是の如く出家して而かも其の中に於て愚癡の士夫有り。聚落城邑に依止し、晨朝に衣を著け鉢を持ち村に入りて乞食するに善く身を護らず、根門を守らず、其の念を攝せず、女人の少壯にして好色なるを觀察しては染著を生じ、正思惟せず、心馳せて相を取り、色欲想に趣き欲心熾盛と爲りて心を燒き身を燒き、俗に返り戒より還りて自ら退沒す。俗務を厭離して出家し、道を學び而かも反つて染著し、諸の罪業を增して自ら破壞し、沈翳沒弱す。五種の大樹有り。其の種至つて微なるも而かも樹生長せば巨大にして、能く衆の雜ふ樹を映障して蔭翳萎悴し生長することを得ざらしむ。何等か五なる。謂ゆる　[一一〇]揵遮耶樹・迦捭多羅樹・

【一〇八】此の偈文巴になし。

【一〇九】S. 46. 39. Rukkha. 出家せる者僧形をなせども修養を怠らば俗に還るべしと戒め、五蓋はニグローダ等の五種の大樹の種子の如く、放任せば心中にひろがりて善心を覆ひ退轉す。之に反し七覺支はよく不退轉を成ず。

【一一〇】巴には nigodha, pilakkha, udumbara, kacchaka, kapitthaka.

已に起こりしものは重ね生じて增廣せしむ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) 一三八四 (七〇五) (不退經)[一〇五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五退法有り。何等をか五と爲す。謂ゆる貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋なり。是れ則ち退法なり。若し七覺支を修習し、多く修習して增廣せしめば是れ則ち不退法なり。何等をか七と爲す。謂ゆる、念覺支・擇法覺支・精進覺支・猗覺支・喜覺支・定覺支・捨覺支なり。是れを不退法と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 一三八五 (七〇六) (蓋經)[一〇六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五法有り、能く黑闇と爲り、能く無目と爲り、能く無智と爲りて、能く智慧を羸らす、明に非ず等覺に非ず、涅槃に轉趣せず。何等をか五と爲す。謂ゆる貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑なり。此の如き五法は能く黑闇と爲り、能く無目と爲り、能く無智と爲り、明に非ず正覺に非ず、涅槃に轉趣せざるなり。若し七覺支有らば能く大明と作り、能く目と爲りて智慧を增長し。明と爲り正覺と爲りて涅槃に轉趣す。何等をか七と爲す。謂ゆる念覺支・擇法覺支・精進覺支・猗覺支・喜覺支・定覺支・捨覺支なり。明と爲り目と爲りて智慧を增長し、明と爲り正覺と爲りて涅槃に轉趣す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) (七〇七) 一三八六[一〇七] (障蓋經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五障五蓋有りて心を煩惱して能く智慧を羸らす、障閡の分は明に非ず正覺に非ず涅槃に轉趣せず。何等をか五と爲す。謂ゆる貪欲蓋・瞋蓋・睡眠蓋・掉

【一〇五】S. 46. 34. Kilesa(2) S. 46. Vuddhi. 37, Aparihāṇa. 五蓋を退法といひ、七覺支を修習するを不退法といふ。

【一〇六】S. 46. 40. Nīvaraṇa 五蓋は菩提涅槃を障へ、七覺支あらば菩提涅槃に轉趣す。

【一〇七】S. 46. 38. Āvaraṇa-nīvaraṇa. 五蓋の障害と、七覺支の利益とを說く。

上ならば則ち上なりと知り、無上ならば則ち無上なりと知る。當に知るべく、當に見るべく、當に得べく、當に覺るべきは、皆悉く了知す。斯れ是の處有り。謂ゆる五學力、十種の如來力なり。何等をか五學力と爲す。謂ゆる信力・精進力・念力・定力・慧力なり。如來の十種力とは何等をか十と爲す。謂ゆる是處を實の如く知るなり、非處も上の如し。十力を廣說す。若し來りて處・非處の智力を問ふ有らば如來の處・非處智を等正覺の知られ見られ覺らるゝ如く彼れの爲に記說す。乃至漏盡智力も亦た是の如く說く。諸の比丘、處・非處の智力とは我れは說く「是れ定にして不定に非ず」と。乃至漏盡智とは我れは說く「是れ定にして不定に非ず」と。定とは正道なり。非定とは邪道なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(第五道諦、第四菩提分相應)[九九]

(第一品)

(一) 一三八三 (七〇四)[一〇〇](不正思惟經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し正しく思惟せずんば未だ起こらざる貪欲蓋則ち起こり、已に起こりし貪欲蓋は重ねて生じて增廣せしめ、未だ起こらざる瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋は則ち起こり、已に瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋は重ね生じて增廣せしめ、未だ起こらざる念覺支は起こらず已に起こりし[一〇一]念覺支は則ち退き、未だ起こらざる[一〇二]擇法・精進・猗喜・定・捨・覺支は起こらず、已に起こりし擇法・精進・[一〇三]猗・喜・定・[一〇四]捨覺支は則ち退かん。若し比丘、正しく思惟せば、未だ起らざる貪欲蓋は起こらず、已に起こりし貪欲蓋は滅せしめ、未だ起こらざる瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋は起こらず、已に起こりし瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋は則ち斷じ、未だ起こらざる念覺支は則ち起こり、已に起こりしものは重ね生じて增廣せしめ、未だ起こらざる擇法・精進・猗喜・定・捨覺支は則ち起こり、

【九九】 S. 46. Bojjhaṅga.Saṃyutta 七菩提分法即ち七覺支法を說く經を輯む。分ちて二品とし第一品は原第二十六卷（今の第二十三卷）に載する八經とし、第二品は次第の五十八經とし合して六十六經なり。

【一〇〇】 S. 48. 24. Ayoniso. 思惟正しからざれば欲貪等の五蓋生じ增廣し、未生の念覺、擇法、精進、猗、喜、定、捨支覺を起らしめず、已生のこれらを滅せしむ。逆も亦いはる。

【一〇一】 舊には普通七菩提分と譯す。

【一〇二】 法の眞義を簡別する。

【一〇三】 輕安なるをいふ。

【一〇四】 平心坦懷なるをいふ。

人力とは愚人の法は事に觸れて毀呰するなり。審諦黠慧力とは智慧の人は常に審諦を現ずるなり。忍辱出家力とは出家の人は常に忍辱を現ずるなり。計數多聞力とは多聞の人は常に思惟計數を現ずるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五四)　一三八〇(七〇一)[九六](如來力經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『十種の如來力有り。若し此の力成就せば、如來應等正覺にして先佛の最勝處を得て能く梵輪を轉じ、大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。何等をか十と爲す。謂ゆる如來は處、非處を實の如く知るなり。是れを初力と名づく。乃至漏の盡くること上に說けるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五五)　一三八一(七〇二)[九七](如來力經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、若し來りて如來の處非處の智力を問ふ有らば如來の處・非處の智力に知られ見られ覺らるゝ如く等正覺を成じて、彼れの爲に記說せん。是の如く乃至漏盡の智力を廣說すること上の如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五六)　一三八二(七〇三)[九八](如來力經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し所有る法を彼れは彼れなりと意解作證するは悉く皆如來無畏智の所生なり。若し比丘來りて我が聲聞と諂はず僞らざる質直の心生ぜば、我れ則ち教誡教授して其れが爲に法を說かん。晨朝に彼れが爲に教誡教授し說法せば日中の時に至りて勝進處を得ん。若し日暮の時彼れが爲に教誡教授して法を說かば晨朝の時に至りて勝進處を得ん。是の如く教授し已らば彼れ正直の心を生ず。實ならば則ち實なりと知り、不實ならば不實なりと知り

【九六】A. X.21. Siha. 增四六、四　如來の十力を說く。

【九七】巴になし。(六七)參照。

【九八】巴になし。如來は所有る法を意解作證し、質直なる弟子を教へ導く。此れ如來に五力十力あればなり。

說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五一) 一三七七(六九八)[94](廣說九力經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『九力有り。何等をか九力と爲す。謂ゆる信力・精進力・慚力・愧力・念力・定力・慧力・數力・修力なり。何等をか信力と爲す。如來の所に於て正しき信心を起こし深入堅固なること上に說けるが如し。何等をか精進力と爲す。謂ゆる四正斷なり。上に說けるが如し。何等をか慚力と爲す。上に說けるが如し。何等をか愧力と爲す。上に說けるが如し。何等をか念力と爲す。謂ゆる內身の身觀に住するなり。上に說けるが如し。何等をか定力と爲す。謂ゆる四禪なり。何等をか慧力と爲す。謂ゆる四聖諦なり。何等をか數力と爲す。謂ゆる聖弟子、若し閑房の樹下に於て是の如き學を作さん、身口の惡行は現法後世に於て當に惡報を受くべしと。上に廣說せるが如し。何等をか修力と爲す。謂ゆる四念處を修するなり。前に說けるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五二) 一三七八(六九九)[95](十力經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『十力有り。何等をか十と爲す。自在王者力・斷事大臣力・機關工巧力・刀劍賊盜力・怨恨女人力・啼泣嬰兒力・毀呰愚人力・審諦黠慧力・忍辱出家力・計數多聞力なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五三) 一三七九(七〇〇)(廣說十力經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、謂ゆる自在王力とは王者は自在の威力を現ずるなり。斷事大臣力とは大臣は事を斷ずるの威力を現ずるなり、機關工巧力とは機關を造る者は其の工巧力を現ずるなり。刀劍盜賊力とは盜賊は必ず刀劍力を現ずるなり。結恨女人力とは女人の法は結恨の力を現ずるなり。啼泣嬰兒力とは嬰兒の法は啼泣の力を現ずるなり。毀呰愚

【九四】 同上。八力を廣說す。

【九五】 巴になし。特殊十力を說く。

たまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば謂ゆる自在王力とは王者は自在の威力を現ずるなり。斷事大臣力とは大臣は事を斷ずるの力を現ずるなり。結恨女人力とは女人の[九一]法は結恨の力を現ずるなり。啼泣嬰兒力とは嬰兒の法は啼泣の力を現ずるなり。毀呰愚人力とは愚人の法は事に觸れて毀呰するなり。審諦黠慧力とは智慧の人は審諦を現ずるなり。忍辱出家力とは出家の人は常に忍辱を現ずるなり。計數多聞力とは多聞の人は常に思惟計數を現ずるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四七) 一三七三(六九四)[九二](舍利弗問經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊舍利弗、世尊の所に詣り稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく「世尊、漏盡の比丘は幾力か有る」と。佛、舍利弗に告げたまはく『漏盡の比丘は八力有り、何等をか八と爲す。謂ゆる漏盡の比丘は心・離に順趣し、離に流注し、離に浚輸し、出に順趣し、出に流注し、出に浚輸し、涅槃に順趣し、涅槃に流注し、涅槃に浚輸す。若し五欲を見ば猶ほ火坑を見るがごとく、是の如く見已つて欲念・欲受・欲著に於て心永住せずして四念處・四正斷・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を修するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者舍利弗、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四八) 一三七四(六九五)(異比丘問經)　尊者舍利弗問經の如く、是の如く、異比丘、佛に問へり。

(四九) 一三七五(六九六)(問諸比丘經)　問諸比丘經も亦上に說けるが如し。

(五〇) 一三七六(六九七)[九三](九力經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく『九力有り、何等をか九力と爲す。謂ゆる信力・精進力・慚力・愧力・念力・定力・慧力・數力・修力なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の

【九一】此の場合の法は性質の義。

【九二】cf. A. VIII. 28. Bala. 漏盡比丘の八力を說く。

【九三】同上。

へり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『七力有り、上に說けるが如し、差別せば、爾の時世尊即ち偈を說いて言はく、

『信力精進力　及び慚愧力　念力定慧力を說く　是れを名づけて七力と爲す　七力成就せば　疾く諸の有漏を斷ぜん』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四四）一三三七〇（六九一）（廣說七力經）[88] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『七力有り、何等をか七と爲す。信力・精進力・慚力・愧力・念力・定力・慧力なり。何等をか信力と爲す、如來の所に於て信力を起こすに深入堅固にして、諸天・魔・梵・沙門・婆羅門及び餘の同法の壞する能はざる所なる。是れを信力と名づく。何等をか精進力と爲す。謂ゆる四正斷なり。上に廣說せるが如し。何等をか慚力と爲す。謂ゆる惡不善法に恥づるなり、上に廣說せるが如し。何等をか愧力と爲す。愧づ可き事に於て愧ぢ、惡不善法を起すを愧づること上に說けるが如し。何等をか念力と爲す。謂ゆる四念處なり。上に說けるが如し。何等をか定力と爲す。謂ゆる四禪なり。上に說けるが如し。何等をか慧力と爲す。謂ゆる四聖諦なり。上に說けるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四五）一三三七一（六九二）（八力經）[89] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『八力有り、何等をか八と爲す。謂ゆる自在王者力・斷事大臣力・結恨女人力・啼泣嬰兒力・毀呰愚人力・審諦黠慧力・忍辱出家力・計數多聞力なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四六）一三三七二（六九三）（廣說八力經）[90] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まり

【八八】巳になし。七力を分別廣說す。

【八九】cf. A.VIII.27. Bala. 特種なる八力を說く。

【九〇】同上。

て彼れの爲に記說せん。若し復た來つて如來の自以樂受の智力を問はゞ、如來の自以樂受の智力もて知見し覺せらるゝが如く等正覺を成じて彼の爲に記說せん、是れを第二の如來智力と名づく。若し來つて如來の禪定・解脫・三昧・正受の智力を問ふこと有らば、如來の禪定・解脫・三昧・正受の如く彼れの爲に記說せん。若し來つて宿命に更る所の智力を問ふこと有らば、如來の宿命に更る所に知見覺せられしが如く彼れの爲に記說せん。若し來つて如來の天眼智力を問ふこと有らば如來の天眼に見らるゝが如く彼れの爲に記說せん。若し來つて如來の漏盡智力を問ふこと有らば、如來の漏盡智力に知見覺せらるゝが如く彼れの爲に記說せん』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六八)一二三六七(六八八)[85](七力經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『七力有り、何等をか七と爲す。信力・精進力・慚力・愧力・念力・定力・慧力なり』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

『信力精進力　慚力及び愧力　正念定慧力　是れを說いて七力と名づく　七力を成就せば　諸の有漏を盡くすを得ん』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六九)一二三六八(六八九)[86](當成七力經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『七力有り、上に說けるが如し、差別せば是の故に比丘、當に是の如く學すべし「我れ當に住力を成就すべし」と。是の如く精進力・慚力・愧力・念力・定力・慧力も亦た當に學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七〇)一二三六九(六九〇)[87](七力經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたま

【八五】 A. VII. 3—5 Bala. 七力あり。之を成就せば有漏を盡さん。

【八六】 同上。

【八七】 同上。

放捨して消息を勤めざるなり。其の長大して自ら放逸せざるを以ての故に。是の如く比丘、若し諸の聲聞、始學にして智慧未だ足らずんば、如來は法を以て隨時教授して之れに消息す。若し久しく學して智慧深固ならば如來は放捨して復た隨時慇懃に教授せざるなり。其の智慧、不放逸を成就せるを以ての故に。是の故に聲聞は五種の學力を、如來は十種の智力を成就せること上に廣說せるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六六) 一三六五(六八六)[八三](師子吼經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『如來は六種の力あり。若し六種の力成就せば如來應等正覺にして先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。謂ゆる處非處を實の如く知るは如來の初力なり。復た次に心樂法受を實の如く知ること上に廣說せるが如し是れを第二の如來力と名づく。復た次に如來は禪・解脫・三昧・正受を實の如く知ること上に廣說せるが如し、是れを如來の第三力と名づく。復た次に如來は過去の種種の宿命の事を實の如く知ること上に廣說せるが如し、是を如來の第四力と名づく。復た次に如來は天眼淨の人眼に過ぐるもて諸の衆生の此に死し彼に生ずるを見ること上に廣說せるが如し、是れを如來の第五力と名づく。復た次に如來は結漏已に盡きて漏無く心解脫し慧解脫せること上に廣說せるが如し。乃至衆中に於て師子吼して吼ゆるなり。是れを如來の第六力と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六七) 一三六六(六八七)[八四](師子吼經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば若し來つて我れに如來の處非處力を問ふこと有らば、如來の處、非處の智力もて知見し覺せらるゝが如く等正覺を成じ

【八三】 A. VI. 64. Sīhanāda.
六種の力を成就せば如來なり。
(a)知處非處力。
(b)知心樂法受力。
(c)知禪解脫三昧正受力。
(d)知宿命事力。
(e)天眼力。
(f)漏盡力。

【八四】 同上。
如來の六力を問ふものあらば記說せん。

り。是の因緣を以て身壞命終して惡趣に墮して地獄の中に生ずるなり。此の衆生は身の善行・口・意の善行あり、賢聖を謗らず正見の業法を受くるなり。彼の因彼の緣もて身壞命終して善趣の天上に生ずるを悉く實の如く知るなり。是れを第九の如來力と名づく。若し此の力成就せば、如來應等正覺にして先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ、大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。[八一]復た次に如來は諸漏已に盡きて漏無く心解脫し、慧解脫し、現法に自ら身に證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知るなり。是れを第十の如來力と名づく。若し此の力成就せば、如來應等正覺にして先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ、大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。此の如き十力は唯だ如來のみ成就す。是れを如來と聲聞との種種の差別と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三八) 一三〇四 (六六五)[八二](乳母經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば嬰兒の、父母生じ已つて其れに乳母を付し隨時摩拭し、隨時沐浴し、隨時乳哺し、隨時消息するが如し。若し乳母謹愼せずんば兒或は草土を以ち諸の不淨物を以て其の口中に著かん。乳母當に卽ち敎へて除去せしむべし。能く時に除却せば善兒なり。自ら却く能はずんば乳母當に左手を以て其の頭を持ち、右手にて其の哽を探ぐるべし、嬰兒當時苦むと雖も、乳母要ず當に苦みて其の哽を探るべし。其の子をして長夜に安樂ならしめんと欲するが爲の故に』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『若し嬰兒長大して識別する所有るに復た草土諸の不淨物を持ちて口中に著くや不や』と。比丘、佛に白さく『不なり世尊、嬰兒長大して別知する所有らば尙ほ脚を以てすら諸の不淨物に觸れず、況んや口中に著かんをや』と。佛、比丘に告げたまはく『嬰兒の小時は乳母隨時料理し消息するも其の長大し智慧成就するに及びては乳母は

【八一】舊には漏盡力。新には漏盡智力。

【八二】巴になし。乳子の小時は乳母一々世話するも、稍成長せば必要以外は自由に遊戲せしめる如く、如來弟子に敎ゆるにも、智慧漸く熟すれば自由に考究せしむ。聲聞は五種の學力を、如來は十力を成ず。

り。[七四]復た次に如來應等正覺は禪解脫三昧正受、染惡清淨處淨を實の如く知るなり。是れを如來の第三力と名づく。若し此の力成就せば如來應等正覺にして先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ、大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。[七五]復た次に如來は衆生の種種の諸根の差別を知りて實の如く知るなり。是れを如來の第四力と名づく。若し此の力を成就せば如來應等正覺にして先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。[七六]復た次に如來は、悉く衆生の種種の意解を知りて實の如く知るなり。是れを第五の如來と名づく。若し此の力成就せば如來應等正覺にして、先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ、大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。[七七]復た次に如來は、悉く世間の衆生の種種の諸界を知りて實の如く知るなり。是れを第六の如來力と名づく。若し此の力に於て成就せば如來應等正覺にして先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。[七八]復た次に如來は一切至處道に於て實の如く知るなり。是れを第七の如來力と名づく。若此の力成就せば如來應等正覺にして、先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ、大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。[七九]復た次に如來は過去の宿命の種種の事に於て憶念するに、一生より百千生に至り、一劫より百千劫に至る。我れ爾の時、彼の生に於て、是の如きの族、是の如きの姓、是の如きの名、是の如きの食、是の如きの苦樂の覺、是の如きの長壽、是の如きの久住、是の如きの壽の分齊あり、我れ彼處に於て死して此處に生じて彼處に生じて此處に死し、是の如きの行、是の如きの因、是の如きの方、宿命の所を更に悉く實の如く知るなり。是れを第八の如來力と名づく。若し此の力成就せば、如來應等正覺にして先佛の最勝處の智を得て能く梵輪を轉じ、大衆の中に於て師子吼して吼ゆるなり。[八〇]復た次に如來は、天眼淨の人眼に過ぐるを以て、衆生の死時、生時を見て、妙色・惡色・下色・上色・惡趣に向かひ、善趣に向ひ、業報に隨ふ受を悉く實の如く知るなり。此の衆生は身の惡業成就し、口・意の惡業成就し賢聖を誹毀して邪見業を受くるな

【七四】舊には知一切諸禪三昧力。新には一切靜慮解脫三摩地三摩鉢底出離雜染清淨智力。

【七五】舊には知他衆生諸根上下力。新には根上下智力。

【七六】舊には知他衆生種々欲樂力。新には種々勝解智力。

【七七】舊には知世間種性力。新には種々界智力。

【七八】舊には知一切道智處相力。新には遍趣行智力。

【七九】舊には知宿命力。新には宿住隨念智力。

【八〇】舊には知天眼力。新には死生智力。

修せん。精進・慚・愧・慧に依らば則ち不善法を離れて諸の善法を修せん』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三七)【三六三(六八四)】(十力經)[七一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の色に於て厭を生じ欲を離れ滅盡して起らず解脫せば、是れを阿羅訶三藐三佛陀と名づく。受・想・行・識も亦た是の如く。說く若し復た比丘の色に於て厭を生じ欲を離れて起らず解脫せば是れを阿羅漢の慧解脫せりと名づく。受・想・行・識も亦た是の如く說く。諸の比丘、如來應等正覺と、阿羅漢の慧解脫せると何の種種の別異有るや』と。諸の比丘、佛に白さく『世尊は是れ法根・法眼・法依なり、唯だ願くは爲に說きたまへ。諸の比丘聞き已りなば當に受け奉行すべし』と。佛、比丘に告げたまはく『諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。如來應等正覺とは、先に未だ聞かざる法を能く自ら覺知し、現法に身に知りて三菩提を得、未來地に於て能く正法を說いて諸の聲聞を覺するなり。所謂四念處・四正斷・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分なり。是れを如來應等正覺と名づく。未だ得ざる所の法を能く得、未だ制せざる梵行を能く制じ、能善く道を知り善く道を說き衆の爲に將導し、然る後聲聞をして法に隨ひ道に隨ふことを成就せしめ、大師の敎誡敎授を樂奉して正法を善くする。是れを如來應等正覺と阿羅漢の慧解脫せるとの種種の別異と名づく。復た次に五學力、如來の十力あり。何等をか學力と爲す。謂ゆる信力・精進力・念力・定力・慧力なり。何等をか如來の十力と爲す。[七二]謂ゆる如來は處、非處は實の如く知るなり。是れを如來の初力と名づく。若し此の力を成就せば如來應等正覺にして先佛の最勝處の智を得て梵輪を轉じ、大衆の中に於て能く師子吼して吼ゆるなり。[七三]復た次に如來は、過去未來現在の業法に於て受因、事報を實の如く知るなり。是れを第二の如來力と名づく。如來應等正覺は此の力を成就して先佛の最勝處を得、能く梵輪を轉じ、大衆の中に於て師子吼を作して吼ゆるな

【七一】M. 12. mahāsīhanāda S. の一部。A. X. 21. sīha. 增四六、四、如來と阿羅との相違如何を說き、次で如來の十力を詳說す。

【七二】處非處智力。

【七三】舊には知業報力、新には業異熟智力。

住せんば、他人は審に五種の白法を以て來つて汝を呵責せん。何等をか五と爲す。言く、汝は信を以て善法に入らず、若し汝信に依らば、能く不善法を離れて諸の善法を修せん。汝は精進無く、慚無く、愧無く、慧の善法に入る無きが故なり。若し慧に依らば、能く諸の不善法を離れて諸の善法を修せん。若し比丘正法に於て變ぜず退かず久住せば、他人は當に五種の白法を以て來つて汝を慶慰すべし。何等をか五と爲す。正信もて善法に入れり。若し信に依らば、不善法を離れて諸の善法を修せばなり。精進・慚・愧・慧もて善法に入れり、若し慧に依らば、不善法を離れて諸の善法を修せばなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三五）一三三六一（六八二）（白法經）[69] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘の戒より還へる者、戒より退く者は、他人當に五種の白法を以て來つて汝を呵責すべし。何等をか五と爲す。若し比丘、信を以て善法に入らざるもの、若し信に依らば不善法を離れて諸の善法を修せん。精進・慚・愧・慧を以て善法に入らざるもの、若し慧に依らば不善法を離れて諸の善法を修せん。若し比丘、其の壽命を盡くすまで純一滿淨に、梵行淸白ならば他人當に五種の白法を以て來つて汝を慶慰すべきこと上に說けるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三六）一三三六二（六八三）（不善法經）[70] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘若し惡不善法をして生ぜしむるを欲せずんば、唯だ信の善法有るのみ。若し信退滅せば不信に永く住して諸の不善法則ち生ぜん。乃至惡不善法をして生ぜざらしめんと欲せば、唯だ精進・慚・愧・慧有るのみ。若し精進・慚・愧・慧の力退滅して、惡慧に永く住せば、惡不善法則ち生ぜん。若し比丘信に依らば則ち不善法を離れて諸の善法を

【六九】同上。戒退より還退せば五種の白法によりて呵責せらるべし。逆も亦言はる。

【七〇】A. V. 5. の後半。信、進、慚、愧、慧によりて不善法を生ぜざらしむ。

力なるを成就し、愧力是れ學力なるを成就し、慧力是れ學力なるを成就すべしと』と。佛の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三二）一三五八（六七九）（廣說學力經）[六六]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、何等か信力是れ學力なる。如來の所に於て善く信に入り根本堅固にして諸天・魔・梵・沙門・婆羅門及び餘の同法の壞する能はざる所なり。何等をか精進力是れ學力なりと爲す。謂ゆる四正斷なり、前に廣說せるが如し。何等をか慚力是れ學力なりと爲す。謂ゆる、羞恥なり。惡不善法、諸の煩惱數を起こし、諸有の熾然たる苦報を受け、未來世に於て生老病死憂悲苦惱するを恥づる、是れを慚力是れ學力なりと名づく。何等をか愧力是れ學力なりと爲す。謂ゆる諸の愧づべき事に而かも愧づるなり。諸の惡不善法、煩惱數を起こし、諸有の熾然たる苦報を受け、未來世に於て生老病死憂悲苦惱するを愧ずる是れを愧力是れ學力なりと名づく。何等をか慧力是れ學力なりと爲す。謂ゆる聖弟子の智慧に住して世間生滅の智慧、賢聖の出厭離を成就し、決定して正しく苦を盡くす、是れを慧力是れ學力なりと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三三）一三五九（六八〇）（當成學力經）[六七]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上の所說の如し、差別せば、是の故に諸の比丘、當に是の學を作すべし。我れ當に信力是れ學力・精進力・慚力・愧力・慧力是れ學力なるを成就すべし」と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三四）一三六〇（六八一）（白法經）[六八]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、若し比丘善法に於て若しは變じ若しは退き若しは久

【六六】cf A. V. 2. 五學力を廣說す。

【六七】（五八）參照。

【六八】A. V. 5. の前半。善法に於て變じ、退き、久住せずば、他人信、進、慚、愧、慧の五白法を以て汝を呵責すべし。逆も亦言はる。

たまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、諸の比丘當に是の學を作すべし「我れ當に勤加精進して信力・精進力・念力・定力・慧力を成就すべし」と』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二八) 一三五四(六七五)(當知五力經)[60] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、彼の信力とは當に知るべし是れ四不壞淨なり。精進力とは當に知るべし是れ四正斷なり。念力とは當に知るべし四念處なり。定力とは當に知るべし是れ四禪なり。慧力とは當に知るべし是れ四聖諦なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二九) 一三五五(六七六)(當學五力經)[61] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、是の故に諸の比丘、當に是の學を作すべし。我れ信力・精進力・念力・定力・慧力を成就せん』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三〇) 一三五六(六七七)(五學力經)[62] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五學力有り、何等をか五と爲す。謂ゆる信力は是れ學力なり。精進力は是れ學力なり。[63]慚力は是れ學力なり。[64]愧力は是れ學力なり。慧力は是れ學力なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三一) 一三五七(六七八)(當成學力經)[65] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、諸の比丘當に是の學を作すべし、我れ當に信力是れ學力なるを成就し、精進力是れ學力なるを成就し、慚力是れ學

【六〇】 cf S. 48. 8. Datthba A. V. 14—15. 五力を廣說す。

【六一】 巴になし。五力を成就すべし。

【六二】 A. V. I. Saṅkhitta. 信、進、慚、愧、慧は學力なり。

【六三】 hiri 内なる良心による恥。

【六四】 ottappa 他に對して恐れ恥ぢる。

【六五】 同上。

へり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、聖弟子の此の四力を成就せんには當に是の學を作すべし。我れ不活を畏れず、我れ何に緣りてか不活を畏るる。若し身に不淨行を行じ、口に不淨行、意に不淨行、諸の邪貪を作し、不信・懈怠・不精進・失念・不定・惡慧・慳にして攝せずんば彼れは應に不活を畏るべし。我れには四力有り。謂ゆる覺力・精進力・無罪力・攝力なり。此の四力有りて成就せるが故に畏るべからず。不活の畏れの如く、是の如く惡名の畏れ、衆中の畏れ、死の畏れ、惡趣の畏れも亦た上の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二五）一三五一（六七二）[五七]（四力經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四力有り、覺力・精進力・無罪力・攝力なり、何等をか覺力と爲す。謂ゆる慧・大慧・深慧・難勝慧なり是れを覺力と名づく。何等をか精進力と爲す。若し不善法・不善數・黑・黑數・有罪・有罪數・親近すべからざる、親近すべからざる數に於て此の諸法を離れ已つて若し諸の餘の善・善數・白・白數・無罪・無罪數・親近すべき、親近すべき數、此の如き等を修習し、增上、精勤し、欲方便し、能く正念正智もて學するに堪ふる、是れを精進力と名づく。無罪力、攝力も上の修多羅に說けるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二六）一三五二（六七三）[五八]（五力經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五力有り、何等をか五と爲す、信力・精進力・念力・定力・慧力なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二七）一三五三（六七四）[五九]（五力當成經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まり

【五七】同上參照。四力を廣說す。

【五八】S 50. 1. Bala. A.V. 13. 信、進、念、定、慧の五力を說く。

【五九】巴になし。五力を成就すべし。

聞きて、歡喜し奉行しき。

（二二）一二三四八（六六九）[五三]（攝經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、若し所有法、是れ衆の取る所ならば、一切皆是れ四攝事なり、或は一に施を取る者、或は一に愛語を取る者、或は一に行利を取る者、或は一に同利を取る者有り。過去世の時、過去世の衆の以て取る所有りしならば、亦た是れ四攝事なり。未來世の衆の當に取る所有るべくんば亦た是れ四攝事ならん。或は一に施を取る者、或は一に愛語を取るもの、或は一に行利を取る者、或は一に同利を取るものならん』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

[五四]『布施及び愛語、　或は行利有らば　同利の諸行生じ　各其の應ずる所に隨ひて　此れを
以て世間を攝すること　猶ほ車の釭に因りて運ぶがごとし　世に四攝事無くんば　母恩
に子の養ふを忘れ　亦た父等の尊きに　謙下の奉事無し　四攝事隨順の法　有るを以
ての故に　是の故に大士有りて　德世間を被ふ』

と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二三）一二三四九（六七〇）[五五]（四力經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四力有り。何等をか四と爲す。謂ゆる覺力・精進力・無罪力・攝力なり。上に說けるが如し。若し比丘此の四力を成就せば五恐怖を離るることを得、何等か五なる。謂ゆる不活の恐怖、惡名の恐怖、衆中の恐怖、死の恐怖、惡趣の恐怖なり。是れを五恐怖と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二四）一二三五〇（六七一）[五六]（四力經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたま

【五三】 A. IV. 32. Saṅgaha.

【五四】 Dānañ ca payya-vajjañ,
ca attha-cariyā ca yā idha,
Samānattatā ca dhammesu,
tattha tattha yathā 'rahaṃ.
Eta kho saṅgahā loka,
rathass' āṇîva yāyato,
ite ca saṅgahā n' assu,
na mātā putta- kāraṇā
Labhetha mānaṃ pūjaṃ vā,
ṛitā vā puttakāraṇā.
Yasmā ca saṅgaha ete
samavekkhanti paṇḍitā,
Tasmā mahattaṃ papponti,
pāsaṃsā ca bhavanti te ti.
(A. IV. 32; Diga XXXI. 34.)

【五五】 cf. IV. 152
覺、進、無罪、攝の四力を成就せば、不活、惡名、衆中、死、惡趣の恐怖を離る。

【五六】 同上參照。
前經參照。

の同法の壞する能はざる所たり。是れを信力と名づく。何等をか精進力と爲す。謂ゆる四正斷なり。何等をか慧力と爲す。謂ゆる四聖諦なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一八一―一九）一三四四―一三四五（餘二力經）　餘の二力も上の如く說く。

（二〇）一三四六（六六七）（四力經）[四九]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四力有り。何等をか四と爲す。謂ゆる信力・精進力・念力・慧力なり。復た次に四力あり、信力・念力・定力・慧力なり。復た次に四力あり。覺力・精進力・無罪力・攝力なり。此の諸の經は上の三力の如く說く。差別せば何等をか覺力と爲す。善・不善法に於て如實に知り、有罪・無罪・習近・不習近・卑法・勝法・黑法・白法・有分別法・無分別法・緣起法・非緣起法に如實に知る。是れを覺分力と名づく。何等をか精進力と爲す。謂ゆる四正斷なり。前に廣說せるが如し。何等をか[五〇]無罪力と爲す。謂ゆる無罪の身・口・意なり、是れを無罪力と名づく。何等をか攝力と爲す。謂ゆる四攝の[五一]惠施・愛語・行利・同利なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二一）一三四七（六六八）（四攝事經）[五二]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば若し最勝の施とは謂ゆる法施なり。最勝の愛語とは謂ゆる善男子の聞かんと樂はば時に應じて法を說くなり。行利の最勝とは諸の不信の者を能く信に入らしめ、信を建立し、戒を立つるには淨戒を以て、慳むには施を以て、惡智には正智を以て入りて建立せしむるなり。同利の最勝とは謂ゆる阿羅漢には阿羅漢を以て、阿那含には阿那含を以て、斯陀含には斯陀含を以て、須陀洹には須陀洹を以て、淨戒には淨を以て、彼れに授くるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を

【四九】 cf. A. IV. 152. (a)信、進、念、慧、の四力、(b)信、念、定、慧、の四力、(c)覺、進、無罪、攝の四力あり。此の中覺力、進力、無罪力、攝力について詳說す。

【五〇】 anavajjabalaṃ

【五一】 SK.-dāna, priyavākya, tathārthacaryā, samānasu-khaduḥkhatā; pāli-dāna, peyyavajja, atthacariyā, samānattatā, 新には布施、愛語、利行、同事と譯す。

【五二】 前經參照。四攝事を解說す。最勝の惠施、愛語、一行利、同利は法にあり。

丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三）一三三九（六六三）[四五]（二力經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、何等をか修力と爲す。謂ゆる四念處を修するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四―一三）一三三〇―一三三八（四正斷經等）　四念處の如く、是の如く四正斷・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分・四道・四法句・止觀も亦た是の如く說く。

（一三）一三三九（六六四）[四六]（三力經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三種の力有り。何等をか三と爲す。謂ゆる信力・精進力・慧力なり。復た次に三力あり。何等をか三と爲す、謂ゆる住信力・念力・慧力なり。復た次に三力あり、何等をか三と爲す。謂ゆる信力・定力・慧力なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一四）一三四〇（六六五）[四七]（三力經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三力有り、信力・精進力・慧力なり。是の如く比丘當に是の學を作すべし「我れ當に信力・精進力・慧力を成就すべし」と』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一五―一六）一三四一―一三四二（念力經等）　精進力の如く、念力、定力も亦た是の如く說く。

（一七）一三四三（六六六）[四八]（三力經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三力有り、信力・念力・慧力なり。何等をか信力と爲す。謂ゆる聖弟子、如來の所に於て淨信に入るに根本堅固にして、諸天・魔・梵・沙門・婆羅門及び諸

【四五】巴になし。修力とは四念處を修するなり。

【四六】巴になし。信、進、慧の三力あり。又信、定、慧の三力あり。

【四七】巴になし。信、進、慧の三力あり、應に成就すべし。

【四八】巴になし。信、念、慧の三力あり。

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二〇―二七) 一三一九―一三三六 (究竟苦邊經等) 苦斷ずるが如く是の如く苦邊を究竟し、苦盡き、苦息み、苦沒し、苦の流れを度り、縛に於て解くことを得、諸色を害し、過去・未來・現在の一切の漏盡くるも亦た是の如く說く。

[三九](第五道誦、第三力相應)

(力　品)

(一) 一三三七(六六一)[四〇](二力經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『二種の力有り。何等をか二と爲す。謂ゆる[四一]數力及び修力なり。何等をか數力と爲す。謂ゆる聖弟子、空閑林中の樹下にて是の如き思惟を作さん。身の惡行は現法後世に惡報を受けん。[四二]我れ若し身の惡行を行じなば、我れ當に自ら悔ゆべく、他をして亦た悔ゐしめん。我が大師も亦た當に悔ゆべく、我が大德梵行も亦た當に悔ゆべし。我れ法を以て我れを責めん「惡名流布し、身壞命終して當に惡趣の泥犂の中に生ずべし」と。是の如く現法にも後にも報ゆ。身の惡行斷ずるは身の善行を修するなり。身の惡行の如く口、意の惡行も亦た是の如く說く。是れを數力と名づく。[四三]何等をか修力と爲す。若し比丘の數力を學するに聖弟子、數力成就し已らば隨つて修力を得。修力を得已らば修力滿足す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜をし奉行しき。

(二) 一三三八(六六二)[四四](二力經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば聖弟子の數力を學して成就し已らば、貪・恚・癡若しは節し若しは盡く。是の如く聖弟子、數力に依りて盡し、數力を立てなば、隨つて修力を得。修力を得已らば修力滿足す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比

【三九】 二力五力乃至十力を說く經を輯む。巴利相應部に少く、增支部と多く一致す。今相應の具略五十六經を合して力品とす。

【四〇】 A. II. 2. 1. Bala. 數力(擇力)と修力の二力を說く。

【四一】 paṭisaṅkhānabalañca bhāvanābalañca. 新には擇力、修力と譯す。思考力と實行力となり。

【四二】 以下泥犂中に生ずべしまで巴利缺。

【四三】 巴には、修力とは有學者の修力にして、此の力を得て貪瞋癡を斷じ、斷じ已つて凡て惡を作さず、惡に從はざるを修力と名づくとあり。

【四四】 巴になし。數力によりて三毒盡き、修力滿足す。

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一七）一三二六（六五八）[三五]（慧根經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り、信根・精進根・念根・定根・慧根なり。何等をか信根と爲す。謂ゆる聖弟子、如來の所に於て信心を起こすに根本堅固にして諸天・魔・梵・沙門・婆羅門及び諸の世間法の壞する能はざる所なり。是れを信根と名づく。何等をか精進根と爲す。謂ゆる四正斷なり。何等をか念根と爲す。謂ゆる四念處なり。何等をか定根と爲す。謂ゆる四禪なり。何等をか慧根と爲す。謂ゆる四聖諦なり。此の諸の功德は皆慧を以て首と爲す。譬へば堂閣は棟を其の首と爲すが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一八）一三二七（六五九）[三六]（慧根經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、『五根有り、何等をか五と爲す。謂ゆる信根・精進根・念根・定根・慧根なり。何等をか信根と爲す。若し聖弟子の如來に於て[三七]菩提心を發して得る所の淨信心、是れを信根と名づく。何等をか精進根と爲す。如來に於て菩提心を發して起す所の精進方便、是れを精進根と名づく。何等か念根なる。如來に於て初めて菩提心を發して起す所の念、是れを念根と名づく。何等をか定根と爲す。如來に於て初めて菩提心を發して起す所の三昧、是れを定根と名づく。何等をか慧根と爲す。如來に於て初めて菩提心を發して起す所の智慧、是れを慧根と名づく。所餘の堂閣の譬へは上に說けるが如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一九）一三二八（六六〇）[三八]（苦斷經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り、何等をか五と爲す。謂ゆる信根・精進根・念根・定根・慧根なり。此の五根に於て修習するに多く修習せば、過去・未來・現在の一切の苦斷ず』

【三五】 cf. S. 48. 10, Vibhaṅga. cf. S. 48. 52. Mallikam. 五根を分別し、慧根を最となす。

【三六】 cf. S. 48. 50. Saddha 信等の五根を解說す。（六）（六四七）と比較せよ。

【三七】 巴になし。

【三八】 巴になし。信等の五根に於て修習すれば、一切苦を斷ず。

根・定根・慧根なり。信根とは當に知るべし、是れ四不壞淨なり。精進根とは當に知るべし、是れ四正斷なり。念根とは當に知るべし。是れ四念處なり。定根とは當に知るべし、是れ四禪なり。慧根とは當に知るべし、是れ四聖諦なり。是の諸の功德は一切皆是れ慧を其の首と爲す、攝持するを以ての故に』と。乃至佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五) 一三二四 (六五六)(慧根經)[三三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り、何等をか五と爲す。信根・精進根・念根・定根・慧根なり。若し聖弟子の慧根を成就せる者は、能く信根を修し、離に依り、無欲に依り、滅に依りて捨に向ふ。是れを信根成就せりと名づく。信根の成就は卽ち是れ慧根なり。信根の如く是の如く精進根・念根・定根・慧根も亦た是の如く說く。是の故に此の五根に就ては慧根を其の首と爲す。攝持するを以ての故に。譬へば堂閣は棟を其の首と爲すが如し、衆材の依る所なり。攝持するを以ての故に。是の如く五根は慧を其の首と爲す。攝持するを以ての故に』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一六) 一三二五 (六五七)[三四] (慧根經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り何等をか五と爲す。信根・精進根・念根・定根・慧根なり。若し聖弟子の信根を成就せる者は、是の如き學を作す。聖弟子、無始より生死して無明に著せられ愛に繫せられ、衆生は長夜に生死に往來し流馳して本際を知らず。因有るが故に生死有り。因永く盡きなば則ち生死無し。無明大闇の聚、障礙して誰れか般涅槃せん。唯だ苦滅し苦息みて淸涼にして沒するのみ。信根の如く是の如く精進根・念根・定根・慧根も亦た是の如く說く。此の五根は慧を首と爲し、慧に攝持せらる。譬へば堂閣は棟を首と爲し、棟に攝持せらるるが如し』

【三三】(一三)(六五四)參照。慧根成就するものは四根を成就す。

【三四】(三)(六五四)參照。信根を得たる者の心構へと、慧根の首たるを說く。

いて外道凡夫の數と爲す』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一二）一二三一（六五三）[21]（廣說經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、若し比丘、彼の五根に於て增上明利にして滿足せば阿羅漢を得、[22]倶分解脫す。若しは軟若しは劣ならば[23]身證を得、彼の若しは軟若しは劣に於ては[24]見到を得、彼の若しは軟若しは劣に於ては[25]信解脫を得、彼の若しは軟若しは劣に於ては斯陀含を得、彼の若しは軟若しは劣に於ては[26]一種を得、彼の若しは軟若しは劣に於ては[27]家家を得、彼の若しは軟若しは劣に於ては[28]七有を得、彼の若しは軟若しは劣に於ては[29]法行を得、彼の若しは軟若しは劣に於ては[30]信行を得。是れを比丘の根波羅蜜・因緣知果波羅蜜・果波羅蜜・因緣知人波羅蜜と名づく。是の如く滿足せば滿足事を作し、減少せば減少事を作す。彼の諸根は則ち空無果ならず。若し此の諸根無くんば、我れ彼れを說くも凡夫の數を作すと爲す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一三）一二三二（六五四）[31]（慧根經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り、何等をか五と爲す。謂ゆる信根・精進根・念根・定根・慧根なり。此の五根は一切皆慧根に攝受せらる。譬へば堂閣の衆材は棟を其の首たるが如し。皆棟に依りて攝持するを以ての故に。是の如く五根は慧を其の首と爲す、攝持するを以ての故に』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一四）一二三三（六五五）[32]（慧根經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り、何等をか五と爲す。謂ゆる信根・精進根・念

【二一】S. 48. 15. Vitthāra
【二二】ubhayatobhāgvimukti
【二三】Kāyasākṣī
【二四】dṛṣṭiprāpta
見得、見至
【二五】śraddhāvimukti
【二六】ekavīcika
一間
【二七】kulaṃkula
【二八】saptakṛdbhavaparama
極七返有
【二九】dhammānusārī (dharma°)
隨法行
【三〇】saddhānusārī(śraddha°)
隨信行、
【三一】S. 48. 52. mallikaṃ
五根の中には慧根を最となす。
堂閣の棟の如し。
【三二】cf. S. 48. 10. Vibhaṅga.
cf. S. 48. 52. Mallikaṃ.
（六）一二三〇六（六四七）参照
五根の中慧根は首なり。

梵・沙門・婆羅門の中に於て、出を爲し離を爲して心顚倒より離ることを得ず、亦た阿耨多羅三藐三菩提を得ざりしならん。信根の如く、精進根・念根・定根・慧根も亦た是の如く說く。諸の比丘、我れ此の信根に於て正智もて實の如く觀察せしが故に信根の集、信根の滅、信根の滅道跡に、正智もて實の如く觀察せしが故に、我れ諸天・魔・梵・沙門・婆羅門衆の中に於て出を爲し離を爲して心顚倒より離れ、阿耨多羅三藐三菩提を成じぬ。信根の如く、精進・念・定・慧根も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一〇）一三〇九（六五一）（沙門婆羅門經）[一九]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、諸の比丘、我れ此の信根の集、信根の沒、信根の味、信根の患、信根の離に實の如く知らずんば我れ諸天・魔・梵・沙門・婆羅門衆の中に於て解脫を爲し、出を爲し離を爲し、心顚倒より離れて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ざりしならん。是の如く精進根・念根・定根・慧根も亦た是の如く說く。諸の比丘、我れ信根、信根の集、信根の沒、信根の味、信根の患、信根の離に於て實の如く知りしが故に諸天・魔・梵・沙門・婆羅門衆の中に於て解脫を爲し出を爲し離を爲し、心顚倒より離れ阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一一）一三一〇（六五二）（向經）[二〇]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、若し比丘、此の五根に於て若しは利し若しは滿足せば阿羅漢を得、若しは軟若しは劣ならば阿那含を得、若しは軟若しは劣ならば斯陀含を得、若しは軟若しは劣ならば須陀洹を得、滿足せば滿足事を成じ、不滿足ならば不滿足事を成じ、此の五根に於ては空無果ならず。若し此の五根に於て一切無くんば我れ彼れを說

【一九】Samaṇabrāhmaṇā(2) 信等の五根の集・沒・味・患・離を如實に知りたるが故に出離を得、正覺を成じたり。

【二〇】S. 48. 18. Patipanno. 信等の五根を完全に滿足せるものは阿羅漢にして、それより劣る程度によりて阿那含・斯陀含・須陀洹を得。全然これなきものは凡夫なり。巴には四雙八輩を上ぐ。

の受心、法の法觀念に住するも亦是の如く說く。是れを念根と名づく。何等をか定根と爲す。[一五]若し比丘、欲惡不善法を離れ、有覺有觀、離に喜樂を生じ、乃至第四禪具足して住する。是れを定根と名づく。何等をか慧根と爲す。若し比丘、苦聖諦に實の如く知り、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に實の如く知らば、是れを慧根と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふを聞きて、歡喜し奉行しき。

(七) 一三〇六 (六四八) [一六](略說經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、若し比丘、此の五根に於て實の如く觀察し已らば、三結に於て斷ずるを知る。何等をか三と爲す。謂ゆる身見・戒取・疑なり。是れを須陀洹と名づく。惡趣に墮ちず決定して正しく三菩提に向ひ、七有の天人に往生して苦邊を究竟す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八) 一三〇七 (六四九) [一七](漏盡經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、若し比丘、此の五根に於て實の如く觀察し已らば、諸の漏を盡くすことを得、欲を離れて解脫す。是れを阿羅漢と名づく。諸漏已に盡き、所作已に作し、諸の重擔を離れ、己利を逮得し、諸の有結を盡くし、正智もて心解脫することを得』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九) 一三〇八 (六五〇) [一八](沙門婆羅門經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『上に說けるが如し、差別せば、諸の比丘、若し我れ此の信根、信根の集、信根の滅、信根の滅道跡に於て實の如く知らずんば、我れ終に諸天・魔

別)す。

【一三】以下四正勤(又は四正斷)の分別。

【一四】四念處の分別。

【一五】以下四禪の分別。

【一六】S. 48. 12. Saṅkhitta. 信等の五根によりて預流を得。

【一七】S. 48. 20. Āsavānaṃ. 信等の五根によりて阿羅漢を得。

【一八】S. 48. 10. Samaṇabrāhmaṇā(2) 信等の五根の集・滅・滅道跡を如實に知りたるが故に出離を得、正覺を成ずるを得たり。

に、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) 一三〇三 (六四五)(阿羅漢經[八]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『此の五根に於て實の如く觀察する者は、諸の漏を起こさず、心、欲を離れて解脫することを得。是れを阿羅漢と名づく。諸漏已に盡き、所作已に作し、諸の重擔を離れ、己利を逮得し、諸の有結を盡くし、正智もて心善く解脫す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五) 一三〇四 (六四六)(當知經[九]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り、何等をか五と爲す。謂ゆる信根・精進根・念根・定根・慧根なり。信根とは當に知るべし是れ[一〇]四不壞淨なりと。精進根とは當に知るべし是れ[一一]四正斷なりと。念根とは當に知るべし是れ四禪なりと。慧根とは當に知るべし是れ四聖諦なりと。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六) 一三〇五 (六四七)(分別經[一二]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り。何等をか五と爲す。謂ゆる信根・精進根・念根・定根・慧根なり。何等をか信根と爲す。若し比丘、如來の所に於て淨信心を起こし、根本堅固にして、餘の沙門婆羅門・諸天・魔・梵・沙門婆羅門及び餘の世間も、能く其の心を沮壞する者無くんば是れを信相と名づく。何等をか精進根と爲す。[一三]已に生ぜし惡不善の法を斷ぜしめ、欲を生じ方便して心を攝し增進して、未だ生ぜざる惡不善の法を起こさず、欲を生じ方便して心を攝し增進して、未だ生ぜざる善法は起こらしめ、欲を生じ方便して心を攝し增進して、已に生ぜし善法は住して忘れず、修習し增廣し、欲を生じ方便して心を攝し增進せば、是れを精進根と名づく。何等をか念根と爲す。[一四]若し比丘、內身の身觀に住し、慇懃方便し正念正智もて世間の貪憂を調伏し、外身・內外身

「根者是我義、最勝自在光顯名根、由此總、成根增上義」とあり。全て能生、增上の力あるものを根と名づく。今信等の五つはよく一切の善法を生ずる故に根と名づく。

【六】 S. 48. 2—3 Sota(1—2) 信等の五根により三結を斷じて預流果を得る。

【七】 須陀洹 sotāpanna(srotaāpanna) とは新には預流と譯す。涅槃に至る流れに預りたる者をいふ。これより聖者の數に入る。

【八】 S. 48. 4—5. Arahan 信等の五根によりて阿羅漢を得。

【九】 S. 48. 8. Daṭṭhabba. 信等の五根を解說す。

【一〇】 佛、法、僧、父、戒の五に於ける淨信。

【一一】 梵には samyakprahāṇa なれども巴には sammappadhāna なり。巴にては正勤の意なり。後者正當なるべし、(a)未生の惡を生ぜざる如く勤め、(b)已生の惡を斷ずる如く勤め、(c)未生の善を生ずる如く勤め、(d)已生の善を失はざる如く勤む。

【一二】 S. 48. 9. Vibhaṅga. 信等の五根を詳して解說(分

卷の第二十三*

（第五道誦◎、第二根相應）

◇（根　品）[一]

（一）三三〇〇（六四二）（知經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『三根有り、[二]未知當知根・知根・[三]無知根なり』と。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

『學地を覺知する時　直道に隨順して進み　精進し勤めて方便して　善く自ら其の心を護らば　自ら生の盡くるを　知るが如く無礙道を已に知る　知るを以て解脫し已りて　最後に無知を得　不動にして意解脫せば　一切の有能く盡き　諸根悉く具足して　根の寂靜を樂がひ　最後身を持ちて　衆の魔怨を降伏す』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）三三〇一（六四三）（淨經）[四]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在せり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[五]五根有り、何等をか五と爲す。謂ゆる信根・精進根・念根・定根・慧根なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三）三三〇二（六四四）（須陀洹經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『五根有り。何等をか五と爲す。謂ゆる信根・精進根・念根・定根・慧根なり。若し比丘、此の五根に於て實の如く觀察し、實の如く佛く觀察せば、三結に於て斷ずるを知る。謂ゆる身見・戒取・疑なり。是れを[七]須陀洹と名づく。惡趣の法に墮ちず、決定して正しく正覺に向ひ、七有の天人に往生して苦邊を究竟す』と。佛此の經を說き已りたまひし

* 新第二十三（原第二十六卷）。根力、覺支三相應三品を攝む。
◎ S. 48 Indriya Saṃyuttam に當る當誦、第二相應なり。原本缺くるも第五誦道品第二となるべし。
◇ 今具（十九）略（八）二十七經を一括して根品とす。
【一】 S. 48. 23. Ñaṇ. A. III. 84. Sekha.
三無漏根を說く。
【二】 anaññātaññassāmitindriyaṃ
aññindriyaṃ
aññātavindriyaṃ
見道に入る刹那に、無始の生死に於て未だ曾て知らざりし四諦の法を知らんとして生じたる意、樂、喜、捨及び信、勤、念、定、慧の九根を未知當知根といふ。即ち修道預流果より乃至阿羅漢向の六の階級にある聖者が、已に知りたる四諦の法によりて惑煩を斷ぜんとして生じたるによりて惑煩を斷ぜんとして生じたる九根を知根といふ。
【三】 無學道即ち阿羅果に於て生じたる九根を具知根といふ。新には具知根と譯す。
【四】 S. 48. 1. Suddhikaṃ
【五】 根（indriya）とは因陀羅（indra）の形容詞「因陀羅の」「力ある」といふが名詞化せるものにして、倶舍論二には

に住し、精勤方便して、正智正念もて世間の貪愛を調伏せんと。是れを自らを洲として以て自らに依り、法を洲として以て法に依り、異を洲とせず異に依らずと名づく』と。佛此の經を説き已りたまひしに、諸の比丘、佛の説かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。[七二]

【七二】新第二十二（原第二十四卷）此に終り、念處相應品もまた終る具（三十五）略（十八）合して五十三經なり。

尊、云何が自らを洲として以て自らに依り、法を洲として以て法に依り、云何が異を洲とせず異に依らざるや』と。佛、阿難に告げたまはく『若し比丘身の身觀念處に、精勤方便して、正智正念もて世間の貪憂を調伏し、是の如く外身、內外身の受・心・法の法觀念處も亦た是の如く說く。阿難、是れを自らを洲として以て自らに依り、法を洲として以て法に依り、異を洲とせず異を洲として依らずと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（五三）〔三三九〕（六三九）(布薩經)[六七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[六八]摩偷羅國の跋陀羅河の側なる傘蓋菴羅樹林の中に住まりたまへり。尊者舍利弗、目揵連、涅槃して未だ久しからざりき。爾の時世尊、月の十五日の布薩の時、大衆の前に於て座を敷きて坐したまへり。爾の時世尊、衆會を觀察し已つて諸の比丘に告げたまはく『我れ大衆を觀て虛空を見已れり。舍利弗、大目揵連般涅槃せるを以ての故に。我が聲聞にて唯だ此の二人のみは善能く說法、敎誡、敎授、辯說、滿足せり。二種の財有り。錢財及び法財なり。錢財は世人より求め、法財は舍利弗、大目揵連より求めぬ。如來は已に施財及び法財より離れたり。汝等、舍利弗、目揵連涅槃せるを以ての故に愁憂苦惱すること莫れ。譬へば大樹の根莖枝葉華果茂盛せるに大枝先づ折れるが如く、亦た寶山の大巖先づ崩るるが如く、是の如く如來の大衆の中にては舍利弗、目揵連の二大聲聞先づ般涅槃せり。是の故に比丘、汝等愁憂苦惱を生ずること勿れ。何んぞ生法・起法・作法・爲法の壞敗の法にして磨滅せざること有らん。壞れざらしめんと欲せば是の處有ること無し。我れ先に已に說きぬ。一切の愛すべき物は皆離散に歸す。[六九]我れ今に久しからずして亦た當に過ぎ去るべし。是の故に汝等當に知るべし[七〇]「自らを洲として以て自らに依り法を洲として以て法に依り異を洲とせず異に依らず」と。謂ゆる內身の身觀念に住し、精勤方便して、正智正念もて世間の貪憂を調伏し、是の如く外身、內外身の受・心・法の法觀念

【六七】 S. 47. 14. Celā 舍利弗、目連の二大弟子沒後の僧伽は空虛なり。佛諸比丘を激勵して自らを燈となし、依となして四念處を修すべしと敎へらる。

【六八】 巴には Vajjīsu Ukkacelāyaṃ Gaṅgāya nadiyā tīre.

【六九】 巴になし。

【七〇】 洲は燈の誤譯。

我れ今[六一]擧體離解し[六二]四方闇易し、[六三]持辯閉塞しぬ。純陀沙彌來りて我れに語つて言はく「和上舍利弗已に涅槃せり。餘の舍利及び衣鉢を持して來りぬ」と』と。佛言はく『云何が阿難、彼の舍利弗は受けし所の[六四]戒身を持ちて涅槃せるや、定身・慧身・解脫身・解脫知見身もて涅槃せるや』と。阿難、佛に白して言さく『不なり世尊』と。佛、阿難に告げたまはく『法の若きは我れ自ら知り等正覺を成じて說きし所なり。謂ゆる四念處・四正斷・四如意足・五根・五力・七覺支・八道支もて涅槃せる耶』と。阿難、佛に白さく『不なり世尊、受けし所の戒身乃至道品の法を持たずして涅槃せりと雖も、然かも尊者舍利弗は持戒多聞、少欲知足にして常に遠離を行じ、精勤方便して攝念安住し、一心に正受し、捷疾の智慧、深利の智慧、超出の智慧、分別の智慧、大智慧、廣智慧、甚深の智慧、無等の智慧、智の寶成就し、能く視、能く教へ、能く照し、能く喜捨し、能く讃歎し、衆の爲に法を說けり。是の故に世尊、我れ法の爲の故に、受法者の爲の故に、愁憂し苦惱す』と。佛、阿難に告げたまはく『汝愁憂し苦惱すること莫れ、所以は何ん、若しは坐し若しは起き若しは作すは有爲敗壞の法なり。何んぞ壞れざるを得ん。壞れざらしめんと欲せば是の處有ること無し。我れ先に已に說きぬ。一切の愛念する所の種種の諸物、適意の事、一切皆是れ乖離の法なり、常保す可からず。譬へば大樹の根莖枝葉華果茂盛せるに大枝先づ折れるが如く、大寶山の大巖先づ崩るるが如く、是の如く如來の大衆の眷屬にては其の大聲聞先づ般涅槃す。若し彼方に舍利弗の住する有らば、彼方に於て我れは則ち無事なり。然るに其の彼方に、我れ則ち空しからず、舍利弗有るを以ての故に。我れ先に已に說けり。故に、汝、今、阿難、我が先に說きしが如く、愛念す可き所の種種適意の事は、皆是れ別離の法なり。是の故に汝今大に愁毒すること莫れ。阿難當に知るべし。[六五]如來も久しからずして亦た過ぎ去るべし。是の故に阿難、當に[六六]自らを洲と作して自らに依るべし。當に法を洲と作して法に依るべし。當に異を洲とせず異に依らざることを作すべし』と。阿難佛に白さく『世

【六一】 驚き悲みのあまり體の自由をかず。

【六二】 disā me na pakkhāyanti 目がくらみ四方がぼつと暗くなる。

【六三】 何が何だかわからなくなる。

【六四】 kinnu……sīlakkhandham adāya parinibbuto 巴には戒蘊を持ちて般涅槃せりやとあり。戒蘊とは、戒の集りなり。意味は「、全ての戒を持ち去りて般涅槃せりや」となり。

【六五】 巴になし。

【六六】 巴に attadīpā とあり。巴の dīpa は梵の dvīpa(洲) dīpa(燈)の二語に當る。今の場は後者が適當なり。即ち「自らを燈明となす」と。

眠覺・語默に智に住し智を正しくす。彼れは此の如き聖戒を成就して根門を守護し、正智正念もて寂靜にして遠離し、空處の樹下の閑房に獨坐す。正身正念にして、心を安住に繫け、世の貪憂を斷じ、貪欲を離れ、貪欲を淨除し、世の瞋恚・睡眠・掉悔・疑蓋を斷じ、瞋恚・睡眠・掉悔・疑悔を離れ、瞋恚・睡眠・掉悔・疑悔を淨除して、五蓋の惱みもて心慧力羸(よわ)れる諸の障閡分の涅槃に趣かざる者を斷除す。是の故に內身の身觀念に住し、精勤方便して正智正念もて世間の貪憂を調伏す、是の如く外身、內外身の受・心・法の法觀念に住するも亦た是の如く說く。是れを比丘の四念處を修すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五一) 一三九七 (六三七)(波羅提木叉(はらだいもくしやきやう)經)[55] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に四念處を修すべし』と。上に廣說せるが如し。差別せば『乃至是の如く出家し已つて靜處に住し、[56]波羅提木叉を攝受して律儀行處具足し、細微の罪に於て大怖畏を生じ、學戒を受持して殺を離れ殺を斷じ、殺生を樂はず、乃至一切の業跡前きに說けるが如く衣鉢の身に隨ふこと鳥の兩翼の如く、是の如く學戒成就して四念處を修せよ』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五二) 一三九八 (六三八)(純陀經)[57] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[58]王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時尊者舍利弗、摩竭提(まかつだい)の[59]那羅(なら)聚落に住まり疾病もて涅槃せり。純陀沙彌(じゆんだしやみ)、[60]瞻視(せんし)して供養しぬ。爾の時尊者舍利弗病に因りて涅槃しぬ。時に純陀沙彌、尊者舍利弗を供養し已つて、餘の舍利を取り衣鉢を擔持(たんぢ)して王舍城に到り衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて却つて一面に住し、尊者阿難に白さく『尊者當に知るべし。我が和上(おしよう)尊者舍利弗已に涅槃しぬ。我れは舍利及び衣鉢を持して來りぬ』と。是に於て尊者阿難、純陀沙彌の語るを聞き已つて、佛の所に往詣し、佛に白して言さく『世尊、

【五五】 S. 47. 46. Pātimokkha. 戒學と四念處を修するとは鳥の兩翼の如し。

【五六】 pātimokkha(prātimokṣa)別々解脫戒とて定共戒、道共戒に簡別して名づく。

【五七】 S. 47. 13. Cunda. 生經2. 舍利弗般泥洹經(大、三、七九)舍利弗死す。阿難悲嘆にくれたり。佛阿難に、生者は必滅なり。徒らに悲む勿れ、自らを燈とし、自らを依として四念處を修せよと敎へらる。

【五八】 巴には Sāvatthiyaṃ Jetavane Anāthapiṇḍikassa ārāme.

【五九】 Nālagāmake

【六〇】 看病せり。

(四五) 一二三九一 (六三五)[四九](光澤經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑の鷄林精舍に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘四念處に於て修習するに多く修習せば、未だ淨からざる衆生を、清淨なることを得せしめ、已に淨き衆生は光澤を增さしむ。何等をか四と爲す、謂ゆる身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四六—四九) 一二三九二—一二三九五 (三菩提經等) 衆生を淨むるが如し、是の如く未だ彼岸に度らざる者は度らしめ、阿羅漢を得、辟支佛を得、阿耨多羅三藐三菩提を得るも亦た上の如く說く。

(五〇) 一二三九六 (六三六)[五〇](比丘經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑の鷄林精舍に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に汝が爲に四念處を修するを說くべし。何等をか四念處を修すと爲す。若し比丘、如來應等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊世に出興して正法を演說したまふに[五一]上語も亦た善く、中語も亦た善く、下語も亦た善し、善き義、善き味、純一滿淨にして、梵行顯示す。若し[五二]族姓子・族姓女・佛に從つて法を聞かば淨信心を得て是の如く修學す在家の和合は欲樂の過ち煩惱の結縛なりと見、空閑に樂居し出家して道を學び、在家を樂はずして[五三]非家に處し、一向に淸淨ならんと欲して其の形壽を盡くすまで純一滿淨にして、鮮白梵行ならん。我れ當に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、正信より非家出家して道を學ぶべしと。是の思惟を作し已つて、卽便ち錢財親屬を放捨し、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、正信より非家出家して道を學び、其の身行を正し、口の四過を護り、正命淸淨にして賢聖の戒を習ひ、諸の[五四]根門を守り、心を護り正念にして、眼に色を見る時、形相を取らず。若し眼根に於て不律儀に住せば世間の貪憂、惡不善法常に心より漏る。而かも今眼に於て正律儀を起こし、耳・鼻・舌・身・意に正律儀を起こすも亦復た是の如し。彼れは賢聖の戒律の成就せるを以て善く根門を攝し、來往周旋、顧視屈伸、坐臥

【四九】巳になし。四念處を修すれば、清淨ならざる者を清淨にし、清淨なるものは更に光澤を增す。

【五〇】cf. S. 47. 3. Bhikkhu. 佛の敎を聞いて出家し、先づ聖戒を習ひ、心を直くせば四念處を修するを得。

【五一】初めも、中途も、終りもよし。

【五二】善男子、善女人。

【五三】家庭を有せず。

【五四】感官を統制して五欲に溺れざること。

ば能く未だ彼岸に度らざる衆生をして彼岸に度ることを得せしむ。謂ゆる四念處なり。何等をか四と爲す。謂ゆる身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなり』と。時に二正士共に論議し已つて各本處に還へりぬ。

(三五) 一三八一 (六二二)(阿羅漢經)[四六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑の鷄林精舍に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、尊者跋陀羅も亦た彼れに在りて住まれり。尊者跋陀羅、尊者阿難に問はく『頗し法有りて修習するに多く修習せば、阿羅漢を得るや』と。尊者阿難、尊者跋陀羅に語るらく『法有りて修習するに多く修習せば而かも阿羅漢を得。謂ゆる四念處なり。何等をか四と爲す。謂ゆる身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなり』と。時に二正士共に論議し已つて各本處に還へりぬ。

(三六) 一三八二 (六二三)(一切法經)[四七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑の鷄林精舍に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『說く所の一切法、一切法とは謂ゆる四念處なり。是れを正說すと名づく。何等をか四と爲す、謂ゆる身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三七) 一三八三 (六二四)(賢聖經)[四八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑の鷄林精舍に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、四念處に於て修習するに多く修習せば賢聖出離すと名づく。何等をか四と爲す、謂ゆる身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三八―四四) 一三八四―一三九〇 (盡苦經等) 出離の如く是の如く、正しく苦を盡くし、苦邊を究竟し、大果を得、大福利を得、甘露法を得、甘露を究竟し、甘露法を作證するも上の如く廣說す。

【四六】 巴になし。四念處を修習すれば阿羅漢を得。

【四七】 巴になし。一切法とは即四念處なり。

【四八】 S. 47. 17. Ariyo. 四念處を修すれば賢聖出離を得。

何が故ぞ如來應等正覺の見たまふ所は、諸の比丘の爲に聖戒として說き、斷ぜず、缺かず、乃至智者の歎ずる所、憎惡せざる所なる』と。尊者阿難、優陀夷に語るらく『四念處を修するが爲の故なり。何等をか四と爲す、謂ゆる身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなり』と。時に二正士共に論議し已つて各本處に還りぬ。

（三二）一二三八（六二九）[42]（不退轉經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑の鷄林精舍に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、尊者跋陀羅[43]も亦た彼れに在りて住まれり。時に尊者跋陀羅、尊者阿難に問うて言はく『頗し法有りて修習するに多く修習せば退轉せざるを得るや』と。尊者阿難、尊者跋陀羅に語るらく『法有りて修習するに多く修習せば能く行者をして退轉せざることを得せしむ。謂ゆる四念處なり。何等をか四と爲す。身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなり』と。時に二正士共に論說し已つて各本處に還へりぬ。

（三三）一二三九（六三〇）[44]（淸淨經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑の鷄林精舍に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、尊者跋陀羅も亦た彼れに在りて住まれり。時に尊者跋陀羅、尊者阿難に問はく『頗し法有りて修習するに多く修習せば、不淨の衆生をして淸淨なることを得、轉じて光澤を增さしむるや』と。尊者阿難、尊者跋陀羅に語るらく『法有りて修習するに多く修習せば能く不淨の衆生をして淸淨なることを得、轉じて光澤を增さしむ。謂ゆる四念處の身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなり』と。時に二正士共に論議し已つて、各本處に還へりぬ。

（三四）一二四〇（六三一）[45]（度彼岸經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑の鷄林精舍に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、尊者跋陀羅も亦た彼れに在りて住まれり。時に尊者跋陀羅、尊者阿難に問はく『頗し法有りて修習するに多く修習せば、能く未だ彼岸に度ることを得ざる衆生をして彼岸に度ることを得せしむるや』と。尊者阿難、尊者跋陀羅に語るらく『法有りて修習するに多く修習せ

【四二】 S. 47. 23. Parihānaṃ. cf. S. 18—20. Kukkutārama (1—3) 四念處を多く修習せば正法を退轉せず。

【四三】 Bhadda

【四四】 S. 47. 25. Suddhakaṃ. cf. S. 47. 24. Parihānaṃ. 衆生四念處を修習すれば淸淨なることを得。

【四五】 巴になし。四念處を修習すれば彼岸に度ることを得。

を超越す、受・心・法の法觀念に住せば諸の魔を超越す』と。時に婆醯迦比丘、佛の說法敎誡を聞き已つて、歡喜し隨喜し、禮を作して去り、獨一靜處にて專精に思惟し、不放逸に住し乃至後有を受けざりき。

（二九）【二三五】（六二六）（比丘經） 第二經も亦た上に說けるが如し。差別せば是の如く比丘、生死を超越す。

（三〇）【二三六】（六二七）（阿那律陀經）[四〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者阿那律陀、佛の所に詣り稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し佛に白して言さく『世尊、若し比丘有りて學地に住し、未だ上進して安隱の涅槃を得ず、而かも方便して求むるに、是の聖弟子は當に云何して正法律に於て修習し多く修習して諸の漏を盡くすを得乃至、自ら後有を受けざるを知るべき』と。佛、阿那律に告げたまはく『若し聖弟子、學地に住し、未だ上進して安隱の涅槃を得ず、而かも方便して求むるに、彼れ爾の時に於ては當に內身の身觀念に住し、精勤方便して正智正念もて世間の貪憂を調伏すべし。是の如く受・心・法の法觀念に住し、精勤方便して正智正念もて世間の貪憂を調伏せよ、是の如く聖弟子、多く修習し已らば、諸の漏を盡くすを得、乃至自ら後有を受けざるを知る』と。爾の時尊者阿那律陀、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し禮を作して去りにき。

（三一）【二三七】（六二八）（戒經）[四一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、巴連弗邑（ぱれんほつむら）の鷄林精舍に住まりたまへり。時に尊者優陀夷、尊者阿難陀も亦た巴連弗邑の鷄林精舍に住まれり。爾の時尊者優陀夷、尊者阿難の所に詣り、共に相問訊し、慰勞し已つて退きて一面に坐し、尊者阿難に語るらく『如來應供等正覺の知りたまふ所見たまふ所は、諸の比丘の爲に聖戒として說きたまへり。斷ぜず、缺かず、擇ばず、離れず、戒取せずして、善く究竟し善く持たしむるは、智者の歎ずる所、憎惡せざる所なり。

【四〇】 cf. S. 47. 26. Padesam. 阿那律、佛に有學比丘は云何にせば漏を盡すやと問ふ。四念處に住すべしと敎へらる。

【四一】 cf. S. 48. 21. Silam. 佛聖戒を制定せらるるは四念處を修せしめんが爲なり。

精に思惟し、不放逸に住し所以を思惟すべし。善男子鬚髮を剃除し、正信より非家出家して道を學ばば、上に廣說せる如く、乃至後有を受けざらん』と。佛、鬱低迦に告げたまはく『是の如し是の如し、汝の所說の如し。但だ我が所說の法に於て我が心を悅ばさず、彼の事業とする所をも成就せずんば、我が後に隨ふと雖も而かも利を得ず、反つて障閡を生ぜん』と。鬱低迦、佛に白さく『世尊の說かせたまふ所もて、我れ則ち能く世尊の心を悅ばしめ、自業成就し、障閡を生ぜざらん。唯だ願くは世尊、我が爲に法を說きたまへ。我れ當に獨一靜處にて專精に思惟し、不放逸に住すべし、上に廣說せる如く乃至、後有を受けざらん』と。是の如く第二第三も請へり。爾の時世尊、鬱低迦に告げたまはく『汝當に先に其の初業を淨め、然る後梵行を修習すべし』と。鬱低迦、佛に白さく『我れ今云何が其の初業を淨め、梵行を修習せん』と。佛、鬱低迦に告げたまはく『汝當に先に其の戒を淨め、其の見を直くして三業を具足すべし。然る後四念處を修せよ。何等をか四と爲す、內身の身觀念に住し、專精に方便して、正智正念もて世間の貪憂を調伏し、是の如く外身、內外身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住することも亦た是の如く廣說す』と。時に鬱低迦、佛の說かせたまふ所を聞きて歡喜隨し喜し、座より起ちて去りにき。時に鬱低迦、佛の教授したまふを聞き已つて、獨一靜處にて專精に思惟し、不放逸に住して所以を思惟せり。善男子の鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、正住より非家出家して道を學ばば乃至、後有を受けずと』と。

(二七) 一三七三 (異比丘經) 鬱低迦所問の如く、是の如く異比丘の所問も亦た上に說くが如し。

(二八) 一三七四 (六一五)(婆醯迦經(はへいかきやう)) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に異比丘有り。婆醯迦と名づく。佛の所に來詣し稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し佛に白して言さく『世尊、善い哉世尊、我が爲に法を說きたまへ』と。前の鬱低迦修多羅に廣說せる如し、差別せば『是の如く婆醯迦比丘、初業淸淨にして身の身觀念に住せば、諸の魔

【三九】 S. 47. 15. Bāhiko cf. S. 35. 89. Bāhiyo
四念處に住せば諸の魔を超越す。

世間に美色をする者の所及び大衆の中を過ぐるべし。一(ひと)りの能く人を殺す者をして刀を拔きて汝に隨はしめん。若し一滴の油を失はば輙ち當に汝の命を斷つべし」と。云何が比丘、彼の油の鉢を持てる士夫、能く油の鉢を念(おも)はず、殺人者を念はずして彼の伎女及び大衆を觀るや不や』と。比丘、佛に白さく『不なり世尊。所以は何ん、世尊、彼の士夫自ら其の後を見るに刀を拔ける者有ればなり。常に是の念を作さん「我れ若し油一滴を落さば彼の刀を拔ける者當に我が頭を截るべし」と。唯だ其の心を一にし油鉢に繫念し、世間の美色及び大衆の中に於て徐ろに歩みて過ぎ、敢へて顧眄(こめん)せず』と。『是の如く比丘、若し沙門婆羅門有り正身にして自重し、其の心念を一にして聲色を顧みず善く一切を攝し、心法、身念處に住せば則ち是れ我が弟子なり、我が教へに隨ふ者なり。云何が比丘、正身にして自重し、其の心念を一にして聲色を顧みず一切を攝持し心法、身念處に住すと爲す。是の如く比丘、身の身觀念に住し、精勤方便して、正智正念もて世間の貪憂を調伏す、受・心・法の法觀念に住するも亦復た是の如し。是れを比丘の正身にして自重し、其の心念を一にして聲色を顧みず善く心法を攝し四念處に住すと名づく』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言(のたま)はく、

『專心正念に　油鉢を護持し　自心隨つて護れば　未だ曾て至らざる方なる　甚だ難
きをも過ぐることを得、　勝妙微細なる　諸佛の說かせたまふ所の　言教の利劍を　當
に其の心を一にして　專精に護持すべし　彼の凡人の　放逸の事は　能く是の如き
不放逸の教に入るに非ず』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二六) 一三七二 (六二四)[三八](鬱低迦經(うつていかきやう)) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者鬱低迦、佛の所に來詣し佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し、佛に白して言さく『善い哉世尊、我が爲に法を說きたまへ、我れ法を聞き已りなば、當に獨一靜處にて專

【三八】 S. 47. 16. Uttiyo cf. S. 47. 15. Bāhiyo
鬱肘低迦、世尊に教を求む。世尊、先づ戒(習慣)を淨め、見を直くして、然る後四念處に住すべしと說かる。

けたまひぬ。菴羅女、世尊の默然として請ひを受けたまへるを知り已つて、稽首して足に禮したてまつり、還つて自家に歸へり、種種の食を設け、床座を布置し、晨朝に使を遣はして、佛に時の到れるを白せり。爾の時世尊、諸の大衆と菴羅女の舍に詣り座に就きて坐したまへり。時に菴羅女手自ら種種の飮食を供養せり。食し訖つて澡漱し鉢を洗ひ竟りぬ。時に菴羅女一小床を持ちて佛の前に坐して佛の說法を聽けり。爾の時世尊、菴羅女の爲に隨喜の偈を說きたまへり。

施す者は人愛念す　多衆に隨從せられ　名稱日に增高し　遠近に皆悉く聞こゆ　衆に處するに常に和雅　慳を離れ畏るる所なし　是の故に智慧を施すに　慳を斷じて永く餘無し　上、忉利天に生じ　長夜に快樂を受く　壽を盡くすまで常に德を修し　難陀園[三四]に娛樂す　百種の諸の天樂あり　五欲其の心を悅ばしむ　彼れは此の人間に於て　佛の說かせたまふ所の法を聞きて　善逝の弟子と爲り　彼の化を受くる生を樂ふ』

と。爾の時世尊、菴羅女の爲に種種に說法し、示敎照喜し、示敎照喜し已つて座より起ちて去りたまひぬ。

（一五）［一二三七］（六二三）（世間經）[三五]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[三六]波羅奈の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『世間に美色を言ふ。世間に美色とは能く多人をして集聚し觀看せしむるものなるや不や』と。諸の比丘、佛に白さく『是の如し世尊』と。佛、比丘に告げたまはく『若し世間に[三七]美色あらば、世間に美色あらば世間に美色とは又た能く種種に歌舞伎樂し、復た極めて多衆をして聚集し看せしむるや不や』と。比丘、佛に白さく『是の如し世尊』と。佛、比丘に告げたまはく『若し世間に美色有らば、世間に美色とは、一處に在りて種種に歌舞伎樂戲笑を作すや。復た大衆有りて一處に雲集せるに、若し士夫の愚ならず癡ならず樂を樂ひ苦に背き、生を貪り死を畏るる有らん。人あり語つて言はく「士夫汝當に油を滿たせし鉢を持ちて、

【三四】歡喜園。

【三五】S. 47. 20. Janapada. 滿油の鉢を持して步くに一滴だにこぼさば殺すべしとて、拔刀者後に從はば、たとへ美女の間にあるとも之を顧みざる如く、眞面目なる比丘は四念處に住して他を顧みず。

【三六】巴には Sumbhesu

【三七】kalyāṇī 美人。

を行じ、正念正智もて心を寂靜にし、受・心・法の法觀念に住し、乃至法に於て遠離を得』と。時に尊者阿難歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（一四）一三七（六二）（菴羅女經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、跋祇の人間に在して遊行し、〔三〇〕鞞舍離園の菴羅園の中に到りて住まりたまへり。爾の時〔三一〕菴羅女、世尊の跋祇の人間に遊行し菴羅園の中に至りて住まりたまへるを聞き、卽ち自ら乘車を莊嚴し、鞞舍離城より出でて世尊の所に詣り、恭敬供養せんとして菴羅園の門に詣り、車より下りて歩み進み、遙かに世尊の諸の大衆の與に圍遶せられて說法したまふを見たてまつりぬ。世尊は遙かに菴羅女の來れるを見て諸の比丘に語りたまはく『汝等比丘、勤めて心を攝して住し、正念正智なれ。今菴羅女來る。是の故に汝誡めよ。云何が比丘勤めて心を攝して住すと爲すや。若し比丘、已に生ぜし惡不善の法は當に斷ずべし、欲を生じ方便精進して心を攝し、未だ生ぜざる惡不善法は起らしめず、未だ生ぜざる善法は生ぜしめ、已に生ぜし善法は住して忘れざらしめ修習し增滿し、欲を生じ方便精進して心を攝せば、是れを比丘の勤め心を攝して住すと名づく。云何が比丘の正智と名づくる。若し比丘の去來す威儀常に正智に隨つて廻顧視瞻し、屈伸し俯仰し、衣鉢を執持し、行住坐臥、眠覺語默、皆正智に隨つて住する是れ正智なり。云何が正念なる。若し比丘、內身の身觀念に住し、精勤方便して、正智正念もて世間の貪憂を調伏し、是の如く受・心・法の法觀念に住し、精勤方便して、正智正念もて世間の貪憂を調伏せば、是れを比丘正念なりと名づく。是の故に汝等、勤めて其の心を攝して正智正念なれ。今菴羅女來る。是の故に汝を誡めよ」と。時に菴羅女世尊の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり、却つて一面に住しぬ。爾の時世尊、菴羅女の爲に種種に說法し示教照喜し、示教照喜し已つて、默然として住したまひぬ。爾の時菴羅女衣服を整へ佛の爲に禮を作し合掌して佛に白さく『唯だ願くは世尊、諸の大衆と明日我れに中食を請ふことを受けたまへ』と。爾の時世尊、默然として請ひを受

【三〇】 S. 47. 1. Ambapāli. 世尊、菴羅林に於て比丘の爲に、四念處、正智正念について說かる。菴羅女法を聞き、翌朝食を供養す。

【三一】 Vesāliyaṃ Ambapāli=vane

【三二】 巴には、世尊菴羅林に於て比丘衆の爲に四念處を說き給ふを記するのみにして、菴羅女のことは全然なし。

を膠し、口を以て草を嚙むに輒ち復た口を膠し、五處同じく膠し聯捲して地に臥すに獵師旣に至り、卽ち杖を以て貫き擔ひ負ひて去る。比丘當に知るべし。愚癡の獼猴は自境界なる父母の居處を捨てゝ他境界に遊びて斯の苦惱を致せしことを。是の如く比丘、愚癡の凡夫は聚落に依りて住し、晨朝に衣を著け鉢を持ち、村に入りて乞食するに善く身を護らず、根門を守らず、眼に色を見已れば則ち染著を生じ、耳聲・鼻香・舌味・身觸・皆染著を生ず。愚癡の比丘は內根、外境の五に縛せられ已つて魔の欲する所に隨ふ。是の故に比丘、當に是の如く學すべし、自ら行ずる所の處は父母の境界に於て依止して住し、他處、他境界に隨つて行ずること莫らんと。云何が比丘、自ら行ずる所の處は父母の境界なるや、謂ゆる四念處なり。身の身觀念に住し、受・心・法の法觀念に住するなりと』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二三) 一三六九 (六二二)[三〇](年少比丘經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に尊者阿難、衆多の比丘と世尊の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐しぬ。尊者阿難、佛に白して言さく『世尊、此の諸の年少比丘は當に云何が敎授し、云何が共れが爲に說法すべき』と。佛、阿難に告げたまはく『此の諸の年少比丘には當に四念處を以て敎へて修習せしむべし。云何が四と爲す。謂ゆる身の身觀念に住し、精勤方便して、不放逸を行じ、正智正念もて心を寂定にし、乃至身・受・心・法を知りて法觀念に住し、精勤方便して不放逸を行じ、正智正念もて心を寂靜にし、乃至法を知るなり。所以は何ん。若し比丘、學地に住する者未だ進上を得ずして、安隱涅槃を志求する時、身の身觀念に住し、精勤方便して不放逸を行じて正念正智もて心を寂靜にし。受・心・法の法觀念に住し、精勤方便して不放逸を行じ、正念正智もて心を寂靜にし乃至法に於て遠離す。若し阿羅漢の諸漏已に盡き、所作已に作し、諸の重擔を捨て、諸の有結を盡くし、正知にして善く解脫せるも彼の時に當つて亦た身の身觀念住を修し、精勤方便して不放逸

【三〇】 S. 47. 4. Sallap. 年少の比丘には四念處を說くべし。阿羅漢も亦四念處に住し心を寂にし法に於て遠離を得。

得べし。云何が四と爲す。謂ゆる須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二二）一二三六七（六一九）（私陀伽經）[二六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘薩羅の人間に在して、私陀伽聚落の北なる身恕林の中に遊行したまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『過去世の時に緣[二七]幢伎師[二八]有り、肩上に幢を竪て弟子に語つて言はく「汝等幢上に於て下に向ひて我れを護れ、我れも亦た汝を護らん」と。迭ひに相護持して遊行嬉戲し、多くの財利を得たり。時に伎弟子、伎師に語つて言はく「言はれし如くせず但だ當に各各自ら愛護し、遊行して嬉戲し多く財利を得べし。身は無爲にして安隱なることを得ん」とて下りぬ。伎師答へて言はく「汝の言ふ所の如く各自愛護せよ。然かも其れ此の義も亦た我が說の如し。已に自ら護る時は卽ち是れ他を護るなり。他の自ら護る時亦た是れ已れを護るなり』と。心自ら親近し修習し護るに隨ひて證を作さば、是れを自ら護り他を護ると名づく。云何が他を護りて自ら護るや。他を恐怖せず、他に違はず、他を害せず、慈心もて彼れを哀れむ、是れを他を護りて自ら護ると名づく。是の故に比丘、當に是の如く學すべし、自ら護らん者も四念處を修し、他を護らん者も亦た四念處を修すべしと』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二三）一二三六八（六二〇）（獼猴經）[二九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『大雪山の中の寒氷嶮しき處には尙ほ獼猴すら無し、況んや復た人有らんをや。或は復た山有り、獼猴の居る所にして而かも人有ること無し。或は復た山有り、人獸共に居り、獼猴の行く處に於て獵師黐膠を以て其の草上に塗るに、黠ある獼猴は遠く避けて而して去るも、愚癡の獼猴は遠く避くること能はず、手を以て小し觸るれば卽ち是の手を膠し、復た二手を以て解いて脫せんと求むれば卽ち二手を膠し、足を以て解かんと求むれば、復た其の足

【二六】S. 47. 19. Sedaka 眞に自らを護ることは他を護るなり。他を護ることは自らを護るなり。

【二七】巴には Sumbhesu とあり。註によれば地方の名とあり。

【二八】caṇḍālavaṃsika. 一種の曲藝師。

【二九】S. 47. 7. Makkaṭa 愚かなる猴は、己の境界を離るゝが故に、獵師に捕へらるゝ如く、比丘若し四念處に住せずば五欲に捕へられて解脫を得ざるべし。

めん、能く脫するを得るや以不や」と。是に於て羅婆、鷹の爪より脫することを得、還つて耕壠の大塊の下に到り、止まる處に安住し、然る後塊上に於て鷹と鬪はんと欲せり。鷹則ち大いに怒る。彼れは是れ小鳥なるに敢へて我れと鬪ふと瞋恚極めて盛んに、駿に飛びて直ちに搏つ。是に於て羅婆塊下に入りぬ。鷹鳥飛びし勢ひに臆を堅塊に衝き身を碎きて卽死しぬ。時に羅婆鳥深く塊下に伏し、仰いで偈を說いて言はく

「鷹鳥力を用ひて來り　羅婆は自界に依る　瞋の猛盛の力に乘じ　禍を致し其の身を碎きぬ　我れは具足し通達して　自らの境界に依り　怨を伏して心隨喜す　自ら觀て其の力を欣ぶ　設ひ汝兇愚にして　百千の龍象の力有らんも　我が智慧の　十六分の一に如かじ　我が智の殊勝なるを觀よ　蒼鷹を摧滅せり」

と。是の如く比丘、彼の鷹鳥の如きは愚癡にして自ら親む所の父母の境界を捨てゝ他處に遊び斯の災患を致せり、汝等比丘も亦た應に是の如くなるべし。自境界の所行の處に於て應に善く守持すべし。他境界をば離れて應當に學すべし。比丘、他處他境界とは謂ゆる五欲の境界なり。眼可意なるを見ば妙色を愛念し、欲心もて染著す。耳は聲を識り、鼻は香を識り、舌は味を識り、身は觸を識り、意す可くんば妙觸を愛念し、欲心もて染著す。是れを比丘の他處、他境界と名づく。自ら父母の境界に處るとは、謂ゆる四念處なり。云何が四と爲す。謂ゆる身の身觀念處・受・心・法の法觀念處なり。是の故に比丘、自行處の父母の境界に於て而かも自ら遊行し、他處、他境界より遠離せんと應に學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二〇)一二三六(六一八)(四果經)[二五]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四念處に於て多く修習せば當に四果、四種の福利を

【二五】　巴になし。
四念處を修すれば四果を得。

身觀に住し、上の煩惱を除斷する能はず、其の心を攝取する能はず、亦復た內心の寂靜を得ず、勝妙の正念正智を得ず、亦復た四種增上して心法、現法に樂住し、本より未だ得ざる所の安隱の涅槃を得ずんば、是れを比丘の愚癡にして辨ぜず善からず、善く內心の相を攝する能はずして外相を取り自ら障閡を生ずと名づく。若し比丘有りて黠慧才辯あり、善巧方便して內心を取り已つて然る後外相を取らば彼れ後時に於て終に退滅して自ら障閡を生ぜざるなり。譬へば廚士の黠慧聰辯にして善巧方便して尊主に供養するに能く衆味を調へ、酸鹹酢淡の善く尊主の嗜む所の相を取りて衆味を和し以て其の心に應ずるに其の尊主の欲する所の味に聽き、數以て之を奉らば、尊主悅び已つて必ず爵祿を得せしめ、愛念倍重す、是の如く黠慧の廚士は善く尊主の心を取るが如く、比丘も亦復た是の如し、身の身觀念に住し、上の煩惱を斷じ、善く其の心を攝し內心寂止し、正念正知もて四增し心法・現法に樂住することを得て、未だ得ざる所の安隱の涅槃を得、是れを比丘の黠慧辯才ありて善巧方便して內心の相を取りて外相を攝持し、終に退滅して自ら障閡を生ずること無しと名づく。受・心・法觀も亦復た是の如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一九) 一二三六五 (六二七)(鳥經)[二三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『過去世の時一鳥有り、名づけて[二四]羅婆と曰ふ。鷹の爲に捉へられ虛空に飛騰し空に於て鳴喚して言はく「我れ自覺せずして忽ちに此の難に遭へり。我れ坐ろに父母の境界を捨離して他處に遊びしが故に此の難に遭ひぬ。如何せん今日他の爲に困しめられ自在を得ず」と、鷹、羅婆に語らく「汝當に何處にか自らの境界有りて自在を得べき」と。羅婆答へて言はく「我れ田の耕壠の中に於て自らの境界有り諸難を免るゝに足る、是れ我が爲には家、父母の境界なり」と。鷹、羅婆に於て憍慢を起こして言はく「汝を放ちて去つて耕壠の中に還らし

【二三】 S. 47. 6. Sakuṇagghi. 自己の境界に還りたる羅婆鳥はよく大敵の鷹に勝つことを得たり。斯く四念處に住する者はよく五欲を離れることを得。

【二四】 lāpa 鶉の一種。

にき。爾の時尊者阿難、舍衛城の中に於て乞食し、還つて衣鉢を擧げ、足を洗ひ已つて世尊の所に詣り、佛の足を稽首したてまつり、退きて一面に坐し、比丘尼の所說を以て具さに世尊に白せり。佛、阿難に告げたまはく『善い哉善い哉、應に是の如く學すべし。四念處に善く心を繫して住せば前後昇降するを知る。所以は何ん、心、外に於て求め、然る後制して其の心を求めしむればなり。散亂の心は解脫せずと皆實の如く知る。若し比丘、身に於て身觀念に住し、彼の身に於て身觀念に住し已らば、若し身、睡に耽り、心法懈怠ならんも彼の比丘は當に淨信を起こし淨相を取りて淨信の心を起こすべし。淨相を憶念し已らば其の心則ち悅ぶ。悅び已つて喜を生ず。其の心喜び已らば身則ち猗息す。身猗息し已らば則ち身の樂を受く。身の樂を受け已らば其の心則ち定まる。心定まらば聖弟子なり。當に是の學を作すべし、我れ此の義に於て、外散の心を攝して休息せしめ、覺想及び已觀想を起こさず、無覺無觀捨念にして樂に住せんと。樂に住し已らば實の如く知る。受・心・法念も亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに尊者阿難、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一八)　一三六四　(六一六)(厨士經)[二一]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に身心の相を取りて外散せしむること莫るべし。所以は何ん。若し彼の比丘愚癡にして辨ぜず[二二]善からずんば自心の相を取らずして外相を取り、然る後退減して自ら障閡を生ずればなり。譬へば厨士愚癡にして辨ぜず、善巧便せず、衆味を調味し、尊主に奉養するに酸鹹酢淡其の意に適せず、善く尊主の嗜む所の酸鹹酢淡の衆味の和を取る能はず。尊主に親侍せる左右に其の須ふる所を司ひ其の欲する所に聽き善く其の心を取りて自ら意を用ふるも衆味を調和すること能はず。以て尊主に奉り若し其の意に適はざれば尊主悅ばず。悅ばざるが故に爵賞を蒙らさず亦た愛念せざるが如し。愚癡の比丘も亦復た是の如く、辨ぜず善からず身に於て

【二一】 S. 47. 8. Sūdo. 愚かなる料理人は、自ら味を試みることをせざる爲、主人の嗜む如く調理し得ざる如く。愚かなる比丘は、自身を顧ることをせず、徒らに心を外に奪はれて心安定せず。賢明なる調理人、先づ自ら味を試みるを以て主人の喜ぶ如く調理するを得る如く、賢明なる弟子は先づ自身を觀ずることにより心安定し、正知正念にしてよく現實に涅槃を得。

【二二】 此の場合の不善(akusala)は道德的の善惡をいふに非ず。賢明ならざるをいふ。

『世尊、說かせたまひし所の大丈夫の如き、云何が大丈夫、非大丈夫と名づくるや』と。佛、比丘に告げたまはく『善い哉善い哉、比丘能く如來に大丈夫の義を問へり。諦らかに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。若し比丘、身の身觀念に住し、彼れ身の身觀念に住し已つて、心、欲を離れず、解脫して諸の有漏を盡くすを得ずんば、我れは說く彼れは大丈夫たるに非らずと。所以は何ん、心、解脫せざるが故なり。若し比丘、受・心・法の法觀念に住し、心、欲を離れず、解脫して諸の有漏を盡くすを得ずんば、我れ彼れは大丈夫と爲すと說かず。所以は何ん、心、解脫せざるが故なり。若し比丘、身の身觀念に住し、心、欲を離るゝを得、心、解脫を得、諸の有漏を盡くさば、我れ彼れは大丈夫と爲すと說くなり。所以は何ん、心、解脫せるが故なり。若し受・心・法の法觀念に住し、受・心・法の法觀念に住し已つて、心、貪欲を離れ、心、解脫を得、諸の有漏を盡くさば我れ彼れは大丈夫と爲すと說くなり。所以は何ん、心、解脫せるが故なり。是れを比丘の大丈夫、及び非大丈夫と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し、足に禮して去りにき。

（一七）〔三六三〕（六一五）（比丘尼經）[19] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、晨朝に衣を著け鉢を持ち舍衞城に入りて乞食し、路中に於て思惟すらく『我れ今先に比丘尼の寺に至らん』と。卽ち比丘尼の寺に往けり。諸の比丘尼遙かに尊者阿難の來れるを見、疾く床座を敷き請うて座に就かしむ。時に諸の比丘尼、尊者阿難の足に禮し、退きて一面に坐し、尊者阿難に白さく『我れ等諸の比丘尼、四念處を修し心を繫して住するに、[20]自ら前後昇降するを知れり』と。尊者阿難諸の比丘尼に告ぐらく『善い哉善い哉、姉妹、當に汝等の所說の如くして學すべし。凡そ四念處を修習するに善く心を繫して住する者は是の如く前後昇降するを知るべし』と。時に尊者阿難、諸の比丘尼の爲に種種に說法し、種種に說法し已つて座より起ちて去り

【一九】 S. 47. 10. Bhikkhunī-vāsaka.
比丘達は四念處の中前分よりは後分の方が漸次勝れてゐることを阿難に告ぐ、阿難これを佛に告げて然る以所を聞く。

【二〇】 前よりも後の方が一層すぐれてゐること知る。

百歳を盡くして命終するも如來の說法は猶ほ盡くる能はず、當に知るべし如來の所說は無量無邊なることを。名・句・味・身も亦復た無量にして終極有ること無し。所謂四念處なり。何等をか四と爲す。謂ゆる身念處・受・心・法念處なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一〇）一二三六　一切の四念處經は皆此の總句を以てす。所謂是の故に比丘、四念處に於て修習して增上欲を起こし、精勤方便して正念正智もて應に學すべしと。

（一一）一二三七（六一三）（不善聚經）[一六]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『不善聚、善聚有り。何等をか不善聚と爲す。謂ゆる三不善根なり。是れを正說すと名づく。所以は何ん。純不善積聚とは謂ゆる三不善根なればなり。云何が三と爲す。謂ゆる貪不善根・恚不善根・癡不善根なり。云何が善聚と爲す。謂ゆる四念處なり。所以は何ん。純善滿具とは謂ゆる四念處なればなり。是れを善說すと名づく。云何が四と爲す。謂ゆる身念處・受・心・法念處なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一二）一二三八（惡行經）[一七]　三不善根の如く是の如く三惡行の身惡行・口惡行・意惡行。

（一三）一二三九（惡想經）　三想の欲想・恚想・害想。

（一四）一二四〇（惡覺經）　三覺の欲覺・恚覺・害覺。

（一五）一二四一（惡界經）　三界の欲界・恚界・害界なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一六）一二四二（六一四）（大丈夫經）[一八]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に異比丘有り、佛の所に來詣し、佛の足に稽首し退きて一面に坐し、佛に白して言さく

【一六】巴になし。不善聚とは貪瞋、癡なり。善聚とは四念處なり。

【一七】S. 47. 47. Duccaritaṃ.

【一八】S. 47. 11. Mahāpurisa. 四念處に住して心よく解脫せるものを大丈夫と名づけ、未だ解脫し得ざる者は然か名づけず。

へり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ當に四念處を修すを說くべし。諦らかに聽き善く思へ。云何が四念處を修する。謂ゆる內身の身觀念に住し精勤方便して正智正念もて、世間の憂悲を調伏し、外身・內外身の觀に住し精勤方便して、正念正智もて、世間の憂悲を調伏し。是の如く受・心・法の內法・外法・內外法の觀念に住し精勤方便して正念正智もて世間の憂悲を調伏する是れを比丘四念處を修すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七）一三五三（正念經）　過去未來に四念處を修するも亦た是の如く說く。

（八）一三五四（六二二）（善聚經）[一二]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『善法聚、不善法聚有り。云何が善法聚なる。所謂四念處なり。是れを正說すと爲す。所以は何ん。純一滿淨の聚とは所謂四念處なればなり。云何が四と爲す。謂ゆる身の身觀念處、受・心・法の法觀念處なり。云何が不善聚なる。不善聚とは所謂[一三]五蓋なり。是れを正說すと爲す。所以は何ん。純一逸滿の不善聚とは所謂五蓋なればなり。何等をか五と爲す。謂ゆる貪欲蓋・瞋恚蓋・睡眠蓋・掉悔蓋・疑蓋なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（九）一三五五（六二三）（弓經）[一四]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『人の四種の强弓を執持し大力もて方便して多羅樹の影を射るに疾く過ぎて閡ざす無きが如く、是の如く如來の[一五]四種の聲聞、增上方便して、利根の智慧もて百年の壽を盡くすまで如來の所に於て百年說法教授され、唯だ食息・補寫・睡眠の中間をば除くのみにして、常に說き常に聽き、智慧明利にして、如來の所說に於て、底を盡くすまで受持し、諸の障閡無く、如來の所に於て再問を加へざらんも、如來の說法は終極有ること無し。法を聽きて壽

【一二】S. 47. 5. Kusalarāsi
四念處は善法の聚り、五蓋は不善法の聚りなり。

【一三】nīvaraṇa(nivāraṇa)
聖道を障礙するものなり。

【一四】巴になし。
如來の說法盡ることなく、無量無邊なり。

【一五】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。

如實の聖法を離るれば則ち聖道を離る。聖道を離るれば則ち甘露法を離る。甘露法を離るれば則ち生老病死憂悲惱苦より脫するを得ざるなり。我れは說く『彼れは苦に於て解脫を得ず』と。若し比丘、四念處を離れずんば聖の如實の法を離れざることを得。聖の如實を離れずんば則ち聖道を離れず。聖道を離れずんば則ち甘露法を離れず。甘露法を離れずんば則ち生老病死憂悲惱苦より脫することを得るなり。我れは說く『彼の人は衆(もろく)の苦より解脫す』と』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五)【三三五一】(六〇九)(集經)[九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ今當に四念處の集、四念處の沒を說くべし、諦らかに聽き善く思へ。何等をか四念處の集、四念處の沒と爲す。食集すれば則ち身集し、食滅すれば則ち身沒す。是の如く身に隨ひて集觀に住し、身に隨ひて滅觀に住するなり。身に隨ひて集滅觀に住すれば則ち所依無くして住し諸の世間に於て永く所取無し。是の如く觸集すれば則ち受集し、觸滅すれば則ち受沒す。是の如く集の法に隨ひて受を觀じて住し、滅の法に隨ひて受を觀じて住するなり。集滅の法に隨ひて受を觀じて住すれば則ち所依無くして住し、諸の世間に於て都べて所取無し。名色集すれば心集し。名色滅すれば則ち心沒す、集の法に隨ひて心を觀じて住し、滅の法に隨ひて心を觀じて住するなり。集滅の法に隨ひて心を觀じて住すれば則ち所依無くして住し、諸の世間に於て則ち所取無し。憶念集すれば則ち法集し、憶念滅すれば則ち法滅す。集の法に隨ひて法を觀じて住し、滅の法に隨ひて法を觀じて住するなり。集滅の法に隨ひて法を觀じて住すれば則ち所依無くして住し、諸の世間に於て則ち所取無し。是れを四念處の集、四念處の沒と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六)【三三五二】(六一〇)(正念經)[一〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛[一一]、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたま

【九】S. 47. 42. Samudaya 四念處の集滅觀に住すれば無所依に住して世間に取着するなし。

【一〇】S. 47. 2. Sata. 四念處に精勤し、世間の憂悲を調伏すべし。

【一一】Vesaliyam Ambapali-vane

卷の第二十二*

第五誦道品第一[一]（第五、道誦、第一[二]念處相應）

（念處品）

（一）一二四七（六〇五）（念處經）[三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四念處有り。何等をか四と爲す。謂ゆる身の身觀念處、受・心・法の法觀念處なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）一二四八（六〇六）（念處經）[四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四念處有り。何等をか四と爲す。謂ゆる身の身觀念處、受・心・法の法觀念處なり。是の如く比丘、此の四念處に於て、修習し滿足し、精勤し方便して、正念正智もて應當に學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三）一二四九（六〇七）[五]（淨經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の[六]祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[七]一乘道有り、諸の衆生を淨め憂悲を越え惱苦を滅して如實の法を得せしむ。所謂四念處なり。何等をか四と爲す。身の身觀念處、受・心・法の法觀念處なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四）一二五〇（六〇八）[八]（甘露經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘四念處を離るれば則ち如實の聖法を離る。

* 新訂卷の第二十二は原第二十四卷なり。原第二十二、三は偈經として後出す。

【一】 S. V. (45—56) Mahāvagga に當る。誦品分類の遺文なり。原第二十四、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、四十一、三十一の八卷より成る今の第一なり。本誦中二十一相應あり。

【二】 S. 47. Satipaṭṭhāna-saṃyutta 四念處を說く經を集めたり。

【三】 巴になし。

【四】 S. 47. 23. Suddhakaṃ. 當卷一相應合して一品とす、具略五十三經あり。

【五】 S. 47. 18. Brahmā. 四念處修習すべし。四念處は唯一の道なり。

【六】 巴には Uruvelāyaṃ najjā Nerañjarāyatīre Ajapālanigrodhe

【七】 梵語の ekāyāno mārgo なるべし。巴には ekāyana maggo とあり。巴の āyana は「到達」の意にして、「乘」の意ならず。「目的に達する唯一の道」の義なるべし。

【八】 cf. S. 47. 41. Amata. 四念處を離るれば聖法を離れ乃至解脫を得ず。四念處を離れずんば聖法を離れず乃至解脫を得。

我れ法を知るが故に來れり　仁者應當に知るべし　當に彼れに於て涅槃すべし　此の法は法にして是の如しと』。

と。質多羅天子此の偈を說き已つて、卽ち沒して現はれざりき。〔六〇〕

【六〇】質多羅品（S. 41 Citta-samyutta）以上十經を以て終り原新倶に第二十一卷終る二品に渉り十七經を攝む。第四弟子所說誦、六相應八品百三十六經あり。

唯だ復た胞胎して生を受けず、丘塚を增さず、血氣を受けざるのみ。世尊の說きたまふ五下分結の如き、我れ、有るを見ず、我れ自ら一結も斷ぜざるを見ず。若し結、斷ぜずんば則ち還つて此の世に生ぜん』と。是に於て長者卽ち床より起ち結跏趺坐し正念にして前に在りて偈を說いて言はく、

『服食の積む所を積み　廣く衆の難を度して　上進の福田に施さば　斯の五種の力を殖う

斯の義の欲する所を以て　俗人にして家に處るも　我れ悉くの利を得　已に衆難を免れ　世間に聞習せらるる　衆の難事を遠離せり。樂知を生ずるは稍難し、等正覺に隨順し　持戒者に供養して　善く諸の梵行を修す。漏盡の阿羅漢　及び聲聞牟尼　是の如き超越見に　上の諸の勝處に於て　常に士夫施を行ぜば　尅く終に大果を獲ん。衆多の施を習行し　諸の良福田に施さば　此の世に於て命終し　化して天上に生じ五欲具足し滿てて　無量の心悅樂す。此の妙果報を獲るは　慳悋無きを以ての故なり

所處に在りて生を受くるに　未だ曾て歡喜せずばあらず』

と。質多羅長者、此の偈を說き已つて、尋いで卽ち命終し、不煩熱天に生じぬ。爾の時質多羅天子是の念を作さく『我れ此こに停まるべからず、當に閻浮提に往き諸の上座比丘を禮拜すべし』と。力士の臂を屈伸するが如き頃に天の神力を以て菴羅林の中に至り、身より天光を放ち遍ねく菴羅林を照せり。時に異比丘有り、夜起きて房より出で、露地を經行せしに、勝光明の普く樹林を照せるを見、卽ち偈を說いて言はく、

『是れは誰ぞ妙天の色　虛空の中に住れり　譬へば純金の山　閻浮檀の淨光の如し』

と。質多羅天子、偈を說いて答へて言はく、

『我れは是れ天人の王　瞿曇名づけて子と稱す　是れ菴羅林の中の　質多羅長者なり

淨戒具足せるを以て　繫念して自ら寂靜にして　解脫身具足せり　智慧身も亦た然なり

先には我れに諂曲ならず幻はさず質直にして質直の所生なりと言ひしに、今云何が諂曲に幻僞にして直からず不直の所生なりと言ふ耶。若し汝前實ならば後は則ち虚なり。後實ならば前は則ち虚なり。汝先には我れ行住坐臥に於て知見常に生ずと言ひしも汝の前後に於ける小事すら知らずして云何ぞ過人法、若しは知、若しは見の安樂住の事を知らん』と。長者復た尼揵若提子に問はく『一問一說一記論、乃至十問十說十記論有り、汝此れ有るや不や。若し一問一說一記論、乃至十問十說十記論無くして、云何ぞ能く我を誘はんとして此の菴羅林の中に來至せる。我れを誘誑せんと欲するや』と。是に於て尼揵若提子、息閉し頭を掉ひ反つて拱いで出で復た還つて顧みざりき。

（一〇）一三四八（五七五）[五八]（病相經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、菴羅聚落の菴羅林の中に住まりたまへり。衆多の上座比丘と倶なりき。爾の時質多羅長者病苦し、諸親圍遶せり。衆多の諸天有り長者の所に來詣し、質多羅長者に語つて言はく『長者、汝當に發願せば轉輪王と作ることを得べし』と。質多羅長者諸天に語つて言はく『若し轉輪王と作るとも彼れも亦た無常・苦・空・無我なり』と。時に長者の親屬、長者に語るらく『[五九]汝當に繫念すべし、汝當に繫念すべし』と。質多羅長者、親屬に語るらく『何が故ぞ汝等我れに繫念せよ繫念せよと敎ふるや』と。彼の親屬言はく『汝是の言を作せり、無常・苦・空・無我たりと。是の故に汝に繫念せよ繫念せよと敎ふるなり』と。長者、諸の親屬に語るらく『諸の天人有り、我が所に來至して我れに語つて言はく、汝當に發願せば轉輪聖王と作ることを得べし、願に隨つて果を得んと。我れ卽ち答へて言はく「彼の轉輪王も亦復た無常・苦・空・非我なり」と』と。彼の諸の親屬、質多羅長者に語るらく『轉輪王に何有りてか而かも彼の諸天、汝をして願求せしむるや』と。長者答へて言はく『轉輪王は正法を以て治化す。是の故に諸天是の如く福利を見るが故に而かも來りて我をして願を發して求むることを爲さしむ』と。諸の親屬言はく『汝今心を用ひよ、當に之れを如何がすべき』と。長者答へて言はく『諸の親屬、我れ今心を作すは

【五八】　S. 41. 10. Gilānadassanam. 質多羅長、者信念不動從容として死につく。死して不煩熱天に生じ、神通を以て菴羅林中に來りて上座比丘のために偈を說く。

【五九】　氣を確かに持て。

に禮し一面に於て坐し、諸の上座比丘に白して言さく『尊者、此の阿耆毘迦は是れ我が先人と親厚なり、今出家して比丘と作らんことを求む。願くは諸の上座、度して出家せしめたまへ。我れ當に衣鉢、衆具を供給すべし』と。諸の上座卽ち出家して鬚髪を剃除し袈裟衣を著けしむ。出家し已つて所以を思惟すらく『善男子鬚髪を剃除し袈裟衣を著け出家し増進して道を學し、梵行を淨修せば阿羅漢を得ん』と。

(九) 一三四五 (五七四)[55](尼揵經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、菴羅聚落の菴羅林の中に住まりたまへり。諸の上座比丘と倶なりき。時に[56]尼揵若提子有り。五百の眷屬と菴羅林の中に詣り、質多羅長者を誘ひて以て弟子と爲さんと欲せり。質多羅長者、尼揵若提子の五百の眷屬を將ひて菴羅林の中に來詣し、我を誘ひて弟子と爲さんと欲せるを聞き、聞き已つて卽ち其の所に往詣し共に相問訊し畢り、各一面に於て坐せり。時に尼揵若提子、質多羅長者に語つて言はく『汝、沙門瞿曇を信じ無覺無觀三昧を得たる耶』と。質多羅長者答へて言はく『我れ信を以ては來らざりしなり』と。阿耆毘言はく『長者汝は諂はず幻はさず質直にして質直の所生なり。長者若し能く有覺有觀を息めなば、亦た能く網を以て風を繋縛せん。若し能く有覺有觀を息めなば、亦た一把の土を以て恒の水の流れを斷ずべし。我れ行住坐臥に於て智見常に生ず』と。質多羅長者、尼揵若提子に問はく『信前に在りと爲す耶、智前に在りと爲す耶。信と智と何れを先と爲し何れを勝れりと爲すや』と。尼揵若提子答へて言はく『信前に在るべし、然る後智あり、信智相比すれば、智は則ち勝れりと爲す』と。質多羅長者、尼揵若提子に語るらく『我れ已に有覺有觀を息め得ることを求め、内淨一心にして無覺無觀、三昧に喜樂を生じ第二禪具足して住せり。我れ晝も亦た此の三昧に住し、夜も亦た此の三昧に住して、終夜常に此の三昧に住し是の如き智有り。何すれぞ信を用ひん』と。[57]尼揵若提子長者の爲に言はく『汝は諂曲幻僞にして直からず、不直の所生なり』と。質多羅長者言はく『汝

【五五】 S. 41. 8. Nigaṇṭha. 尼犍子外道、質多羅長者を誘ひて弟子となさんとせしも、却つて論破せられて走りたり。
【五六】 Nigaṇṭha Nātaputta 闍那教中興の祖。
【五七】 原文「世尊、尼犍若提子」に作る、今「尼犍若提子、長者」に改む。

して去りにき。

（八）三二四（五七三）（阿耆毘迦經）[五二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、菴羅林の中に住まりたまへり。時に[五三]阿耆毘外道有り。是れ質多羅長者の先人と親厚なり。質多羅長者の所に來詣し、共に相問訊し慰勞し已つて一面に於て住しぬ。質多羅長者、阿耆毘外道に問はく『汝出家して幾時なるや』と。答へて言はく『長者、我れ出家してより已來、二十餘年なり』と。質多羅長者問うて言はく『汝出家して來二十年を過ぎて過人法、究竟の知見、安樂住を得たりと爲すや不や』と。答へて言はく『長者、出家して二十年を過ぐと雖も過人法、究竟知見、安樂住を得ず、唯だ祼形にして髮を拔き乞食して人間に遊行し土中に臥する有るのみ』と。質多羅長者言はく『此れは名づけて法律と稱するに非ず。此れは是れ惡知なり。出要の道に非ず。[五四]等覺なりと曰ふに非ず。讃歎する處に非ず。依止す可からず。唐に出家と名づけ二十年を過ぎ、祼形にして髮を拔き乞食して人間に遊行し、灰土の中に臥せり』と。阿耆毘、質多羅長者に問はく『汝沙門瞿曇の爲に弟子と作り、今に於て幾時なるや』と。質多羅長者答へて言はく『我れ世尊の弟子となり二十年を過ぐ』と。復た問はく『質多羅長者、汝沙門瞿曇の弟子となり二十年を過ぎ復た過人法、勝れたる究竟の知見を得たるや不や』と。質多羅長者答へて言はく『汝今當に知るべし、質多羅長者は要らず復た胞胎を經由して生を受けず、復た丘塚を增さず、復た血氣を起さず、世尊の說かせたまふ所の五下分結の如き一結として斷ぜざるものを見ず、若し一結も斷ぜざれば當に復た還つて此の世に生ずべし』と。是の如く說く時、阿耆毘迦、悲歎涕淚し、衣を以て面を拭ひ、質多羅長者に謂つて言はく『我れ今當に何の計をか作すべき』と。質多羅長者答へて言はく『汝若し能く正法律に於て出家せば我れ當に汝に衣鉢供身の具を給すべし』と。阿耆毘迦須臾思惟し已つて質多羅長者に語つて言はく『我れ今隨喜す、我れに作す所を示せよ』と。時に質多羅長者、彼の阿耆毘迦を將ひて諸の上座の所に往詣し、諸の上座の足

【五二】S. 41. 9. Acela. 阿耆毘、二十年外道に出家して所證なし、舊友質多羅長者に導かれて佛門に出家す。

【五三】巴には Acela-Kassapa とあり。もと邪外道(Ājīvaka)なりし爲、阿耆毘外道といふ。

【五四】完全な覺り。

き。質多羅長者說法を聞き已つて、歡喜し隨喜し、卽ち座より起ち禮を作して去りにき。

尊者摩訶迦は供養をして障罪を利せしめんと欲せざりしが故に、卽ち座より起ちて去り、遂に復た還へらざりき。

(七) 一三四三 (五七二)(繫經[四九]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、菴羅林の中に住まりたまへり。衆多の上座比丘と倶なりき。爾の時衆多の上座比丘食堂に集まりて是の如き論議を作せり[五〇]『諸尊、意に於て云何。謂ゆる眼、色に繫する耶、色、眼に繫する耶、是の如く耳聲・鼻香・舌味・身觸・意法は、意、法に繫すと爲す耶、法、意に繫する耶』と。時に質多羅長者、行きて營む所有り、便ち精舍を過ぎり、諸の上座比丘の食堂に集まれるを見、卽便ち前んで諸の上座の足に禮し、足に禮し已つて問うて言はく『尊者食堂に集まりて何の法を論說せるや』と。諸の上座答へて言はく『長者、我れ等今日此の食堂に集まりて此の如き論を作せり「眼、色に繫すと爲す耶、色、眼に繫する耶、是の如く耳聲・鼻香・舌味・身觸・意法は、意、法に繫すと爲す耶、法、意に繫すと爲す耶」と』と。長者問うて言はく『諸尊は此の義に於て云何が記說せるや』と。諸の上座言はく『長者の意に於ては云何』と。長者、諸の上座に答へて言はく『我が意の如きは謂ゆる眼、色に繫するに非ず、色、眼に繫するに非ず、乃至意、法に繫するに非ず、法、意に繫するに非ず。然かも中間に欲貪なるもの有りて、彼れに隨つて繫するなり。譬へば二牛の如し一は黑く一は白し、駕するに軛鞅を以てす。人有り問うて言はく「黑牛に白牛を繫すと爲すや、白牛に黑牛を繫すと爲すや」と[五一]。等問すと爲すや』と。答へて言はく『長者、等問には非ざるなり。所以は何ん、黑牛に白牛を繫するに非ず、亦た白牛に黑牛を繫するに非ず、然かも彼の軛鞅是れ其の繫なればなり』と。『是の如く尊者、眼、色に繫するに非ず、色、眼に繫するに非ず、乃至意、法に繫するに非ず、法、意に繫するに非ず。然かも其の中間なる欲貪是れ其の繫なり』と。時に質多羅長者、諸の上座の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮作を

【四九】 S. 41. 1. Saññojanaṃ. 上座の比丘達、眼色に繫するや、色眼に繫するやの問題決定し得ず。質多羅上者五に決定を與ふ。

【五〇】 巴には繫と所繫の法とは體も名も別なりや、一體にして名のみ別なりやとあり。

【五一】 正しき問をなす。

なり、我れ雲雨微風を起こさんと欲す、爾かすべきや不や』と。諸の上座答へて言はく『汝爾かし能はば佳なり』と。時に摩訶迦即ち三昧に入ること其の正受の如くせしに、時に應じて雲起こり、細雨微かに下り、涼風飂飂として四方より來りて精舍の門に至る。尊者摩訶迦、諸の上座に語つて言はく『所作止む可きか』と。答へて言はく『止む可し』と。時に尊者摩訶迦即ち神通を止めて自房に還へりぬ。時に質多羅長者是の念を作さく『最も下座の比丘にして而かも能く此の大神通力有り、況んや復た中座と及び上座とならんをや』と。即ち諸の上座比丘の足に禮し、摩訶迦比丘に隨ひて、住する所の房に至り、尊者摩訶迦の足に禮し、退きて一面に坐し白して言さく『尊者、我れ尊者の過人法の神足現化を見得んことを欲す』と。尊者摩訶迦言はく『長者、見て恐怖する勿れ』と。是の如く三たび請ひしも亦た三たび許さざりき。長者出つて復た重ねて請へり『願くは尊者の神通變化を見せたまへ』と。尊者摩訶迦、長者に語つて言はく『汝且らく外に出で乾ける草木を取り、積聚し已りなば一張の氎を以て上を覆へよ』と。質多羅長者即ち其の敎への如く外に出で薪を聚めて積と成し來りて尊者摩訶迦に白せり『薪を積とすること已に成り氎を以て上を覆へり』と。時に尊者摩訶迦即ち火光三昧に入りて戸の鉤孔の中より火焰を出しぬ。光り其の積を燒き薪都べて盡きぬ。唯だ白氎のみは然えざりき。長者に語つて言はく『汝今見しや不や』と。答へて言はく、『已に見たり。尊者は實に奇特を爲す』と。尊者摩訶迦、長者に語つて言はく『當に知るべし此れは皆不放逸を以て本と爲し、不放逸の集、不放逸の生、不放逸の轉なり。不放逸の故に阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に長者、此れ及び餘の功德は一切皆不放逸を以て本と爲し、不放逸の集、不放逸の生、不放逸の轉なり。不放逸の故に阿耨多羅三藐三菩提及び餘の道品の法を得るなり』と。質多羅長者、尊者摩訶迦に白さく『願くは常に此の林中に住まりたまへ。我れ當に壽を盡くすまで衣服・飲食、病に隨ひ湯藥を供養すべし』と。尊者摩訶迦行く、因緣有りしが故に其の請ひを受けざり

ず、受想行識は是れ我なりと見ず、識は我に異ると見ず、我の中に識有り、識の中に我有りと見ざるなり。是れを身見を無くし得と名づく』と。復た問はく『尊者、其の父は何なる名ぞ、何所に於てか生ぜし』と。答へて言はく『長者、我れは後方の長者の家に生れたり』と。質多羅長者、尊者梨犀達多に語るらく『我れ及び尊者二りの父は本是れ[四六]善知識なるや』と。梨犀達多答へて言はく『是の如し長者』と。質多羅長者、梨犀達多に語つて言はく『尊者若し能く此の菴羅林の中に住まらば我れ形壽を盡くすまで衣服・飲食・病に隨ひて湯藥を供養せん』と。尊者梨犀達多默然として請ひを受けぬ。時に尊者梨犀達多、質多羅長者の請ひを受け供養の障礙の故に久しく世尊の所に詣らざりき。時に諸の上座比丘、質多羅長者の爲に種種に說法し示敎照喜せり。示敎照喜し已つて、質多羅長者、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

(六)〔三四二〕(五七一)(摩訶迦經)[四七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、菴羅聚落の菴羅林の中に住まりたまへり。衆多の上座比丘と俱なりき。時に質多羅長者有り、諸の上座の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐し、諸の上座比丘に白して言さく『唯だ願くは諸尊、[四八]牛牧の中に於て我が請食を受けたまへ』と。時に諸の上座、默然として請ひを受けぬ。質多羅長者、諸の上座の默然として請ひを受けしを知り已つて、既に自ら家に還へり、星夜種種の飲食を備具し、晨朝に座を敷き、使を遣はして諸の上座に時の到れるを白せり。諸の上座衣を著け鉢を持ちて牛牧の中なる質多羅長者の舍に至り、座に就きて坐せり。時に質多羅尊者自らの手もて種種の飲食を供養せり。食し已つて鉢を洗ひ澡漱し畢んぬ。質多羅長者は一卑床を敷きて上座の前に於て坐して法を聽けり。時に諸の上座、長者の爲に種種の法を說きて示敎照喜せり。示敎照喜し已つて座より起ちて去りにき。質多羅長者も亦た後に隨ひて去りぬ。諸の上座、諸の酥酪の蜜を食して飽滿し、春後の月熱き時に於て行路に悶え極まりぬ。爾の時一下座の比丘有り、摩訶迦と名づく。諸の上座に白さく『今日は大熱

〔四六〕 善き朋友。

〔四七〕 S. 41.4. Mahaka. 上座比丘衆、質多羅の牛舍に於て酥酪の蜜に飽滿し、熱苦しかりけるに、摩訶迦神通力をもて涼風を起す。質多羅隨喜して更に過人法の神足を示さんことを請ひ「示されたり。摩訶迦之はすべて不放逸によりて得たりと言ふ。

〔四八〕 gokule 牧場。

て、澡漱し鉢を洗ひ訖はりぬ。質多羅長者は一卑床を敷き、上座の前に於て坐して法を聽けり。爾の時上座は長者の爲に種種に說法し、示教照喜し已つて、座より起ちて去りぬ。時に諸の上座路中に於て梨犀達多に語るらく『善い哉善い哉、梨犀達多比丘、汝眞に捷を辯じ事を知りて說けり。若しは餘の時に於ても、汝常に此の如く應ずべし』と。時に諸の上座、梨犀達多の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

（五）【三四一】（五七〇）（梨犀達多經）[四五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、菴羅聚落の菴羅林の中に住まりたまへり。衆多の比丘と俱なりき。時に質多羅長者、諸の上座の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐し諸の上座に白して言さく『諸の世間に見る所、或は我有りと說き、或は衆生を說き或は壽命を說き、或は世間の吉凶を說く。云何が尊者、此の諸の異見は、何を本とし、何の集、何の生、何の轉ぞや』と。時に諸の上座默然として答へざりき。是の如く三たび問ひしに、亦た三たび默然たりき。時に一下座の比丘有り、梨菴達多と名づく。諸の上座に白して言さく『我れ彼の長者の所問に答へんと欲す』と。諸の上座言はく『善く答へ能はば答へよ』と。時に長者卽ち梨犀達多に問はく『尊者、凡そ世間に見る所は何を本とし何の集、何の生、何の轉ぞや』と。尊者梨犀達多答へて言はく『長者、凡そ世間に見る所、或は我有りと言ひ、或は衆生を說き、或は壽命を說き、或は世間の吉凶を說く、斯等の諸見は一切皆身見を以て本と爲し、身見の集、身見の生、身見の轉なり』と。復た問はく『尊者、云何が身見と爲すや』と。答へて言はく、長者、愚癡無聞の凡夫は、色は是れ我なり、色は我に異れり。色の中に我有り、我の中に色有りと見るなり。受想行識は是れ我なり、識は我に異れり、我の中に識有り、識の中に我有りと見るなり。長者、是れを身見と名づく』と。復た問はく『尊者、云何が此の身見を無くし得るや』と。答へて言はく『長者、謂ゆる多聞の聖弟子は色は是れ我なりと見ず、色は我に異るを見ず、我の中に色有り、色の中に我有りと見

【四五】 Isidatta(2)
梨犀達多、質多羅長者の所問に對し、上座に代りて答ふ。
(1)世間に我有りと說き、衆生を說き、壽命を說き、吉凶を說くは何によるや。(2)云何が身見となす。(3)云何が身見を滅するや。

なり』と。復た問はく『尊者、滅の正受に入る時幾法をか作すと爲すや』と。答へて言はく『長者、此れを應に先づ問ふべし。「何が故に今問へるや」と。然して當に汝が爲に說くべし。比丘、滅の正受に入るには二法を作す。止に觀を以てす』と。時に質多羅長者、尊者迦摩の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（四）〔三四〕（五六九）[四三]（梨犀達多經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、菴羅聚落の菴羅林の中に住まりたまへり。衆多の比丘と倶なりき。時に質多羅長者、諸の上座比丘の所に詣り、稽首して足に禮し、一面に於て坐しぬ。諸の上座比丘、質多羅長者の爲に種種に說法し、示敎照喜せり。示敎照喜し已つて、默然として住せり。時に質多羅長者座より起ちて偏へに右の肩を袒にし、右の膝を地に著け十指の掌を合せ諸の上座に請ひて言はく『唯だ願くは諸尊、我が薄食を受けたまへ』と。時に諸の上座、默然として請を受けぬ。時に彼の長者、諸の上座の默然として請を受けしを知り已つて足に禮して去りぬ。還つて自家に歸へり種種の飲食を辨じ、床座を敷き、晨朝に使を遣はして時の到れるを白せり。時に諸の上座衣を著け鉢を持ちて、長者の舍に至り座に就きて坐せり。長者稽首して諸の上座の足に禮し、一面に於て坐し、諸の上座に白せり。『所謂種種の界とは云何が種種の界と爲すや』と。時に諸の上座默然として住せり。是の如くなること再三なりき。爾の時尊者[四四]梨犀達多、衆中の下に坐し、諸の上座に白して言さく『諸尊、我れ彼の長者の所問に答へんと欲す』と。諸の上座答へて言はく『可なり』と。長者質多羅卽ち問うて言はく『尊者、所謂種種の界とは、何等か種種の界なる』と。梨犀達多答へて言はく『長者、眼界異り、色界異り、眼識界異り、耳界異り、聲界異り、耳識界異り、鼻界異り、香界異り、鼻識界異り、舌界異り、味界異り、舌識界異り、身界異り、觸界異り、身識界異り、意界異り、法界異り、意識界異れり。是の如く長者、是れを種種の界と名づく』と。爾の時質多羅長者、種種の淨美なる飲食を下ろして供養せり。衆僧食し已つ

〔四三〕 S. 41. 2. Isidatta(1) 梨犀達多、上座の末席にありて、質多羅長者の所問に答ふ。謂く種々の界とは十八界とあり。

〔四四〕 Isidatta(Ṛsidatta) 仙授と譯す。

の如し』

と。答へて言はく『長者

壽、暖と及び識とは　身を捨つる時倶に捨つ　彼の身を塚間に棄つるに、無心にして木石の如し』

と。復た問はく『尊者、若しは死すと、若しは滅盡を受に入ると差別あるや不や』と。答ふらく、『壽、暖を捨つれば諸根悉く壞し、身命分離す。是れを名づけて死と爲す。滅盡定とは身・口・意の行滅し、壽命を捨てず、暖を離れず、諸根壞せず、身命相屬するなり。此れ則ち命終と、滅正受に入るとの差別の相なり』と。復た問はく『尊者、云何が滅正受に入るや』と。答へて言はく『長者、滅正受に入るとは、我れ滅正受に入る、我れ當に滅正受に入るべしと言はず、然かも先に是の如く漸息方便を作し、先に方便せしが如く向ひて正受に入るなり』と。復た問はく『尊者、滅正受に入る時先づ何の法をか滅する、身行と爲すや、口行と爲すや、意行と爲すや』と。答へて言はく『長者、滅正受に入る者は先づ口行を滅し、次に身行次に意行なり』と。復た問はく『尊者、云何が滅正受より出づと爲すや』と。答へて言はく『長者、滅正受より出づる者も亦た我れ今正受より出づ我れ當に正受より出づべしと念言せず。然かも先に已に方便心を作し、其の先心の如くにして起つなり』と。復た問はく『尊者、滅の正受より起つとは何の法より先づ起つや、身行と爲すや、口行と爲すや、意行と爲すや』と。答へて言はく『長者、滅の正受より起つは、意行より先づ起ち、次に身行、後に口行なり』と。復た問はく『尊者、滅の正受に入れば云何が順趣し流注し、浚輸するや』と。答へて言はく『長者、滅の正受に入れば離に順趣し、離に流注し、離に浚輸し、出に順趣し、出に流注し、出に浚輸し、涅槃に順趣し、涅槃に流注し、涅槃に浚輸す』と。復た問はく『尊者、滅の正受に住せる時、觸は幾觸と爲すや』と。答へて言はく『長者、觸不動・觸無相・觸無所有

れ有相なり。無諍ならば是れ無相なり。貪とは是れ所有なり。恚癡とは是れ所有なり。無諍ならば是れ無所有なり。復た次に無諍ならば貪を空じ恚癡を空ず、空は常住にして變易せず、空は我に非ず我所に非ず。是れを法は一義にして種種の味ありと名づく』と。尊者那伽達多問うて言はく『云何が長者、此の義は汝先に聞きし所なる耶』と。答へて言はく『尊者聞かざるなり』と。復た長者に告ぐらく『汝大利を得たり、甚深の佛法に於て現に賢聖の慧眼に入るを得たり』と。質多羅長者、尊者那伽達多の所説を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（三）〔三三九〕（五六八）（伽摩經）[四〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、菴羅聚落の菴羅林の中に住まりたまへり。諸の上座比丘と倶なりき。時に質多羅長者有り、諸の上座比丘の所に詣り、諸の上座に禮し已つて、尊者伽摩比丘の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐し、尊者伽摩比丘に白さく『所謂行とは云何が行と名づくるや』と。伽摩比丘言はく『行とは謂ゆる三行の身行・口行・意行なり』と。復た問はく『云何が身行、云何が口行、云何が意行なる』と。答へて言はく『長者、出息入息を名づけて身行と爲し、[四一]有覺有觀を名づけて口行と爲し、[四二]想思を名づけて意行と爲す』と。復た問はく『何が故ぞ出息入息を名づけて身行と爲し、有覺有觀と名づけて口行と爲し、想思を名づけて意行と爲すや』と。答ふらく『長者、出息入息は是れ身法なり。身に依り、身に屬し、身に依りて轉ず。是の故に出息入息を名づけて身行と爲す。有覺有觀なるが故に則ち口語す。是の故に有覺有觀は是れ口行なり。想思は是れ意行なり。心に依り、心に屬し、心に依りて轉ず、是の故に想思は是れ意行なり』と。復た問はく、『尊者、覺觀已に口語に發せば、是の覺觀を名づけて口行と爲し、想思は是れ心の數法にして心に依り心に屬して相轉ず、是の故に想思を名づけて意行と爲す』と。復た問はく『尊者幾法か有る

『若し人、身を捨つる時　彼の身の屍、地に臥す　丘塚の間に棄つるに　無心にして木石

【四〇】 S. 41. 6. Kāmabhū. 質多羅長者、伽摩比丘に質問す。(1)云何が行と名づくるや。(2)云何が身業、口意業なりや。(3)死と滅正受(盡定)との差違云何。(4)云何が滅(盡定)に入る。(5)滅正受(盡定)に入るには何法より滅するや。(6)云何が滅正受より出ずるや。(7)滅正受より起つには何法よりするや。(8)滅正受に入れば云何が順趣するや。(9)滅正受に住する時幾觸ありや。(10)滅正受に入る時幾法を作すや。

【四一】 vitakkavicārā 有覺有伺に同じ。

【四二】 saññā ca vedanā ca 受、想に同じ。

に禮し、退きて一面に坐しぬ。時に諸の上座比丘、質多羅長者の爲に種種に説法し、示教照喜せり。示教照喜し已つて默然として住せり。時に質多羅長者、尊者那伽達多比丘の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐しぬ。尊者那伽達多、質多羅長者に告ぐらく『[一九]無量心三昧・無相心三昧・無所有心三昧・空心三昧有り。云何が長者、此の法は種種の義の故に種種に名づくと爲すや、一義なるも種種の名有りと爲すや』と。質多羅長者、尊者那伽達多に問はく『此の諸の三昧は世尊の説かせたまふ所と爲す耶、尊者自意の説と爲す耶』と。尊者那伽達多答へて言はく『此れは世尊の説かせたまへる所なり』と。質多羅長者、尊者那伽達多に語るらく『我れに小く此の義を思惟することを聽るされよ、然る後當に答ふべし』と。須臾思惟し已つて、尊者那伽達多に語るらく『法の種種の義にして、種種の句、種種の味なる有り、法の一義にして、種種の味なる有り』と。復た長者に問はく『云何が法の種種の義にして、種種の句、種種の味なること有りや』と。長者答へて言はく、「無量三昧とは謂ゆる聖弟子の心と慈と倶ひ怨無く憎無く恚無く、寛弘に心を重んじ、無量に修習して普ねく緣じて一方に充滿す。是の如く二方・三方・四方・上下・一切世間なり。心と慈と倶ひ、怨無く憎無く恚無く寛弘にして心を重んじ、無量に修習して諸方に充滿し、一切世間に普ねく緣じて住する、是れを無量三昧と名づく。云何が無相三昧と爲す。謂ゆる聖弟子は一切の相に於て念ぜず、無相心三昧を身に作證する。是れを無相心三昧と名づく。云何が無所有心三昧なる。謂ゆる聖弟子は一切の無量識入處を度り、所有無く、無所有心に住する。是れを無所有心三昧と名づく。云何が空三昧なる。謂ゆる聖弟子は世間空を世間空なりと如實に觀察し、常住にして變易せざるは我に非ず我所に非ず、是れを空心三昧と名づく。是れを名づけて法は種種の義にして種種の句、種種の味なりと爲す』と。復た長者に問はく『云何が法は一義にして種種の味なるや』と。答へて言はく『尊者、謂ゆる貪は有量なり。若し無諍ならば第一無量なり。謂ゆる貪とは是れ有相なり。恚癡とは是

【一九】appamāṇā cetovimutti, ākiñcaññā cetovimutti, suññatā cetovimutti, animittā cetovimutti.

とは長者、此の偈は何の義か有る』と。質多羅長者言はく『尊者那伽達多、世尊は此の偈を說きたまひし耶」と。答へて言はく『是の如し』と。質多羅長者、尊者那伽達多に語つて言はく『尊者、須臾默然たれ、我れ當に此の義を思惟すべし』と。須臾默然として思惟し已つて、尊者那伽達多に語つて言はく『青とは謂ゆる戒なり。白く覆ふとは謂ゆる解脫なり。一輻とは身念なり。轉ずるとは轉出なり。[三六]車とは止觀なり。結を離るとは三種の結有り、謂ゆる貪恚癡なり。彼の阿羅漢は諸漏已に盡き、已に滅し已に知り、已に根本を斷じて多羅樹を截るが如く、更らに復た生ぜず、未來世に滅して起こらざるの法なり。觀察とは謂ゆる見なり。來るとは人なり、流を斷ずとは愛の生死に流るを彼の羅漢比丘は諸漏已に盡き已に知りて、其の根本を斷ずること、多羅樹の頭を截るが如く、復た生ぜず、未來世に於て起こらざるの法を成ずるなり。縛せずとは謂ゆる三縛なり。貪欲の縛、瞋恚の縛、愚癡の縛なり。彼の阿羅漢比丘は諸漏已に盡き、已に斷じ已に知りて其の根本を斷ずること、多羅樹の頭を截るが如く、更らに復た生ぜず、未來世に於て起こらざるの法を成ずるなり。是の故に尊者那伽達多、世尊は此の偈を說きたまへり。

「枝青きに白を以て覆ひ　一輻にして轉ずるの車　結を離るるを觀察し來れば　流れを斷じて復た縛せず」

と。此れは世尊の說かせたまふ所の偈なり。我れ已に分別せるなり』と。尊者那伽達多、質多羅長者に問うて言はく『此の義汝先きに聞けるや』と。答へて言はく『聞かざるなり』と。尊者那伽達多言はく『長者、汝善利を得たり、此の甚深の佛法に於て、賢聖の慧眼に入るを得たり』と。時に質多羅長者、尊者那伽達多の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（二）一三三八（五六七）[三七]（那伽達多經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[三八]菴羅聚落の菴羅林精舍に住まりたまへり。衆多の上座比丘と俱なりき。時に質多羅長者有り、諸の上座比丘の所に詣り稽首して足

【三六】巴には車とは四大所成の身の異語なりと。Rathoti kho bhante imass=etaṃ cātumahābhūtikassa kāyassa adhivacanam

【三七】S. 41. 7. Godatta. 那伽達多、質多羅長者に無量心三昧、無相無所有、空心三昧は種々の義なるが故に種々に名づくるや、一義なるものを種々に名づくるやと問ふ。

【三八】巴には Macchikāsaṇḍe Ambāṭakevane

信ずるなり。復た次に聖弟子は大師の說法を聞かず、復た明智にして尊重なる梵行者の說を聞かず、又復た先に受持せし所を重ねて誦習すること能はず、亦復た先に聞きし所の法を以て人の爲に廣說せず、然かも先に聞きし所の法に於て、獨一靜處にて思惟し觀察して、是の如し是の如しと觀察し、是の如し是の如しと正法に入るを得、乃至正法を信ずるなり。是の如く他より聞きて內に正しく思惟する。是れを未だ正見を起こさざるを起こさしめ、已に起こりし正見を增廣せしむと名づけ、是れを未だ戒、身に滿たざるを滿たさしめ、已に滿ちし者は隨順し攝受すと名づく。精進し方便せんと欲し乃至常に攝受する。是れを見、淨まれば苦種を斷ずと名づく。云何が解脫淸淨斷と爲すや。謂ゆる聖弟子は、貪心に欲無く解脫し恚癡心に欲無く解脫す。是の如く解脫して未だ滿たざる者は滿ぜしめ、已に滿ぜし者は隨順して攝受し、精進を欲し、乃至常に攝受する。是れを解脫淨まれば苦種を斷ずと名づくと。尊者阿難、是の法を說く時、婆頭聚落の諸の童子、尊者阿難の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（第四弟子所說誦、第六質多相應）[30]

（質多羅品）[31]

（一）一三三七（五六六）（那伽達多經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[32]菴羅聚落の菴羅林の中に住まりたまへり。衆の上座比丘と俱なりき。時に[33]質多羅長者有り、諸の上座比丘のところに詣り稽首して足に禮し、退きて一面に坐しぬ。時に諸の上座比丘、質多羅長者の爲に種種に說法し、示敎照喜せり。種種に說法し示敎照喜し已つて、默然として住せり。時に質多羅長者、稽首して諸の上座比丘の足に禮し、[34]那伽達多比丘の房に往詣し　那伽達多比丘の足に禮し、退きて一面に坐せり。時に那伽達多比丘、質多羅長者に問はく、說く所の如き、

[35]「枝青きに白を以て覆ひ　一輻にして轉ずるの車
結を離るるを觀察し來らば　流れを斷じて復た縛せず」

【三〇】 質多長者に關する經を輯錄せり、S. 41. Citta-saṃyutta に相當す。
【三一】 cf. S. 41. 5. Kāmabhū. 質多羅長者、佛所說の偈文の意義の了解を世那伽達多比丘に答ふ。
【三二】 巴には Macchikāsaṇḍe Ambāṭakavane
【三三】 Citta(Citr)
【三四】 Nāgadatta 但し巴本には Kāmabhu とあり。
【三五】 Nelaṅgo setapacchādo, ekāro vattati ratho Anīghaṃ passa āyantaṃ chinnasotaṃ abandhanan ti. 靑技(nilāṅga) は無缺點(nelaṅga)に掛けたるか？

阿難の橋池の人間に遊行し、婆頭聚落國の北なる身恕林の中に住まれるを聞き、聞き已つて相呼び聚集して尊者阿難の所に往詣し、稽首して尊者阿難の足に禮し、退きて一面に坐しぬ。時に尊者阿難、諸の童子に語つて言はく『帝種如來應等正覺は四種の淸淨を說きたまふ。[二九]戒淸淨・心淸淨・見淸淨・解脫淸淨なり。云何が戒淸淨と爲す。謂ゆる聖弟子は戒波羅提木叉に住して、戒增長し威儀具足し、微細の罪に於ても能く恐怖を生じ、學戒を受持し、戒、身に滿たざる者は能く滿足せしめ、已に滿てる者は隨順して執持し精進方便して超出せんと欲せしめ、精勤勇猛にして能く諸の身心に法を常に能く攝受するに堪えしむ。是れを戒淨まれば苦種を斷ずと名づく。云何が名づけて心淨斷と爲す。謂ゆる聖弟子は欲惡不善の法を離れ、乃至第四禪を具足して住す。定、身に未だ滿たざる者には滿たさしめ、已に滿てし者は隨順して執受し、精進せんと欲し乃至、常に執受す。是れを心淨まれば苦種を斷と名づく。云何が名づけて見淨斷と爲す。謂ゆる聖弟子は大師の說法を聞き、是の如し是の如しと說法せば則ち是の如く是の如く入り、實の如く正觀し、是の如き是の如き歡喜を得、隨喜を得、佛に從ふことを得るなり。復た次に聖弟子は大師の說法を聞かずして然かも餘の明智にして尊重なる梵行者の說に從ひ梵行者の是の如し是の如しと說くを聞き尊重して則ち是の如く是の如く入り、實の如く觀察す。是の如し是の如しと觀察して彼の法に於て歡喜を得、隨喜して正法を信ずるなり。復た次に聖弟子は大師の說法を聞かず、亦復た明智にして尊重なる梵行者の說をも聞かずして、先に聞きし所に隨ひて受持し重ねて誦習し隨ふ。先に聞きし所を受持し是の如し是の如しと重誦し已つて、是の如し是の如しと彼の法に入るを得、乃至正法を信ずるなり。復た次に聖弟子は大師の說法を聞かず、明智にして尊重なる梵行者の說を聞かず、又復た先に受持せし所を重ねて誦習する能はざるも、然かも先に聞きし所の法を人の爲に廣說し、先に聞きし所の法を是の如し是の如しと人の爲に廣說して、是の如し是の如しと法に入ることを得、正智もて觀察し、乃至正法を

【二九】 sīlaparisuddhipaddhāniyaṅgaṃ cittaparisuddhipadhāniyaṅgaṃ diṭṭhiparisuddhipadhāniyaṅgaṃ vimuttiparisuddhipadhāniyaṅgaṃ 巴利を直譯すれば、戒淨勤支、心淨勤支、見淨勤支、解脫淨勤支なり。但し梵語には padhāna は pahāna なるべく、從つて斷と譯せること四斷と四正勤の如し。

ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知れりと聞き、聞き已つて是の念を作す「彼の聖弟子は諸の有漏を盡くし、乃至自ら後有を受けざるを知れり。我れ今何が故ぞ諸の有漏を盡くさざる。何が故ぞ自ら後有を受けざることを知らざると」。爾の時に當つて則ち能く諸の有漏を斷じ、乃至自ら後有を受けざるを知れり。姊妹、是れを慢に依り慢を斷ずと名づく。姊妹、云何が愛に依り愛を斷ずるや。謂ゆる聖弟子は、某尊者某尊者の弟子の諸の有漏を盡くし乃至自ら後有を受けざるを知れりと聞き、我れ等何すれぞ諸の有漏を盡くし乃至自ら後有を受けざることを知らざると。彼れ爾の時に於て、能く諸の有漏を斷じ、乃至自ら後有を受けざるを知れり。姊妹、是れを愛に依り愛を斷ずと名づく。姊妹、所行無くんば婬欲和合の橋梁を斷截す』と。尊者阿難、是の法を說く時、彼の比丘尼は遠塵離垢して法眼淨を得たり。彼の比丘尼は法を見、法を得、法を覺り、法に入り、狐疑を度り、他に由らず、正法律に於て心無畏を得て尊者阿難の足に禮し、尊者阿難に白さく『我れ今發露して過を悔ゆ。愚癡にして善く脫せず是の如き不流類の事を作せり。今尊者阿難の所に於て、自ら過を見、自ら過を知れり。發露して懺悔す哀愍の故に』と。尊者阿難、比丘尼に語るらく『汝今眞實に自ら罪を見、自ら罪を知れり、愚癡不善にして、汝自ら知りて不類の罪を作せしも汝今自ら知り自ら見て過を悔ゆ。未來世に於ては具足戒を得ん。我れ今汝の悔過を受く、哀愍の故に、汝をして善法增長し、終ひに退減せざらしめん。所以は何ん、若し自ら罪を見、自ら罪を知ること有りて、能く過を悔ひなば、未來世に於て具足戒を得、善法增長して終ひに退減せざればなり』と。尊者阿難、彼の比丘尼の爲に種種に說法し、示敎照喜し已つて、座より起ちて去りにき。

（一一）一三三六（五六五）（婆頭經）[27]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、橋池[28]に在して人間に遊行したまへり。尊者阿難と俱なりき。婆頭聚落國の北なる身恕林の中に至れり。爾の時婆頭聚落の諸の童子、尊者

【二七】 A. 104. Sāpugī. 阿難、聚落の童子のために、戒と、心と、見と解脫と淨まれば苦種を斷ずと說く。
【二八】 Koliyesu Sāpūgannāma Koliyānaṃ nigame.

を起こし、使を遣はして尊者阿難に白せり『我が身病苦に遇へり、唯だ願くは尊者哀愍して見看たまへ』と。尊者阿難晨朝に衣を著け鉢を持ちて彼の比丘尼の所に往けり。彼の比丘尼、遙かに尊者阿難の來るを見て[二〇]身體を露にして床上に臥せり。尊者阿難遙かに彼の比丘尼の身を見、卽ち自ら諸根を攝斂し、身の背を廻らして住せり。彼の比丘尼、尊者阿難の諸根を攝斂し身の背を廻らして住せるを見、卽ち自ら慚愧し、起ちて衣服を著け坐具を敷き、出でて尊者阿難を迎へ、請ひて座に就かしめ、稽首して足に禮し、退きて一面に住しぬ。時に尊者阿難、說法を爲して言はく『姉妹、[二一]此の如き身は穢食に長養せられ、[二二]憍慢に長養せられ、[二三]愛に長養せられ、[二四]婬欲に長養せらる。姉妹、穢食に依れる者は當に穢食を斷ずべし。慢に依れる者は當に憍慢を斷ずべし。愛に依れる者は當に愛欲を斷ずべし。姉妹、云何が穢食に依れる者は當に穢食を斷ずべしと名づくるや。謂ゆる聖弟子は食に於て數を計り思惟して食し、[二五]著樂の想無く、憍慢の想無く、摩拭の想無く、莊嚴の想無し。身を持たんが爲の故に、養活せんが爲の故に、飢渴の病を治せんが故に、梵行を攝受せんが故に、宿の諸の受を滅せしめ、新しき諸の受を生ぜず、崇習長養し、若しは力め若しは樂ひ若しは觸れ當に是の如くして住すべし。[二六]譬へば商客の酥油の膏を以て、以て其の車に膏するに染著の想無く、憍慢の想無く、摩拭の想無く、莊嚴の想無きが如し、運載の爲の故なり。瘡を病める者の塗るに酥油を以てし、著樂の想無く、憍慢の想無く、摩拭の想無く、莊嚴の想無きが如し、瘡を愈さんが爲の故なり。是の如く聖弟子は、數を計りて食し、染著の想無く、憍慢の想無く、摩拭の想無く、莊嚴の想無し、養活せんが爲の故に、飢渴を活せんが故に、梵行を攝受せんが故に、宿の諸の受を離れ、新しき諸の受を起こさず、若しは力め若しは樂ひ若しは罪に觸るる無く安隱にして住す。姉妹、是れを食に依りて食を斷ずと名づく。慢に依りて慢を斷ずとは、云何が慢に依りて慢を斷ずるや。謂ゆる聖弟子は、某尊者、某尊者の弟子の諸の有漏を盡くし無漏にして心解脫し、慧解脫し、現法に自

[二〇] 巴には身體を露はにしより以下、退きて一面に坐すまではなし、ただ sā sīsaṃ pārupitvā mañcake nipajji. 彼女は頭からおつ被つて寢臺に臥したりとあり。
[二一] āhārasambhūto ayaṃ kāyo
[二二] mānasambhūto ayaṃ kāyo
[二三] taṇhāsambhūto ayaṃ kāyo
[二四] methunasambhūto ayaṃ kāyo
[二五] n' eva davāya na madāya na maṇḍanāya na vibhūsanāya
[二六] 巴に譬喩なし。

を信じて怖畏の想を生ず。受持すること是の如くなれば淨戒を具足して宿業漸く吐かれ、現法に熾然を離るることを得、時節を待たずして能く正法を得、通達し現見觀察して、智慧もて自覺す。離車長者、是れを如來應等正覺は知りたまふ所見たまふ所を說き、熾然を離れて淸淨に超出するを說き、一乘道を以て衆生を淨め、苦惱を滅し、憂悲を越えて眞如の法を得せしめたまふと名づく。復た次に離車、是の如く淨戒具足せば欲惡不善の法を離れ、乃至第四禪具足して住す。是れを如來應等正覺は熾然を離るるを說きたまひ乃至如實の法を得せしめたまふと名づく。[一八]復た三昧正受有り、此の苦聖諦に於て實の如く此れを知り、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に實の如く知りて具足し、是の如き智慧心もて業を更らに造らず。宿業漸く已に斷じ現に正法を得、諸の熾然を離れて時節を待たずして通達現見し、自覺智を生ず。離車、是れを如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所第三の熾然を離れて淸淨に超出するを說き、一乘道を以て衆生を淨め、苦惱を離れ、憂悲を滅して如實の法を得せしめたまふと名づく』と。爾の時尼揵の弟子なる離車の無畏、默然として住せり。爾の時阿耆毘の弟子なる離車聰慧、重ねて離車無畏に語つて言はく『怪しき哉無畏、何すれぞ默然として住せる。如來應等正覺の所說・所知・所見に於て善く說法を聞きて隨喜せざるや』と。離車無畏答へて言はく『我れ其の義を思惟せるが故に默然として住せるのみ。誰れか世尊沙門瞿曇の說かるる法を聞きて隨喜せざるものぞ。若し沙門瞿曇の說法を聞くこと有りて而かも隨喜せざる者は此れ則ち愚夫なり。長夜に非義不饒益の苦を受くべし』と。時に尼揵の弟子なる離車無畏、阿耆毘の弟子なる聰慧、重ねて佛の說かせたまふ所の法を尊者阿難陀に說かるるを聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ちて去りにき。

（二〇）一三五（五六四）[一九]（比丘尼經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。尊者阿難も亦た彼れに在りて住まれり。時に異比丘尼有り。尊者阿難の所に於て染著の心

【一八】巴には四聖諦の代りに次の如く說く。So kho so Abhaya bhikkhu evaṃ sīlasampanno……pa……āsavānaṃ khayā anāsavaṃ cetovimuttiṃ paññāvimuttiṃ diṭṭh' eva dhamme sayaṃ abhiññā sacchikatvā upasampajja viharati. 斯の如く戒を具足せる其の比丘は、諸漏を盡すが故に無漏心解脫慧解脫を現法に自ら通達し作證し具足して住す。

【一九】A. IV. 159. Bhikkhunī. 或る比丘尼阿難に染著の心を起し病と稱して人をして招かしむ。阿難食を斷じ、愛を斷じ、憍慢を斷じ、愛を斷じ、愛欲を斷ずべしと敎ゆ。比丘尼發露懺悔す。阿難比丘の未來世に於ては善法增長し、退減せざるを記別す。巴には Kosamb'yaṃ Ghositārāme

世間善く向ふと名づけ、云何が世間善く到ると名づくるや』と。尊者阿難、瞿師羅の長者に語らく、『我れ今汝に問はん、意に隨つて我れに答へよ。長者意に於て云何。若し法を說くことあるに貪欲を調伏し、瞋恚を調伏し、愚癡を調伏せば世間の說法者と名づけ得るや不や』と。長者答へて言はく『尊者阿難、若し法を說くことあるに貪欲・瞋恚・愚癡を調伏せば是れ則ち名づけて世間の說法と爲す』と。復た長者に問はく『意に於て云何、若し世間貪欲を調伏し、瞋恚を調伏し、愚癡を調伏するに向はば、是れを世間善く向ふと名づく。若し世間已に貪欲・瞋恚・愚癡を調伏せば、是れを善く到ると名づくる耶、非と爲す耶』と。長者答へて言はく『尊者阿難、若し貪欲を調伏し已に斷じて餘無く、瞋恚・愚癡已に斷じて餘無くんば、是れを善く到ると名づく』と。尊者阿難答へて言はく『長者、我れ試みに汝に問ひしに、汝便ち眞實に我れに答へたり。其の義此の如し。當に之れを受持すべし』と。瞿師羅の長者、尊者阿難の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

(九) 三三四 (五六三)[12](尼犍經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、毘舍離の獼猴池の側なる重閣講堂に住まりたまへり。尊者阿難も亦た彼れに在りて住まれり。爾の時[13]無畏離車、是れ尼犍の弟子なり。聰明童子離車あり、是れ阿耆毘の弟子なり。俱に尊者阿難の所に往き、共に相問訊し慰勞し已つて一面に於て坐しぬ。時に無畏離車、尊者阿難に語るらく『我が師、尼犍子は熾然の法を滅し、淸淨に超出して諸の弟子の爲に是の如き道・宿命の業を說く[14]「苦行を行ずるが故に悉く能く之れを吐き、身業作さざれば橋梁を斷截し、未來世に於て復た諸の漏無く、諸の業永く盡く。業永く盡くるが故に衆苦永く盡き、苦永く盡くるが故に苦邊を究竟す」』と。尊者阿難『此の義云何』と。尊者阿難、離車に語つて言はく『如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所は、三種の熾然を離れて淸淨に超出する道を說き、[15]一乘道を以て衆生を淨め、憂悲を離れ、苦惱を越えて[16]眞如の法を得せしめたまへり。[17]何等をか三と爲す。是の如き聖弟子は淨戒に住して波羅提木叉を受け、威儀具足し、諸の罪過

【一二】 A. III. 74. Nigaṇṭha. 尼犍子の徒なる無畏離車及び阿耆毘(Ājīvaka)の徒なる聰明童子離車の二人、阿難より佛所說の戒、定、四諦を聞きて隨喜す。

【一三】 Abhayo ca Licchavi Paṇḍitakumārako ca Licchavi.

【一四】 So purāṇānaṃ kammānaṃ tapasā vyantibhāvaṃ paññāreti navānaṃ kammānaṃ akaraṇā setughātaṃ. Iti kammakkhayā dukkhakkhayā dukkhakkhayā vedanakkhayo vedanakkhayā sabbaṃ dukkhaṃ nijjiṇṇaṃ bhavissati.

彼は苦行によりて古き業より離れしめ、新しき行を作せざるが故に橋梁を斷截し、かくて業盡くるが故に苦盡き、苦盡くるが故に受盡き受盡くるが故に一切苦滅ばん。

【一五】 一乘道の文字巴になし。

【一六】 眞如の文字巴になし。

【一七】 Katamā tisso ? Idha Abhaya bhikkhu sīlavā hoti pātimokkhasaṃvarasaṃvuto viharati ācāragocara-sampanno aṇumattesu vajjesu bhayadassāvī

る所なる』と。答へて言はく『愛を斷ずるなり』と。復た問はく『尊者阿難、何を所依として愛を斷ずることを得るや』と。答へて言はく『婆羅門[七]欲に依つて愛を斷ずるなり』と。復た問はく[八]『尊者阿難、豈に無邊際に非ずや』と。答へて言はく『婆羅門、無邊際には非ず是の如く邊際有り無邊際には非ざるなり』と。復た問はく『尊者阿難、云何が邊際有りて無邊際には非ざるや』と。答へて言はく『婆羅門、我れ今汝に問はん、意に隨つて我れに答へよ。婆羅門、意に於て云何。汝先に精舍に來詣せんと欲せしこと有りしや不や』と。婆羅門答へて言はく『是の如し阿難』と。『是の如く婆羅門、精舍に來至し已れば彼の欲息むや不や』と。答へて言はく『是の如し尊者阿難。彼れ精進し方便し籌量して精舍に來詣せんには』と。復た問はく『精舍に至り已らば彼れの精進し方便し籌量する息むや不や』と。答へて言はく『是の如し』と。尊者阿難復た婆羅門に語らく『是の如く婆羅門、如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所は四如意足を說き、[九]一乘道を以て衆生を淨め苦惱を滅し憂悲を斷じたまへり。何等をか四と爲す、[一〇]欲定斷行成就如意足・精進定・心定・思惟定斷行成就如意足なり。是の如く聖弟子は欲定斷行成就如意足を修して、離に依り無欲に依り出要に依り滅に依りて捨に向ひ乃至愛を斷ず。愛斷じ已らば彼の欲も亦た息む。精進定・心定・思惟定斷行成就を修して、離に依り無欲に依り出要に依り滅に依りて捨に向ひ乃至愛盡く。愛盡き已らば思惟則ち息む。婆羅門、意に於て云何。此れは邊際には非ざるや』と。婆羅門言はく『尊者阿難、此れは是れ邊際にして不邊際には非ざるなり』と。爾の時婆羅門、尊者阿難の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ちて去りにき。

（八）三〇三（五六二）（瞿師羅經）[一一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。尊者阿難も亦た彼れに在りて住まれり。爾の時瞿師羅の長者、尊者阿難の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐し、尊者阿難に白さく『云何が名づけて世間の說法者と爲し、云何が

【七】此の欲は希望なり、發心なり。巴には「欲・勤・心・觀の四神足を修する、これが斷の道なり」とあり。

【八】欲に依りて欲を斷ずるといふことは道理に合せず、際限無かるべしとなり。

【九】一乘道の文字巴になし。

【一〇】梵には2.chanda-samādhi-prahāṇa-saṃskāra-samanvāgato riddhipādaḥ, 2. vīrya, 3. citta, 4. mīmāṃsā. 然るに巴にては、prahāṇa(斷)を padhāna(勵)に作る。巴の方が原の形なるべし。如意足は神足とも譯す。足とは依所。神通を得るもとなり (1)欲(禪定に對する希望)により、定を勵み、行を具足するが神通を起すもとなり。(2)精進により……。(3)心に思ふことにより……。(4)觀察することにより……。

【一一】巴になし。瞿師羅長者、說法者とは云何と問ふ。阿難、貪瞋癡を調伏せるものを說法者と名づくと說く。

（六）三三一（五六〇）（度量經）[三]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、俱睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。爾の時尊者阿難も亦た、彼れに在りて住まれり。時に尊者阿難、諸の比丘に告ぐらく『[四]若し比丘比丘尼、我が前に於て自ら記說せば、我れ當に善哉と慰勞して問訊すべし、或は求むるに四道を以てせん。何等をか四と爲す。[五]若し比丘比丘尼、坐して是の如き住心の、善住心・局住心・調伏心・止觀・一心に等受分別を作し、法に於て量度し、修習し多く修習し已りて諸の使を斷ずることを得たりと。若し比丘比丘尼有りて我が前に於て自ら記說せば我れ則ち是の如し善哉と慰喩し、或は是れを求むるを初めに道を說くと名づく。復た次に比丘比丘尼、正しく坐して思惟し、法に於て選擇思量し、住心の善住・局住・調伏止觀・一心等受もてし、是の如く正しく向ひ多く住して諸の使を離るゝことを得たりと、若し比丘比丘尼有りて我が前に於て自ら記說せば當に是の如し善哉と慰喩し、或は是れを求むるを第二に道を說くと名づく。復た次に比丘比丘尼、掉亂の持する所と爲るも調伏心を以て坐し、正しく住心の善住心・局住心・調伏止觀・一心等受の化に坐し、是の如く正しく向ひ多く住し已りしに則ち諸の使を斷じたりと、若し比丘比丘尼有りて、我が前に於て自ら記說せば我れ則ち是の如し善哉と慰喩し、或は是れを求むるを第三に道を說くと名づく。復た次に比丘比丘尼、止觀和合して俱に行じ、是の如く正しく向ひ多く住することを作せしに則ち諸の使を斷じたりと、若し比丘比丘尼、我が前に於て自ら記說せば我れ則ち是の如し善哉と慰喩して敎誡し、或は是れを求むるを第四に道を說くと名づく』と。時に諸の比丘、尊者阿難の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七）三三二（五六一）（婆羅門經）[六]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。尊者阿難も亦た彼れに在りて住まれり。時に異婆羅門有り。尊者阿難の所に詣り、共に相問訊し慰勞し已つて、一面に於て坐し、尊者阿難に問はく『何が故ぞ沙門瞿曇の所に於て梵行を修するや』と。尊者阿難、婆羅門に語るらく『斷ぜんが爲の故なり』と。復た問はく『尊者何をか斷ず

【三】A. IV. 170. Yuganaddha.

【四】巴には阿難曰く、「若し誰か比丘比丘尼にして我が前に於て阿羅漢果を記說せば彼はすべて四支によるか或は(四支の)中の何れかによる」と。

【五】巴利所說の四支は、1. samathapubbaṅgamaṃ vipassanaṃ bhāveti. 止を先にして觀を修す。2. vipassanāpubbaṅgamaṃ samathaṃ bhāveti. 觀を先にして止を修す。3. samathavipassanaṃ yuganaddhaṃ bhāveti. 止と觀とを一緒にして修す。4. cittaṃ ajjhattaṃ yeva santiṭṭhati sannisīdati ekod=ihoti samādhiyati. 內心を安定し、落ちつけ、專一にし、等持する。

【六】S. 51. 15. Brāhmaṇa 或る婆羅門、阿難に佛敎に出家する目的を問ふ。愛を斷ずるにあり、愛を斷ずるは欲等の四如意足によると答ふ。また無邊際なりやとの問に對して有邊際なる所以を說ぐ。

*卷の第二十一

(第四弟子所說誦、第五阿難相應の續、第二部(原第二十一卷の初))

(阿難品の續き)

(五)〔三三〇〕(五五九)(迦摩經)[一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛・波羅利弗妬路國に住まりたまへり。尊者阿難、及び尊者迦摩も亦た波羅利弗妬路の雞林精舍に住まれり。時に尊者迦摩、尊者阿難の所に詣り、共に相問訊し慰勞し已つて、一面に於て坐し尊者阿難に語るらく[二]『奇なる哉尊者阿難、眼有り色有り、耳有り聲有り、鼻有り香有り、舌有り味有り、身有り觸有り、意有り法有り。而かも比丘有りて是等の法有るも能く覺知せず。云何が尊者阿難、彼の比丘は有想にして覺知せずと爲すや、無想なるが故に覺知せずと爲すや』と。尊者阿難、迦摩比丘に語つて言はく『有想なる者も亦た覺知せず、況んや復た無想ならんをや』と。復た尊者阿難に問はく『何等をか有想にして有に於て而かも覺知せずと爲すや』と。尊者阿難、迦摩比丘に語つて言はく『若し比丘欲惡不善の法を離れ有覺有觀、離に喜樂を生じ、初禪具足して住する、是の如き有想の比丘は法有るも而かも覺知せざるなり。是の如く第二第三第四禪の空入處・識入處・無所有入處具足して住する、是の如き有想の比丘は法有るも而かも覺知せざるなり』と。『云何が無想にして法有るも而かも覺知せざるや』と。『是の如き比丘は一切の想を憶念せず、無相心三昧を身に作證し具足して住するなり。是れを比丘の無想にして有法に於て而かも覺知せずと名づく』と。尊者迦摩比丘、復た尊者阿難に問はく『若し比丘の無相心三昧にて涌らず沒せず、解脫し已つて住し、住し已つて解脫せば、世尊は此れは是れ何の果、何の功德なりと說きたまふや』と。尊者阿難、迦摩比丘に語つて言はく『若し比丘無相心三昧にて涌らず沒せず解脫し已つて住し、住し已つて解脫せば、世尊は此れは是れ智の果、智の功德なりと說きたまへり』と。時に二正士、共に論議し已つて歡喜し隨喜し、各座より起ちて去りにき。

---

* 原新俱に卷二十一なり。

【一】 cf. S. 35. 192. Kāmabhū 迦摩と阿難との問答。六根六境あるも、初禪乃至、無所有入處を具足して住するものは有想にして覺知せず、無想心三昧を身に作證し具足して、住するものは無想にして覺知せず。

【二】 巴には、迦摩が、六根が六境の結縛なりや、六境が六根の結縛なりやと問へるに對して、阿難は、六根と六境とによりて生じたる欲貪が結縛なりと答ふ。

者阿難に問はく『若し比丘の無相心三昧に勇まず沒せず、解脫し已つて住し、住し已つて解脫せるを問はゞ世尊は此れは是れ何の果、何の功德なりと說きたまふや』と。尊者阿難、彼の比丘に問うて言はく『比丘、汝は此の三昧を得たるや』と。彼の比丘默然として住せり。尊者阿難彼の比丘に語つて言はく『若し比丘の無相心三昧を得て、勇まず沒せず、解脫し已つて住し、住し已つて解脫せば世尊は、此れは是れ智の果、智の功德なりと說きたまへりと』と。尊者阿難此の法を說く時、異比丘其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。[六三]

【六三】此に原新第二十卷終る三品に涉り二十三經を攝む。

り』と。時に諸の比丘尼、尊者阿難の所説を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（二）五五七（五六七）（闍知羅經）[六一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。爾の時尊者阿難も亦た彼れに在りて住まれり。時に闍知羅比丘尼有り、尊者阿難の所に詣り、稽首して足を禮し、退きて一面に坐し、尊者阿難に問はく『若し無相心三昧に勇まず沒せず、解脱し已つて住し、住し已つて解脱せば、尊者阿難、世尊は此れを何の果、何の功德なりと說きたまふや』と。尊者阿難、闍知羅比丘尼に語るらく『若し無相心三昧に勇まず沒せず、解脱し已つて住し、住し已つて解脱せば、世尊は是れを智の果、智の功德なりと說きたまへり』と。闍知羅比丘尼言はく『奇なる哉尊者阿難、大師及び弟子は同句、同味、同義なり。尊者阿難、昔、一時に於て佛、娑祇城の安禪林の中に在せり。時に衆多の比丘尼有りて佛所に往詣し此の如き義を問へり。爾の時世尊は是の如きの句、是の如きの味、是の如きの義を以て、諸の比丘尼の爲に說きたまひき。是の故に當に奇特なりと知るべし。大師、弟子の所說は同句、同味、同義にして所謂第一句義なり』と。時に闍知羅比丘尼、尊者阿難の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（三）五五八 闍知羅比丘尼の如く迦羅跋比丘尼も亦た爾なり。

（四）五五九（五六八）（阿難經）[六二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、倶睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。時に異比丘有り、無相心三昧を得て是の念を作さく『我れ若し尊者阿難の所に詣りなば尊者阿難に問はん。「若し比丘の無相心三昧に勇まず沒せず、解脱し已つて住し、住し已つて解脱せば、此の無相心三昧は何の果にして世尊は此れを何の功德なりと說きたまふや」と。尊者阿難、若し我れに問うて言はん「比丘、汝此の無相心三昧を得たるや」と。我れは未だ曾て有らずと實問異答して我れ當に尊者阿難に隨逐すべし。脫し餘人有りて此の義を問はゞ因て聞くことを得ん』と。彼の比丘即ち尊者阿難に隨ひて六年中を經たるも餘人の此の義を問ふ者有ること無かりき。即ち自ら尊

【六一】 A. IX, 37. 闍知羅比丘尼、阿難に無相心三昧の果と功德を問ひ、世尊と同句、同味、同義を得て喜ぶ。前經に同じ。

【六二】 巴になし。一比丘、阿難に無相心三昧について問ふ。

陀施[五六]（だせ）と曰ふ。身病苦に遭へり。尊者摩訶迦旃延、陀施長者の身苦患（くげん）に遭へりと聞きて晨朝に衣を著け鉢を持ち八城に入りて乞食し、次いで陀施長者の舍に到りぬ。訶梨長者經に廣說せるが如し。

（第四弟子所說誦、第五阿難相應第一部（原第二十卷の末））[五七]

（阿難品）[五八]

（一）一三二六（五六六）（無相心三昧經）[五九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、娑祇城の安禪林の中に住まりたまへり。爾の時衆多の比丘尼、佛の所に詣り稽首して足に禮したてまつり退きて一面に住しぬ。爾の時世尊、衆多の比丘尼の爲に種種に說法し、示教照喜したまへり。示教照喜し已つて默然として住したまへり。時に諸の比丘尼、佛に白して言さく『世尊、若し[六〇]無相心三昧に勇まず沒せず、解脫し已つて、住し住し已つて解脫せば、此の無相心三昧を、世尊は是れ何の果、何の功德なりと說きたまふや』と。佛、諸の比丘尼に告げたまはく『若し無相心三昧に勇まず沒せず、解脫し已つて住し、住し已つて解脫せば、此の無相心三昧は智の果、智の功德なり』と。時に諸の比丘尼、世尊の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

時に衆多の比丘尼、尊者阿難の所に往詣し、稽首して足に禮し退きて一面に坐し、尊者阿難に白さく『若し無相心三昧に勇まず沒せず、解脫し已つて住し、住し已つて解脫せば、此の三昧は是れ何の果、何の功德なりと說くや』と。尊者阿難、諸の比丘尼に語るらく『姉妹、若し無相心三昧に勇まず沒せず、解脫し已つて住し、住し已つ解脫せば、世尊は是れ智の果、智の功德なりと說きたまへり』と。諸の比丘尼言はく『奇なる哉尊者阿難、大師及び弟子は同句、同味、同義にして所謂第一句義なり。今諸の比丘尼、世尊の所に詣り、是の如き句、是の如き味、是の如き義を以て世尊に問ひしに世尊も亦た已に是の如きの句、是の如きの味、是の如きの義もて我れ等が爲に說きたまひ、尊者阿難の所說の如く異らざりき。是の故に奇特なり。大師及び弟子は同句、同味、同義な

【五六】 Dasama 商首の名。

【五七】 以下阿難に關する經を集めたり。巴利には此の章なし。

【五八】 本卷の四經と次卷の七經と十一經を以て一品とす。

【五九】 巴になし。比丘尼、無相心三昧を佛に問ひ、次に阿難に問ふ。答ふる所同じ。比丘尼佛と弟子と同句、同味、同義なるを奇特となす。

【六〇】 一切の形相に執はれざる三昧。

に佛の功徳を念ずべし。此れは如來應等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊なりと。法の功徳を念じては、世尊の正法律に於て現法に諸の熱惱を離れて、非時に通達し緣もて自ら覺悟すと。僧の功徳を念じては善く向ひ、正しく向ひ、直く向ひ、等しく向ひて隨順の行を修し、謂ゆる須陀洹に向ひては須陀洹を得、斯陀含に向ひては斯陀含を得、阿那含に向ひては阿那含を得、阿羅漢に向ひては阿羅漢を得、是の如き四雙八士を、是れを世尊の弟子僧の戒・定・慧・解脱・解脱知見を具足し、供養恭敬、尊重の處と名づく。世間無上の福田たるに堪へんと。戒の功徳を念じては、自ら正戒を持ち、非盜取戒・究竟戒・可讃歎戒・梵行戒・不憎惡戒を毀たず缺かず、斷ぜず、壞せざらんと。施の功徳を念じては、自ら布施を念じて心自ら欣慶し、慳貪を捨除し、家に在居すと雖も解脫して、心施・常施・樂施・具足施・平等施あり。天の功徳を念じては、四王天・三十三天・炎摩天・兜率天・化樂天・他化自在天を念じ清淨に戒を信じ、此に於て命終して彼の天の中に生ず。我れも亦た是の如く、清淨に信・戒・施・聞・慧もて彼の天の中に生ぜん。長者是の如く覺り、四不壞淨に依りて六念處を增せよ』と。長者、尊者摩訶迦旃延に白さく『世尊は四不壞淨に依りて六念處を增すことを說きたまへり我れ悉く成就せん。我れ當に念佛の功徳、念法・念僧・念戒・念施・念天を修習すべし』と。尊者摩訶迦旃延、長者に語つて言はく『善い哉長者、能く自ら記悅し、阿那含を得たり』と。是の時長者、尊者摩訶迦旃延に白さく『願くは此に於て食したまへ』と。尊者摩訶迦旃延、默然として請を受けぬ。訶梨聚落の主なる長者、尊者摩訶迦旃延の請を受けしを知り已つて、種種淨美の食を具へ手自から供養せり。飯食し訖して鉢を澡ぎ、洗漱し畢はりて、長者の爲に種種に說法し示教照喜せり。示教照喜し已つて座より起ちて去りにき。

(二〇) 一二三五 (五五五)(訶梨經)[五四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者摩訶迦旃延は釋氏の訶梨聚落に於て住まれり。時に[五五]八城に長者有り。名づけて

【五四】 巳になし。迦旃延、陀施長者の病牀を見舞ふ。
【五五】 Aṭṭhaka 市の名。

の究竟なり、無垢を究竟し、梵行を究竟して畢竟清淨なり」と言ひしが如きは、云何が此の法律に於て邊際を究竟し、無垢を究竟し、梵行を究竟して畢竟清淨なるや』と、尊者迦旃延、長者に語つて言はく『若し比丘の眼界・心法の境界を取らば繫著し使す。彼れ若し盡き欲無く息み沒しなば此の法律に於て邊際を究竟し、無垢を究竟し梵行を究竟して畢竟清淨なり。耳・鼻・舌・身・意の意界・心法の境界を取らば繫著し使す。若し盡き離れ滅し息み沒しなば此の法律に於て邊際を究竟し、無垢を究竟し、梵行を究竟して畢竟清淨なり』と。時に訶梨聚落の主なる長者、尊者摩訶迦旃延の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

(九) 一三二四 (五五四)(訶梨經)[五一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者摩訶迦旃延は釋氏の訶梨聚落に住まれり。時に訶梨聚落の主なる長者、身病苦に遭へり。尊者摩訶迦旃延、訶梨聚落の主なる長者の身病苦に遭へるを聞き、聞き已つて晨朝に衣を著け鉢を持ち、訶梨聚落に入りて乞食し、次第に訶梨聚落の主なる長者の舍に入りぬ。訶梨聚落の主なる長者。遙かに尊者摩訶迦旃延を見て座より起たんと欲しき。尊者摩訶迦旃延、長者の起たんと欲せるを見卽ち之れに告げて言はく『長者起つこと莫れ。幸ひに餘座有り、我れ自ら餘座に坐すべし』と。長者に語つて言はく『云何が長者、病忍ぶ可しや不や。身の諸の苦病漸く差愈るや不や。増すこと無きを得る耶』と。長者答へて言はく『尊者、我が病忍び難し、身の諸の苦痛は轉た増して損する無し』と、卽ち三種の譬を說くこと前の叉摩比丘經に說くが如し。尊者摩訶迦旃延、長者に語つて言はく『是の故に汝當に[五二]佛に不壞淨、法に不壞淨、僧に不壞淨を修し、聖戒成就すべしと當に是の如く學すべし』と。長者答へて言はく『佛の說かせたまふ所の四不壞淨の如きは、我れ悉く成就せり。我れは今、佛の不壞淨、法の不壞淨、僧の不壞淨を成就し、聖戒成就せり』と。尊者摩訶迦旃延、長者に語つて言はく『汝當に此の四不壞淨に依りて[五三]六念を修習すべし。長者當

āgā nirodhā cāgā paṭinissaggā cittaṃ suvimuttan ti vuccati.

[五〇] cf. S. 35. 130. Haliddako 前經に同じ。

[五一] cf. A. IV. 26. 摩訶迦旃延、訶梨聚落主の病床を見舞ひ、四不壞淨と六念とを說く。

[五二] 不壞淨とは壞れざる淨き信仰(aveccappasāda)なり。

[五三] 六念とは念佛・念法・念僧・念戒・念施・念天なり。

是の故に世尊、義品を說いて摩揵提の所問に答へたまひし偈は

「若し一切の流れを斷じ　亦た其の流源を塞ぎ　聚落に相習近するを　牟尼は積歎したまはず　五欲を虛空にせば　永へは已に還へり滿たず　復た世間と　共に言語もて諍訟せず」

となり。是れを如來の說かたまふ所の偈の義分別と名づく』と。爾の時訶梨聚落の長者、尊者摩訶迦旃延の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

(七) 〔三三二〕(五五二)[四七](訶梨經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者摩訶迦旃延は釋氏の訶梨聚落精舍に住まれり。時に訶梨聚落の主なる長者、尊者摩訶迦旃延の所に詣り、稽首して足に禮し退きて一面に坐し、尊者摩訶迦旃延に白さく『世尊は界隔山の天帝釋の石窟に於て說いて憍尸迦[四八]、若し沙門婆羅門の無上の愛盡きて解脫し、心正しく善く解脫せば、邊際を究竟し、無垢を究竟し、梵行を究竟して畢竟淸淨なり」と言ひしが如きは、云何が此の法律に於て、邊際を究竟し、無垢を究竟し、梵行を究竟せば畢竟淸淨なるや』と。尊者摩訶迦旃延、長者に語つて言はく[四九]『謂ゆる眼・眼識・眼識に識らるゝ色、相依りて喜を生ず。彼れ若し盡きて欲無く滅し息み沒せば此の法律に於て邊際を究竟し、無垢を究竟し、梵行を究竟して畢竟淸淨なり。耳・鼻・舌・身・意・意識・意識に識らるゝ法、相依りて喜を生ず。彼れ若し盡きて滅し息み沒せば、比丘此の法律に於て、無垢を究竟し、梵行を究竟し、畢竟淸淨なり』と。時に訶梨聚落の主なる長者、尊者摩訶迦旃延の所說を聞きて、歡喜し隨喜し禮を作して去りにき。

(八) 〔三三三〕(五五三)[五〇](訶梨經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者摩訶迦旃延は釋氏の訶梨聚落に在りき。聚落の主なる長者、尊者摩訶迦旃延の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐し尊者摩訶迦旃延に問はく『世尊は界隔山の石窟の中にて天帝釋の爲に說いて「憍尸迦、若し沙門婆羅門、無上の愛盡きて解脫し、心善く解脫せば邊際

ṃviññāṇo siyaṃ anāgataṃ addhānaṃ ti. Evaṃ kho gahapati purekkharāno hoti.

【四六】 Kathañ ca gahapati kathaṃ viggayha janena kattā hoti. Idha gahapati ekacco evarūpiṃ kathaṃ kattā hoti. Na tvaṃ imaṃ dhammavinayaṃ ājānāsi ahaṃ imaṃ dhammavinayaṃ ājānāmi kiṃ tvaṃ imaṃ dhammavinayaṃ ājānissasi, micchāpaṭipanno, tvaṃ asi ahaṃ asmi sammāpaṭipanno, pure vacanīyaṃ pacchā avaca pacchā vacanīyaṃ pure avaca, sahitaṃ me asahitaṃ te adhiciṇṇaṃ te viparāvattaṃ, āropito te vādo caravādappamokkhāya niggahito si nibbeṭhehi vā sace pahositi.

【四七】 S. 22. 4. Hāliddikāni(2) 訶梨、阿那律に佛の帝釋に答へられたる文について問ふ。

【四八】 Ye te Samaṇabrāhmaṇā taṇhāsaṅkhayavimuttā, te accantaniṭṭhā accantayogakkhemino accantabrahmacārino accantapariyosānā seṭṭhā devamanussānaṃ 'ti.

【四九】 Rūpadhātuyā kho gahapati yo chando yo rāgo yā nandi yā taṇhā ye upāyupādānā cetaso adhiṭṭhānābhinivesānusayā, tesaṃ khayā vir-

る眼識は眼識に識らるゝ色に依りて愛喜を生ず。彼れ若し盡きなば欲無く滅し息み沒す。是れを不流と名づく。耳鼻舌身意、意識は意識に識らるゝ法に依りて貪欲を生ず。[四〇]彼れ若し盡きなば欲無く滅し息み沒す。是れを不流と名づく』と。復た問はく『[四一]云何してか』と。尊者摩訶迦旃延答へて言はく『謂ゆる眼及び色に緣りて眼識を生じ、三事和合して觸を生ず、觸に緣りて受の樂受・苦受・不苦不樂受を生ず。此れに依りて流に染著す。耳鼻舌身・意・意識・意識法の三事和合して觸を生ず。觸に緣りて受の樂受・苦受・不苦・不樂受を生ず。此の受に依りて愛喜の流を生ず。是れを流源と名づく。云何が亦た其の[四二]流源を塞ぐや。謂ゆる眼界もて取りて心法は境界に繫著し使す。彼れ若し盡きて欲無く滅し息み沒せば是れを流源を塞ぐと名づく。耳鼻舌身意もて取りて心法は境界に繫著し使す。彼れ若し盡きて欲無く滅し息み沒せば是れを亦た其の流源を塞ぐと名づく』と。復た問はく『[四三]云何が習近し相讃歎すと名づくるや』と。尊者摩訶迦旃延答へて言はく『在家出家共に相習近して喜を同くし憂を同くし樂を同くし苦を同くし、凡そ爲作する所は悉く皆共同なる是れを習近し相讃歎すと名づく』と。復た問はく『云何が讃歎せざるや』と。在家出家相習近せず、喜びを同じくせず憂を同じくせず苦を同じくせず樂を同じくせず、凡そ爲作する所は悉く相悅可せざる是れを相讃歎せずと名づく』と。『云何が[四四]欲を空せざるや』と。『謂ゆる五欲の功德なり。眼識せらるゝ色に愛樂する念長養して愛欲深く染著し、耳の聲に、鼻の香に、舌の味に、身の觸に愛樂する念長養して愛欲深く染著し、此の五欲に於て貪を離れず、愛を離れず、念を離れず、渴を離れざるなり。是れを欲を空ぜずと名づく』と。「云何が欲を空ずと名づくるや』と。『謂ゆる此の五欲の功德に於て貪を離れ、欲を離れ、愛を離れ、念を離れ渴を離るゝ、是れを欲を空ずと名づく。[四五]我の繫著使を說くは是れを心法還つて復た滿つと名づく。[四六]彼の阿羅漢比丘は諸漏已に盡きて其の根本を斷つこと、多羅樹の頭を截るが如く未來世に於て更らに復た生ぜず、云何が當に復た他と諍訟すべけん。

處流 (okasāri) といはる。受……。想……。行……。」

【三九】 anokasāri

【四〇】 巴には如來は貪等を根本より斷じたれば不流と言はるとあり。

【四一】 以下の說明巴になし。

【四二】 aniketsāri

【四三】 kathaṃ ca santhava-jāto hoti

【四四】 kathaṃ ca kāmehi aritto hoti

【四五】 Kathaṃ ca gahapati purakkhāno hoti. Idha gaha-pati ekaccassa evaṃ hoti. Evaṃrūpo siyaṃ anāgatam addhānaṃ, evaṃvedano; eva-

は第五の苦處より出でて勝處に昇り、一乘道もて衆生を淨め、苦惱を離れ憂悲を滅して如實の法を得るを說きたまふと名づく。復た次に聖弟子は天德を念じ、四王天・三十三天・炎摩天・兜率天・化樂天・他化自在天を念じ、清淨の信心もて、此に於て命終して彼の諸天に生ず。我れも亦た是の如く、信戒施聞慧もて、此に於て命終して彼の天の中に生ず。是の如く聖弟子、天の功德を念ずる時は欲覺・瞋恚害覺を起こさず。是の如き聖弟子は染著心より出づ。何に於てか染著する。謂ゆる五欲の功德なり。此の五欲の功德に於て貪恚癡を離れて正念正知に安住し直道に乘じて天の念を修せば正しく涅槃に向ふ。是れを如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所は第六の苦處より出でて勝處に昇り、一乘道もて衆生を淨め、苦惱を離れ憂悲を滅して如實の法を得るを說きたまふと名づく』と。尊者摩訶迦旃延、此の經を說き已りしに、諸の比丘、其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六) 三三二 (五五一)(訶梨經)[三四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者摩訶迦旃延は、釋氏の[三五]訶梨聚落精舍に住まれり。時に訶梨聚落の長者、尊者摩訶迦旃延の所に詣り、稽首して足に禮し退きて一面に坐し、尊者摩訶迦旃延に白さく『世尊義品[三六]にて摩揵提の所問に答へたまひし偈の如くんば、

「[三七]一切の諸の流れを斷じ　亦た其の流の源を塞ぎ　聚落に相習近するは　牟尼は稱歎したまはず　五欲を虛空にし　永へに以て還へり滿たさず　世間と諍ひて言訟するを畢竟復た爲さず」

尊者摩訶迦旃延、此の偈は何の義か有る』と。尊者摩訶迦旃延、長者に答へて言はく『[三八]眼の流とは、眼識、貪を起こさば眼界に依りて貪欲流出するが故に名づけて流と爲す。耳鼻舌身意の流とは謂ゆる意識貪を起こさば意界に依りて貪識流出するが故に名づけて流と爲す』と。長者復た尊者摩訶迦旃延に問はく『云何が名づけて[三九]不流と爲すや』と。尊者迦旃延、長者に語つて言はく『謂ゆ

【三四】 S. 22. 3. Hāliddikāni (1) 訶梨長者、經集摩揵提經中の一偈の義を迦旃延に問ふ。

【三五】 巴には Avantīsu kuraraghare pabbate とあり、訶梨とは長者の名とせり。

【三六】 Suttanipāta, Māgandiyasutta.

【三七】 Suttanipāta, 844.
Okaṃ pahāya aniketasārī,
Gāme akubbaṃ muni santhavāni,
Kāmehi ritto apurakkharāno
Kathaṃ na viggayha janena kayirā.

【三八】 巴には「色界は識の依處(oka)なり。色界に於て貪によりて縛せられたる識は依

に昇り、一乘道もて衆生を淨め、苦惱を離れ憂悲を滅して如實の法を得るを說きたまふと名づく。復た次に聖弟子は、僧法の善く向ひ、正しく向ひ、直く向ひ、等しく向ひて隨順行を修するを念ず。謂ゆる須陀洹に向ひては須陀洹果を得、斯陀含に向ひては斯陀含を得、阿那含に向ひては阿那含を得、阿羅漢に向ひては阿羅漢を得るなり。是の如き四雙八士は是れを世尊の弟子僧の戒具足し、定具足し、慧具足し、解脫具足し、解脫知見具足して供養恭敬禮拜する處、世間無上の福田と名づく。聖弟子の是の如く僧を念ずる時、爾の時、聖弟子は欲覺、瞋恚、害覺を起さず。是の如き聖弟子は染著心より出づ。何等をか染著心と爲す。謂ゆる五欲の功德なり。此の五欲の功德に於て貪恚癡を離れて、正念正知に安住し直道に乘じて念僧を修習せば正しく涅槃に向ふ。是れを如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所は第三苦處より出でて勝處に昇り、一乘道もて衆生を淨め、苦惱を離れ憂悲を滅して如實の法を得るを說きたまふと名づく。復た次に聖弟子は戒德を念じ、不缺戒・不斷戒・純厚戒・不離戒・非盜取戒・善究竟戒・可讃歎戒・梵行不憎惡戒を念ず。若し聖弟子の此の戒を念ずる時、自ら身中に成就せし所の戒を念ぜば、爾の時に當つて欲覺・瞋恚害覺を起さず。是の如き聖弟子は染著心より出づ。何等をか染著心と爲す。謂ゆる五欲の功德なり。此の五欲の功德に於て貪恚癡を離れて正念正知に安住し、直道に乘じて戒念を修せば正しく涅槃に向ふ。是れを如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所は第四苦界より出でて勝處に昇り、一乘道もて衆生を淨め、苦惱を離れ憂悲を滅し如實の法を得るを說きたまふと名づく。復た次に聖弟子は自ら施法を念ず。心自ら欣慶し、我れ今慳貪の苦を離れ、家に在居すと雖も解脫して、心施・常施・捨施・具足施・平等施あり。若し聖弟子、自ら施す所の法を念ずる時は、欲覺・瞋恚・害覺を起さず。是の如き聖弟子は染著心より出づ。何に於てか染著する。謂ゆる五欲の功德なり。此の五欲の功德に於て貪恚癡を離れて正念正知に安住し、直道に乘じて施念を修せば正しく涅槃に向ふ。是れを如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所

時に尊者摩訶迦旃延、默然として請ひを受けぬ。時に迦梨迦優婆夷、尊者摩訶迦旃延の請ひを受けしを知り已つて卽ち種種淨美の飲食を辦じ、恭敬尊重し、自手から食を奉れり。時に優婆夷、尊者摩訶迦旃延の食し已つて、鉢を洗ひ澡漱し訖れるを知りて、一卑坐を敷き、尊者摩訶迦旃延の前に於て恭敬して法を聽けり。尊者摩訶迦旃延、迦梨迦優婆夷の爲に種種に說法し示敎照喜せり。示敎照喜し已つて座より起ちて去りにき。

（五）三三〇（五五〇）（離經）[三三]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者摩訶迦旃延は舍衛國の祇樹給孤獨園に在りき。尊者摩訶迦旃延、諸の比丘に語るらく『佛世尊如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所は六法の苦處より出でて勝處に昇るを說き、一乘道の諸の衆生を淨めて諸の惱苦を離れ、憂悲悉く滅して眞如法を得るを說きたまふ。何等をか六と爲す。謂ゆる聖弟子は、如來應等正覺の行じたまふ所の法は淨く如來應等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊なりと念ず。聖弟子は如來の行じたまふ所に應ずる法を念ずるが故に、貪欲の覺を離れ、瞋恚の覺を離れ、害の覺を離る。是の如き聖弟子は染著心より出づるなり。何等をか染著心と爲す。謂ゆる五欲の功德なり。此の五欲の功德に於て貪恚癡を離れて正念正智に安住し、直道に乘じて念佛を修習せば正しく涅槃に向ふ。是れを如來應等正覺知りたまふ所見たまふ所は第一、苦處より出でて勝處に昇り、一乘道もて衆生を淨め、苦惱を離れ、憂悲を滅して如實の法を得るを說きたまふと名づく。復た次に聖弟子は、正法を念ず。世尊の現法律を念じ諸の熱惱を離れて非時に通達し。卽ち現法の緣に於て自ら覺悟す。爾の時、聖弟子此の正法を念ずる時、欲覺、瞋恚害覺を起こさず。是の如き聖弟子は染著心より出づ。何等をか染著心と爲す。謂ゆる五欲の功德なり。此の五欲の功德に於て、貪恚癡を離れて正念正知に安住し、直道に乘じて念法を修習せば正しく涅槃に向ふ。是れを如來應等正覺の知りたまふ所見たまふ所は第二の苦處はり出でて勝處

【三三】A. VI. 26. Vimutti.

摩訶迦旃延に白さく『世尊の說かせたまふ所の如く、[三〇]僧耆多童女の所問に答へよ。世尊の、僧耆多童女の所問に說きたまひし偈は

[三一]「實義、心に存せば　寂滅して亂れず　諸の勇猛　愛す可き端正の色を降伏し　一心に獨り靜思し　妙禪の樂を服食せば　是れ則ち世間の伴黨より　遠離すと爲す。　世間の諸の伴黨の　我れに習近する者無し」

となり。尊者摩訶迦旃延、世尊の此の偈は其の義云何』と。尊者摩訶迦旃延、優婆夷に語つて言はく『姉妹、一沙門婆羅門有りて言はく[三二]「地一切入處正受は此れ則ち無上なり。此の果を求めんが爲に、姉妹、若し沙門婆羅門、地一切入處に於て正受し淸淨鮮白ならば、則ち其の本を見、患を見、滅を見、滅道跡を見るなり。本を見、患を見、滅を見、滅道跡を見るを以ての故に、眞實の義を得て心に存し、寂滅して亂れざるなり。姉妹、是の如く水一切入處、火一切入處、風一切入處、靑一切入處、黃一切入處、赤一切入處、白一切入處、空一切入處、識一切入處を無上と爲す者は、此の果を求めんが爲に、姉妹、若しは沙門婆羅門、乃至識處一切入處に於て正受し、淸淨鮮白ならば、本を見、患を見、滅を見、滅道跡を見るなり。本を見、患を見、滅を見、滅道跡を見るを以ての故に、是れ則ち實義、心に存し、寂滅して亂れず、善く見、善く入るなり。是の故に世尊、僧耆多童女の所問に答へたまひし偈は

「實義、心に存せば　寂滅して亂れず　諸の勇猛　愛す可き端正の色を降伏し　一心に獨り靜思し　妙禪の樂を服食せば　是れ則ち　世間の伴黨より遠離すと爲す　世間の諸の伴黨の　我れに習近する者無し

となり。是の如く姉妹、我れは解す。世尊は是の如き義を以ての故に、是の如き偈を說きたまひしならん』と。優婆夷言はく『善い哉尊者、眞實義を說けり。唯だ願くは我が請食を受けたまへ』と。

【三〇】 Kumāripañha.

【三一】 Atthassa pattiṃ hadayassa santiṃ jetvāna senaṃ piyasātarūpaṃ eko 'haṃ jhāyi sukham anubodhiṃ tasmā janena na karomi sakkhiṃ sakkhī na sampajjati kenaci me ti (cf. S. IV. 3.5 Dhitaro.)

【三二】 巴には Paṭhavīkasiṇa-samāpattiparamā kho bhagini eke samaṇabrāhmaṇā atthābhinibbattesuṃ. とあり、但し、地一切入處は梵語の paṭhavī-kṛtsnāyatan なり。新には之を(十)遍處と譯す。禪三昧の一種にして青、黃、赤白、地、水、火、風、空識の一々に、ついて無邊なりと觀ず。

耶。阿羅呵の所に於て何をか聞く所と爲す』と。王、尊者摩訶迦旃延に白さく『婆羅門、十不善業跡を作さば當に惡趣に墮つべし。阿羅呵の所作は是の如く聞けり。刹利、居士、長者も亦た是の如く說く』と。復た問はく『大王、若し婆羅門、十善業跡を行じ、殺生を離れ乃至正見せば當に何所にか生ずべき。善趣と爲す耶、惡趣と爲す耶。阿羅呵の所に於て何をか聞く所と爲す』と。王、尊者摩訶迦旃延に白さく『若し婆羅門、十善業跡を行ぜば當に善趣に生ずべし。阿羅呵の所作は是の如く聞けり。是の如く刹利、居士、長者も亦た是の如く說く』と。復た問はく『云何が大王、是の如き四姓は平等なりと爲すや不や。種種の勝れること差別せるが如きこと有りと爲すや』と。王、尊者摩訶迦旃延に白さく『是の如き義ならば則ち平等なりと爲す。種種の勝れること差別せるが如きこと有ること無し』と。「是の故に大王、當に知るべし。四姓は悉く平等なるのみ。種種の勝れること差別せるが如きこと有ること無し。世間に言說するが故に、婆羅門第一なる、婆羅門は白く餘は悉く黑し。婆羅門は清淨なるも非婆羅門には非ず。婆羅門の生にして、生ずるには口より生ず。婆羅門の作、婆羅門の化、婆羅門の所有なるなり。當に知るべし。業は眞實なり。業に依れりと。王、尊者摩訶迦旃延に白さく『實に所說の如し。皆是れ世間に言說するが故に、婆羅門の勝れる有り、餘の者は卑劣なり。婆羅門は白く、餘は悉く黑し。婆羅門は清淨なるも非婆羅門には非ず。婆羅門の生にして、生ずるには口より生ず。婆羅門の化、婆羅門の所有なるなり。皆是れ業にして、眞實に業に依れり』と。爾の時摩偷羅王、尊者摩訶迦旃延の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（四）一三二九（五四九）（迦梨經）[27]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者摩訶迦旃延、[28]阿槃提國の拘羅羅咤精舍に住まれり。晨朝に衣を著け鉢を持ち、拘羅羅咤精舍に入りて次第に乞食し、[29]迦梨迦優婆夷の舍に至りぬ。時に優婆夷、尊者摩訶迦旃延を見、即ち床座を敷き請ふて坐に就かしめ、前んで尊者摩訶迦旃延の足に禮し、退きて一面に住し、尊者

【二七】 A. X. 26. Kali. 迦梨迦優婆夷、偈者多童女の問に對する世尊の答について問ふ。迦旃延十一切入處（十遍處）を說く。
【二八】 Avantisu kuraraghare pavatte pabbate.
【二九】 Kali upāsikā 巴には迦梨優婆夷が摩訶迦旃延のもとに至る。

して侍衛せしめ先に起き後に臥し及び諸の使を悉く意の如くならしむるや不や』と。答へて言はく『意の如し』と。復た問はく『大王、刹利王と爲り、居士王と爲り、長者王と爲るに、自らの國土に於て、所有る四姓を悉く皆召來し、財を以ち力を以て其れをして侍衛せしめ、先に起き後に臥し、及び諸の使を皆悉く意の如くならしむるや不や』と。答へて言はく『意の如し』と。復た問はく『大王、是の如く四姓は悉く皆平等なり。何の差別か有らん。當に知るべし、大王、四種の姓なるものは皆悉く平等にして、勝れること差別せるが如きの異有ること無し』と。摩偸羅王、尊者摩訶迦旃延に白さく『實に爾なり。尊者、四姓は皆等しくして種種に勝れること差別せるが如きこと有ること無し』と。『是の故に大王、當に知るべし。四姓は世間の言説に差別せるのみなり。乃至業に依るに眞實に差別無きなり。復た次に大王、此の國土の中には婆羅門有りて偸盗者有り。當に之れを如何がすべき』と。王、尊者摩訶迦旃延に白さく『婆羅門の中に、偸盗者有らば或は鞭ち或は縛し或は國より驅出し或は其れに金を罰し或は手足耳鼻を截り、罪の重きは則ち殺し、及び其の盗める者は然かも婆羅門なるも則ち名けて賊と爲す』と。復た問はく『大王、若し刹利、居士、長者の中に、偸盗者有らば當に復た如何すべき』と。王、尊者摩訶迦旃延に白さく『亦たは鞭ち亦たは縛し亦たは國より驅出し亦たは其れに金を罰し、亦復た手足耳鼻を斷截し、罪の重きは則ち殺すなり』と。『是の如く大王、豈に四姓は悉く平等なるに非ず耶。種種の差別、異り有りと爲すや不や』と。王、尊者摩訶迦旃延に白さく『是の如き義ならば實に種種の勝れること差別せるが如きこと無し』と。尊者摩訶迦旃延、王に語つて言はく『當に知るべし大王、四種の姓とは世間の言説に言ふなり「婆羅門は第一なり。餘は悉く卑劣なり。婆羅門は白く餘人は悉く黑し。婆羅門は淸淨なるも非婆羅門には非ず」と。當に業に依るべし。眞實に業に依れる耶』と。復た問はく『大王、婆羅門・殺生・偸盗・邪婬・妄語・惡口・兩舌・綺語・貪・恚・邪見の十不善業跡を作し已らば、惡趣に生ずと爲す耶、善趣なる

濁を離れず、梵志、若し是の如くんば、復た八十九十にして髪白く齒落つと雖も、是れを年少の法を成就せりと名づく。年二十五にして膚白く髪黒く盛壯美色なりと雖も、五欲の功德に於て、貪を離れ、欲を離れ、愛を離れ、念を離れ、濁を離れ、若し是の如くんば、復た年少の年二十五にして膚白く髮黑く盛壯美色なりと雖も老人の法を成就すれば宿士の數と爲す』と。爾の時梵志、尊者摩訶迦旃延に語るらく『尊者の所說の義の如きを我れ自ら省察するに老いたりと雖も則ち少し。汝等少しと雖も耆年の法を成じぬ。世間多事なり便ち還らんことを請はしめよ』と。尊者摩訶迦旃延言はく『梵志、汝自ら時を知れ』と。爾の時梵志、尊者摩訶迦旃延の所說を聞きて、歡喜し隨喜して其の本處に還へらぬ。

(三) 二三二八 (五四八)(摩偸羅經)[二六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。尊者摩訶迦旃延は稠林の中に在りて住まれり。時に摩偸羅の國王、是れ西方の王子なり、尊者摩訶迦旃延の所に詣り、摩訶迦旃延の足に禮し、退きて一面に坐し、尊者摩訶迦旃延に問はく『婆羅門は自ら言ふ。「我れは第一なり。他人は卑劣なり。我れは白く餘人は黑し。婆羅門は清淨なるも非婆羅門には非ず。是れ婆羅門の子にして口より生じ、婆羅門の化する所なり。是れ婆羅門の所有なり」と。尊者摩訶迦旃延、此の義云何』と。尊者摩訶迦旃延、摩偸羅王に語つて言はく『大王、此れは是れ世間の言說のみ、世間の言說に言はく「婆羅門は第一なり。餘人は卑劣なり。婆羅門は白く餘人は黑し。婆羅門は清淨なるも非婆羅門には是れ非ず。婆羅門は婆羅門より生ず。生ずるには口より生じ、婆羅門の化する所なり。是れ婆羅門の所有なり」と。大王、當に知るべし。業眞實ならば、是れ業に依るものなり』と。王、尊者摩訶迦旃延に語るらく『此れは則ち略說なり。我が解せざる所なり。願くは重ねて分別せよ』と。尊者摩訶迦旃延言はく『今當に汝に問ふべし。問ひに隨つて我れに答へよ』と。即ち問うて言はく『大王、汝婆羅門の王と爲るに、自らの國土に於て、諸の婆羅門、刹利、居士、長者此の四種の人を悉く皆召來し、財を以ち力を以つて、其れを

【二六】 M. 84. Madhura.

羅國なる舍衞城の祇樹給孤獨園に在せり』と。爾の時梵志座より起ちて衣服を整へ、偏へに右の肩を袒にし右の膝を地に著け、佛の住せらるる處に向ひて合掌し讚歎すらく、

[二二]『南無南無佛世尊如來應供等正覺、能く欲貪の諸の繫著を離れ、悉く能く貪欲の縛及び諸の見欲を遠離して根本を淨めたまへり』と。時に持澡灌杖梵志、尊者摩訶迦旃延の所說を聞きて、歡喜し隨喜し座より起ちて去りにき。

（二）〔三二七〕[二三]（五四七）（經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。尊者摩訶迦旃延は[二四]婆羅那の烏泥池の側に在り、衆多の比丘と食堂に集まりて持衣の事を爲せり。時に執杖梵志有り、年耆け根熟せり、食堂の所に詣り一面に於て杖を柱として住し、須臾默然し已つて諸の比丘に語るらく『諸の長老、汝等何が故ぞ老宿の士を見て、共に語り問訊し恭敬して坐することを命ぜざるや』と。時に尊者摩訶迦旃延も亦た衆の中に在りて坐せり。時に尊者摩訶迦旃延、梵志に語つて言はく『我が法は宿老の來る有らば皆共に語り問訊し、恭敬禮拜して之れに命じて坐せしむ』と。梵志言はく『我れ此の衆の中を見るに我れより老いし者有る無きも、恭敬禮拜して坐することを命ぜず。汝云何が我が法は宿老有るを見ば恭敬し禮拜して其れに命じて坐せしむと言ふや』と。摩訶迦旃延言はく『梵志、若し耆年の八十九十にして、髮白く齒落つるも年少の法を成就せるは此れ宿士に非ず。復た年少にして年二十五にして色白く髮黑く盛壯美滿なりと雖も、而かも彼れ耆年の法を成就せば宿士の數と爲す』と。梵志問うて言はく『云何が名づけて八十九十にして髮白く齒落ち、而かも復た年少の法を成就せりと爲し、年二十五にして膚白く髮黑く盛壯美色なるも宿士の數と爲すや』と。尊者摩訶迦旃延、梵志に語つて言はく[二五]『五欲の功德有り、謂ゆる眼識せらるる色を愛樂し念し、耳識せらるる聲、鼻識せらるる香、舌識せらるる味、身識せらるる觸を愛樂し念ずるなり。此の五欲の功德に於て貪を離れず、欲を離れず、愛を離れず、念を離れず、

〔二二〕 Namo tassa Bhagavato arahato sammāsambuddhassa.

〔二三〕 A. II. 4.7 Kaṇḍarāyana. 增一九、九(大二、五四五b) 五欲に於て、貪、欲、愛、念、渴を離れざるものは八十九十歲になると雖も宿士に非ず、二十五歲あるも五欲に於て貪等を離れたるものは宿士なり。

〔二四〕 巴には madhurāyaṃ Gundāvana

〔二五〕 So ca kāme paribhuñjati kāmamajjhe vasati kāmapariḷāhena pariḍayhati kāmavitakkehi khajjati kāmapariyesanāya ussukko atho so bālo tveva saṅkhaṃ gacchati.

まへり。爾の時尊者阿那律、舍衞國に在りて松林精舍に住まりき。時に尊者阿那律、諸の比丘に語るらく[16]『譬へば大樹の生ずるも而かも下に順ひて浚ふに隨ひ輸すに隨ふ。若し其の根を伐らば樹必ず當に倒れ、所に隨つて下に順ふが如く、是の如く比丘、四念處を修せば長夜に順趣し浚輸して遠離に向ひ、順趣し浚輸して出要に向ひ、順趣し浚輸して涅槃に向ふ』と。尊者阿那律此の經を說き已りしに、諸の比丘、其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

（第四弟子所說誦、第四 摩訶迦旃延相應）*

（大摩訶迦品）◎

（一）〔三三二六〕（五四六）（[17]澡灌杖經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者摩訶迦旃延、[18]跋蘭那聚落の烏泥池の側に在りき。[19]時に執澡灌杖梵志あり、摩訶迦旃延の所に詣り共に相問訊し慰勞し已つて、一面に於て坐し、摩訶迦旃延に問うて言はく『何の因、何の緣もて王は王と共に諍ひ、婆羅門居士は婆羅門居士と共に諍ふや』と。摩訶迦旃延、梵志に答へて言はく[20]『貪欲に繫著する因緣の故に王は王と共に諍ひ、婆羅門や居士、婆羅門や居士と共に諍ふなり』と。梵志復た問はく『何の因、何の緣もて出家は出家と而かも復た共に諍ふや』と。摩訶迦旃延答へて言はく[21]『見欲に繫著するを以ての故に、出家は出家と而かも復た共に諍ふなり』と。梵志復た問はく『摩訶迦旃延、頗し能く貪欲の繫著を離れ、及び此の見欲の繫著を離るること有りや不や』と。尊者摩訶迦旃延答へて言はく『梵志、我が大師なる如來應等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊有り、能く此の貪欲の繫著、及び見欲の繫著を離れたまへり』と。梵志復た問はく『佛世尊は今何所に在せるや』と。答へて言はく『佛世尊は今婆羅者人の中の拘薩

【一六】巴には恒河の東流を以て喩えたり。

＊巴相應部になし。

◎十經を一品とす。

【一七】A. II. 4. 6 Ārāmadaṇḍa. 執澡灌杖梵士、王と王の諍ひ、婆羅門と婆羅門、居士と居士、沙門と沙門の諍ひの原因を問ふ。迦旃延それは貪欲と見欲とを因とすと答ふ。見欲と貪欲を離れたるは勝世尊なりといふ。

【一八】Varaṇāyaṃ Kaddamadahatīre

【一九】Ārāmadaṇḍo brāhmaṇo

【二〇】Kāmarāga-vinivesa-vinibandha. paligedha-pariyuṭṭhānajjhosāna-hetukho brāhmaṇā khattiyā pi khattiyehi vivadanti

【二一】Diṭṭhirāga-vinivesa-vinibandha-paligedha-pariyuṭṭhānajjhosāna-hetu kho brāhmaṇa samaṇā pi samaṇehi vivadantīti.

（九）一二二三（五四三）[一三]（阿羅漢比丘經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に尊者阿那律、舍衞國の松林精舍に在りて住まれり。時に衆多の比丘有り、尊者阿那律の所に詣り、尊者阿那律と共に相問訊し慰勞し已つて、一面に於て坐し尊者阿那律に語つて言はく『若し阿羅漢比丘の諸漏已に盡くし、所作已に作し、重擔を捨離し、諸の有結を離れ、正智もて心善く解脫せるも亦た四念處を修する耶』と。尊者阿那律、比丘に語つて言はく『若し比丘の諸漏已に盡き、所作已に作し、重擔を捨離し、諸の有結を離れ、正智もて心善く解脫せる彼れも亦た四念處を修するなり。所以は何ん、得ざる者は得、證せざるものは證し、現法に樂住せんが爲の故なり。所以は何ん。我れも亦た諸の有漏を離れて阿羅漢を得、所作已に作し、心善く解脫せるも亦た四念處を修するが故に。得ざる者は得、到らざる者は到り、證せざる者は證し、乃至現法に安樂に住すればなり』と。時に諸の正士、共に論議し已つて、歡喜し隨喜し各座より起ちて去りにき。

（一〇）一二二四（五四四）[一四]（何故出家經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に尊者阿那律、舍衞國の松林精舍に在りき。時に衆多の外道の出家有り、尊者阿那律の所に詣り、共に相問訊し慰勞し已つて、一面に於て坐し、尊者阿那律に語るらく『尊者、何が故ぞ沙門瞿曇の法の中に於て出家せる』と。尊者阿那律言はく『修習せんが爲の故なり』と。復た問はく『何をか修習する所なる』と。答へて言はく『謂ゆる諸根を修め、諸力を修め、諸の覺分を修め、諸の念處を修むるなり。汝何等の修をか聞かんと欲する』と。復た問はく『根力、覺分、我れ其の名字をも知らず。況んや復た義を問はんをや。然かも我れ念處に聞かんと欲す』と。尊者阿那律言はく『諦らかに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。若し比丘の內身の身觀念處、乃至法の法觀念處なり』と。時に衆多の外道の出家、尊者阿那律の所說を聞きて、歡喜し隨喜し各座より起ちて去りにき。

（一一）一二二五（五四五）[一五]（向涅槃經） 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりた

【一三】 S. 52. 5. Kaṇṭaki(2)。阿那律衆多の比丘のために、阿羅漢も亦四念處を修するを說く。

【一四】 巴になし。阿那律、外道の出家の爲に、佛敎に出家せる所以を說く。特に四念處を說明す。

【一五】 cf. S. 52. 8. Salaḷāgāraṃ. 阿那律四念處を修すれば涅槃に順趣するを說く。

り。時に尊者阿那律、舍衛國の松林精舍に在り、病差へて未だ久しからざりき。時に衆多の比丘有り、阿那律の所に往詣し、問訊し慰勞し已つて、一面に於て坐し、尊者阿那律に問はく『安隱の樂に住せるや不や』と。阿那律言はく『安隱の樂に住せり、身の諸の苦痛も漸く已に休息せり』と。諸の比丘、尊者阿那律に問はく『何の所住に住せば身の諸の苦痛、安隱なることを得るや』と。尊者阿那律言はく『四念處に住せば身の諸の苦痛、漸く安隱なることを得、何等をか四と爲す。謂ゆる內身の身觀念處、乃至法の法觀念處なり。是れを四念處と名づく。此の四念處に住するが故に身の諸の苦痛、漸く休息することを得』と。時に諸の正士、共に論議し已つて、歡喜し隨喜し、各座より起ちて去りにき。

（八）〔三三〕（五四二）（有學漏盡經）[一]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に尊者阿那律、舍衛國の松林精舍に在りき。時に衆多の比丘有り、尊者阿那律の所に詣り、共に相問訊し慰勞し已つて、一面に於て坐し、尊者阿那律に問はく『若し比丘、學[二]地に在りて上安隱涅槃住を求むるに、聖弟子は、云何が修習し多く修習せば此の法律に於て、諸の漏を盡くすことを得、無漏心解脫し、慧解脫し、現法に自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知るや』と。尊者阿那律、諸の比丘に語つて言はく『若し比丘、學地に在り、上安隱涅槃の心に住するを述べん、聖弟子は、云何が修習し多く修習せば此の法律に於て、諸の漏を盡くすことを得、無漏心解脫し、慧解脫し、現法に自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知るやとは、當に四念處に住すべし。何等をか四と爲す。謂ゆる內身の身觀念處、乃至法の法觀念處なり。是の如き四念處を修習し多く修習せば、此の法律に於て諸の漏を盡くすことを得、無漏心解脫し、慧解脫し、現法に自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る』と。時に諸の比丘、共に尊者阿那律の所說を聞きて、歡喜し隨喜し各座より起ちて去りにき。

【一】 S. 52. 4. Kaṇṭaki(1) 衆多の比丘、有學比丘は如何にせば諸の漏を盡すべきかを阿那律に問ふ。四念處によると答ふ。
【二】 sekha 有學とも譯す。修學の途上にあるもの。

如く衆生の身の善行・口・意の善行もて賢聖を謗らずして正見成就せるは是の因緣を以て、身壞命終して天上に生ずることを得。譬へば明目の士夫の四衢道に住して諸の人民の若しは來り若しは去り、若しは坐し若しは臥せるを見るが如し。我れも亦た是の如し。四念處に於て修習し多く修習して此の大德大力神通を成じて、諸の衆生の死の時、生の時の善趣惡趣を見るに、是の如き衆生は身の惡行・口・意の惡行もて賢聖を誹謗せし邪見の因緣によりて地獄の中に生じ、是の如き衆生は、身の善行・口・意の善行もて賢聖を謗らざる正見の因緣により、身壞命終して天上に生ずるを得。是の如く尊者阿難、我れ四念處に於て修習し多く修習して此の大德大力神通を成じたり』と。時に二正士、共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(六) 三三〇 (五四〇)(所患經)[9] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者阿那律、舍衞國の松林精舍に在りて、身病苦に遭へり。時に衆多の比丘有り、尊者阿那律の所に詣り、問訊し慰勞し已つて一面に於て住し、尊者阿那律に語つて言はく『尊者阿那律、患ふ所增損するも、安忍すべきや不や。病勢漸損して轉た增さざるや』と。尊者阿那律言はく『我が病安からず、安忍すべきこと難し、身の諸の苦痛轉た增して損する無し』と。卽ち三種の譬を說くこと上の叉摩經に說けるが如し。『然るに我が身已に此の苦痛に遭へり。且らく當に安忍して正念正知なるべし』と。諸の比丘、尊者阿那律に問はく『心何所に住して而かも能く安忍し、是の如き大苦に正念正知なるや』と。尊者阿那律、諸の比丘に語つて言はく『四念處に住し、我が身に起りし所の諸の苦痛に於て能く自ら安忍し正念正知す。何等をか四念處と爲す。謂ゆる內身の身觀念處、乃至受・心・法觀念處なり。是れを四念處に住し、身の諸の苦痛に能く自ら安忍し正念正知すと名づく』と。時に是の正士、共に論議し已つて、歡喜し隨喜し、各廣より起ちて去りにき。

(七) 三三一 (五四一)[10](所患經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへ

【九】 S. 52. 10. Bāḷhagilāya. 阿那律、病苦の中に四念處を修して心安忍す。

【一〇】 前經參照。

目揵連、尊者阿那律に問はく『何の功德に於て修習し多く修習して此の七大德神力を成ぜる』と。尊者阿那律、尊者大目揵連に語らく『我れ四念處に於て修習し多く修習して此の大德神力を成じたり。何等をか四と爲す内身の身觀に心を繫して住し、精勤方便し、正念正知もて世間の貪憂を除き、外身・內外身。內受・外受・內外受。內心・外心・內外心。內法・外法・內外法の觀に心を繫して住し、精進方便して世間の貪憂を除けり。是れを四念處を修習し多く修習して此の大德神力を成じたりと名づく。千の須彌山に於て少方便を以て悉く能く觀察すること明目の士夫の高山の頂に登りて、下の千の多羅樹林を觀るが如し。是の如く我れ四念處に於て修習し多く修習して此の大德神力を成じ、少方便を以て千の須彌山を見たり。是の如く尊者大目揵連、我れ四念處に於て修習し多く修習して此の大德神力を成じたり』と。時に二正士、共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

（五）一三〇九（五三九）（阿難所問經）[八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。尊者舍利弗、尊者大目揵連、尊者阿難、尊者阿那律も舍衞國の手成浴池の側に住まれり。爾の時尊者阿難、尊者阿那律の所に往き、共に相問訊し慰勞し已つて一面に於て坐せり。尊者阿難、尊者阿那律に問はく『何の功德に於て修習し多く修習して是の如き大德大力大神通をば成就せる』と。尊者阿那律、尊者阿難に語らく『我れ四念處に於て修習し多く修習して此の大德大力を成じたり。何等をか四と爲す。內身の身觀念處に心を繫して住し、精勤方便し、正念正知もて世間の貪憂を除けり、是の如く外身・內外身・內受・外受・內外受。內心・外心・內外心。內法・外法・內外法の觀念處に心を繫して住し、精勤方便して世間の貪憂を除けり。是の如く尊者阿難、我れ此の四念處に於て修習し多く修習し少方便もて、淨天眼の天人眼に過ぐるを以て諸の衆生を見、死の時、生の時、好色惡色、上色下色、善趣惡趣に業に隨つて生を受くるを皆實の如く見たり。此の諸の衆生は、身の惡行・口・意の惡行もて賢聖を誹謗せし邪見の因緣により、身壞命終して地獄の中に生ず。是の

【八】cf. S. 52. 11. Sahassa. 阿難、阿那律に何の功德を以て大德神通を得るやを問ふ。四念處によると答ふ。

卷の第二十*

(第四弟子所說誦第三阿那律相應の續き、第二部(原第二十卷))

(阿那律品の續き)

(三) 一三〇七 (五三七)(手成浴池經)[一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者大目揵連、尊者阿那律は舍衞國の[二]手成浴池の側に住まれり。[三]尊者舍利弗、尊者阿那律の所に詣り、共に相問訊し、慰勞し已つて一面に於て坐しぬ。尊者舍利弗、尊者阿那律に語つて言はく『奇なる哉、阿那律、大德神力あり、何の功德に於て修習し多く修習して能く此に至れる』と。尊者阿那律、尊者舍利弗に語つて言はく『[四]四念處に於て修習し多く修習せば此の大德神力を成ずるなり。何等をか四念處と爲す。內身の身觀念處に精して勤方便せば、正念正知にして世間の貪憂を調伏す。是の如く外身・內外身。內受・外受・內外受。內心・外心・內外心。內法・外法・內外法の觀念處に精勤して方便せば、正念正知にして是の如く世間の貪憂を調伏す。尊者舍利弗、是れを四念處を修習し多く修習せば此の大德神力を成ずと名づく。尊者舍利弗、我れ四念處に於て善く修習せしが故に、小千世界に於て、少しく方便を作せば能く遍ねく觀察すること明目の士夫の樓觀上に於て下なる平地の種種の物を觀るが如し。我れ少しく方便を作して小千世界を觀察するも亦復た是の如し。是の如く我れ四念處に於て修習し多く修習して、此の大德神力を成じたり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(四) 一三〇八 (五三八)(目連所問經)[五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。尊者舍利弗、尊者大目揵連、尊者阿難、尊者阿那律も[六]舍衞國に住まれり。爾の時尊者大目揵連、尊者阿那律の所に詣り、共に相問訊し慰勞し已つて、一面に於て坐しぬ。時に尊者大

* 原新俱に第二十卷なり。前卷に續く九經を合せて一品とす。

【一】 S. 52. 3. Sutanu. 阿那律、四念處を反復修習するが故に大德神力を得たりと告白す。

【二】 Sutanutīre 舍衞城の川の名。

【三】 巴には衆多の比丘とあり。

【四】 satipaṭṭhāna(smṛtyupasthāna) 念の置き所。

【五】 S. 52. 6. Kaṇṭaki. 目連、阿那律に如何にして大德神力を得るやを問ふ。答ふる所前經の如し。

【六】 巴には Sākata kaṇṭakīvane.

【七】 mahābhiññata 威大なる通。

乘道有り、衆生をして清淨に、生老病死憂悲惱苦を離れて、眞如法を得せしむ。所謂四念處なり。何等をか四と爲す。身の身觀念處・受・心・法の法觀念處なり。若し四念處に於て樂はざる者は、賢聖の法に於て樂はず。聖法に樂はざる者は、聖道に於て樂はず。聖道を樂はざる者は、甘露法に於ても亦た樂はず。甘露法を樂はざる者は、則ち生老病死憂悲惱苦より脫すること能はず若し四念處に於て、信樂する者は、賢聖の法を樂ひ、賢聖の法を樂ふ者は、聖道を樂ひ、聖道を樂ふ者は、甘露法を得、甘露法を得る者は生老病死憂悲惱苦より脫することを得』と。尊者阿那律、尊者大目揵連に語つて言はく『是の如し是の如し、尊者』と。大目揵連、尊者阿那律に語つて言はく『云何が名づけて四念處を樂ふと爲す』と。『尊者大目揵連、若し比丘、身の身觀念處には、[六六]心に身を緣じて正念に住し調伏して止息し寂靜にして一心增進し、是の如く受・心・法念處に、正念に住し調伏して止息し寂靜にして、一心增進せば、尊者大目揵連、是れを比丘の四念處を樂ふと名づく』と。時に尊者大目揵連卽ち其の像三昧を正受せるが如く舍衞國の松林精舍の門より還つて跋祇聚落の失收摩羅山の恐怖稠林なる禽獸の處に至りぬ。

(三三) 一三〇六 (五三六)[六七](獨一經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連、尊者阿那律に問はく『云何が名づけて四念處を修習し多く修習すと爲す』と。尊者阿那律、尊者大目揵連に語つて言はく『若し比丘、內心に於て厭離の想を起し、內身に於て不厭離の想を起し、厭離、不厭離俱に捨想せば正念正知なり。內身の如く是の如く外身・內外身、內受・外受・內外受。內心・外心・內外心、內法・外法・內外法に、厭離の想、不厭離の想を作し、厭離、不厭離俱に捨想せば正念正知に住するなり。是の如く尊者大目揵連、是れを四念處を修習し多く修習すと名づく』と。時に尊者大目揵連卽ち三昧に入れり。舍衞國の松林精舍より三昧神通力に入りて、力士の臂を屈伸するが如き頃に、還つて跋祇聚落の失收摩羅山の恐怖稠林なる禽獸の住處に到りぬ。

【六六】身體の內も外も全て此れ集法にして無常敗壞の法なるを觀じて煩惱を滅するなり。

【六七】S. 52. 2. Rahogata. 目連、阿那律より四念處を聞く。

佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衛國に於て、迦葉佛の法の中に出家して比丘と作り好んで諍訟を起こして衆僧を鬪亂せしめ、諸の口舌を作して和合せざらしめき。先住の比丘は厭惡して捨て去り未來には來らざりき。斯の罪に緣るが故に已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（第四、弟子所說誦、[五六]第三阿那律相應第一部（原第十九卷の末））

[五七]（阿那律品）

（三二）一三〇五（五三五）（獨一經）[五八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者[五九] 阿那律は[六〇] 松林精舍に住まれり。時に尊者大目揵連は[六一] 跋祇聚落の[六二] 失收摩羅山の[六三] 恐怖稠林なる禽獸の處に住まれり。時に尊者阿那律、獨一靜處にて禪思し思惟して是の念を作さく[六四]『一乘道有り、衆生を淨め、憂悲惱苦を離れて眞如の法を得るなり。謂ゆる四念處なり、何等をか四と爲す。身の身觀念處・受・心、法の法觀念處なり。若し四念處より遠離する者は、賢聖の法より遠離す。賢聖の法より遠離する者は、聖道より遠離す。聖道より遠離する者は、甘露法より遠離す。甘露法より遠離する者は、則ち生老病死憂悲惱苦より脫すること能はざるなり。若し四念處に於て信樂する者は、聖法に於て信樂す。聖法に信樂する者は、聖道に於て信樂す。聖道に信樂する者は、[六五] 甘露法に於て信樂す。甘露法に於て信樂する者は、生老病死憂悲惱苦より脫することを得』と。爾の時尊者大目揵連、尊者阿那律の心の所念を知り、力士の臂を屈伸するが如き頃に、神通力を以て跋祇聚落の失收摩羅山の恐怖稠林なる禽獸の處に於て沒し、舍衛城の松林精舍に至り、尊者阿那律の前に現じ、阿那律に語つて言はく『汝獨一靜處にて禪思し思惟して是の念を作せる耶「一

【五六】S. 52 Anuruddha Saṃyuttam に相當す。
【五七】第十九卷末の二經と次卷の首九經と十一經より成る。
【五八】S. 52. 1. Rahogato. 目連、阿那律より四念處を聞く。
【五九】Anuruddha
【六〇】Jetavane Anāthapiṇḍikassa ārāme
【六一】Vajji 十六大國の隨一。
【六二】Suṃsumāragira 村名。
【六三】Bhesakalā
【六四】巴のこの經には一乘道に當る文字なきも四念處を主として一乘を明す經は多し。此處に相當する巴利文は極簡單なり。
Yesaṃ kesaṃ ci cattāro satipaṭṭhānā viraddhā, viraddho tesaṃ ariyo maggo sammādukkhakkhayagāmi; yesaṃ kesaṃ ci cattāro satipaṭṭhānā āraddhā, āraddho tesaṃ ariyo maggo sammādukkhakkhayagāmī ti.
何人にもせよ、四念處を遠離せる者は、苦を完全に滅する道なる聖道を遠離せり。何人にもせよ四念處を發したる者は、苦を完全に滅する道なる聖道を發せり。
【六五】甘露。amata(amṛta) とは不死の靈藥の名なり。甘露法とは不死の法なり。

(四〇) 一三〇二 (五三二)(摩々帝經)[五一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て、一大身の衆生の其の舌長廣にして、熾然たる鐵釘以て其の舌に釘つに虛に乘じて行き、啼哭號呼せるを見たり』と。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衞國に於て、迦葉佛の法の中に出家して比丘と作れり。[五二]摩摩帝の爲に諸の比丘を呵責して言はく「諸長老、汝等此處を去るべし。儉薄なれば相供すること能はず、各意に隨つて去れ。豐樂の處、饒なる衣食の所を求めなば、衣食床臥、病に應ずる湯藥乏しからざるを得べし。先に住せし比丘は悉く皆捨てて去りぬ」と。客僧之れを聞きて亦復た來らざりき。斯の罪に緣るが故に已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四一) 一三〇三 (五三三)[五三](惡口形名經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て一大身の衆生の比丘の像、皆鐵葉を著けて以て衣服と爲し、體を擧げて火然え亦た鐵鉢を以て熱せる鐵丸を盛りて之れを食せるを見たり』と。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衞國に於て、迦葉佛の法の中に出家して比丘と作れり。[五四]摩摩帝の惡口形を作し、諸の比丘に名づけて或は言はく「此れは是れ惡禿なり、此れは惡風法なり、此れは惡衣服なり」と。彼の惡口を以ての故に先住者は去り、未だ來らざるは來らざりき。斯の罪に緣るが故に已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四二) 一三〇四 (五三四)[五五](好起諍訟經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國に住まりたまへり。乃至

【五一】 巳になし。目連、迦葉佛の時に出家せる者、利己主義なりし爲苦報を受くるを見る。

【五二】 mamatta 利己主義自己本位。

【五三】 巳になし。目連、迦葉佛の時出家せる者にして利己主義の爲に他人を惡口せし者の苦報を受くるを見る。

【五四】 勝手の惡口雜言して禿とか無作法とか穢いとか罵るを云ふ。

【五五】 巳になし。目連、迦葉佛の時に出家せる比丘にして、好んで諍訟を起したる爲苦報を受くる者を見る。

比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三二)一三二九四(五三〇)(比丘經)[四七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て、一大身の衆生の熾然たる鐵葉を以て、以て其の身に纏ひ、衣被床臥、悉く皆熱鐵にして炎火熾然たり、熱せる鐵丸を食し、虛に乘じて行き、啼哭號呼せるを見たり』と。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衛國に於て、迦葉佛の法の中に出家して比丘と作れり。衆僧の爲に衣食を乞ひ、僧に供せし餘りは輒ち自ら受用せり。斯の罪に緣るが故に已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも、續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三三―三八)一三二九五―一三三〇〇[四八](比丘尼等經) 比丘の如く、是の如く比丘尼・式叉摩那・沙彌・沙彌尼・[四九]優婆塞・優婆夷も亦復た是の如し。

(三九)一三三〇一(五三二)(駕乘牛車經)[五〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て、一大身の衆生の熾然たる鐵車而かも其の頸に駕して、其の頸筋を拔き、及び四脚を連ね、筋以て其の頸を勒して熱鐵の地を行き虛に乘じて去り、啼哭號呼せるを見たり』と。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衛國に於て、牛車に駕乘して以て自ら生活せり。斯の罪に緣るが故に、地獄の中に於て無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【四七】S. 19. 17—21. Bhikkhu 目連、檀施の衣食を私せる比丘の苦報を受くるを見る。

【四八】S. 18, 19, 20, 21.

【四九】優婆塞、優婆夷は巴になし。

【五〇】巴になし。目連、嘗て牛車に駕乘せしものの苦報を受くるを見る。

出入し、虛に乘じて行くに苦痛切迫し、啼哭號呼せるを見たり』と。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衞國に於て、迦葉佛の法の中に出家して沙彌と作り、次に衆僧の果園を守りしが七果を盜取し持ちて和上に奉れり。斯の罪に緣るが故に已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三〇）【一三九二】（五〇八）（盜食石蜜經）[四五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て、一大身の衆生の其の舌廣長なるを見たり。利釿有り、炎火熾然として以て其の舌を斫るに虛に乘じて行き、啼哭號呼せるを見たり』と。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衞國に於て、迦葉佛の法の中に出家して沙彌と作れり。斧を以て石蜜を破り衆僧に供養せしに、斧刀を著けし者は盜み取りて之れを食へり。斯の罪に緣るが故に地獄の中に入りて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三一）【一三九三】（五〇九）（盜取二䴵經）[四六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て是の大身の衆生の雙鐵輪有りて兩脇の下に在り熾然として旋轉し、還つて其の身を燒くに、虛に乘じて行き、啼哭號呼せるを見たり』と。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衞國に於て、迦葉佛の法の中に出家して沙彌と作れり。石蜜の䴵を持つて衆僧に供養せしに二䴵を盜取して掖下に著けたり。斯の罪に緣るが故に已に地獄の下にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の

【四五】巴になし。目連、石蜜を盜み食へる者の苦報を受くるを見る。

【四六】巴になし。目連、石蜜の二䴵を盜みて掖下に著けたる沙彌の苦報を受くるを見る。

きて、歡喜し奉行しき。

(二七) 一二八九 (五三五)(憎嫉婆羅門經)[四二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て一衆生の體を擧げて糞穢にて以て其の身を塗り、亦た糞穢を食し、虚に乘じて行くに、臭穢にして苦惱し、啼哭號呼せるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の波羅㮈城に於て、自在王の師なる婆羅門と爲れり。憎嫉の心を以て、迦葉佛の聲聞僧を請ひ、糞を以て飯下に著き衆僧を惱まさんと試みたり。斯の罪に緣るが故に已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二八) 一二九〇 (五三六)(不分油經)[四三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て、一大身の衆生の頭上に大銅鑊有りて熾然中に滿ち、群銅身體に流灌するに虚に乘じて行き、啼哭號呼せるを見たり』と。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の舍衞國に於て、迦葉佛の所にて出家し知事比丘と爲れり。檀越有りて油の諸の比丘に付すべきを送れり。時に衆多の客比丘有り。知事比丘、時に油を分ちて客を待さず。比丘去りて後乃ち分てり。斯の罪に緣るが故に已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは、眞實にして異らず』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二九) 一二九一 (五三七)(盜取七果經)[四四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連言はく『我れ路中に於て、一大身の衆生の熾熱せる鐵丸有りて身より

【四二】 S. 19. 12. Duṭṭhabrāhmaṇo. 目連、佛の聲聞を憎嫉したる婆羅門の受苦報を見たり。

【四三】 巴になし。目連、檀施の油を客比丘に分たざりし知事比丘の受苦報を見たり。

【四四】 巴になし。目連、七果を盜みし沙彌の苦報を受くるを見る。

を擧げ、倶に世尊(のみもと)に詣り、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐しぬ。時に尊者勒叉那、尊者大目揵連に問はく『晨朝に路中にて、何の因、何の緣もて欣然として微笑せる』との尊者大目揵連、尊者勒叉那に語るらく『我れ路中に於て、一大身の衆生の體を擧げて膿壞し、臭穢不淨にして虛に乘じて行くに、烏・鵄・鵰・鷲・野干・餓狗・隨逐して摣食し、啼哭號呼せるを見たり。我れ衆生を念へり「是の如き身を得て是の如き苦を受くるは一に何ぞ痛い哉」と』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『我れも亦た此の衆生を見る。而かも說かざるは信ぜざるを恐るるが故なり。所以は何ん。如來の所說を信ぜざる者有らば是れ愚癡の人にして長夜に苦を受くればなり。此の衆生は過去世の時、此の波羅㮈城に於て女人と爲り、色を賣つて自活せり。時に比丘有り、迦葉佛の所に於て出家せり。彼の女人不淸淨の心を以て、彼の比丘に請ひしに、比丘は直心もて請ひを受けしも、其の意を解せざりき。女人瞋恚し、不淨水を以て比丘の身に灑げり。斯の罪に緣るが故に、已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一六)　一二八　(五二四)[四〇](瞋恚燈油灑經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。乃至我れ路中に於て、一大身の衆生の體を擧げて火然え、虛に乘じて行き、啼哭號呼して諸の苦痛を受くるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の波羅㮈城に於て、[四一]自在王の第一夫人と爲り、王と共に宿せしが瞋恚の心を起こし然燈油を以て王の身上に灑げり。斯の罪に緣るが故に已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛是の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞

【四〇】 S. 19. 15. Okilini-Sapattaṅgārakakiri. 目連、自在王夫人の瞋恚によりて然燈の油を王の身に灑ぎて得たる苦報を見る。
【四一】 Kaliṅgarāja

(二三) 一三八五 (五二二)(卜占師經)[37] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至路中に一衆生の其の身獨り轉ずること猶ほ旋風の若く、虛に乘じて行けるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て卜占師と爲り。多人を誤惑し以て財物を求めたり。斯の罪に緣るが故に、已に地獄の中にて無量の苦を受く。地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二四) 一三八六 (五二三)(好他婬經)[38] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至路中に一衆生の身を傴らせ行を藏し、狀恐怖せるが如く、體を擧げて服を被るに、悉く皆火然え、還つて其の身を燒き虛に乘じて行けるを見たり。佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て好みて他婬を行ぜり。斯の罪に緣るが故に、已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二五) 一三八七 (五二三)(賣色經)[39] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。時に尊者大目揵連、尊者勒叉那比丘、晨朝に共に波羅㮈城に入りて乞食し、路中に於て尊者大目揵連、思惟顧念し欣然として微笑せり。時に尊者勒叉那、尊者大目揵連に白して言さく『世尊及び世尊の弟子の欣然として微笑するは必ず因緣有り。何の緣にてか尊者今日欣然として微笑せる』と。尊者大目揵連、尊者勒叉那に語るらく『此れは非時の問ひなり、且らく乞食し、還りて世尊の前に詣りて當に所事を問ふべし』*と。時に俱に城に入りて乞食し、還りて足を洗ひ衣鉢

【三七】 巴になし。目連卜占師の受苦を見たり。

【三八】 S. 19. 11. Pāradārika. 目連、姦夫の受苦を見たり。

【三九】 S. 19. 13. Nicchavitthi-aticārini 目連、賣色女の受苦を見る。

＊ 他經に例するに「是事」なるべし。

るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

[二三]（二七—一八）・一三七九—一三八〇（斗秤欺人經）　鍛銅師の如く、是の如く斗秤欺人、村主布監も亦復た是の如し。

（一九）一三八一（五一九）（捕魚師經）[二四]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至路中に一衆生の銅鐵の羅網を以て自ら其の身に纏ひ、火常に熾然として還つて其の體を燒くに、痛み骨髓に徹し、虛に乘じて行けるを見たり。佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て、捕魚師と爲れり。斯の罪に緣るが故に、已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を受くるも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず。當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二〇—二一）一三八二—一三八三（捕鳥網兎經）　捕魚師の如く[二五]捕鳥、網兎も亦復た是の如し。

（二二）一三八四（五二〇）（卜占女經）[二六]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至路中に一衆生の頂に鐵磨有り、盛火熾然として轉じて其の頂を磨し、虛に乘じて行くに、無量の苦を受くるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『彼の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て卜占女人と爲り、式を轉じて卜占し、欺妄して人を惑はし以て財物を求めたり。斯の罪に緣るが故に、已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【二三】S. 19. 10. Gāmakūṭaka.

【二四】巴になし。目連漁夫の苦報を見たり。

【二五】cf. S. 19. 3. Piṇḍasakuṇiyaṃ

【二六】S. 19. 14. Maṅgulitthi ikkhaṇitthi 目連、卜占女の受苦を見たり。

き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一三) **三二七五** (五一六)(殺猪經)[29] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至我れ路中に於て、一大身の衆生の體を擧げて毛を生じ、毛積舒の如く、毛悉く火然え、還つて其の身を燒くに痛み骨髓に徹せるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て、屠猪人と爲りて群猪を殲殺せり。斯の罪に緣るが故に已に百千歲、地獄の中に墮ちて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて、今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一四) **三二七六** (五一七)(斷人頭經)[30] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至我れ路中に於て、一大身の無頭の衆生の、兩邊に目を生じ、胸前に口を生じ、身常に血を流し、諸蟲唼食して痛み骨髓に徹するを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て好んで人頭を斷ぜり、斯の罪に緣るが故に、已に百千歲、地獄の中に墮ちて無量の苦を受け、今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは、眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五) **三二七七** (捉頭經)[31] 人頭を斷ずるが如く頭を捉るも亦た是の如し。

(一六) **三二七八** (五一八)(鍛銅人經)[32] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至我れ路中に於て、一衆生の陰卵瓮(おんらんかめ)の如く、坐せば則ち上に踞(うづくま)り、行けば則ち肩に擔ふを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は、過去世の時王舍城に於て鍛銅師(たんどうし)と作り、僞器もて人を欺けり、斯の罪に緣るが故に、已に地獄の中にて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得

【二九】 S. 19. 5. Asi-sūkariko 目連殺猪者の苦報を見たり。

【三〇】 S. 19. 16. Sīsachinno-coraghātaka. 目連、人頭を切斷せる者の苦報を見たり。

【三一】 巴になし。

【三二】 S. 19. 10. Aṇḍabhari-Gāmakuṭako. 目連、鍛銅師の僞器もて人を欺ける者の苦報を見たり。

の體を燒くに、痛み骨髓に徹せるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て調象士と爲れり。斯の罪に緣るが故に已に百千歲地獄の中に墮ちて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは、眞實にして異らず。當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七—一〇) 一三六九—一三七二 [26] 調象士の如く是の如く調馬士・調牛士・好縺人者及び諸の種種の苦切人者も亦復た是の如し。

(一一) 一三七三 (五二四)(好戰經) [27] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連路中に於て一大身の衆生の身を擧げて毛を生じ、毛の利きこと刀の如く、其の毛火然え、還つて其の身を割くに、痛み骨髓に徹せるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て戰諍を好樂し、刀劍もて人を傷つけぬ。已に百千歲地獄の中に墮ちて無量の苦を受け地獄の餘罪にて、今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず。當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一二) 一三七四 (五二五)(獵師經) [28] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連路中に於て、一大身の衆生の遍ねく身に毛を生じ、其の毛箭に似、皆悉く火然え、還つて其の身を燒くに痛み骨髓に徹せるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は、過去世の時此の王舍城に於て曾て獵師と爲りて諸の禽獸を射たり。斯の罪に緣るが故に已に百千歲、地獄の中に墮ちて無量の苦を受け、地獄の餘罪にて今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは、眞實にして異らず、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說

【二六】 同前。

【二七】 cf. S. 19. 6. Satti-māgavi 目連好戰者の苦報を見たり。

【二八】 S. 19. 7. Usu-kāṇiyo. 目連獵師の苦報を見たり。

を信ぜざる者有らば是れ愚癡の人にして長夜に當に饒益せざる苦を受くべければなり。諸の比丘、是の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て屠羊者と爲れり。斯の罪に緣るが故に已に百千歳地獄の中に墮ちて無量の苦を受け、今此の身を得るも餘罪に緣るが故に續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異ること無し、汝等受持せよ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) 三二六六(五二一)(屠羊弟子經)[二三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連、路中に於て一大身の衆生の體を擧げて皮無く、形脯腊の如く虛に乘じて行けるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、王舍城に於て屠羊の弟子と爲れり、屠羊の罪の故に已に百千歳、地獄の中に墮ちて無量の苦を受け、今此の身を得るも續いて斯の罪を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異ること無し、當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五) 三二六七(五二二)(墮胎經)[二四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至路中に、一大身の衆生の體を擧げて皮無く、形肉段の如く、虛に乘じて行けるを見たり。乃至佛、諸の比丘に告げたまはく『此の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て自ら其の胎を墮せり。斯の罪に緣るが故に地獄の中に墮ちて已に百千歳無量の苦を受け、餘罪を以ての故に今此の身を得るも續いて斯の苦を受くるなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは、眞實にして異ること無し。當に之れを受持すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六) 三二六八(五二三)(調象士經)[二五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。乃至尊者大目揵連、路中に於て一大衆生の體を擧げて毛を生じ、毛は大針の如く、針皆火然え、還つて其

[二三] 巴になし。目連行乞の途次全身皮膚なきものの空を行くを見たり。佛此れは前世に於て屠牛者の弟子なりきと曰ふ。

[二四] 巴になし。目連、墮胎者の苦報を見たり。

[二五] S. 19. 8. Sūci-Sārathi. S. 19. 9. Sūcako 目連調象士の苦報を見たり。

るなり。諸の比丘、大目揵連の所見の如きは眞實にして異らず、汝等受持せよ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 三一六五 (五一〇)(屠羊者經)[三三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。尊者大目揵連と尊者勒叉那とは耆闍崛山の中に在りき。尊者勒叉那、晨朝の時に於て尊者大目揵連の所に詣り尊者大目揵連に語るらく『共に耆闍崛山より出で王舍城に入りて乞食せん』と。尊者大目揵連默然として許し、卽ち共に耆闍崛山より出で王舍城に入りて乞食し行きて一處に至りしに尊者大目揵連、心に所念有り、欣然として微笑せり。尊者勒叉那、尊者大目揵連の微笑せるを見、卽ち問うて言はく『尊者、若し佛及び佛の聲聞の弟子の欣然として微笑するは、因緣無きに非ず、尊者今日、何の因、何の緣もて微笑を發せる』と。尊者大目揵連言はく『問ふ所は時に非ず、且らく乞食し世尊の前に於て當に是の事を問ふべし。是れ時に應じたる問ひなり』と。尊者大目揵連と尊者勒叉那と共に城に入り乞食し已つて還へり、足を洗ひ衣鉢を擧げ倶に佛所に詣り、佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐しぬ。尊者勒叉那、尊者大目揵連に問はく『我れ今晨朝に、共に王舍城に入りて乞食せしに汝一處に於て欣然として微笑せり。我れ卽ち汝に微笑の因緣を問ひしに汝我れに答へて言はく「問ふ所は時に非らず」と。我れ今汝に問はん「何の因、何の緣もて欣然として微笑せる」と。尊者大目揵連、勒叉那に語るらく『我れ路中に於て一大衆生の身を擧げて皮無く、純ら一の肉段にして空に乘じて行けるを見たり。烏・鵄・鵰・鷲・野干・餓狗隨つて摣食し、或は脇肋より其の內藏を採りて取つて之れを食ふに、苦痛切迫し啼哭號呼せり。我れ卽ち思惟すらく「是の如き衆生は是の如き身を得て乃し是の 如き饒益せざる 苦を受く」と。佛、諸の 比丘に 告げたまはく『善い哉比丘、我が聲聞中、實眼・實智・實義・實法に住し、 決定して 通達せば 是の衆生を見る。我れも亦た是の衆生を見て、而かも說かざるは信ぜざるを恐るるが故なり。所以は何ん。如來の所說

【三三】 S. 19. 4. Nicchavorabbhi.
目連行乞の途次全身皮膚なく、肉段となりて空を行く者を見たり。佛これは前生に於ては屠羊者なりきと曰ふ。

目揵連の所に詣り、尊者大目揵連に語るらく『共に耆闍崛山より出で王舍城に入りて乞食せん』と。尊者大目揵連默然として許し、卽ち共に耆闍崛山より出で王舍城に入りて乞食し、行きて一處に至りしに、尊者大目揵連心に念ずる所有り、欣然として微笑せり。尊者勒叉那、尊者大目揵連の微笑せるを見て卽ち問うて言はく『尊者、若し佛及び佛の聲聞の弟子の欣然として微笑するは因緣無きに非らず、尊者今日、何の因、何の緣もて微笑を發せるや』と。尊者大目揵連言はく、問ふ所は時に非ず、且らく乞食し、還つて世尊の前に於て、當に是の事を問ふべし。是れ時に應じたる問ひなり、』と。尊者大目揵連と尊者勒叉那と共に城に入りて乞食し、已つて還へり、足を洗ひ衣鉢を擧げ倶に佛の所に詣り、佛の足に稽首したてまつり、退きて一面に坐しぬ。尊者勒叉那、尊者大目揵連に問はく『我れ今晨朝に汝と共に王舍城に入りて乞食せしに、汝一處に於て欣然として微笑しぬ。我れ卽ち汝に問ひき「何の因緣もて笑へる」と。汝我れに答へて言はく「問ふ所は時に非ず」と。我れ今汝に問はん「何の因、何の緣もて欣然として微笑せる」と』と。尊者大目揵連、尊者勒叉那に語るらく『我れ路中に於て一衆生を見たり。筋骨相連り、身を擧げて不淨にして臭穢厭ふ可し。烏・鵄・鷲・野干・餓狗、隨つて獲食し、或は脇肋より其の內藏を探り、取つて之れを食ふに極めて大いて苦痛し啼哭號呼せり。我れ是れを見已つて心に卽ち念言すらく「是の如き衆生は是の如き身を得て而かも是の如き饒益せざる苦を受く」と』と。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『善い哉比丘、我が聲聞中、實眼・實智・實義・實法に住し、決定して通達せば是の如き衆生を見る。我れも亦た是の衆生を見て、而かも說かざるは信ぜざるを恐るるが故なり。所以は何ん。如來の所說を信ぜざる者有らば、是れ愚癡の人にして、長夜に當に饒益せざる苦を受くべければなり。諸の比丘、是の衆生は過去世の時、此の王舍城に於て屠牛の弟子爲り。屠牛の罪に緣るが故に已に百千歲、地獄の中に墮ちて無量の苦を受く。彼の屠牛の惡行の餘罪に緣るが故に今此の身を得るも續いて是の如き饒益せざる苦を受く

目揵連に問うて言はく『若し佛及び佛弟子の欣然として微笑するは因緣無きに非らず。尊者今日、何の因、何の緣もて微笑を發せるや』と。尊者大目揵連言はく『問ふ所は時に非ず、且く王舍城に入りて乞食し、還つて世尊の前に於て當に是の事を問ふべし。是れは時に應じたる問ひなり。當に汝が爲に說くべし』と。時に尊者大目揵連と尊者勒叉那と王舍城に入り乞食して還へり、足を洗ひ衣鉢を擧げ倶に佛所に詣り、佛の足に稽首したてまつり、退きて一面に坐しぬ。尊者勒叉那、尊者大目揵連に問はく『我れ今晨朝に汝と共に耆闍崛山より出でて乞食せしに汝一處に於て欣然として微笑せり。我れ卽ち汝に微笑の因緣を問ひしに、汝我れに答へて言はく「問ふ所は時に非らず」と。今復た汝に問はん『何の因、何の緣もて欣然として微笑せしや』と。尊者大目揵連、尊者勒叉那に語るらく『我れ路中にて一衆生を見たり、身樓閣の如くなるに啼哭號呼し憂悲苦痛し、虛に乘じて行けり。我れ是れを見已つて是の思惟を作しき「是の如き衆生は此の如き身を受けて而かも是の如き憂悲大苦有り」と。故に微笑を發せしなり』と。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『善い哉善い哉、我が聲聞中、實眼・實智・實義・實法に住し決定して通達せるは是の衆生を見るなり。我れも亦た此の衆生を見て而かも說かざるは人信ぜざるを怒る。所以は何ん。如來の所說を信ぜざる者有らば是れ愚癡の人にして長夜に苦を受くればなり』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『過去世の時、彼の大身の衆生は、此の王舍城に在りて屠牛兒たり、屠牛の因緣を以ての故に、百千歲に於て地獄の中に墮ちぬ。地獄より出でしも屠牛の餘罪ありて是の如き身を得て常に是の如き憂悲惱苦を受くるなり。是の如く諸の比丘、尊者大目揵連の所見の如きは異らず、汝等受持せよ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）三二四（五〇九）（屠牛者經）[二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時尊者大目揵連と尊者勒叉那と耆闍崛山に在りき。尊者勒叉那、晨朝の時に於て尊者大

【二】 S. 19. 1. Aṭṭhipesi 目連行乞の途次骸骨の鷲、烏等に逐はれ食はれて苦しむを見たり。佛、此れは前世に於て屠牛者なりきと曰ふ。

閻浮提の僧迦舍城なる外門の外の優曇鉢樹の下に還へりたまふべし』と。尊者大目揵連、世尊の教を受け即ち三昧に入れり。譬へば力士の臂を屈伸するが如き頃に、三十三天より沒して閻浮提に至り諸の四衆に告ぐらく『諸人當に知るべし。世尊は却つて復七日にして、三十三天より閻浮提の僧迦舍城なる外門の外の優曇鉢樹の下に還へりたまはん』と。期せるが如く七日にして世尊は三十三天より閻浮提の僧迦舍城なる優曇鉢樹の下に下りたまへり。天龍鬼神、乃至梵天悉く從つて來下せり。即ち此の時より此の會を名づけて天下處と名づく。

（七）三二六二（五〇七）（諸天經）[15] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[16]王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に[17]四十天子有り。尊者大目揵連の所に來詣し、稽首して禮を作し、退きて一面に坐しぬ。時に尊者大目揵連、諸の天子に語つて言はく『善い哉諸の天子佛に於て不壞[18]淨成就し、法、僧に不壞淨成就せり』と。時に四十天子、座より起ちて衣服を整へ、偏へに右の肩を袒にし、合掌して尊者大目揵連に白さく『我れ佛に於て不壞淨を、法、僧に於て不壞淨を得、聖戒成就せしが故に天上に生じたり』と。一天ありて言はく『佛に於て不壞淨を得たり』と。有ひは言はく『法は不壞淨を得たり』と。有ひは言はく『僧に不壞淨を得たり』と。有ひは言はく『聖戒成就し、身壞命終して天上に生ずることを得たり』と。時に四十天子、尊者大目揵連の前に於て、各自ら記說し、須陀洹の果を得、即ち沒して現ぜざりき。四十天子の如く、是の如く四百・八百・十千の天子も亦た是の如く說く。

（第二品）*

（一）三二六三（五〇八）（屠牛兒經）[19] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に尊者大目揵連と尊者[20]勒叉那比丘とは共に耆闍崛山に在りき。尊者勒叉那、晨朝に尊者大目揵連の所に詣り尊者大目揵連に語るらく『共に耆闍崛山より出で王舍城に入りて乞食せん』と。時に尊者默然として許し、即ち共に耆闍崛山より出で王舍城に入りて乞食し、行きて一處に至りしに尊者大目揵連、心に所念あり欣然として微笑せり。尊者勒叉那、微笑せるを見已つて即ち尊者大

【一五】S. 55. 18. Devacārika. 經意前經に同じ。
【一六】巴には Sāvatthi
【一七】巴には三十三天。
【一八】pasanna 淨信。

* 第二品は地獄に關する諸經四十二を以て第二品とす。
【一九】巴になし。目連行乞の途次に於て、身樓閣の如き者の啼哭號呼し、憂悲苦惱せるを見たり。佛、之は前世に於て屠牛者の兒なりきと曰ふ。
【二〇】Lakkhaṇa

曾て佛世尊に從ひて、所說の法を聞ける有りて不壞淨を得、身壞命終して此に來生せるや』と。佛、尊者大目揵連に告げたまはく『是の如し是の如し。此の中の種種の諸天の來り雲集せる者は、宿命より法を聞き佛に不壞淨、法僧に不壞淨を得、聖戒成就し身壞命終して此に來生せるなり』と。時に天帝釋、世尊と尊者大目揵連と歎說し、諸天衆の共に語れるを見已つて、尊者大目揵連に語るらく『是の如し是の如し、尊者大目揵連、是の中の種種の集會は皆是れ宿命に曾て正法を聞きて、佛に不壞淨・法・僧に不壞淨を得、聖戒成就し身壞命終して此に來生せり』と。時に異比丘有り、世尊と尊者大目揵連及び天帝釋と語言し善相を述可せるを見已つて尊者大目揵連に語るらく『是の如し是の如し、尊者大目揵連、是の中の種種の諸天の此に來會せる者は皆是れ宿命に曾て正法を聞きて佛の不壞淨、法僧の不壞淨を得て聖戒成就し、身壞命終して此に來生せり』と。時に一りの天子有り、座より起ちて衣服を整へ、偏へに右の肩を袒にし合掌して佛に白さく『世尊、我れも亦た佛の不壞淨を成就せしが故に此に來生せり』と。復た天子有りて言はく『我れは法の不壞淨を得たり』と。有ひは言はく『僧の不壞淨を得たり』と。有ひは言はく『聖戒成就せしが故に此に來生せり』と。是の如く諸天の無量千數、世尊の前に於て各自ら記說して須陀洹の法を得、悉く佛前に於て即ち沒して現ぜざりき。時に尊者大目揵連、諸の天衆の去れるを知りて久しからずして座より起ち衣服を整へ、偏へに右の肩を袒にし、佛に白して言さく『世尊、閻浮提の四衆、稽首して世尊の足に敬禮したてまつり世尊に問訊せり。「少病少惱、起居輕利にして安樂に住したまふや不や」と。四衆は思慕して世尊を見たてまつらんと願へり。又た世尊に白せり「我等人間は神力の三十三天に昇りて世尊を禮覲したてまつること有ること無し。然かも彼の諸天、大德力有らば悉く能く來下して閻浮提に至りたまへ」と。唯だ願くは世尊、閻浮提に還へりたまへ、四衆を愍むが故に』と。佛、目揵連に告げたまはく『汝、彼れに還つて閻浮提の人に語るべし。却つて後七日にして、世尊は當に三十三天より

座より起ち禮を作して去りにき。

時に諸の四衆、三月の安居を過ぎ已つて復た尊者大目揵連の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐しぬ。時に尊者大目揵連、諸の四衆の爲に種種に說法し示教照喜せり。示教照喜し已つて默然として住せり。時に諸の四衆、座より起ち、稽首して禮を作し、尊者大目揵連に白さく『尊者大目揵連、當に知るべし、我れ等世尊を見たてまつらざること已に久しく、衆甚だ虛渴し、世尊を見たてまつらんと欲す。尊者大目揵連、若し勞を憚らずんば願くは我れ等が爲に三十三天に往詣し、普ねく我れ等が爲に世尊に問訊せよ「少病少惱起居輕利にして安樂に住したまふや不や」と。又た世尊に白せ「閻浮提の四衆、世尊を見たてまつらんと願ふも、神力の三十三天に昇りて世尊を禮敬したてまつる無し。三十三天自ら神力有らば人中に來下せよ。唯だ願くは世尊閻浮提に還へりたまへ。哀愍を以ての故に」と』と。時に尊者大目揵連、默然として許しぬ。時に諸の四衆、尊者大目揵連默然として許せるを知り已つて各ゝ座より起ち、禮を作して去りにき。

爾の時尊者大目揵連、四衆の去り已れるを知りて卽ち三昧に入り其の如く正受し、大力士の臂を屈申するが如き頃に舍衞國より沒して、三十三天の驄色虛軟の石上に於て、波梨耶多羅拘毘陀羅香樹を去ること遠からずして現じぬ。爾の時世尊は三十三天の衆なる無量の眷屬の與に圍遶せられて說法したまへり。時に尊者大目揵連、遙かに世尊を見たてまつり踊躍歡喜して是の念を作さく『今日世尊、諸天の大衆に圍遶せられて說法したまふこと、閻浮提の衆會と異らず』と。爾の時世尊、尊者大目揵連の心の所念を知ろしめして尊者大目揵連に語つて言はく『大目揵連、自力の爲に非ず、我れ諸天の爲に說法せんと欲せば彼れ卽ち來集し、其れをして去らしめんと欲せば彼れ卽ち還へり去る。彼れは心に隨つて來り、心に隨つて去るなり』と。爾の時尊者大目揵連、佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し世尊に白して言さく『種種の諸天の大衆雲集せり。彼の天衆の中には

諸の天女の輩、身に瓔珞の莊嚴の具を著け、妙音聲を出し、五樂を合するに善き樂を作せるが如く音聲異らず。諸の天女の輩、旣に尊者大目揵連を見、悉く皆慚愧し、室に入りて藏隱しぬ。時に天帝釋、尊者大目揵連に語るらく『此の堂觀を觀よ、地好く平正にして、其の壁・柱・梁・重閣・牕牖・羅網・簾障、悉く皆嚴好なり』と。尊者大目揵連、帝釋に語つて言はく『憍尸迦は先に善法福德の因緣を修して此の妙果を成じたり』と。是の如く帝釋は三たび自ら稱歎して尊者大目揵連に問へり。尊者大目揵連も亦た再三答へたり。時に尊者大目揵連此の念を作さく『今此の帝釋は極めて自ら放逸にして界の神住に著して此の堂觀を歎ぜり。我れ當に彼れの心をして厭離を生ぜしむべし』と、即ち三昧に入り、神通力を以て一の足指を以て其の堂觀を撤き悉く震動せしむ。時に尊者大目揵連卽ち沒して現ぜざりき。諸の天女の衆、此の堂觀の震掉動搖するを見、顚沛して恐怖し、東西に馳走し、帝釋に白して言さく『此れは是れ憍尸迦の大師にして此の大功德力を有せる耶』と。時に天帝釋、諸の天女に語るらく『此れは我が師に非ず、是れは大師の弟子大目揵連なり。梵行淸淨にして大德、大力者なり』と。諸の天女言はく『善い哉憍尸迦、乃し此の如き梵行の大德大力の同學有り、大師の德力は當に復た如何なるべき』と。

(六)〔三六一〕[一二](五〇六)(帝釋經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、三十三天の驄[一三]色虛軟の石上に住まりたまへり。波梨耶多羅[一四]、拘毘陀羅香樹を去ること遠からずして夏安居し、母及び三十三天の爲に說法したまへり。爾の時尊者大目揵連は舍衞國の祇樹給孤獨園に在りて安居せり。時に諸の四衆、尊者大目揵連の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐し、尊者大目揵連に白さく『世尊の夏安居したまへる處を知れるや不や』と。尊者大目揵連答へて言はく『我れ聞く世尊は、三十三天の驄色虛軟の石上に在せり、波梨耶多羅拘毘陀羅香樹を去ること遠からずして夏安居し、母及び三十三天の爲に說法したまへり』と。時に諸の四衆、尊者大目揵連の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、各々

【一二】 S. 40. 10 sakka. 增36,5.
(長2.41, 大2.703b)
Cv. V. 8.
Dhp. A. III. p. 224f.
J. IV. 263.
世尊三十三天に於て說法せらる。目連衆の依賴を受けて世尊の還來を乞ふ爲に彼處に至る。

【一三】 devesu Tāvatiṃsesu 忉利天・須彌山の頂上にあり。帝釋を中心として四方に各八天あれば三十三天なり。

【一四】 pāricchattaka 第一の樹の名。

是の如き堂觀の端嚴なる毘闍延の如きもの有ること無し。我れ是の慳を調伏せるを見しが故に此の妙果有り。故に斯の偈を說きぬ』と。大目揵連、帝釋に語つて言はく『善い哉善い哉、憍尸迦、汝能く此の勝妙の果報を見て而かも斯の偈を說けり』と。時に天帝釋、尊者大目揵連の說く所を聞きて、歡喜し隨喜し、忽然として現ぜざりき。

（五）〔三八〇〕（五〇五）〔二〕（愛盡經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城に住まりたまへり。時に尊者大目揵連は耆闍崛山の中に在りき。爾の時尊者大目揵連獨一靜處にて禪思して是の念を作しぬ『昔ある時釋提桓因、界隔山の石窟中に於て世尊に愛盡解脫の義を問へり。世尊爲に說きたまひしに聞き已つて隨喜し、更らに所問の義あらんと欲するに似たり。我れ今當に往いて其の喜意を問ふべし』と。是の念を作し已つて、力士の臂を屈申するが如き頃に耆闍崛山に於て沒して三十三天に至り一分陀利池を去ること遠からずして住しぬ。時に天帝釋、五百の婇女と遊戲して池に浴せり。諸の天女有りて音聲美妙なり。爾の時帝釋、遙かに尊者大目揵連を見、諸の天女に語つて言はく『歌ふこと莫れ歌ふこと莫れ』と。時に諸の天女卽便ち默然たり。天帝釋、卽ち尊者大目揵連の所に詣り、稽首して足に禮し退きて一面に住しぬ。尊者大目揵連、帝釋に問うて言はく『汝先に界隔山の中に於て世尊に愛盡解脫の義を問ひ、聞き已つて隨喜せり、汝が意云何。說を聞きて隨喜せしと爲すや、更らに所問有らんと欲せしが故に隨喜せりと爲す耶』と。天帝釋、尊者大目揵連に語るらく『我が三十三天は多く放逸の樂に著せり、或は先の事を憶ひ、或る時は憶はざるなり。世尊は今王舍城の迦蘭陀竹園に在せり。尊者、我が先に界隔山の中にて問ひし所の事を知らんと欲せば今往いて世尊に問ふ可し、世尊の說の如く汝當に受持すべし。然かも我が此の處には、好堂觀有り新しく成りて未だ久しからず、入りて觀看るべし』と。時に尊者大目揵連、默然として請ひを受け卽ち天帝釋と共に堂觀に入れり。彼の諸の天女、遙かに帝釋の來れるを見、皆天樂を作し、或は歌ひ、或は舞へり。

〔二〕 M. 37. Taṇhāsaṅkhaya. 目連神通を以て帝釋天宮に至る。帝釋生活放逸にして新樂の樓閣を示して自ら誇る。目連神通力を以て樓閣を震動して彼が心をして厭離を生ぜしめんとす。

卷の第十九[*]

（第四弟子所說誦、第二目揵連相應の續き、第二部（原第十九卷））

（第一品）[◎]

（四）［一三五九］（五〇四）（慳垢經）[一]是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時尊者大目揵連、耆闍崛山[二]に在りき。時に釋提桓因[三]、上妙堂觀に有りしが夜に於て尊者大目揵連の所に來詣し、稽首して足に禮し退きて一面に坐しぬ。時に釋提桓因の光明普く耆闍崛山を照らし、周匝して大いに明なりき。爾の時釋提桓因坐し已つて卽ち偈を說いて言はく、

『能く慳垢を伏せる　大德は時に隨つて施す　是れを施中の賢と名づく　來世には殊勝を見ん』

と。時に大目揵連、帝釋に問うて言はく『憍尸迦[四]、云何が慳垢を調伏せば殊勝を見ると爲すや』と。而かも汝は說いて言へり。

「能く慳垢を調伏せる　大德は時に隨つて施す　是れ則ち施中の賢なり　來世には殊勝を見ん」

と』と。時に天帝釋答へて言はく『尊者大目揵連・勝婆羅門大姓・勝刹利大姓・勝長者大姓・勝四王天・勝三十三天、稽首して敬禮するが故に、尊者大目揵連、我れ勝婆羅門大姓・勝刹利大姓・勝長者大姓・勝四王天・勝三十三天に恭敬作禮せらる。斯の果報を見しが故に此の偈を說きぬ。復た次に尊者大目揵連、乃至[五]日の周行する所、諸方を照らすより、千の世界、千の月、千の日。千の須彌山王、千の弗婆提舍[六]、千の欝多羅提舍[七]、千の瞿陀尼迦[八]、千の閻浮提[九]、千の四天王、千の三十三天、千の炎摩天、千の兜率陀天、千の化樂天、千の他化自在天、千の梵天を名づけて小千世界と爲す。此の小千世界の中には、堂觀の毘闍延[一〇]堂觀と等しきもの有ること無し。毘闍延に百一の樓觀有り。觀に七重有り。重に七房有り、房に七天后有り、后に各七侍女あり。尊者大目揵連、小千世界に於ては、

---

* 原新俱に第十九卷なり四十八經を攝む。
◎ 前卷と同類經を合せて七經第一品となる。

【一】 M. 37. Cūḷa-Taṇhāsaṅkhaya. S, 增一九、三斷愛經天帝釋、その受用する所の妙果は全く慳垢を調伏したる果報なりと目連に告白す。
【二】 Gijjhakūṭa pabbata 靈鷲山なり。
【三】 Sakka devānaṃ inda (Śakra devānā indra)の音譯なり。天帝釋、帝釋天、天上釋、略して帝釋と譯す。「諸天の中の帝王なる釋」といふ義なり。釋とは因陀羅の別名なり。
【四】 Kausika 天帝釋別名なり。
【五】 須彌山を中心として東西南北に四洲あり、七山八海を交互に繞らし、更に鐵圍山を以て外郭となし、日月運行して照す之を一小世界といふ。
【六】 東勝身洲。
【七】 南贍部洲。
【八】 西牛貨洲。
【九】 北俱盧洲。
【一〇】 Vejayanta (Vaijayanta) 帝釋天の宮殿。

通力、大功德の爲に安坐して坐せり。我れも亦た大力もて、汝と倶なるを得。目揵連、譬へば大山に人有りて小石を持つて之に投ずるも大山の色味悉く同じきが如く、我れも亦た是の如し。尊者の大力大德と與に同座に而かも坐することを得。譬へば世間の鮮淨の好物は人皆頂戴するが如く、是の如く、尊者目揵連の大德大力は、諸の梵行者皆應に頂戴すべし。諸の尊者目揵連に遇ふて交遊往來し、恭敬供養することを得る者有らば大いに善利を得。我も亦た尊者大目揵連と交遊往來することを得るものも亦た善利を得たり』と。時に尊者大目揵連、尊者舍利弗に語るらく『我れ今大智大德の尊者舍利弗と同座して而かも坐することを得たり。小石を以て之を大山に投ずるに、其の色を同じくすることを得るが如く、我れも亦た是の如し。尊者大智舍利弗と同座して而かも坐し第二伴と爲ることを得たり』と。時に二正士共に論議し已て各座より起ちて去りにき。[一〇七]

【一〇七】原新倶に第十八卷終る即ち第四誦の第一終る擬る所三品四十九經。

佛の子と爲り、勤めて方便せざるも禪解脫を得、三昧を正受し、一日の中に於て、世尊、神通力を以て三たび我が所に至りたまひて、三たび我れに教授して、大人處を以て我れを建立したまへり』と。尊者大目揵連、此の經を說き已りしに、諸の比丘其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三）一二五八（五〇三）[一〇二]（寂滅經）　是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、尊者舍利弗、尊者大目揵連、尊者阿難、王舍城の迦蘭陀竹園に在り、一房に於て共住（ぐじゅう）せり。時に尊者舍利弗、後夜の時に於て尊者目揵連に告ぐらく『奇なる哉、尊者目揵連、汝今夜に於て[一〇三]寂滅正受に住す』と。尊者目揵連、尊者舍利弗の語を聞き、尊者目揵連、言はく『我れ都て汝の喘息の聲を聞かず』と。尊者目揵連言はく『此は寂滅正受にあらず、麁の正受に住せるのみ。尊者舍利弗、我れ今夜に於て世尊と共に語りたり』と。尊者舍利弗言はく『目揵連、世尊は舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり、此を去ること極めて遠し。云何が共に語りしや。汝は今竹園に在り、云何が共に語りしや。汝神通力を以て世尊の所に至りたるや、是れ世尊神通力もて汝の所に來至したまふと爲すや』と。尊者目揵連、尊者舍利弗に語るらく『我れ神通力を以て世尊の所に詣らず。世尊も神通力を以て我が所に來至したまはず。然かも我れ舍衞國の王舍城の中に於て聞く。世尊及び我れは俱に天眼（てんげん）、天耳（てんに）を得たるが故に。我れ能く世尊に所謂る[一〇四]慇懃精進を問ひたてまつりき。「云何が名づけて慇懃精進と爲すや」と。世尊、我れに答へて言（のたま）はん[一〇五]「目揵連、若し此の比丘晝なれば則ち經行し、若しくは坐して[一〇六]不障礙法を以て自ら其の心を淨め、初夜には、若しくは坐し經行して、不障礙法を以て自ら其の心を淨め、中夜の時に於ては房外に出で、足を洗ひ、還つて房に入り右脇にして臥し、足足相累ね、明相を係念し、正念正知にして、思惟を作起す。後夜の時に於ては徐に覺め、徐に起き、若しは坐し亦たは經行し、不障礙法を以て自ら其の心を淨む。目揵連、是れを比丘の慇懃精進と名づく」』と。尊者舍利弗、尊者目揵連に語つて言はく『汝、大目揵連は眞に大神

【一〇二】S. 21. 3. Ghaṭa. 目連、神力を以ての故に相遠隔せる佛と法話す。舍利弗その德力を讃嘆す。

【一〇三】vippasannāni kho te āvuso moggalāna indriyāni.

【一〇四】āraddhaviriya 發勤精進とも譯す。精進を發したるなり。

【一〇五】巴文異る。

【一〇六】經行と禪坐とを交へて氣分の轉換をはかり、以て修行中の惰氣を一掃する。Jātakaṭṭhakathā I, 2 Vaṇṇupatha-jātaka の偈文の註に引用さる。Jātakaṭṭhakathā I, 1. Apaṇṇakajātaka の偈文の註に引用せらる。

の功徳を得るが如し。我れも亦た是の如し。佛の子と爲り、勤めて方便せずして禪解脱を得、三昧を正受し、一日の中に於て世尊、神通力を以て三たび、我が所に至りたまひて、三たび我れに教授し、大人の處する所を以て我を建立したまへり』と。尊者大目揵連此の經を說き已りしに、諸の比丘其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 三二五七 (五〇二)(無相經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり、爾の時、尊者大目揵連王舍城の耆闍崛山の中に在りき。爾の時、尊者大目揵連諸の比丘に告ぐらく『一時、世尊王舍城に住まりたまへり。我れは耆闍崛山の中に住まりき。我れ獨一靜處にて是の如き念を作しき「云何が名づけて聖住と爲すや」と。復た是の念を作しき「若し比丘有りて一切の相を念ぜず、無相を心に正受し、身作證を具足して住せば、是れを聖住と名づく」と。我れ是の念を作しき「我れ當に此の聖住に於て[九八]一切の相を念ぜず無相を心に正受し、身作證を具足して住し、多く住すべし」と。多く住し已りしに[九九]取相の心生じぬ。爾の時、世尊、我が心念を知ろしめし、力士の臂を屈申するが如き頃に神通力を以て竹園精舍より沒して耆闍崛山の中に現れたまひ、我が前に於て我れに語げて言はく「目揵連、汝當に聖住に住すべし。放逸を生ずること莫れ」と。我れ世尊の教を聞き已りしに即ち一切の相を離れ、無相を心に正受し、身作證を具足して住しぬ。是の如くすること三たび至り、世尊も亦た三たび來りて我れに教へたまへり「汝當に聖住に住すべし、放逸を生ずる莫れ」と。我れ教を聞き已りしに一切の相を離れ無相を心に正受し、身作證を具足して住しぬ[一〇〇]。諸大德、若し正しく佛子を說くとせば則ち我が身是れなり。佛に從り生じ、法化從り生じ[一〇一]、佛法分を得たり。所以は何ん。我れは是れ佛子にして、佛に從り生じ、法化より生じ、佛法分を得、少方便を以て禪解脱を得、三昧を正受すればなり。譬へば轉輪聖王の太子は、未だ灌頂せずと雖も已に王法を得、勤めて方便せざるも能く五欲の功德を得るが如く、我れも亦た是の如し。

敬虔なる告白をなしてゐるのであるが、漢譯によれば、目連が特に佛陀の恩寵を受けたる如く說きたり。

【九七】 S. 40. 9. Animitta. 目連その所得の聖住は全く佛恩の然らしむる所以を告白す。

【九八】 animittaṃ cetosamādhiṃ 巴の註によれば「常相等を捨て已りて轉じたる觀三昧を指して言はれたり」と。

【九九】 nimittānusāriviññāṇaṃ hoti

【一〇〇】 以下前經に同じ、

【一〇一】 佛の具有する性質の一分。

於て信心を生ぜしを以ての故なり。[90]

（第四弟子所說誦、第二[91]目揵連相應、第一部（原第十八卷の末））

（第[92]一品）

（一）一三三六（五〇二）[93]（聖默然經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時、尊者大目揵連、王舍城の耆闍崛山の中に在りき。爾の時、尊者大目揵連、諸の比丘に告ぐらく『一時、世尊、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。我れは此の耆闍崛山の中に於て住まりき。我れ獨一靜處にて、是の如きの念を作しき「云何が聖默然と爲す」と。復た是の念を作しき「若し比丘有りて[94]有覺有觀を息め、內淨・一心・無覺・無觀にして三昧に喜樂を生じ第二禪具足して住せば、是れを聖默然と名づく」と。復た是の念を作しき「我れも今亦た當に聖默然たるべし」と。有覺有觀を息め、內淨・一心・無覺・無觀にして三昧に喜樂を生じ具足して住し、多く住しぬ。多く住し已りしに復た有覺有觀の心起りぬ。爾の時世尊、我が心念を知ろしめして竹園精舍より沒して耆闍崛山の中に現はれ、我が前に於て我れに語げて言はく「目揵連、汝當に聖默然たるべし。放逸を生ずること莫れ」と。我れ世尊の說きたまへるを聞き已つて卽ち復た有覺有觀を離れ、內淨一心無覺無觀にして三昧に喜樂を生じ第二禪具足して住しぬ。是の如くすること再三、佛も亦た再三我れに敎へたまへり「汝當に聖默然たるべし、放逸なる莫れ」と。我れ卽ち復た有覺有觀を息め內淨一心、無覺無觀にして[95]三昧に喜樂を生じ第三禪具足して住しぬ。[96]若し正說せば佛子にして佛に從り生じ、法化より生じ、佛法分を得たる者は則ち我が身是れなり。所以は何ん。我れは是れ佛子にして、佛に從り生じ、法化より生じ、佛法分を得、少方便を以て禪解脫を得、三昧を正受すれば、譬へば轉輪聖王の長太子は未だ灌頂せずと雖も已に王法を得、勤めて方便せざるも能く五欲

---

navijjāyṃ micchājīvena jīvikaṃ kappenti. 先の星曆を親ずるに對して、男女の體相を觀察して吉凶禍福を占ひ、不正手段もて生活を營むものを言へり。

【八九】 dhammikaṃ āhāraṃ āhārenti 正當なる食を食する。

【九〇】 舍利弗相應は二品四十六經餘にて此に經る。

【九一】 巴 S. 40 Moggalāna Saṃyutta に當るも出入不同多し。

【九二】 本卷三經と次卷の始四經と七經を一品とす。

【九三】 S. 21. 1. Kolito. cf. 40. 1—6. 目揵連、その所得の大通は全く如來の恩惠によることを說く。

【九四】 vitakka-vicārānaṃ 新には有尋有伺といふ。思考すること。

【九五】 巴には第二禪。

【九六】 以下巴にはたゞ次の如し、「諸尊、若し正說せば摩聞は大師によりて護念せられて大通を得たり。此の我を正說するも、摩聞は大師によりて護念せられて大通を得たり。」とあり。之によれば目連はその所得の通（六通）は全く如來の恩惠によるものなりと極めて

問うて言はく『沙門食する耶』と。尊者舍利弗答へて言はく『食す』と。復た問はく『云何が沙門[八〇]口を下にして食する耶』と。答へて言はく『不なり、姉妹』と。復た問はく『[八一]口を仰けて食する耶』と。答へて言はく『不なり、姉妹』と。復た問はく『[八二]云何が口を方にして食する耶』と。答へて言はく『不なり、姉妹』と。復た問はく『[八三]口を四維にして食する耶』と。答へて言はく『不なり、姉妹』と。復た問はく『我れ沙門に食せる耶と問はば我れに答へて食せりと言ひ、我れ口を仰ける耶と問へば我れに答へて不なりと言ひ、口を下にして食する耶といへば我れに答へて不なりと言ひ、口を方にして食する耶といへば我れに答へて不なりと言ひ、口を四維にして食する耶といへば我れに答へて不なりと言ふ。是の如きの所說は何等の義か有る』と。尊者舍利弗言はく『姉妹、諸の所有る沙門婆羅門の、[八四]事に明かなる者横法にも明かにして[八五]邪命もて食を求むる者は、是の如き沙門婆羅門は口を下にして食するなり。若し諸の沙門婆羅門の、[八六]仰いで星暦を觀じ邪命もて食を求むる者は、是の如き沙門婆羅門は則ち口を仰けて食すと爲す。若し諸の沙門婆羅門の[八七]他の使命を爲して邪命もて食を求むる者は、是の如き沙門婆羅門は則ち口を方にして食すと爲す。若し沙門婆羅門有りて諸の[八八]醫方種種の治病を爲して邪命もて食を求むる者は、是の如き沙門婆羅門は則ち口を四維にして食すと爲す。姉妹、我れは此の四種の邪命に墮して食を求めず。然かも我れは姉妹、但だ法のみを以て食を求めて自活するなり。是の故に我れ四種の食を爲さずと說くなり』と。時に淨口外道の出家尼、尊者舍利弗の所說を聞きて歡喜し隨喜して去りぬ。時に淨口外道出家尼、王舍城の里巷四衢の處に於て讃歎して言はく『沙門釋子は[八九]淨命もて自活し、極めて淨命もて自活す。諸の施を爲さんと欲する者有らば應に沙門釋種子に施すべし。若し福を爲さんと欲せば應に沙門釋種子の處に於て福を作すべし』と。時に諸の外道の出家有り、淨口外道出家尼の沙門釋子を讃歎する聲を聞きて嫉妬心を以て彼の淨口外道出家尼を害せしに、命終の後兜率天に生じぬ。尊者舍利弗の所に

【八〇】 巴の adhomukha なり。mukha は口の義なれども轉じて顔の義に用ふ。「下」口とは「顔を下に向けて」の義なり。

【八一】 ubbhamukha 顔を仰向けて。

【八二】 disāmukha 顔を四方に向け、顧みて。

【八三】 vidisāmukha 東南、西南、西北、東北に顔を向け、顧みて。

【八四】 巴利の註釋によれば Vatthuvijja-tiracchānavijjā=yā'ti vatthuvijjāsaṅkhātāya tiracchānavijjāya. とあり。事明と言はれる低級な知識(動物的な)によりて」といふ風に釋せり。例へば葫蘆(ヘウタン)の作り方に就いての知識の如しと。

【八五】 不正な生活手段なり。巴利の註釋によれば、低級な知識を以て信者より施を受けて生活するをいふとあり。

【八六】 星を觀て吉凶を卜する。

【八七】 他人に事を託されて中間に於て不正を働くなり。

【八八】 巴には左の如し。Ye hi keci bhagini samaṇa-brāhmaṇā aṅgavijjātiracchā-

へば村邑の近くに大石山の斷ぜず壞せず穿たず厚密なる有りて正使ひ東方より風來るも動ぜしむること能はず、亦復た過ぎりて西方に至ること能はず、是の如く南西北方四維の風來るも傾動すること能はず、亦た過ぎること能はざるが如く、是の如く、比丘心を法として善く心を修せば貪欲心を離れ、瞋恚心を離れ愚癡心を離れて無貪法、無恚法、無癡法を得、是の比丘は能く自ら、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作して自ら後者を受けずと知ると記說す。譬へば因陀の銅鐵及銅柱を深く地中に入れ築いて堅密ならしめば、四方より風吹くも傾動すること能はざるが如く、是の如く比丘、心を法として善く心を修し已らば、貪欲心を離れ、瞋恚心を離れ、愚癡心を離れて無貪法、無恚法、無癡法を得。是の比丘は能く自ら我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると記說す。譬へば石柱の長さ十六肘なるに、八肘を地に入るれば、四方より風吹くも傾動し能はざるが如く、是の如く、比丘、心を法として善く心を修し已らば悉く貪欲心を離れ、瞋恚心を離れ、愚癡心を離れて、無貪法、無恚法、無癡法を得て能く自ら、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると記說す。譬へば火もて燒くに未だ燒けざる者を燒き已らば復た更に燒けざるが如く、是の如く、比丘、心を法として心を修し已らば、貪欲心を離れ、瞋恚心を離れ、愚癡心を離れて、無貪法、無恚法、無癡法を得て能く自ら、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作して自ら後有を受けざるを知ると記說す』と。舍利弗此の經を說き已りしに、諸の比丘、其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九)三二五(五〇〇)[七九](淨口經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に尊者舍利弗も亦た王舍城の迦蘭陀竹園に住まれり。爾の時尊者舍利弗、晨朝に衣を著け鉢を持ち、王舍城に入りて乞食せり。乞食し已つて一樹の下に於て食せり。時に淨口外道の出家尼有り。王舍城より出でて少しく營む所有り、尊者舍利弗の一樹の下に坐して食するを見たり。見已つて

【七九】 S. 28. 10. Sucimukhi. 佛陀の聲聞は淨命によりて生活し、邪命によらず。

三菩提を得せしめたまふらん。今現在の諸佛世尊如來等正覺も亦た五蓋惱心を斷じて、慧力羸く障礙品に墮して涅槃に向はざる者をして四念處に住し、七覺分を修して阿耨多羅三藐三菩提を得せしめたまへり』と。佛、舍利弗に告げたまはく『是の如し、是の如し、舍利弗、過去、未來、今現在の佛は悉く五蓋惱心を斷じて、慧力羸く障礙品に墮して涅槃に向はざる者をして四念處に住し、七覺分を修して阿耨多羅三藐三菩提を得せしむ』と。佛是の經を說き已りたまひしに、尊者舍利弗、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八) 三二四 (四九九)(石柱經)[七八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時、尊者舍利弗、耆闍崛山の中に在りき。時に月子比丘有り。是れ提婆達多の弟子なり。尊者舍利弗のもとに詣り、共に相問訊し慰勞し已つて退いて一面に住まれり。退いて一面に住まり已りしに、尊者舍利弗、月子比丘に問うて言はく『提婆達多比丘は諸の比丘の爲に說法するや不や』と。月子比丘、答へて言はく『說法す』と。尊者舍利弗、月子比丘に問うて言はく『提婆達多は云何が說法するや』と。月子比丘、尊者舍利弗に語つて言はく『彼の提婆達多は是の如く說法して言ふ「比丘、心を法として、心を修せば、是の比丘は能く自ら我れ已に離欲し、五欲の功德より解脫せり」と記說せるなり』と。舍利弗、月子比丘に語つて言はく『汝、提婆達多は何を以て說法して言はざる耶「比丘心を法として善く心を修せば欲心を離れ、瞋恚心を離れ、愚癡心を離れて、無貪法、無恚法、無癡法を得、欲有、色有、無色有の法に轉還せず。彼の比丘は能く自ら記說して我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後者を受けずと知ると言ふと』月子比丘言はく『彼れは能はざるなり、尊者舍利弗』と。爾の時、尊者舍利弗、月子比丘に語つて言はく『若し比丘有りて心を法として善く心を修せば能く貪欲心、瞋恚愚癡心を離れて無貪法、無恚無癡法を得。是の比丘は能く自ら、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けずと知ると記說す。譬

【七八】 A. IX. 26. Silāyūpa. 舍利弗提婆の徒なる月子比丘に心を法として心を修せば、貪瞋癡を離れて解脫すと說く。

是の如きの解脫、是の如きの住を知れるや不や』と。舍利弗、佛に白して言さく『知らざるなり。世尊』と。佛、舍利弗に告げたまはく『汝復た未來の三藐三佛陀の所有る增上戒、是の如きの法、是の如きの慧、是の如きの明、是の如きの解脫、是の如きの住を知れるや不や』と。舍利弗、佛に白して言さく『知らざるなり、世尊』と。佛、舍利弗に告げたまはく『汝復た能く今現在の佛の所有る增上戒、是の如きの法、是の如きの慧、是の如きの明、是の如きの解脫、是の如きの住を知れるや不や』と。舍利弗、佛に白して言さく『知らざるなり、世尊』と。佛、舍利弗に告げたまはく『汝若し過去、未來、今現在の諸佛世尊の心中の所有る諸法を知らずして云何が是の如く讃歎し、大衆中に於て師子吼を作して說いて言ふや「我れ深く世尊を信じたてまつる。過去、當來の諸の沙門、婆羅門の所有る智慧の世尊の菩提と等しき者有ること無し、況んや復た上に過ぎんをや」』と。舍利弗、佛に白して言さく『世尊、我れ過去、當來、今現在の諸佛世尊の[七七]心の分齊を知ること能はず。然かも我れ能く諸佛世尊の法の分齊を知れり。我れ世尊の說法の轉轉して深く、轉轉して勝れ、轉轉して上く、轉轉して妙なるを聞けり。我れ世尊の說法の一法を知らば卽ち一法を斷じ、一法を知らば卽ち一法を證し、一法を知らば卽ち一法を修習するを聞き、法を究竟して大師の所に於て淨信を得、心淨まるを得たり。世尊、是れ等正覺の世尊は譬へば國王に邊城有るに城の周匝方直、牢固堅密にして唯だ一門のみ有りて、第二門無く、門を守れる者を立つ。人民入出するに皆此の門より若しは入り、若しは出づ。其の門を守れる者復た人數の多少を知らずと雖も要ず人民の唯だ此の門のみよりして更に他所無きを知れるが如し、是の如く我れ、過去の諸佛如來應等正覺の悉く五蓋惱心を斷じて、慧力羸く、障礙品に墮して涅槃に向はざる者をして四念處に住し、七覺分を修して阿耨多羅三藐三菩提を得せしめたまへるを知れり。彼の當來中の諸佛世尊も亦た五蓋惱心を斷じて、慧力羸く障礙品に墮して涅槃に向はざる者をして四念處に住し、七覺分を修して阿耨多羅三藐

【七七】 Cetopariyāya 心の作用、心の働き方。

するが如く、是の如く、比丘、諂曲ならず、幻僞せず、欺誑せず、正信にして慚愧し、精勤正念、正定智慧ありて、慢緩ならず、心遠離に存し、深く戒律を敬ひ、沙門行を顧み、勤めて修して自省し、法の爲に出家し、涅槃を志求せば。是の如き比丘は我が罪を擧ぐるを聞きて歡喜して頂受すること甘露を飲むが如し』と。佛、舍利弗に告げたまはく『若し彼の比丘諂曲にして幻僞し、欺誑し不信、無慚無愧、懈怠失念、不定惡慧あり、慢緩にして遠離に違ひ、戒律を敬はず、沙門行を顧みず、涅槃を求めず、命の爲に出家せば、是の如き比丘には教授して與に共に言語すべからず。所以は何ん。此等の比丘は梵行を破るが故なり。若し彼の比丘諂曲ならず、幻僞せず、欺誑せず、信心慚愧、精勤正念、正定智慧ありて慢緩ならず、心遠離に存じ、深く戒律を敬ひ、沙門行を顧み、涅槃を志崇して、法の爲に出家せば。是の如き比丘には應當に教授すべし。所以は何ん。是の如き比丘は能く梵行を修し、能く自ら建立するが故なり』と。佛此の經を説き已りたまひしに、尊者舍利弗、佛の説かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七) 三二五[七四] (四九八)(那羅犍陀經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、[七五]那羅犍陀賣衣者菴羅園に住まりたまへり。爾の時、舍利弗、世尊の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり退きて一面に座し、佛に白して言さく『世尊、我れ深く世尊を信じたてまつる。過去、當來、今現在の諸の沙門、婆羅門の所有る智慧の世尊の菩提と等しき者有ること無し。況んや復た上に過ぎんをや』と。佛、舍利弗に告げたまはく『善き哉、善き哉、舍利弗、善い哉説く所、第一の説なり。能く衆の中に於て師子吼を作し、自ら深く世尊を信ずと言ひ、過去、當來、今現在の沙門、婆羅門の所有る智慧の佛の菩提と等しき者有ること無し。況んや復た上に過ぎんをやと言へり』と。佛、舍利弗に問ひたまはく『汝能く審に過去の[七六]三藐三佛陀の所有る增上戒を知れるや』と。舍利弗、佛に白して言さく『知らざるなり。世尊』と。復た舍利弗に問ひたまはく『是の如きの法、是の如きの慧、是の如きの明、

【七四】 S. 47. 12. Nālandaṃ. D. 28 Sampasādaniya S. 長 18自歡喜經(大1.76b—79a) 舍利弗佛の菩提の超絶せるを讃嘆し、その所以を述ぶ。

【七五】 Nālandāyaṃ Pāvārikambavane

【七六】 sammāsambuddha (sammyaksambuddha) 正等覺者。本經中に三耶三佛と云ふも同じ。

所の解材譬經に說いて諸の沙門に教へたまふが如し。「若し賊有りて來り汝を執らへて鋸を以て身を解くに汝等賊に於て惡念惡言を起さば自ら障礙を生ずべし。是の故に比丘、若し鋸を以て汝が身を解かんとせば汝、當に彼れに於て惡心變易を起し及び惡言を起して自ら障礙を作すこと勿るべく、彼の人の所に於て當に慈心を生じ怨無く恨無かるべし。四方の境界に於て慈心を正受し具足して住せんと應當に學すべし」と。是の故に世尊、我れ當に是の如くすべし。世尊の說かせたまふ所の如く、解身の苦も當に自ら安忍すべし。況んや復た小苦に謗にして安忍せざらんをや。沙門の利、沙門の欲は、不善法を斷ぜんと欲し、善法を修せんと欲す。此の不善法に於ては當に斷ずべし、善法は當に修すべし。精勤方便して、善く自ら防護し、繫念思惟して不放逸行を應當に學すべし』と。

[七一]舍利弗、佛に白して言さく『世尊、我れ若し他の比丘の罪を擧ぐるに實にして不實に非ず。時にして不時に非ず。義饒益して非義饒益せるに非ず。柔軟にして麁澁に非ず。慈心にして瞋恚せざるに。然かも彼の擧げらるゝ比丘は瞋恚を懷く者有り』と。佛、舍利弗に問ひたまはく『何等の像類の比丘、其の罪を擧ぐるを聞きて瞋恚を生ずるや』と。舍利弗、佛に白して言さく『世尊、若し彼の比丘、諂曲にして幻僞し、欺誑し不信、無慚無愧、懈怠失念、不定惡慧あり、慢緩にして遠離に違ひ、戒律を敬はず、沙門を顧みず、勤めて修學せず、自ら省察せず、[七二]命の爲に出家し、涅槃を求めずんば是の如き等の人は我が罪を擧ぐるを聞かば則ち瞋恚を生ず』と。[七三]佛、舍利弗に問ひたまはく『何等の像類の比丘、汝の罪を擧ぐるを聞きて瞋恨せざるや』と。舍利弗、佛に白して言さく『世尊よ、若し比丘有りて諂曲ならず、幻僞せず、欺誑せず、信有りて慚愧し、精勤正念、正定智慧ありて、慢緩ならず、遠離を捨てず、深く戒律を敬ひ、沙門行を顧み、涅槃を尊崇し、法の爲に出家して性命の爲にせずんば、是の如き比丘は我が罪を擧ぐるを聞きて歡喜して頂受すること甘露を飲むが如し。譬へば刹利婆羅門の女、沐浴し清淨にして好妙華を得ば愛樂し頂戴して以て其の首に冠

[七一] 下劣なる比丘は實にして乃至慈悲もて擧罪せらるれも瞋恚を抱く。
[七二] 生活手段として出家する。
[七三] 眞の比丘は擧罪されて瞋恚を生ぜず、却つて之を喜ぶ。

て非時に非ず。義饒益して非義饒益せるに非ず。柔軟にして麁澁に非ず。慈心にして瞋恚に非ずんば、實にして罪を擧ぐる比丘には當に幾の法を以て饒益して改變せざらしむべきや』と。佛、舍利弗に告げたまはく『實にして罪を擧ぐる比丘には當に五法を以て饒益して變悔せざらしむべく、當に是の言を作すべし「長老、汝は實にして罪を擧ぐ不實に非ず。時にして非時に非ず。義饒益して非義ならず。柔軟にして麁澁に非ず。慈心にして瞋恚に非ず」と。舍利弗、實にして罪を擧ぐる比丘には當に此の五法を以て義饒益して變悔せざらしむべし。亦た來世に實にして罪を擧ぐる比丘をして而かも變悔せざらしむべし』と。[六八]舍利弗、佛に白して言さく『世尊、實にして罪を擧げらるる比丘は當に幾の法を以て饒益して變悔せざらしむべきや』と。佛、舍利弗に告げたまはく『罪を擧げらるる比丘は當に五法を以て饒益して變悔せざらしむべく、當に是の言を作すべし「彼の比丘は實にして罪を擧ぐ、不實に非ず。汝、變悔すること莫れ。時にして非時ならず。義饒益して非義饒益せず。柔軟にして麁澁に非ず、慈心にして瞋恚せるに非ず。汝變悔すること莫れ」』と。[六九]舍利弗、佛に白して言さく『世尊、我れ實にして罪を擧げらるゝ比丘の瞋恚有る者を見る。世尊、實にして罪を擧げられて瞋恚する比丘には當に幾の法を以て瞋恨に於て自ら開覺せしむべきや』と。佛、舍利弗に告げたまはく『實にして罪を擧げられて瞋恚する比丘には當に五法を以て自ら開覺せしむべく、當に彼に語つて言ふべし「長老、彼の比丘は實にして汝の罪を擧ぐ、不實に非ず。汝瞋恨すること莫れ。乃至慈心にして瞋恚に非ず。汝瞋恨すること莫れ」と。舍利弗、實にして罪を擧げられて瞋恚する比丘は當に此の五法を以て恚恨に於て開覺することを得せしむべし』と。[七〇]舍利弗、佛に白して言さく『世尊、實と不實にして我が罪を擧ぐる者有らば、彼の二人に於て我れ當に自ら其の心を安んずべし。若し彼れ實ならば我當に自ら知るべし。若し不實ならば自ら開解して、此れ則ち不實なり。我れ今自ら知りぬ、此の法無しと言ふべし。世尊、我れ當に是の如くすべし。世尊の說かせたまふ

【六八】實にして乃至慈心もて擧罪せられたる者をして、變悔せしめざるためには五法を以てせよ。

【六九】實にして乃至慈心もて擧罪せられたる者をして、瞋恚を起さざらしむるには五法を以てせよ。

【七〇】舍利弗自身、實不實にして擧罪せられたる場合の心構へを說く。

を擧ぐることを得』と。[六四]舍利弗、佛に白して言さく『世尊、擧げらるる比丘は復た幾の法を以て自ら其の心を安んずるや』と。佛、舍利弗に告げたまはく『擧げらるる比丘は當に五法を以て其の心を安んぜしめて念言すべし「彼れは何の處を得て實と爲して不實ならしむる莫く、時ならしめて非時ならしむる莫く、是れ義饒益せしめて非義饒益せしむる莫く、柔軟にして麁澁ならしむる莫く、慈心にして瞋恚ならしむる莫きや」と。舍利弗、擧げらるる比丘は當に此の五法を具して自ら其の心を安んずべし』と。[六五]舍利弗、佛に白して言さく『世尊、我れ他の罪を擧ぐる者を見るに、不實にして實に非ず、非時にして是れ時に非ず、非義饒益して義饒益する爲に非ず、麁澁にして柔軟ならず、瞋恚にして慈心に非ず。世尊、不實にして他罪を擧ぐる比丘に於ては當に幾の法を以て饒益して其をして改悔せしむべきや』と。佛、舍利弗に告げたまはく『實ならざる擧罪比丘は當に五法を以て饒益して其をして改悔せしむべし。當に之に語つて言ふべし「長老、汝今罪を擧ぐるも不實にして是れ實に非ず、當に改悔すべし。不時にして是れ時に非ず。非義饒益して是れ義饒益せるに非ず。麁澁にして柔軟に非ず、瞋恚にして慈心に非ず。汝當に改悔すべし」と。舍利弗、不實にして他の罪を擧ぐる比丘には當に此の五法を以て饒益して其を改悔せしむべく、亦た當來世の比丘をして不實にして他罪を擧ぐることを爲さざらしめよ』と。[六六]舍利弗、佛に白して言さく『世尊、不實にして罪を擧げらるる比丘は復た幾の法を以て變悔せざらしむるや』と。佛、舍利弗に告げたまはく『不實にして罪を擧げらるる比丘は當に五法を以て自ら變悔せざるべし。彼れは應に是の念を作すべし「彼の比丘は不實なるに罪を擧ぐ是れ實に非ず。非時にして是れ時に非ず。非義饒益して是れ義饒益せるに非ず。麁澁にして柔軟に非ず。瞋恚にして慈心に非ず。我れは眞に是れ變悔す」と。不實にして罪を擧げらる、比丘は當に此の五法を以て自ら其の心を安んじて自ら變悔せざるべし』と。[六七]舍利弗、佛に白して言さく『世尊、比丘有りて罪を擧ぐるに實にして不實に不實に非ず。時にし

【六四】擧罪せられたるものは五法によりて心を安定せしめよ。

【六五】不實、乃至瞋恚を以て擧罪する者は五法によりて改悔せしむべし。

【六六】不實にして擧罪せられたるものを變悔せしめざらんが爲には五法を以てせよ。

【六七】實にして乃至慈心ありて擧罪したるものをして改悔せしめざる爲には五法を以てせよ。

し自ら省察するや。比丘、應に是の如く思惟すべし。我れ是ならざる、類せざる、應からざる罪を作り、彼れをして我れを見せしむ。若し我れ此の罪を爲さずんば彼れ則ち見ざらん。彼れ我が罪を見るを以て喜ばずして嫌責す、故に之を擧ぐるのみ。餘の比丘の聞く者も亦た當に嫌責すべし。是の故に長夜に諍訟して强梁轉た增し、諍訟して相言はん「起す所の罪に於て正法律を以て止めて休息せしむること能はず」と。我れ今自ら知りぬ。己れに稅を輸すが如しと。是れを比丘の起す所の罪に於て能く自ら觀察すと名づく。云何が擧罪比丘能く自ら省察するや。擧罪比丘は應に是の如く念ずべし。彼の長老比丘は類せざる罪を作して我れをして之を見せしむ。若し彼れ此の類せざる罪を作さずんば我れ則ち見ざらん。我れ其の罪を見て喜ばざるが故に擧ぐ。餘の比丘の見るものも亦た當に喜ばざるが故に之を擧ぐべし。長夜諍訟轉た增して息まず。正法律を以て起りし所の罪を止め其れをして休息せしむること能はず。我れ今日より當に自ら之を去りて、己れに稅を輸すが如くすべしと。是の如く擧罪の比丘は善能く正思惟に依りて內に自ら觀察す。是の故に諸の比丘、有罪及擧罪の者は、當に正思惟に依りて自ら觀察し、長夜に强梁にして增長せしめざるべし。諸の比丘、諍訟せざることを得、起こりし所の諍は能く法律を以て止めて休息せしむ』と。尊者舍利弗是の經を說き已りしに、諸の比丘、聞き已つて歡喜し奉行しき。

(六)【三四二】(四九七)(擧罪經)[六一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、[六二]尊者舍利弗、佛の所に詣り、佛の足に稽首したてまつり退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、若し擧罪比丘、他の罪を擧げんと欲せば心に幾の法を安住せしめて他の罪を擧げ得るや』と。佛、舍利弗に告げたまはく[六三]『若し比丘、心に五法を安住せしめば他の罪を擧ぐることを得。云何が五と爲す。實にして不實に非ず。時にして非時に非ず。義饒益して非義饒益せるに非ず。柔軟に麁澁ならず。慈心にして瞋恚せざるなり。舍利弗、擧罪比丘此の五法を具せば他の罪

【六一】 A. V. 167. Codanā. 罪を擧ぐる場合、及び擧げらるる場合の心得を說く。
【六二】 巴には舍利弗が諸比丘に告ぐ。
【六三】 巴には五法の順序異るも內容全同。

し奉行しき。

(四) 一三五〇 (四九五)[五五](戒經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に尊者舍利弗、耆闍崛山中に在りき。爾の時尊者舍利弗、諸の比丘に告ぐらく『其れ[五六]犯戒とは戒を破るを以ての故なり。[五七]所依退減し、心樂住せず、樂住せずんば已に喜・息樂・寂靜三昧・如實知見・遠離・離欲・解脱を失ひ、已に永く[五八]無餘涅槃を得ること能はず。[五九]樹根壞すれば枝葉華果悉く成就せざるが如く、犯戒の比丘も亦復た是の如し。功德退減せば心樂住せず、信樂せず、已に喜・息樂・寂靜三昧・如實知見・厭離・離欲・解脱を失ふ。解脱を失ひ已らば永く無餘涅槃を得ること能はず。持戒の比丘は根本具足し、所依具足して心に信樂を得。信樂を得已らば心に歡喜・息樂・寂靜三昧・如實知見・厭離・離欲・解脱を得。解脱を得已らば悉く能く、疾く無餘涅槃を得。譬へば樹根壞せずんば枝葉華果悉く成就することを得るが如く、持戒の比丘も亦復た是の如し、根本具足し、所依成就せば、心に信樂を得。信樂を得已らば歡喜・息樂・寂靜三昧・如實知見・厭離・離欲・解脱し疾く無餘涅槃を得』と。尊者舍利弗、是の經を說き已りしに、諸の比丘、其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五) 一三五一 (四九六)[六〇](諍經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時、舍利弗、諸の比丘に告ぐらく『若し諸の比丘、諍起りて相言はん「犯罪比丘、擧罪比丘有り」と。彼若し正思惟に依りて自ら省察せずんば、當に知るべし、彼の比丘は長夜强梁にして、諍訟轉た增し、共に相違返し、結恨彌深く、起す所の罪に於て、正法律を以て止めて休息せしむること能はずと。若し比丘、此に已に起りし諍訟有るも、若しは犯罪比丘、若しは擧罪比丘、倶に正思惟に依りて、自ら省察し尅責せば、當に知るべし、彼の比丘は長夜强梁にして、共に相違返して、結恨轉た增さず、起す所の罪に於て能く法律を以て止めて休息せしむと。云何が、比丘、正思惟

【五五】 A. I. V. 168. Sila.
A. X. 4.
A. XI. 4—5.
戒を犯すものは根なき木の如く道果を失ふ。戒を持つ者は根ある木の如く道果を得。

【五六】 dussila

【五七】 hatupanisa

【五八】 巴になし。

【五九】 巴には枝葉成就せざる木は芽等滿足せず。

【六〇】 巴になし。罪を犯したる者正しく反省するなく、他の比丘また正しき反省なくして罪を摘發し嫌責する時は、徒らに諍訟轉た增して罪を止むること能はず無益に終る可し。されば、兩者とも正しき反省を怠るべからず。

是の思惟を作さん『我れ内に心の中に欲を離ると爲すや不や』と。是の比丘は當に境界に於て或は淨相を取るべし。若し其の心を覺らば彼に於て順趣し湊注せん。譬へば鳥翮(かく)火に入らば則ち卷いて舒展す可からざるが如く、是の如く比丘、或は淨相を取るも卽ち遠離に須ひて流注し湊輸せん。比丘、當に是の如く知るべければなり。「方便行に於て心懈怠ならず、法寂靜を得、寂に止り樂を息め淳淨一心ならん」と。謂ゆる我れを思惟し已りて、淨相に於て遠離に順ひ、修道に隨順せば則ち能く自ら五欲の功德に於て離欲し解脫せりと記するに堪任せん』と。尊者舍利弗是の經を說き已りしに、諸の比丘其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三)〔三四九〕(四九四)(枯樹經)[五二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。尊者舍利弗は、耆闍崛山の中に在りき。爾の時、尊者舍利弗、晨朝に衣を著け鉢を持ち、耆闍崛山より出で王舍城に入りて乞食せり。路邊に於て一大枯樹を見、卽ち樹下に於て坐具を敷き身を斂(き)めて正坐して諸の比丘に語るらく『若し比丘の、禪思を修習し、神通力を得、心自在を得たる有りて、此の[五三]枯樹をして地と成らしめんと欲せば卽時に地と爲らん。所以(ゆえ)は何ん。謂ゆる此の枯樹の中には地界有ればなり。是の故に比丘、神通力を得て心に地の解を作さば卽ち地を成じて異らず。若し比丘有りて神通力を得自在にして意の如く此の樹をして水火風[五四]金銀等の物と爲らしめんと欲せば悉く皆成就して異らず。所以は何ん。謂ゆる此の枯樹には水界有るが故なり。是の故に比丘禪思して神通力を得自在にして意の如く、枯樹をして金と成らしめんと欲せば卽時に金と成りて異らず。及び餘の種種の諸物、悉く成じて異らず。所以は何ん。彼の枯樹には種種の界有るを以ての故なり。此の故に比丘、禪思して神通力を得自在にして意の如く種種の物を爲さば悉く成じて異らず。比丘、當に知るべし。比丘の、禪思、神通の境界は不可思議なりと。是の故に比丘、當に勤め禪思して諸の神通を學すべし』と。舍利弗是の經を說き已りしに、諸の比丘、其の所說を聞きて、歡喜

【五二】 A. VI 41. Dārukkhandha 舍利弗枯木を見て、神通力を得たる比丘はこれを即時に、地、水、火、風、金、銀と作し得と說く。

【五三】 aṁhuṃ dārukkhandhaṃ pathavī tveva adhimucceyya.「此の樹幹を地と觀ずることを得。」

【五四】 巴には subhan tveva adhimucceyya…… asubhan tueva adhimucceyya「淨不淨と觀ずることを得」

泥極めて深溺なるも久しく旱りて雨らずんば池水乾消して其の地破裂するが如く、是の如く比丘法を見、法教に隨順するを得ずんば乃至命終するも亦た所得無く來生して當に復た還て此の界に墮つべし。若し比丘有りて無量三昧もて、身に證を作し具足して住するを得ば、有身の滅涅槃に於て心信樂を生じて有身を念ぜざらん。譬へば士夫、乾淨の手を以て樹枝を執持するに手、樹に著かざるが如し。所以は何ん。手淨きを以ての故なり。是の如く比丘、無量三昧を得て身に作證し具足して住し有識の滅涅槃に於て心に信樂を生じて有身を念ぜずんば、現法に法教に隨順し乃至命終して。復來り還て此の界に生ぜざらん。是の故に比丘、當に勤め方便して無明を破壞すべし。譬へば聚落の傍に泥池有り、四方の流水及び數ば天より雨ふるに水常に池に入りて其の水盈溢し穢惡流出して其の池清淨なるが如く、是の如く皆現法に法教に隨順するを得、乃至命終するも復た還て此の界に生ぜざらん。是の故に比丘、當に勤め方便して無明を破壞すべし』と。尊者舍利弗此の經を說き已りしに、諸の比丘、其の所說を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三)【三四八】(四九三)[五〇]〔乘船逆流經〕　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に尊者舍利弗、諸の比丘に告ぐらく『若し[五一]阿練若比丘ならば、或は空地、林中、樹下に於て當に是の學を作すべし「內に自ら觀察思惟するに心の中に自ら有欲の想を覺するや不や」と。若し覺せずんば當に境界に於て、或は淨相に於て、若し愛欲起らば遠離に違ふべし。譬へば士夫力を用ひて船に乘り流に逆ふて上るに身小にして疲怠せば則ち倒還して流に順つて下るが如く、是の如く、比丘、淨想を思惟せば還て愛欲を生し、遠離に違はん。是の比丘は學する時、下方便を修して淳淨を得ず。是の故に還て愛欲の漂はす所と爲り、法力を得ず、心寂靜ならず、其の心を一にせず、彼の淨相に於て隨て愛欲を生じ、流注し淩輸して、遠離に違ふ。當に知るべし、是の比丘は敢て自ら五欲の功德に於て離欲し解脫せりと記せずと。若し比丘、或は空地、林中、樹下に於て

【五〇】巴になし。自ら反省すること緩にしなれば愛欲を生じて遠離に違背し、反省嚴にして精進すれば五欲より遠離し解脫することを得ん。

【五一】araññaka bhikkhu なるべし araññа は林なり。比丘は林等靜寂なる所を選びて修行せるが故に阿練若（又は阿蘭者）比丘といふ。

く『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(三〇) 三二三九 [四一]閻浮車、舍利弗に問はく『謂ゆる業跡とは云何か業跡と爲す』と。舍利弗言はく『業跡とは十不善業跡なり。謂ゆる殺生、偸盜、邪婬、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて此の十業跡を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(三一) 三二四〇 [四二]閻浮車、舍利弗に問はく『所謂る穢とは云何が穢と爲す』と。舍利弗言はく『穢とは謂ゆる三穢の貪欲穢、瞋恚穢、愚癡穢なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて此の三穢を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(三二—三六) 三二四一—三二四五 穢の如く、是の如く[四三]垢膩刺戀縛も亦た爾なり。

(三七) 三二四六 (四九一)(沙門出家所問經)[四四] 閻浮車所問經の如く、沙門出家所問も亦た是の如し。

([四五]第 二 品)

(一) 三二四七 [四六](四九二)(泥水經)是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時、尊者舍利弗も亦た彼れに在りて住まれり、時に尊者[四七]舍利弗、諸の比丘に語るらく『若し比丘有りて[四八]無量三昧を得て身に證を作し具足して住し、[四九]有身の滅涅槃に於て心樂著せず、有身に顧念せば、譬へば士夫の膠を手に著け、以て樹枝を執るに手卽ち樹に著きて離し得ること能はざるが如し。所以は何ん。膠手に著けるが故なり。比丘、無量三摩提を身に證を作し、心有身滅涅槃に樂著せず。有身を顧念せば終に離るゝを得ず、現法に法敎に隨順するを得ず、乃至命終するも亦た所得無く還て復た此の界に來生し終に癡冥を破り得ること能はざらん。譬へば聚落の傍に泥池有り

【四一】 巴になし。十不善業跡あり。之を斷ずるは八正道による。十不善業道といふも同じ。
【四二】 巴になし。貪欲等の三穢あり。之を斷ずるには八正道による。
【四三】 巴には此の外に Vedanā (S. 38. 7) あり。今第一經の下に四十經と云ふも三十六經に局れば脫落あるべし。
【四四】 S. 39. Sāmaṇḍaka に當る、例略は從來前品に合したるを以て今も別立せず、沙門出家所問經も四十經又は三十六經たり得るも明示せざるを以て一經とす。
【四五】 泥水經等の九經を第二品とす。大部分は巴利相應部になく、多くは增支部に含まる。
【四六】 cf. A. IV. 178 Jambāli. 無量三昧を得ると雖も、有身滅涅槃を樂はざらば手に膠を著けて樹技を執る如く徹底したる解脫を得ず。
【四七】 巴には世尊の說法。
【四八】 巴には心解脫 cetovimutti
【四九】 Sakkāyanirodha

る八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二五) 一三三四[三六] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂る清涼とは云何が清涼と爲す』と。舍利弗言はく『清涼とは五下分結盡くるなり。謂ゆる身見・戒取・疑・貪欲・瞋恚なり』。復た問はく『道有り向有りて修習するに多く修習せば此の五下分結を斷じて清涼を得る耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二六) 一三三五[三七] 閻浮車、舍利弗に問はく『謂ゆる清涼を得とは云何が清涼を得と爲すや』と。舍利弗言はく『五下分結已に盡き已れるを知る。是れを清涼を得と名づく』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば清涼を得る耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二七) 一三三六[三八] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂上清涼とは云何が上清涼と爲すや』と。舍利弗言はく『上清涼とは謂ゆる貪欲永く盡きて餘無く、瞋恚愚癡永く盡きて餘無く、一切の煩惱永く盡きて餘無くんば、是れを上清涼と名づく』と。復た問はく『道有り向有りて此の上清涼を得る耶』と舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二八) 一三三七[三九] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂る上清涼を得とは云何が上清涼を得と名づくるや』と。舍利弗言はく『上清涼を得とは貪欲永く盡きて餘無く、已に斷じ已れるを知り、瞋恚愚癡永く盡きて餘無く、已に斷じ已れるを知らば是れを上清涼を得と名づく』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて此の上清涼を得る耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二九) 一三三八[四〇] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂愛とは云何か愛と爲す』と。舍利弗言はく『三愛有り、謂ゆる欲愛・色愛・無色愛なり』と。復た問はく『道有り向有りて此の三愛を斷ずる耶』と。舍利弗言は

【三六】巴になし。五下分結盡くるを清涼といふ。八正道による。

【三七】巴になし。前經參照。

【三八】巴になし。前經參照。

【三九】前經參照。

【四〇】S. 38. 10. Taṇhā 巴には kāmataṇhā, bhavataṇhā, vibhavataṇhā (欲愛、有愛、無有愛) とあり。

は五蓋有り。謂ゆる貪欲蓋・瞋恚蓋・睡眠蓋・掉悔蓋・疑蓋なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば此の五蓋を斷ずる耶』と。舍利弗答へて言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二一) 三三〇[三二] 閻浮車、舍利弗に問はく『謂ゆる穌息とは云何が穌息と爲す』と。舍利弗言はく『穌息とは謂ゆる三結を斷ずるなり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば三結を斷ずる耶』と。舍利弗答へて言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二二) 三三一[三三] 閻浮車、舍利弗に問はく『謂ゆる穌息を得とは、云何が穌息を得る者と爲すや』と。舍利弗言はく『穌息を得とは、謂ゆる三結已に盡き已れるを知るなり』。復た問はく『道有り向有りて此の結を斷ずる耶』と。舍利弗答へて言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二三) 三三二[三四] 閻浮車、舍利弗に問はく『謂ゆる上穌息を得とは云何が上穌息を得と爲すや』と。舍利弗言はく『上穌息を得とは謂ゆる貪欲永く盡き、瞋恚愚癡永く盡くるなり。是れを上穌息を得と名づく』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば上穌息を得』と。舍利弗答へて言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二四) 三三三[三五] 閻浮車、舍利弗に問はく『謂ゆる上穌息處を得とは云何が上穌息處を得と爲すや』と。舍利弗言はく『上穌息處を得とは謂く貪欲已に斷じ已れるを知り永く盡きて餘無く、瞋恚愚癡已に斷じ已れるを知り永く盡きて餘無くんば、是れを上穌息處を得と爲す』と。復た問はく『舍利弗よ、道有り向有りて修習するに多く修習せば上穌息處を得る耶』と。舍利弗答へて言はく『有り。謂ゆ

【三二】 S. 38. 15. Assāsa 蘇息とは三結を斷ずるなり。それは八正道による。巴には六觸處の集・滅・味・患・離を如實に知るなりとあり。

【三三】 同前。assāsapatta.

【三四】 S. 38. 6. Paramassāsa 巴には六觸處の集・滅・味・患・離を如實に知り已りて無取解脫せるを得上蘇息といふ。

【三五】 同前。前經の得上蘇息の得の字は不要？

乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(一七) 一三二六[二六] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂結とは云何が結と爲す』と。舍利弗言はく『結とは九結、謂ゆる愛結、恚結、慢結、無明結、見結、他取結、疑結、嫉結、慳結なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば此の結を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(一八) 一三二七[二七] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂使とは云何が使と爲す』と。舍利弗言はく『使とは七使、謂ゆる貪欲使・瞋恚使・有愛使・慢使・無明使・見使・疑使なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば此の使を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(一九) 一三二八[二八] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂欲とは云何が欲と爲す』と。舍利弗言はく『欲とは謂ゆる眼に識らるゝ色の愛樂し念じ、染着す可き色、耳に聲の、鼻に香の、舌に味の、身に識らるゝ觸の愛樂し念じ、染着す可き觸なりと、閻浮車、此の[二九]功德は欲に非ず、但だ覺想思惟する者のみなり』と。是の時舍利弗卽ち偈を說いて言はく。

[三〇]『彼に非ざる愛欲使なり　世間の種種の色にて　唯だ覺想有る　是れ則ち士夫の欲なり、
彼の諸の種種の色は　常に世間に在り、　愛欲の心を調伏せば、　是れ則ち黠慧の者なり』と。

復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば此の欲を斷ずる耶』と。舍利弗答へて言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二〇) 一三二九[三一] 閻浮車、舍利弗に問うて言はく『所謂蓋とは云何が蓋と爲す』と。舍利弗言はく『蓋と

[二六] 巴になし。愛・恚・慢・無明・見・他取・疑・嫉・慳の九結あり。之を斷ずるは八正道による。

[二七] 巴になし。貪欲・瞋恚・有愛・慢・無明・見・疑の七使あり。之を斷ずるは八正道による。

[二八] 巴になし。可愛の色等の五欲は、唯覺想思惟すべきものにして欲すべきに非ず。欲を斷ずるは八正道による。

[二九] 功德とは guṇa 對境の意なり。

[三〇] Kathā-vatthu 8. 4. Aṅg. 3. 4. 彼とは對境を指す。欲は境に在るに非ず、心になり。之を煩惱欲(kilesa-kāma)といふ。

[三一] 貪欲等の五蓋あり。之を斷ずるは八正道による。

五受陰なり。云何が五受陰なる。謂ゆる色受陰、受想行識受陰なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて此の有身を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(二) 一二二一[二〇] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂苦とは云何が苦と爲す』と。舍利弗言はく『[二一]苦とは謂ゆる、生の苦、老の苦、病の苦、死の苦、恩愛の別離する苦、怨憎の會ふ苦、求むる所を得ざるの苦。略說して五受陰の苦なり。是れを名づけて苦と爲す』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて此の苦を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(三) 一二二二[二二] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂る流とは云何が流と爲す』と。舍利弗言はく『流とは謂ゆる欲流・有流・見流・無明流なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば此の流を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(四) 一二二三[二三] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂扼とは云何が扼と爲す』と。扼は流に說くが如し。

(五) 一二二四[二四] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂取と云何が取と爲す』と。舍利弗言はく『取とは四取、謂ゆる欲取・我取・見取・戒取なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば此の取を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(六) 一二二五[二五] 閻浮車、舍利弗に問はく『所謂縛とは云何が縛と爲す』と。舍利弗言はく『縛とは四縛なり。謂ゆる欲貪の縛、瞋恚の縛、戒取の縛、我見の縛なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有り、修習するに多く修習せば此の縛を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見

【二〇】S. 38. 14. Dukkha. 生苦等あり。之を斷ずるは八正道による。
【二一】巴には dukkhadukkhatā saṅkhāradukkhatā vipariṇāmadukkhatā 苦苦、行苦、變易苦。
【二二】S. 38. 11. Ogha. 欲流・有流・無明流あり。之を斷ずるは八正道による。
【二三】巴になし。
【二四】S. 38. 12. Upādāna. 欲・我・見・戒の四取あり。此れを斷ずるは正道による。
【二五】巴になし。欲貪、瞋恚、戒取、我見の四縛あり。此を斷ずるは八正道による。

く『貪欲已に斷じて餘無く、瞋恚愚癡已に斷じて餘無くんば、是れを阿羅漢と名づく』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば阿羅漢を得る耶』と。舍利弗言はく『謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(七) 三二六[一四]閻浮車、舍利弗に問はく『所謂阿羅漢とは云何が阿羅漢者と名づくるや』と。舍利弗言はく『貪欲永く盡きて餘無く、瞋恚愚癡永く盡きて餘無くんば、是れを阿羅漢者と名づく』と。復た問はく『道有り向有りて、修習するに多く修習せば阿羅漢者を得る耶』と。舍利弗言はく『有り、謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(八) 三二七[一五]閻浮車、舍利弗に問はく『所謂無明とは云何が無明と爲すや』と。舍利弗言はく『[一六]所謂無明とは、前際に於て知る無く、後際に知る無く、前後中際に知る無く、佛法僧寶に知る無く、苦集滅道に知る無く、善不善無記に知る無く、內に知る無く、外に知る無く、若しくは彼彼の事に於て知る無く闇障ならば是れを無明と名づく』と。閻浮車、舍利弗に語らく『此れは是れ大闇の積聚なり』と。復た問はく、舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば無明を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(九) 三二八[一七]閻浮車、復た尊者舍利弗に問はく『所謂る有漏とは、云何が有漏なる』と。前に說くが如し。

(一〇) 三二九[一八]閻浮車、舍利弗に問はく『所謂る有とは云何が有と爲す』と。舍利弗言はく『有とは謂ゆる三有の欲有、色有、無色有なり』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば此の有を斷ずる耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已りて各座より起ちて去りにき。

(一一) 三三〇[一九]閻浮車、舍利弗に問はく『所謂有身とは云何が有身なる』と。舍利弗言はく『有身とは

【一四】同前。

【一五】S. 38. 9. Avijjā.

【一六】巴には單に、苦・集・滅・道に於て無知なるを無明といふ。

【一七】S. 38. 8. Āsava

【一八】S. 38. 13. Bhavo. 有とは欲、色、無色の三有なり。

【一九】S. 38. 15. Sakkāya. 有身とは五受陰なり。

愚癡を調伏するに向はゞ、是れを正向すと名づく。若し貪欲已に盡きて餘無く斷ぜるを知り、瞋恚愚癡已に盡きて餘無く斷ぜるを知らば、是れを善く斷ずと名づく』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに多く修習せば能く善斷を起すや』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已りて各座より起ちて去りにき。

(三) 〔三二二〕[九]閻浮車、舍利弗に問はく『謂ゆる涅槃とは云何か涅槃と爲す』と。舍利弗言はく『涅槃とは貪欲永く盡き、瞋恚永く盡き、愚癡永く盡き、一切の諸の煩惱永く盡くる。是れを涅槃と名づく』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習るに多く修習せば涅槃を得る耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて、各座より起ちて去りにき。

(四) 〔三二三〕[一〇]閻浮車、舍利弗に問はく『何が故に沙門瞿曇の所に於て出家して梵行を修するや』と。舍利弗言はく『[一一]貪欲を斷ぜん爲の故に、瞋恚を斷ぜんが故に、愚癡を斷ぜんが故に、沙門瞿曇の所に於て出家して梵行を修す』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて、修習するに多く修習せば貪欲・瞋恚・愚癡を斷ずるを得る耶』と。舍利弗言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。

(五) 〔三二四〕[一二]閻浮車、舍利弗に問はく『謂ゆる有漏盡とは云何が名づけて有漏盡と爲すや』と。舍利弗言はく『有漏とは三有漏なり。謂ゆる欲有漏、有有漏、無明有漏なり。此の三有漏の欲盡きて餘無きを有漏盡と名づく』と。復た問はく舍利弗道有り向有りて修習するに多く修習せば漏盡を得る耶』と。舍利弗答へて言はく『有り。謂ゆる八正道の正見乃至正定なり』と。時に二正士共に論議して已つて各座より起ちて去りき。

(六) 〔三二五〕[一三]閻浮車、舍利弗に問はく『所謂阿羅漢とは云何が阿羅漢と名づくるや』と。舍利弗言は

世間に於て說法者たり、正向たり、善逝たるものは何か、またそれにならんには八正道あるを說く。

【七】loke suppaṭipannā

【八】loke sugatā

【九】S. 38. 1. Nibbāna. 貪瞋癡の盡きたるを涅槃と名づく。

【一〇】S. 38. 4. Kim atthi 世尊の許にて世家して梵行を修する理由。

【一一】巴には苦を知らんが爲とあり。

【一二】cf. S. 38. 8. Āsava 有漏盡(無漏)とは欲漏、有漏、無明漏の盡きて餘なきを言ふ。八正道はその道なり。

【一三】S. 38. 2. Arahatta. 貪瞋癡の盡きたるを阿羅漢といふ。八正道は阿羅漢への道なり。

卷の第十八[*]

弟子所說誦第四[一]（品の一）（第四弟子所說誦[二]第一舍利弗相應）

（第一閻浮車品）

（一）三二〇（四九〇）（閻浮車經）[三]是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、摩竭提國の[四]那羅聚落に住まりたまへり。爾の時尊者舍利弗も亦た摩竭提國の那羅聚落に在りき。時に外道の出家有り閻浮車と名づく、是れ舍利弗の[五]舊き善知識なり。舍利弗のもとに來詣して問訊し、共に相慰勞し已て退て一面に坐し、舍利弗に問うて言はく『賢聖の法律の中には何の難事か有る』と。舍利弗、閻浮車に告ぐ。『唯だ出家するは難し』と。『云何か出家するは難きや』と。答へて言はく『愛樂するは難し』と。『云何か愛樂するは難きや』と。答へて言はく『樂（たのし）みで常に善法を修するは難し』と。復た問はく『舍利弗、道有り向有りて修習するに、多く修習せば常に善法を修すること增長する耶』と。答へて言はく『有り。謂ゆる八正道なり。謂ゆる正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定なり』と。閻浮車言はく『舍利弗、是れ則ち善道なり。是れ則ち善向なり。修習するに多く修習せば諸の善法に於て常に修習し增長せん。舍利弗、出家は常に此の道を修習し久しからずして疾く諸の有漏を盡すことを得ん』と。時に二正士共に論議し已つて各座より起ちて去りにき。是の如く閻浮車の所問に比して序ぶること四十經なり。

（二）三二一[六]閻浮車、舍利弗に問はく『云何が善說法者を名づけて、[七]世間の正向と爲すや、云何が名づけて[八]世間の善逝と爲すや』と。舍利弗言はく『若し說法して欲貪を調伏し、瞋恚を調伏し、愚癡を調伏せば、是れを世間の說法者と名づく。若し欲貪を調伏するに向ひ、瞋恚を調伏するに向ひ、

＊原、新倶に第十八なり。

【一】原本誦品の殘留せるものなり。今は弧內の如く訂す。舍利弗等の弟子の所說を綴めたるものとす。弟子說も他に散在するも、今專らなるによる。雜阿第十八、十九、二十、二十一卷を攝す。順序に從ひ第一部乃至第四部となす。巴利にては

S. 38. Jambukhādaka-saṃyutta

S. 39. Sāmaṇḍaka-saṃyutta

S. 40. Moggalāna-saṃyutta

S. 41. Citta-saṃyutta.

【二】舍利弗所說經を集めたるが故にかく名づけたり、巴利には此の名なく、閻浮相應（Jambukhādaka-saṃyutta）とあれども、閻浮所問は漢譯にては舍利弗所說の一部分なれば、今は此の如く章名を附けたり。閻浮車品は S. 38 に應じ、本文に四十經とあれども攝むる所は三十六經なり。

【三】S. 38. 16. Dukkaraṃ 出家するは難し、出家して道を樂しむは難し、八正道あり、之を修すれば漏を盡すことを得と說く。

【四】Nālakagāmaka

【五】巴利の註釋によれば舍利弗の甥とあり。

【六】S. 38. 3. Dhammavādi

說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三〇）一二〇八（四八八）（一法經）[五八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し一法に於て無常を觀察し、變易を觀察し、離欲を觀察し、滅を觀察し、捨離を觀察せば、諸の漏を盡くすことを得。謂ゆる一切の衆生は食に由つて存す。復た二法有り、名及び色なり。復た三法有り、謂ゆる三受なり。復た四法有り、謂ゆる四食なり。復た五法有り、謂ゆる五受陰なり。復た六法有り、謂ゆる六內外入處なり。復た七法有り、謂ゆる七識住なり。復た八法有り、謂ゆる世の八法なり。復た九法有り、謂ゆる九衆生居なり。復た十法有り、謂ゆる十業跡なり。此の十法に於て、無常を正觀し、變易を觀察し、離欲を觀察し、滅を觀察し、捨離を觀察せば、諸の漏を盡くすことを得』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三一）一二〇九（四八九）（一法經）[五九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し一法に於て無常を觀察し、變易を觀察し、離欲を觀察し、滅を觀察し、捨離を觀察せば、苦邊を究竟し、苦より解脫す。謂ゆる一切の衆生は食に由て存す。復た二法有り、名及び色なり。復た三法有り、謂ゆる三受なり。復た四法有り、謂ゆる四食なり。復た五法有り、謂ゆる五受陰なり。復た六法有り、謂ゆる六內外入處なり。復た七法有り、謂ゆる七識住なり。復た八法有り、謂ゆる世の八法なり。復た九法有り、謂ゆる九衆生居なり。復た十法有り、謂ゆる十業跡なり。此の十業跡に於て、無常を觀察し、變易を觀察し、離欲を觀察し、滅を觀察し、捨離を觀察せば、苦邊を究竟し、苦より解脫す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。[五八、五九]

【五八】一法乃至十法に於て無常變易、離欲、滅、捨離を觀察せば諸漏を盡すことを得。

【五九】前經と同じ。

【五八】原新俱に第十七卷此に終る二品　十一經を攝む。

【五九】原本第十七卷外に一經を載す、これ第十六卷一二〇六七と同經の重出なり。

種子は唯だ想受の滅を說き、名づけて至樂と爲す」と。此れ應ぜざる所なり、所以は何ん。應當に語つて言ふべし「此れは世尊の說かせたまふ所の受樂の數に非らず、世尊の受樂の數を說きたまふは、優陀夷に、四種の樂有りと說きたまふが如し。何等をか四と爲す。謂ゆる離欲の樂、遠離の樂、寂滅の樂、菩提の樂なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者優陀夷、及び瓶沙王佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二八)一二〇六(四八六)(一法經)[五六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し一法に於て正しき厭離を生じて樂はず背捨せば、諸の漏を盡くすことを得、所謂一切衆生は食に由て存するなり。復た二法有り、名及び色なり。復た三法有り、謂ゆる三受なり。復た四法有り、謂ゆる四食なり。復た五法有り、謂ゆる五受陰なり。復た六法有り、謂ゆる六內外入處なり。復た七法有り、謂ゆる七識住なり。復た八法有り、謂ゆる世の八法なり。復た九法有り、謂ゆる九衆生居なり。復た十法有り、謂ゆる十業跡なり。此の十法に於て、厭を生じて樂はず背捨せば、諸の漏を盡くすことを得』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二九)一二〇七(四八七)(經)[五七]是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し一法に於て正しき厭離を生じて樂はず背捨せば、苦邊を究竟し、苦より解脫す。謂ゆる一切衆生は食に由つて存するなり。復た二法有り、名及び色なり。復た三法有り、謂ゆる三受なり。復た四法有り、謂ゆる四食なり。復た五法有り、謂ゆる五受陰なり。復た六法有り、謂ゆる六內外入處なり。復な七法有り、謂ゆる七識住なり。復た八法有り、謂ゆる世の八法なり。復た九法有り、謂ゆる九衆生居なり。復た十法有り、謂ゆる十業跡なり。此の十法に於て、正しき厭離を生じて樂はず背捨せば、苦邊を究竟し、苦より解脫す』と。佛此の經を

【五六】一法乃至十法に於て正しく厭離を生じ樂はず背捨せば諸漏を盡すことを得。

【五七】前經と同じ。

名づく。云何が六受を說く。謂ゆる眼觸生の受・耳・鼻・舌・身・意觸生の受なり。云何が十八受を說く、謂ゆる隨六喜行・隨六憂行・隨六捨行の受なり、是れを十八受を說くと名づく。云何が三十六受なる。六貪著の喜に依り、六離貪著の喜に依り、六貪著の憂に依り、六離貪著の憂に依り、六貪著の捨に依り、六離貪著の捨に依る。是れを三十六受を說くと名づく。云何が百八受を說く。謂ゆる三十六受の、過去の三十六、未來の三十六、現在の三十六なり。是れを百八受を說くと名づく。云何が無量受を說く、此の受、彼の受等と說くが如く、比丘、是の如きを無量を說くと名づく。是れを無量受を說くと名づく。優陀夷。我れ是の如く種種に受の如實の義を說く。世間は解せざるが故に共に諍論し、共に相違反して終竟に我が法律の中の眞實の義を得ず。自ら止息するを以てなり。優陀夷、若し我が此の說く所の種種の受の義に於て、實の如く解知せば、諍論し共に相違反することを起こさず、起こるも未だ諍を起こさざるに能く法律を以て止めて休息せしむ。然るに優陀夷二受の欲受・離欲受有り。云何が欲受なる。五欲の功德の因緣もて受を生ず、是れを欲受と名づく。云何が離欲受なる。謂ゆる比丘の欲惡不善の法を離れ有覺有觀、離に喜樂を生じ、初禪を具足して住する。是れを離欲受と名づく。若しは說いて言ふ有らん「衆生の此の初禪に依るは、唯だ是れ樂たるのみ餘のものには非らず」と。此れは則ち然らず。所以は何ん。更らに勝樂の此れに過ぐるもの有るが故なり。何者か是れなる。謂ゆる比丘の有覺有觀を離れ、內淨にして定に喜樂を生じ、第二禪を具足して住するなり。是れを勝樂と名づく。是の如く乃至、非想非非想入處まで、轉轉して勝說す。若しは說いて言ふ有らん「唯だ此の處のみは有り。乃至非想非非想は極樂なるも餘には非らず」と。亦復た然らず。所以は何ん。更らに勝樂の此れ過ぐるもの有るが故なり。何者か是れなる。謂ゆる比丘の一切の非想非非想入處を度りて想受滅し、身に證を作し具足して住するなり。是れを勝樂の彼れに過ぐるものと名づく。若し異學の出家ありて、是の說を作して言はん「沙門釋

便を作して汝に問へるなり。汝當に諦らかに聽くべし。當に汝が爲に說くべし。其の觀ずる所の如く、次第に諸の漏を盡くす是れを見第一と爲す。其の問ふ所の如く、次第に諸の漏を盡くす、是れを聞第一と名づく。生ずる所の樂の如く、次第に諸の漏を盡くさば、是れを樂第一と名づく、其の想ふ所の如く、次第に諸の漏を盡くさば、是れを想第一と名づく。如實に觀察して、次第に諸の漏を盡くす、是れを有第一と名づく』と。時に二正士共に論說し已りて、座より起ちて去りにき。

(二七) 一二〇五 (四八五)(優陀夷經)[五四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時[五五]瓶沙王、尊者優陀夷の所に詣り、稽首して禮を作し、退きて一面に坐しぬ。時に瓶沙王、尊者優陀夷に白つて言はく、云何が世尊の說かせたまふ所の諸受なる』と。優陀夷言はく『大王、世尊は三受を說きたまふ。樂受・苦受・不苦不樂受なり』と。瓶沙王、尊者優陀夷に白さく『是の言を作すこと莫れ、世尊は三受の樂受・苦受・不苦不樂受を說きたまふと。正に二受の樂受、苦受有るべし。不苦不樂の若きは是れ則ち寂滅なり』と。是の如く三たび說けり。優陀夷、王の爲に三受を立つること能はず、王も亦た二受を立つること能はざりき。俱共に佛の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり退きて一面に住しぬ。時に尊者優陀夷先きに說きし所を以て、廣く世尊に白せり、『我れも亦た三受を立つること能はず、王も亦た二受を立つること能はざりき。今故に來りて具さに世尊に是の如きの義を問ひたてまつる。定めて幾受か有る』と。佛、優陀夷に告げたまはく『我れ時には一受を說くこと有り、或る時は二受を說き、或は三・四・五・六・十八・三十六乃至百八受を說き、或る時は無量受を說く。云何が我れ一受を說く。所有る受は皆悉く是れ苦なりと說くが如き是れを我れ一受を說くと名づく。云何が二受を說く。身受、心受を說く、是れ二受と名づく。云何が三受なる。樂受・苦受・不苦不樂受なり。云何が四受なる。謂ゆる欲界繫受・色界繫受・無色界繫受及び不繫受なり。云何が五受を說く。謂ゆる樂根・喜根・苦根・憂根・捨根なり、是れを五受を說くと

【五四】 S. 36. 19, 23. Udāyi. 頻婆娑羅王は世尊は二受を說き給ふと執し、優陀夷は三受なりと執決せず世尊に尋ぬ。世尊答へて受を說く時と場合に應じて種種に說く旨を述べらる。

【五五】 頻婆娑羅王なり。巴には pañcakaṅgo thapati. といふ舍衞城の一士官となつてゐる。

謂ゆる色、行を倶ふなり。云何が無食解脱なる。謂ゆる無色、行を倶ふなり。云何が無食無食解脱なる。謂ゆる彼の比丘、貪欲に染まずして解脱し、瞋恚愚癡の心に染まずして解脱せる。是れを無食無食解脱と名づく』と。佛此の經を説き已りたまひしに、諸の比丘、佛の説かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二六) 一三〇四 (四八四)(跋陀羅經)[五三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時尊者跋陀羅比丘、及び尊者阿難、倶に祇樹給孤獨園に住まれり。爾の時尊者阿難、尊者跋陀羅の所に往詣し、共に相問訊し、慰勞し已つて一面に於て住せり。時に尊者阿難、尊者跋陀羅比丘に問うて言はく『云何が名づけて見第一と爲すや。云何が聞第一なる。云何が樂第一なる。云何が想第一なる。云何が有第一なる』と。尊者跋陀羅、尊者阿難に語つて言はく『梵天有り、自在に造作し、化すること意の如く世の父たり。若し彼の梵天を見る者は、名づけて見第一なりと曰はん。阿難、衆生有りて、離に喜樂を生じ、處處に潤澤し、處處に敷悅し、身を擧げて充滿し、不滿の處無し、謂ゆる離に喜樂を生じ、彼れ三昧より起ち聲りを擧げて唱説し、遍ねく大衆に告るらく「極めて寂靜なる者は離に喜樂を生ず。極樂なる者は離に喜樂を生ず」と。諸の彼の聲を聞く者有らば、是れを聞第一と名づけん。復た次に阿難、衆生有りて、此の身に於て喜を離るるの樂に潤澤し、處處に潤澤し、敷悅充滿し、身を擧げて充滿し、不滿の處無き。所謂喜を離るるの樂、是れを樂第一なりと名づけん。云何が想第一なる。阿難、衆生有りて、一切の識入處と度り、無所有無所有入處を具足して住せんと、若し彼の想を起さば、是れを想第一なりと名づけん。云何が有第一なる。復た次に阿難、衆生有りて、一切の無所有入處を度り、非想非非想入處を具足して住せんと、若し彼の有を起こさば、是れを有第一なりと名づけん』と。尊者阿難、尊者跋陀羅比丘に語つて言はく『多く人有りて是の如きの見、是の如きの説を作すに、汝も亦も彼れに同じ、何の差別か有らん。我れ方

【五三】A. V. 170. Bhaddaji. 阿難、跋陀羅に見第一等を試問してその誤れるを正す。

斷じ、不善に長養せらるる喜を斷じ、不善に長養せらるる憂を斷ず。是れを五法の遠離と名づく。云何が五法を修滿するや。謂ゆる隨喜・歡喜・猗息・樂・一心なり』と。佛、舍利弗に告げたまはく『是の如し是の如し。若し聖弟子、喜樂を遠離することを修學し、具足して身に證を作さば、五法を遠離し、五法を修滿す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二五) 一二〇三 (四八三)(無食樂經)[49] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく[50]『食念者有り、無食念者有り、無食無食念者有り。食樂者、無食樂者有り、無食無食樂者有り。食捨者有り、無食捨者有り、無食無食捨者有り。食解脫者有り、無食解脫者有り、無食無食解脫者有り。云何が[51]食念なる。謂ゆる五欲の因緣もて念を生ずるなり。云何が無食念なる。謂ゆる比丘の欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離に喜樂を生じ初禪具足して住せる。是れを無食念と名づく。云何が[52]無食無食念なる。謂ゆる比丘の有覺有觀息み、內淨一心にして無覺無觀、定に喜樂を生じ、第二禪を具足して住せる。是れを無食無食念と名づく。云何が有食樂なる。謂ゆる五欲の因緣もて樂を生じ喜を生ずる。是れを食樂有りと名づく。云何が無食樂なるや。謂ゆる有覺有觀を息め內淨一心にして無覺無觀、空に喜樂を生ずる。是れを無食樂と名づく。云何が無食無食樂なる。謂ゆる比丘の喜貪捨の心を離れて住し、正念正知にして安樂に彼の聖の說く捨に住する。是れを無食無食樂と名づく。云何が有食捨なる。謂ゆる五欲の因緣もて捨を生ずる。是れを有食捨と名づく。云何が無食捨なる。謂ゆる彼の比丘喜貪捨の心を離れて住し、正念正知にして安樂に彼の聖の說く捨に住し、第三禪を具足して住せる。是れを無食捨と名づく。云何が無食無食捨なる。謂ゆる比丘の苦を離れ樂を息め、憂喜先に已に離れ、不苦不樂、捨、淨念一心にして、第四禪を具足して住せる。是れを無食無食捨と名づく。云何が有食解脫なる。

【四九】 S. 36. 29. Nirāmisaṃ. 修禪の深淺により物質に著すると、精神的に純化せるとによりて、喜、樂、捨、解脫に段階差別あり。

【五〇】 Atthi bhikkhave sāmisā pīti atthi nirāmisā pīti, atthi nirāmisā nirāmisatarā pīti, atthi sāmisaṃ sukhaṃ atthi nirāmisaṃ sukhaṃ atthi nirāmisā nirāmisataraṃ sukhaṃ, atthi sāmisā upekhā atthi nirāmisā upekhā atti nirāmisā nirāmisatarā upekhā; atthi sāmiso vimokkho atthi nirāmiso vimokkho atthi nirāmisā nirāmisataro vimokkho.

【五一】 食とは食物のみならず、廣く物質を指す。煩惱により、求められるもの。

【五二】 nirāmisā nirāmisatarā 巴利の註釋によれば、一層出世的な念が勝れてゐる。恰も王の側近の寵臣の勢力ある如しとある。

證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二四) 一二〇三 (四八二) (喜樂經)[四七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。夏安居の時なり、爾の時給孤獨の長者、佛の所に來詣し、稽首して足に禮したてまつり却つて一面に坐しぬ。佛爲に說法し、示敎照喜したまへり。種々の法を說き、示敎照喜し已りたまひしに、座より起ちて衣服を整へ、佛の爲に禮を作し、合掌して佛に白して言さく『唯だ願くは世尊、諸の大衆と、我れより三月のあひだ衣被・飲食・應病湯藥を請くることを受けさせたまへ』と。爾の時世尊、默然として許したまへり。時に給孤獨の長者、佛の默然として請くることを受けたまへるを知り已つて、座より起ちて去り、還りて自家に歸へりぬ。三月を過ぎ已つて、佛の所に來詣し、稽首して足に禮したてまつり退きて一面に坐しぬ。佛、給孤獨の長者に告げたまはく『善い哉長者、三月供養せし衣被・飲食・應病湯藥もて、汝は上道を莊嚴し淨治せるを以て、未來世に於ては當に安樂の果報を得べし。然も汝今默然として[四八]此の法を樂受すること得ること莫れ。汝當に精勤し、時時に喜樂を遠離することを學し具足して身に證を作すべし』と。時に給孤獨の長者、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜隨喜し、座より起ちて去りにき。爾の時尊者舍利弗、衆の中に於て坐し、給孤獨長者の去れるを知り已つて、佛に白して言さく『奇なる哉世尊、善く給孤獨長者の爲に說法し給孤獨長者を勸勵して言へり『汝已に三月具足して如來大衆の中に供養し、上道を淨治せり。未來世に於ては當に樂報を受くべし。汝默然として此の福に樂著すること莫れ。汝當に時時に喜樂を遠離することを學し、具足して身に證を作すべし』と。世尊、若し聖弟子をして喜樂を遠離することを學し、具足して身に證を作さしめば、五法を遠離し、五法を修滿することを得ん。云何が五法を遠離するや。謂ゆる欲に長養せらるる喜を斷じ、欲に長養せらるる憂を斷じ、欲に長養せらるる捨を

【四七】A. V. 176. Piti
給孤獨長佛及僧伽のために三ケ月間衣食藥等を供養す。佛未來世に安樂の果報あるべしと記別し、なほ喜樂を遠離せば現世に作證せんと敎へらる。舍利弗此の佛言を聞きて喜び自己の體驗を披瀝す。

【四八】未來世に安樂の果報を受くることに樂著するなり。

きに非らず。云何が因緣なる。欲は是れ因緣なり、覺は是れ因緣なり、觸は是れ因緣なり。諸の比丘、欲に於て寂滅せず、覺に寂滅せず、觸に寂滅せずんば、彼の因緣の故に衆生は受を生ず。寂滅せざる因緣を以ての故に衆生は受を生ず。彼の欲寂滅するも覺寂滅せず、觸寂滅せずんば、彼の因緣を以ての故に、衆生は受を生ず。寂滅せざる因緣を以ての故に、衆生は受を生ず。彼の欲寂滅し覺寂滅するも、觸寂滅せずんば、彼の因緣を以ての故に衆生は受を生ず、寂滅せざる因緣を以ての故に、衆生は受を生ず。彼の欲寂滅し、覺寂滅し、觸寂滅するも、彼の因緣を以ての故に衆生は受を生ず、彼の寂滅の因緣を以ての故に衆生は受を生ず。邪見の因緣の故に衆生に受を生ず。邪見寂滅せざる因緣の故に衆生は受を生ず。邪志・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定・邪解脫・邪智の因緣の故に衆生は受を生ず、邪智寂滅せざる因緣の故に衆生は受を生ず。正見の因緣の故に衆生は受を生ず。正見寂滅せる因緣の故に衆生は受を生ず。正志・正語・正業・正命・正方便・正念・正定・正解脫・正智の因緣の故に衆生は受を生ず。正智寂滅せる因緣の故に衆生は受を生ず。若し彼れ得ざる者は得、獲ざる者は獲、證せざる者は證せんと欲せば彼の因緣を以ての故に衆生は受を生ず。彼れ寂滅せる因緣を以ての故に衆生は受を生ず。是れを寂滅せざる因緣もて衆生は受を生じ、寂滅せる因緣もて衆生は受を生ずと名づく。若し沙門婆羅門、是の如き緣緣、緣緣の集、緣緣の滅、緣緣の集道跡、緣緣の滅道跡に實の如く知らずんば、彼れは沙門のなかの沙門に非らず、婆羅門のなかの婆羅門に非らず、沙門のなかの沙門に同じからず、婆羅門のなかの婆羅門に同じからず、沙門の義に非らず、婆羅門の義たる現法に自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知るに非らず。若し沙門婆羅門、此の緣緣、緣緣の集、緣緣の滅、緣緣の集道跡、緣緣の滅道跡に於て實の如く知らば、當に知るべし是れ沙門のなかの沙門なり、婆羅門のなかの婆羅門なり、沙門に同じく、婆羅門に同じく、沙門の義、婆羅門の義を以て現法に自ら

味、受の患、受の離に於て實の如く知るを以ての故に、諸の天・世間・魔・梵・沙門・婆羅門・天人衆の中に於て、脫すと爲し、出づと爲し、諸の顚倒より脫すと爲し、阿耨多羅三藐三菩提を得たるなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三一) 一三〇九 (四八〇)(沙門婆羅門經)[四四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し沙門婆羅門、諸の受に於て實の如く知らず、受の集、受の滅、受の集道跡、受の滅道跡、受の味、受の患、受の離に實の如く知らずんば、沙門に非らず婆羅門に非らず、沙門に同じからず、婆羅門に同じからず、沙門の義に非らず、婆羅門の義たる、現法に自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知るに非らず。若し沙門婆羅門、諸の受に於て實の如く知り、受の集、受の滅、受の集道跡、受の滅道跡、受の味、受の患、受の離に實の如く知らば、彼れは是れ沙門のなかの沙門たり、婆羅門のなかの婆羅門たり、沙門に同じく、婆羅門に同じく、沙門の義、婆羅門の義たる現法自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知る』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三二) 一三〇〇 (沙門數婆羅門數經) 沙門非沙門の如く、是の如く沙門數非沙門數も亦た是の如し。

(三三) 一三〇一 (四八一)(壹奢能伽羅經)[四五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、壹奢能伽羅國[四六]の壹奢能伽羅林の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ此の中に於て半月坐禪せんと欲す。諸の比丘、復た遊行すること勿れ、唯だ乞食及び布薩を除く』と。卽便ち坐禪して復た遊行したまはざりき、唯だ乞食及び布薩を除くのみなり。爾の時世尊、半月過ぎ已つて、坐具を衆の前に敷きて坐し、諸の比丘に告げたまはく『我れ初めて成佛せし時思惟せし所の禪法の少許の禪分を以て、今半月に於て思惟して是の念を作せり「諸の衆生有りて受を生ずるは皆因緣有り、因緣無

【四四】 S. 36. 26—28. Samaṇa-brāhmaṇā. 受乃至受の離實の如くに知らずんは沙門、婆羅門に非ず。若し知れば眞の沙門婆羅門にして、よくその目的を達す。

【四五】 受は因緣ありて生ず。緣緣乃至緣緣の滅道跡を知らずんば眞の沙門婆羅門に非ず。

【四六】 Icchānaṅgala

易の法ならば、是れを受の患と名づく。若し受に於て欲食を斷じ欲食を越ゆれば、是れを受の離と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一八) 一二〇九六 (四七七)(阿難所問經) 異比丘問經の如く、尊者阿難の所問の經も、亦た是の如し。

(一九) 一二〇九七 (四七八)[四二](比丘經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『云何が受と爲し、云何が受の集、云何が受の滅、云何が受の集道跡、云何が受の滅道跡なる』と。諸の比丘、佛に白して言さく『世尊は是れ法根・法眼・法依なり。善い哉世尊、唯だ願くは廣說したまへ、諸の比丘聞き已りなば、當に受け奉行すべし』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『諦らかに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし』と。佛、比丘に告げたまはく『三受有り、樂受・苦受・不苦不樂受なり。觸の集は是れ受の集なり。觸の滅は是れ受の滅なり。若し受に於て愛樂し讃歎し染著し堅住せば、是れを受の集道跡と名づく。若し受に於て愛樂し讃歎し染著し堅住せざれば是れを受の滅道跡と名づく。若し受の因緣もて樂喜を生ぜば、是れを受の味と名づく。若し受無常變易せば、是れを受の患と名づく。若し受に於て欲食を斷じ欲食を越ゆれば、是れを受の離と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二〇) 一二〇九八 (四七九)[四三](解脫經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し我れ諸の受に於て實の如く知らず、受の集、受の滅、受の集道跡、受の滅道跡、受の味、受の患、受の離に實の如く知らずんば、我れ諸天・世間・魔・梵・沙門・婆羅門・天人衆の中に於て、解脫し出離し諸の顚倒より脫することを得ざりしならん。亦た阿耨多羅三藐三菩提に非ざるなり。我れ諸の受、受の集、受の滅、受の集道跡、受の滅道跡、受の

【四二】 S. 36. 25. Bhikkhu 經意同前。

【四三】 佛若し諸の受、受の集、乃至受の離に實の如く知らずんば、無上正覺を證せざりしならん。

集、云何が受の滅、云何が受の集道跡、云何が受の滅道跡、云何が受の味、云何が受の患、云何が受の離なる』と是の如く觀察したまへり。三受の樂受・苦受・不苦不樂受有り、觸の集は是れ受の集、觸の滅は是れ受の滅なり。若し受に於て愛樂し、讃歎し、染著し、堅住せば、是れを受の集道跡と名づく。若し受に於て、愛樂し、讃歎し、染著し、堅住せずんば、是れを受の滅道跡と名づく。若し受の因緣もて樂喜を生ぜば、是れを受の味と名づく。若し受、無常變易の法ならば、是れを受の患と名づく。若し受に於て欲貪を斷じ欲貪を越ゆれば、是れを受の離と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二一六）一三〇八九―一三〇九四（先智經）　毘婆尸佛の如く、是の如く式棄佛・毘濕波浮佛・迦羅迦孫提佛・迦那迦牟尼佛・迦葉佛、及び我が釋迦文佛の未だ成佛したまはざりし時、思惟して諸の受を觀察したまふも亦復た是の如し。

（二一七）一三〇九五（四七六）（禪思經）[四一]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時異比丘有り、獨一靜處にて禪思し是の如く諸の受を觀察せり『云何が受、云何が受の集、云何が受の滅、云何が受の集道跡、云何が受の滅道跡、云何が受の味、云何が受の患、云何が受の離なる』と。時に彼の比丘禪より覺め已つて世尊の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に住し、佛に白して言さく『世尊、我れ獨一靜處にて禪思し、諸の受を觀察せり。云何が受と爲し、云何が受の集、云何が受の滅、云何が受の集道跡、云何が受の滅道跡、云何が受の味、云何が受の患、云何が受の離なる』と。佛、比丘に告げたまはく『三受有り、樂受・苦受・不苦不樂受なり。觸の集は是れ受の集なり、觸の滅は是れ受の滅なり。若し受に於て愛樂し、讃歎し、染著し、堅住せば、是れを受の集道跡と名づく。若し受に於て愛樂し、讃歎し、染著し、堅住せずんば、是れを受の滅道跡と名づく、若し受の因緣もて樂喜を生ぜば、是れを受の味と名づく。若し受無常變

【四一】S. 36. 23. Bhikkhu. 經意同前。

き、諸の行は漸次止息するを以ての故に、一切の諸の受は悉く皆是れ苦なりと說く』と。阿難、佛に白して言さく『云何が世尊、諸の受は漸次に寂滅するを以ての故に說きたまふや』と。佛、阿難に告げたまはく『初禪正受の時、言語寂滅し、第二禪正受の時、覺觀寂滅し、第三禪正受の時、喜心寂滅し、第四禪正受の時、出入息寂滅し、空入處正受の時、色想寂滅し、識入處正受の時、空入處の想寂滅し、無所有入處正受の時、識入處の想寂滅し、非想非非想入處正受の時、無所有入處の想寂滅し、想受滅正受の時、想受寂滅す。是れを漸次に諸の行寂滅すと名づく』と。阿難、佛に白して言さく『世尊、云何が漸次に諸の行止息するや』と。佛、阿難に告げたまはく『初禪正受の時、言語止息し、二禪正受の時、覺觀止息し、三禪正受の時、喜心止息し、四禪正受の時、出入息止息し、空入處正受の時、色想止息し、識入處正受の時、空入處の想止息し、無所有入處正受の時、識入處の想止息し、非想非非想入處正受の時、無所有入處の想止息し、想受滅正受の時、想受止息す。是れを漸次に諸の行止息すと名づく』と。阿難、佛に白して言さく『世尊、是れを漸次に諸の行止息すと名づるや』と。佛、阿難に告げたまはく『復た勝止息・奇特止息・上止息・無上止息有り、是の如き止息は、餘の止息に於て過上なるもの無し』と。阿難、佛に白さく『何等をか勝止息・奇特止息・上止息・無上止息にして諸の餘の止息に過上なる者無しと爲すや』と。佛、阿難に告げたまはく『貪欲心に於て解脫を樂はず、恚癡心に解脫を樂はざる。是れを勝止息・奇特止息・上止息・無上止息にして、諸の餘の止息に過上なる者無しと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者阿難、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一〇）　一三〇八（四七五）（先智經）[四〇]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『毘婆尸如來、未だ成佛したまはざりし時、獨一靜處にて禪思し思惟して、是の如き觀を作して、諸の受を觀察したまへり。『云何が受と爲し、云何が受の

【四〇】 S. 36. 24. Pubbeñāna. 毘婆尸佛は三受及び其の集、滅、滅道跡を觀察せらる。

時に異比丘有り。獨一靜處にて禪思し念言すらく『世尊は、三受の樂受・苦受・不苦不樂受を說きたまひ、又た諸の所有る受は、悉く皆是れ苦なりと說きたまふ。此れ何の義か有る』と。是の比丘是の念を作し已つて、禪より起ち、佛の所に往詣し、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に住し、佛に白して言さく『世尊、我れ靜處に於て禪思し、念言すらく、世尊は三受の樂受・苦受・不苦不樂受を說きたまひ、又た諸の所有る受は、悉く皆是れ苦なりと說きたまふ。此れ何の義があると』と。佛、比丘に告げたまはく『我れ一切の行は無常なるを以ての故に、一切の諸の行は變易の法なるが故に、諸の所有る受は悉く皆是れ苦なりと說く』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

『諸行は無常にして　皆是れ變易の法なりと知る　故に受は悉く苦なりと說くは正覺の知ろしめす所なり　比丘勤めて方便して正智もて傾動せざれ　諸の一切の受に於て黠慧は能く了知す　悉く諸の受を知り已りなば　現法に諸の漏を盡くし　身死して數に墮ちず　永く般涅槃に處せん』

と。佛是の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九) 三〇八七 (四七四)[三九](止息經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、獨一靜處にて禪思し念言すらく『世尊三受の樂受・苦受・不苦不樂受を說きたまひ、又復た諸の所有る受は、悉く皆是れ苦なりと說きたまふ。此れ何の義か有る』と。是の念を作し已つて、禪より起ち、世尊の所に詣り、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に住し、佛に白して言さく『世尊、我れ獨一靜處にて禪思し念言すらく、世尊は三受の樂受・苦受・不苦不樂受を說きたまひ、又た一切の諸の受は悉く皆是れ 苦なりと說きたまふ。此れ何の義か有ると』。佛、阿難に告げたまはく『我れ一切の行は無常なるを以ての故に、一切の行は變易の法なるが故に、諸の所有る受は、悉く皆是れ苦なりと說く。又復た阿難、我れ諸の行は漸次寂滅するを以ての故に說

【三九】 S. 36. 15―16. Santaka.
諸行は無常變易の法なるが故に一切諸受皆苦なりと說く。又諸行は寂滅止息の法なるが故に皆苦なりと說く。次に云何が寂滅止息するや。初禪に於て言語寂滅し、漸次進み、乃至想受滅正受の時に想受寂滅す。

(2)[三三]塵有る及び塵無き　乃至風輪より起こるあり　(3)是の如く此の身中に　諸の受の起こるも亦た然なり　若しは樂若しは苦受　及び不苦不樂　[三四]有食と無食と　貪著不貪著なり
(4)比丘勤め方便して　正智もて傾動せざれ　此の一切の受に於て　黠慧は能く了知す
(5)諸の受を了知するが故に　現法に諸の漏を盡くし　身死して數に墮ちず　永く般涅槃に處するなり』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七)一二〇八五(四七二)(客舍經)[三五]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば[三六]客舍に種種の人住めり。若しは刹利・婆羅門・長者・居士・野人・獵師・持戒・犯戒・在家・出家、悉く中に於て住めるが如く、此の身も亦復た是の如く種種の受生ず。苦受・樂受・不苦不樂受・樂身受・苦身受・不苦不樂身受・樂心受・苦心受・不苦不樂心受・樂食受・苦食受・不苦不樂食受・樂無食受・苦無食受・不苦不樂無食受・樂貪著受・苦貪著受・不苦不樂貪著受・樂出要受・苦出要受・不苦不樂出要受なり』と。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

[三七]『譬へば客舍の中に　種種なる人の住止するが如し　刹利婆羅門　長者居士等　旃陀羅
野人　持戒犯戒の者　在家出家の人　是の如き等の種種なり　此の身も亦た是の如く
種種の諸の受生ず　若しは樂若しは苦受　及び不苦不樂　有食と無食と　貪著不
貪著なり　比丘勤めて方便して　正智もて傾動せざれ　此の一切の受に於て　黠慧は
能く了知す　諸の受を了知するが故に　現法に諸の漏を盡くし　身死して數に墮ちず
永く般涅槃に處するなり』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八)一二〇八六(四七三)(禪經)[三八]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。

【三三】巴には Sarajā arajāvāpi, sītā uphā ca ekadā, adhimattā parittā ca, puthu vāyanti. mālutā 塵ある、塵なき、涼しき、熱き、一時の、强き、小さき風は吹く。
【三四】巴になし。
【三五】S. 36. 14. Āgāra. 客舍には種種雜多の人宿泊する如く、人生には亦種種の苦樂あり。
【三六】āgantukāgāra. 旅館。
【三七】巴に此の偈文なし。
【三八】S. 36. 11. Rahogataka. 苦、樂、不苦不樂の三受を說き、また總じて一切苦なりと說くは、一切諸行は無常變易の法なるが故なり。

被らず、爾の時に當つては唯だ一受の、所謂身受のみを生じ、心受を生ぜざるが如し。樂受に觸れらるるも欲樂に染まず。欲樂に染まざるが故に彼の樂受に於て、貪使に使せれず。苦觸の受に於て瞋恚を生ぜず。瞋恚を生ぜざるが故に恚使に使せられず。彼の二使に於ける集・滅・味・患・離を實の如く知る。實の如く知るが故に、不苦不樂受の癡使に使はれざるなり。彼の樂受に於て解脫して繫せず、苦受、不苦不樂受に解脫して繫せざるなり。何に於てか繫せざる。謂ゆる貪恚癡に繫せず、生老病死憂悲惱苦に繫せざるなり』と。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

『多聞は苦樂に於て　覺知を受けざる非らず　彼の凡夫人よりは　其れ實には大に聞る有り[二九]　樂受に放逸ならず　苦觸に憂を增さず　苦樂の二俱に捨てて　順はず亦た違はざるなり　比丘勤め方便して　正智もて傾動せざれ　此の一切の受に於て　黠慧は能く了知す。諸の受を了知するが故に　現法に諸の漏を盡くし　身死して數に墮ちず　永く般涅槃に處するなり』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六) 三〇八四 (四七二)(虛空經)[三〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば空中に狂風卒かに起こり四方より來るに、塵土有る風、塵土無き風、[三一]毘濕波の風、[三二]鞞嵐婆の風、薄き風、厚き風、乃至風輪より起こる風あるが如く、身中の受の風も亦復た是の如し。種種の受の風起る。樂受・苦受・不苦不樂受・樂身受・苦身受・不苦不樂身受・樂心受・苦心受・不苦不樂心受・樂食受・苦食受・不苦不樂食受・樂無食・苦無食・不苦不樂無食の受・樂貪受・苦貪受・不苦不樂貪受・樂出要受・苦出要受・不苦不樂出要受なり』と。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく、

(1)『譬へば虛空の中に　種種の狂風起こるが如し　東西南北より風ふき　四維も亦た是の如し

【二九】 以下巴利偈と一致せず。

【三〇】 S. 36. 12—13. Ākāsam. 空中に種種の風嵐吹く如く、人生には種種の苦樂の感ぜらるるあり。

【三一】 viśva-vāta. 普ねく一體に吹く風、

【三二】 verambha-vāta ? 巴になし。高空を吹く風。

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(五) 三〇八三 (四七〇)[二八] (箭經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『愚癡無聞の凡夫は苦・樂の受、不苦不樂の受を生ず。多聞の聖弟子も亦た、苦・樂の受、不苦不樂の受を生ず。諸の比丘、凡夫と聖人と何の差別かある』と。諸の比丘、佛に白さく『世尊は是れ法根法眼法依なり。善い哉世尊、唯だ願くは廣說したまへ。諸の比丘聞き已りなば、當に受け奉行すべし』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『愚癡無聞の凡夫は、身に觸れて諸の受を生じ、苦痛逼迫し、乃至奪命せば、憂愁啼哭し稱怨號呼す』と。

佛、諸の比丘に告げたまはく『諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。諸の比丘、愚癡無聞の凡夫は、身に觸れて諸の受を生じ諸の苦痛を增し、乃至奪命せば、愁憂稱怨し、啼哭號呼して、心狂亂を生ず。爾の時に當つて二受を增長す。若しは身受、若しは心受なり。譬へば士夫の身、雙(ふたつ)の毒箭を被るに極めて苦病を生ずるが如し。愚癡無聞の凡夫も亦復た是の如し。二受の身受、心受を增長して極めて苦痛を生ず。所以は何ん。彼の愚癡無聞の凡夫は了知せざるを以ての故に諸の五欲に於て樂受の觸を生じ、五欲の樂を受くればなり。五欲の樂を受くるが故に、貪使の所使と爲る。苦受觸するが故に則ち瞋恚を生ず。瞋恚を生ずるが故に恚使の所使と爲る。此の二受に於て、若しは集、若しは滅、若しは味、若しは患、若しは離を實の如く知らず。實の如く知らざるが故に、不苦不樂受を生じて、癡使の所使と爲り、樂受に繫せられて終ひに離れず、苦受に繫せられて終ひに離れず、不苦不樂受に繫せられて終ひに離れざるなり。云何が繫する。謂ゆる貪恚癡の繫する所と爲り、生老病死憂悲惱苦の繫する所と爲るなり。多聞の聖弟子は、身に觸れて苦受を生じ、大苦逼迫し、乃至奪命するも憂悲稱怨し、啼哭號呼し、心亂れ發狂するを起さず、爾の時に當つては唯だ一受のみを生ず、所謂身受なり。心受を生ぜざるなり。譬へば士夫の一毒箭を被るも第二の毒箭を

【二八】 S. 36. 6. Sallatha. 愚凡も賢聖も人間たる以上種種の苦を受くるに差別なし。然も凡夫は身受とともに、心受あるが故に憂惱狂亂し、賢聖はたゞ身受のみなれば心は泰然たり。其の所以は、凡夫は五欲の樂に染むが故に三毒生じ、賢聖には此のことなきが故なり。

(1)[二四]『樂受の受けらるゝ時　則ち樂受を[二五]　知らずんば　貪使に使せられて　出要の道を見ざるなり。(2)苦受の受けらるゝ時　則ち苦受を知らずんば　瞋恚使に使せられて　出要の道を見ざるなり。(3)不苦不樂受を　正覺の說かるゝがごとく　善く觀察せざる者は　終に彼岸に度らざるなり。(4)比丘勤めて精進し　正しく知りて動轉せざれ。　此の如く一切の受を　慧ある者は能く覺知す。(5)諸の受を覺知せば　現法に諸の漏を盡くす。　明智ある者は命終して　衆の數に墮ちず　衆の數既に斷ぜば　永く般涅槃に處せん』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者羅睺羅、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四)　三〇八二　(四六九)[二六](深嶮經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『大海の[二七]　深嶮とは、此れ世間愚夫の所說なり。深嶮は賢聖の法律に說く所に非らず。深嶮なりと世間に說く所は是れ大水積聚の數のみ。若し身に從ひて諸の受を生じ、衆の苦逼迫して或は惱み或は死せば、是れを大海の極めて深嶮なる處と名づく。愚癡無聞の凡夫は、此の身に於て諸の受を生じ、苦痛逼迫せば或は惱み或は死し、憂悲稱怨し啼哭號呼し、心亂れて發狂し長く淪み沒溺して止息する處無し。多聞の聖弟子は、身に於て諸の受を生じ、苦痛逼迫して或は惱み或は死するも、憂悲を生じて、啼哭號呼し、心狂亂を生ぜず、生死に淪まずして、止息する處を得』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

(1)『身に諸の苦受を生じ　逼迫し乃至死するに　憂悲して息忍せず　號呼して狂亂を發さば
心自ら障礙を生じ　衆苦增を招集して　永く生死の海に淪み　休息する處を知る莫けん
(2)能く身の諸の受を捨てゝ、　身に生ずる所の苦惱　切迫して乃至死するも　憂悲の想を起さず　啼哭號呼せず　能く自ら衆苦を忍ばば　心障礙を生ぜず　衆苦增を招集して
生死に淪沒せず　永く安隱の處を得ん』

【二四】漢巴本の偈文一致す。
【二五】appajānato 遍知せざれば。完全に知らざればの意。
【二六】S. 36. 4. Pātāla. 大海の深嶮は賢者の說かざる所なり。生死を深嶮となす。愚凡は中に於て憂悲狂亂啼哭して止息するなきも、賢聖は狂亂せず生死に沈まず、
【二七】pātāla 斷崖絕壁なり、今の場合は大海の中の急に深くなりたる所を言ふなるべし。

へり。爾の時尊者羅睺羅、佛の所に往詣し、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に住し、佛に白して言さく『世尊、云何が知り云何が見ば、我が此の識身及び外境界一切の相に、我我所の見・我慢・繫著・使有ること無きを得るや』と。佛、羅睺羅に告げたまはく『三受有り、苦受・樂受・不苦不樂受なり、樂受を觀じては而かも苦想を作し、苦受を觀じては劍刺の想を作し、不苦不樂受を觀じては無常想を作せ。若し彼の比丘、樂受を觀じて而かも苦想を作し、苦受を觀じて劍刺の想を作し、不苦不樂受を觀じて無常滅の想を作さば、是れを正見すと名づく』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

『樂を觀じて苦想を作し　苦受は劍刺に同じうし　不苦不樂に於て　無常滅の想を修する
は是れ則ち比丘の　正見成就せる者と爲す。　寂滅安樂道にして　最後の邊に住まり
永く諸の煩惱を離れ　衆の魔軍を摧伏す』

と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者羅睺羅、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 三八一 (四六八)[二三] (三受經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時尊者羅睺羅、佛の所に往詣し、佛の足に稽首したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、云何が知り云何が見ば、我が此の識身及び外境界一切の相に、我我所の見・我慢・繫著・使有ること無きを得るや』と。佛、羅睺羅に告げたまはく『三受有り、苦受・樂受・不苦不樂受なり。樂受を觀ずるは樂受の貪使を斷ぜんが爲の故に、我所に於て梵行を修し、苦受の瞋恚使を斷ぜんが故に我所に於て梵行を修し、不苦不樂受の癡使を斷ぜんが故に我所に於て梵行を修す。羅睺羅、若し比丘、樂受の貪使已に斷じ已れるを知り、苦受の恚使已に斷じ已れるを知り、不苦不樂受の癡使已に斷じ已れるを知らば、是れを比丘の愛欲の縛を斷除し諸の結慢を去り無間等にして苦邊を究竟せりと名づく』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

【二三】 S. 36. 3. Pahānena. 樂受に於ては貪隨眠を滅し、苦受に於ては瞋隨眠を滅し、不苦不樂受に於ては癡隨眠を斷ぜば我我所の見等無きを得。

は內若しは外、若しは麁若しは細、若しは好若しは醜、若しは遠若しは近、彼の一切は我に非らず我に異らず相在せずと、實の如く知り、水界・火界・風界・空界・識界も亦復た是の如くならば、羅睺羅・比丘、是の如く知り是の如く見ば、我が此の識身及び外境界一切の相に於て、我我所の見・我慢・繋著、使有ること無し。羅睺羅、若し比丘の此の識身及び外境界一切の相に於て我我所の見・我慢・繋著、使有ること無くんば、是れを愛縛の諸の結を斷じ、諸の愛の正慢を斷じ、無間等にして苦邊を究竟せりと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者羅睺羅、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(第三因緣誦、第四*受相應)

(◎受相應品)

(一) 三〇七九 (四六六) (觸因經)[二一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時尊者羅睺羅、佛の所に往詣し、稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、云何が知り云何が見ば、我が此の識身及び外境界一切の相に、我我所の見・我慢・繋著・使有ること無きを得るや』と。佛、羅睺羅に告げたまはく『三受有り、苦受・樂受・不苦不樂受なり。此の三受は、何の因、何の集、何の生、何の轉ぞや。謂ゆる此の三受は觸の因、觸の集、觸の生、觸の轉なり。彼彼の觸因となり彼彼の受生ず、若し彼彼の觸滅すれば彼彼の受も亦た滅し、止み清涼にして沒す。是の如く知り是の如く見ば、我が此の識及び外境界一切の相に、我我所の見・我慢・繋著・使有ること無きを得』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者羅睺羅、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) 三〇八〇 (四六七) (劍刺經)[二二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたま

* S. 36 Vedanā saṃyutta に當る。
◎ 三十一經一括して受相應品とす。

【二一】 S. 36. 10. Phassa-mūlaka 苦等の三受は觸を因として生ずるものなることを知見せば、我我所見乃至使無きを得。本經以下三經は前經と同く羅睺羅に關するも內容によりて別品とす。

【二二】 S. 36. 5. Datthabbena. 樂受にも苦想をなし、苦受は劍もて刺さるる思ひをなし、不苦不樂受に於て無常想を作せば我我所の見乃至使あることなし。

以て專精に思惟すべき』と。時に五百の比丘、尊者阿難に答ふらく『當に二法を以て專精に思惟すべし。乃至滅界なり』と。上座の所說の如し。時に尊者阿難、五百の比丘の所說を聞きて、歡喜し隨喜し、佛の所に往詣し、佛の足に稽首して、退きて一面に坐し、佛に白して言さく『世尊、若し比丘、空處・樹下・閑房にて思惟せんには、當に何の法を以てか專精に思惟すべき』と。佛、阿難に告げたまはく『若し比丘、空處・樹下・閑房にて思惟せんには、當に二法を以つて專精に思惟すべし。乃至滅界なり』と。五百の比丘の所說の如し。時に尊者阿難、佛に白して言さく『奇なる哉世尊、大師及び諸の師子、皆悉く同法・同句・同義・同味なり。我れ今上座のもとに詣り、上座と名づくる者に、此の如き義を問ひしに、亦た此の義此の句此の味を以て我れに答ふること今世尊の說かせたまふ所の如くなりき。我れ復た五百の比丘の所に詣り、亦た此の義此の句此の味を以て問ひしに、彼の五百の比丘も亦た、此の義此の句此の味を以て答へたり。今世尊の說かるゝが如くなりき。是の故に當に知るべし、師及び弟子は、一切同法・同義・同句・同味なることを』と。佛、阿難に告げたまはく『汝彼の上座を知りて何如なる比丘なりと爲すや』と。阿難、佛に白さく『知らざるなり世尊』と。佛、阿難に告げたまはく『上座とは是れ阿羅漢なり。諸の漏已に盡き、已に重擔を捨て、正智もて心善く解脫せり。彼の五百の比丘も亦た皆是の如し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、尊者阿難、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二〇）三〇六[一〇]（四六五）（著使經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時尊者羅睺羅、世尊の所に詣り稽首して足に禮したてまつり、退きて一面に坐し佛に白して言さく『世尊、云何が知り云何が見ば我が此の識身及び外境界なる一切の相に、我我所の見・我慢・繫著・使有ること無きを得るや』と。佛、羅睺羅に告げたまはく『諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。羅睺羅、若し比丘、所有る地界に於て、若しは過去若しは未來若しは現在、若し

【三〇】cf. S. 22. 91. Rāhula. cf. S. 18. 21. Anusaya.
地、水、火、風、空識界に於て全て我に非ず、異我たらず、相在せずと見る時は、我我所の見、我慢、繫著、使なきを得。

に白さく『說かるる種種の界とは、云何が種種の界と爲すや』と。尊者阿難、瞿師羅の長者に答うらく『謂ゆる三種の出界なり。云何が三なる。謂ゆる欲界より出でて色界に至り、色界を出でて無色界に至り、一切の諸行一切の思想滅する界、是れを三出界と名づく』と。卽ち偈を說いて言はく、

『欲界より出でて　色界を超踰するを知り　一切の行寂滅し　勤めて正方便を修す　一切の愛を斷除せば　一切の行滅盡し　一切の有餘　復た轉じて有に還らざるを知らん』

と。尊者阿難、是の經を說き已りしに、瞿師羅の長者、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

（九）三〇七（四六四）（同法經）[一八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、上座のもとに往詣せり。上座と名づくる者の所に詣り已つて、恭敬し問訊し、問訊し已つて退き一面に坐し上座に問うて、上座と名づくる者に言はく『若し比丘、空處・樹下・閑房に於て思惟せんには、當に何の法を以てか專精に思惟すべき』と。上座答へて言はく『尊者阿難、空處・樹下・閑房に於て思惟せんには、當に二法を以て專精に思惟すべし。所謂止觀なり』と。尊者阿難、復た上座に問はく『止を修習するに、多く修習し已らば當に何をか成ずる所なるべき。觀を修習するに、多く修習し已らば當に何をか成ずる所なるべき』と。上座答へて言はく『尊者阿難、止を修習せば終に觀を成ず。觀を修習し已らば、亦た止を成ずるなり。謂ゆる聖弟子は止、觀俱に修して、諸の解脫界を得るなり』と。阿難復た問はく『上座、云何が諸の解脫界なる』と。上座答へて言はく『尊者阿難、若し[一九]斷界・無欲界・滅界、是れを諸の解脫界と名づく』と。尊者阿難復た上座に問はく『云何が斷界乃至滅界なる』と。上座答へて言はく『尊者阿難、一切の行を斷ずる、是れを斷界と名づけ、愛欲を斷除する、是れ無欲界なり。一切の行滅する、是れを滅界と名づく』と。時に尊者阿難、上座の所說を聞きて歡喜し隨喜し、五百の比丘の所に往詣し、恭敬して問訊し退きて一面に坐し、五百の比丘に白して言さく『若し比丘、空處・樹下・閑房に於て思惟せん時は、當に何の法を

【一八】阿難、上座と五百比丘と佛とに同一の問を作せしに同一の答を得たり。故に覺りぬ。大師及び諸の弟子、皆悉く同法、同句、同義、同味なりと。

【一九】斷界、無欲界、滅界。

ず。彼の苦觸の因緣もて苦受を生ず。是の如く耳鼻舌身意の法も、亦た是の如く說く。復た次に長者、異の眼界、異の色界、捨處ならば二因緣もて識を生じ、三事和合して不苦不樂の觸を生ず。不苦不樂の因緣もて不苦不樂受を生ず。是の如く耳鼻舌身意の法も、亦た是の如く說く』と。爾の時瞿師羅の長者、尊者阿難の所說を聞きて、歡喜隨喜し、足を禮して去りにき。

(六) 三〇七四 (四六一)[15](三界經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。爾の時瞿師羅の長者、尊者阿難の所に詣り、稽首して足に禮し、一面に於て坐し、尊者阿難に白さく『說かるる種種の界とは、云何が種種の界と爲すや』と。尊者阿難、瞿師羅の長者に告ぐるらく、『三界有り。云何が三なる。謂ゆる欲界・色界・無色界なり』と。爾の時尊者阿難、卽ち偈を說いて言はく、

『欲界を曉了せり。　色界も亦復た然なり、　一切の有餘を捨てて、　無餘寂滅を得、　身の和合界に於て、　永く盡きて無餘を證したまへる　三耶三佛は　無憂離苦の句を說きたまふ。』

と。尊者阿難、是の經を說き已りしに、瞿師羅の長者、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

(七) 三〇七五 (四六二)[16](三界經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。爾の時瞿師羅の長者、尊者阿難の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐し、尊者阿難に白さく『說かるる種種の界とは云何が種種の界と爲すや』と。尊者阿難、瞿師羅の長者に告るらく『三界有り、色界・無色界・滅界なり、是れを三界と名づく』と。卽ち偈を說いて言はく、

『若しは色界の衆生　及び無色界に住して　滅界を知らざる者は　還りて復た諸の有を受けん　若し色界を斷じて　無色界にも住せずば　滅界にて心解脫し　永く生死を離る』

と。尊者阿難、是の經を說き已りしに、瞿師羅の長者、歡喜し隨喜し、禮を作して去りにき。

(八) 三〇七六 (四六三)[17](三界經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。爾の時瞿師羅の長者、尊者阿難の所に詣り、稽首して足に禮し、退きて一面に坐し、尊者阿難

【一五】欲・色・無色の三界を說く。

【一六】色・無色・滅の三界を說く。

【一七】前經に同じ。

言さく『衆生は自作に非らず他作に非らず』と。佛、婆羅門に告げたまはく『是の如く論ずる者には、我れ與に相見えず。汝今自ら來りて、我れに自作に非らず他作に非らずと言ふや』と。婆羅門言はく『云何が瞿曇、衆生は自作と爲すや他作と爲すや』と。佛、婆羅門に告げたまはく『我れ今汝に問はん、意に隨つて我に答へよ。婆羅門、意に於て云何。衆生に方便界有りて、諸の衆生をして方便を作すを知らしむるや』と。婆羅門言はく『瞿曇、衆生に方便界有りて、諸の衆生をして方便を作すを知らしむ』と。佛、婆羅門に告げたまはく『若し方便界有りて、諸の衆生をして方便あるを知らしむれば、是れ則ち衆生は自作なり是れ則ち他作なり。婆羅門、意に於て云何。衆生に安住界・堅固界・出界・造作界有りて、彼の衆生をして造作有るを知らしむるや』と。婆羅門、佛に白さく『衆生に安住界・堅固界・出界・造作界有りて、諸の衆生をして造作有るを知らしむ』と。佛、婆羅門に告げたまはく『若し彼の安住界・堅固界・出界・造作界有りて諸の衆生をして造作あるを知らしむれば、是れ則ち衆生は自作なり、是れ則ち他作なり』と。婆羅門、佛に白さく『衆生に自作有り他作有り、瞿曇、世間多事なり、今當に請ひ辭すべし』と。佛、婆羅門に告げたまはく『世間多事ならば宜しく是れ時なりと知るべし』と。時に彼の婆羅門、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し隨喜し、座より起ちて去りにき。

(五) 一三〇七 (四六〇)(瞿師羅經)[一三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、拘睒彌國の瞿師羅園に住まりたまへり。爾の時、瞿師羅長者、尊者阿難の所に詣り、尊者阿難の足に禮し、退きて一面に坐し、尊者阿難に白さく『說かるる種種の界とは、云何が種種の界と爲すや』と。尊者阿難、瞿師羅の長者に告るらく[一四]『眼界の異なる、色界の異なる(ありて)、喜處ならば、二因緣もて識を生じ、三事和合して觸を生ず。又た喜觸の因緣もて樂受を生ず。是の如く耳鼻舌身意の法も、亦た是の如く說く。復た次に長者、異の眼界、異の色界有りて憂處ならば、二因緣もて識を生じ、三事和合して苦の觸を生

【一三】 S. 35. 129. Ghosita. 眼界色界はそれぞれ別なる存在なり。此の二に緣りて識生じ、三者和合して觸を生ず。此の場合、色界眼界喜處ならば樂受生じ、憂處ならば苦受、不捨處ならば不苦不樂住生ず、耳鼻舌身意の法も亦然り。
【一四】 Samvijjati kho gaha-pati cakkhudhāturūpā ca manāpā chakkhuviññāṇaṃ ca sukhavedaniyam phassam paṭicca uppajjati sukhā ve-danā.

惱有り熱有り、身壞命終して、惡趣の中に生ず。譬へば城邑聚落に遠からず曠野有り、大火卒に起るに、彼の力有りて能く火を滅する者無きが如し。當に知るべし、彼の諸の野の中の衆生は、悉く火害を被ると、是の如く諸の沙門婆羅門、生に安んぜば危嶮の想を生ずるも、身壞命終して、惡趣の中に生ぜん。諸の比丘、因有りて[二]出要の想を生ず、無因には非らず。云何が因有りて出要の想を生ずる。謂ゆる出要界は、出要界を緣じて、出要の想、出要の欲、出要の覺、出要の熱、出要の求を生ず。謂ゆる彼の慧ある者、出要を求むる時、衆生は三處の正を生ず。謂ゆる身・口・心なり。彼れ是の如く正因緣を生じ已らば、現法に樂に住し、苦しまず、礙げず、惱まず、熱せず、身壞命終して、善趣の中に生ず。是れを因緣もて出要の想を生ずと名づく。云何が不恚、不害の想を生ずる。謂ゆる不害界なり。不害界の因緣もて、不害の想、不害の欲、不害の覺、不害の熱、不害の求を生ず。彼の慧ある者、不害を求むる時、衆生は三處正し。謂ゆる身・口・心なり。彼の正因緣生じ已らば、現法に樂に住し、苦しまず、礙げず、惱まず、熱せず、身壞命終して、善趣の中に生ず。是れを因緣もて不害の想を生ずと名づく。若し諸の沙門婆羅門、生に安んじ不害の想を生じて、捨離せず、覺らず吐さざるも、現法に樂に住し、苦しまず、礙げず、惱まず、熱せず、身壞命終して善趣の中に生ず。譬へば城邑聚落の邊りに曠野有り、大火卒に起れるに、人の能く手足もて火を滅するに堪ふる有らんに、當に知るべし彼の諸の衆生、草木に依れる者、悉く害を被らざるが如し。是の如く諸の沙門婆羅門、生に安んじ、正想を生じて、捨てず覺らず、吐さずんば、現法に樂に住し、苦しまず礙げず、惱まず熱せず、身壞命終して、善趣の中に生ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四)　三〇七二　(四五九)(自作經)[三]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。時に婆羅門有り佛の所に來詣し、世尊と面に相慰勞し已つて、一面に於て住し、佛に白して

【二】 nekkhamma 出離。

【三】 A. VI. 38. Attakārī. 或る婆羅門「衆生は自作に非ず他作に非ず」といふ異見を述べしに「自作あり、また他作あり」と示さる。これ平生の佛說に反するが如きも法は見界に依る邊執すべからざるを示すなり。

界を緣ずれば、我れ、下說・下見・下想・下思・下欲・下願・下士夫・下所作・下施設・下建立・下部分・下顯示・下受生を生ずと說く。是の如く中(界)、是の如く勝界・勝界を緣ずれば、我れ、彼れは勝說・勝見・勝想・勝思・勝願・勝士夫・勝所作・勝施設・勝建立・勝部分・勝顯示・勝受生を生ずと說く』と。時に婆迦利比丘有り、佛の後に在りて扇を執りて佛を扇ぎつつ佛に白して言さく『世尊、若し三藐三佛陀に於て、三藐三佛陀に非ざる見を起こさば彼の見も亦た界を緣じて生ずる耶』と。佛、比丘に告げたまはく『三藐三佛陀に於て、三藐三佛陀に非ざる見を起こすも亦た界を緣じて生ず、界ならざるに非らず。所以は何ん。凡夫界とは是れ無明界なればなり、我が先に說きしが如く、下界を緣ずれば下說・下見、乃至下受生を生じ、中(界は中)勝界は勝說・勝見、乃至勝受生を生ず』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 三〇七 (四五八)(因經)[八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『因有りて[九]欲想を生ず、無因には非ざるなり。因有りて恚想、害想を生ず、無因には非ざるなり。云何が因、欲想を生ずるや。謂ゆる欲界を緣ずるなり。欲界を緣ずるが故に、[一〇] 欲想・欲欲・欲覺・欲熱・欲求を生ず。愚癡の凡夫、欲求を起こし已らば、此の衆生は三處の邪を起こす。謂ゆる身・口・心なり。是の如き邪因緣の故に現法に苦に住し、苦有り礙有り惱有り熱有り、身壞命終して惡趣の中に生ず。是れを因緣もて欲想を生ずと名づく。云何が因緣もて恚想(を生ずるや)、害想を生ずるや。謂ゆる害界なり。害界を緣ずれば害想・害欲・害覺・害熱・害求を生ず。愚癡の凡夫、害求を起こし已らば、此の衆生は三處の邪を起こす。謂ゆる身・口・心なり。三處の邪の因緣を起こし已らば、現法に苦に住し、苦有り礙有り惱有り熱有り、身壞命終して惡趣の中に生ず。是れを因緣もて害想を生ずと名づく。諸の比丘、若し諸の沙門婆羅門、是の如く生に安んじ、危嶮の想を生ずるも、捨離を求めず覺らず吐さずんば、彼れは則ち現法に苦に住し、苦有り礙有り

【七】 正藏に「緣不界」は「緣下界」の誤なり。巴によれば、Hīnaṃ Kaccāyana dhātuṃ paṭicca uppajjati hīnā saññā hīnā diṭṭhi hīno vitakko hīnā cetanā hīnā patthanā hīno paṇidhi hīno puggalo hīnā vācā, hīnaṃ ācikkhati deseti paññapeti paṭṭhapeti vivarati vibhajati uttānikaroti, hīnā tassa uppattiti vadāmi.

【八】 A. VI. 39. Nidāna. S. 14. 12. Sanidānaṃ. 欲界を緣じて欲想等を生じ、恚界を緣じて恚想等を生じ、害界を緣じて害想等を生じ、身口意の三業邪惡となりて現世に苦惱あり、身終して惡趣に墮す。出要界、不恚界、不害界等を緣じて身口意の三業正しく現世に樂住し、命終して善趣の中に生ず。

【九】 Sanidānaṃ uppajjati kāmavitakko.

【一〇】 kāmasaññā, kāmacha=nda, kāmasaṅkappo, kāma=pariḷāhaṃ, kāmapariyesanaṃ.

卷の第十七*

◎雜因誦第三品の五（第三因緣誦、第三界相應の續き、第二部（原第十七卷））

㊃（第　二　品）

（一）一三〇六（四五六）（正受經）[一]是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[二]光界・淨界・無量空入處界・無量識入處界・無所有入處界・非想非非想入處界・有滅界有り』と。時に異比丘有り座より起ちて衣服を整へ、稽首して足に禮したてまつり、合掌して佛に白して言さく『世尊、彼の光界・淨界・無量空入處界・無量識入處界・無所有入處界・非想非非想入處界・滅界の此の如き諸界は、何の因緣によりてか知る可き』と。佛、比丘に告げたまはく『彼の光界は闇に緣るが故に知る可し。淨界は不淨に緣るが故に知る可し。無量空入處界は色に緣るが故に知る可し。無量識入處界は內に緣るが故に知る可し。無所有入處界は所有に緣るが故に知る可し。非想非非想入處界は有第一に緣るが故に知る可し。滅界は有身に緣りて知る可し』と。諸の比丘、佛に白して言さく『世尊、彼の光界乃至滅界は、何を正受するを以て得るや』と。佛、比丘に告げたまはく『[三]彼の光界・淨界・無量空入處界・無量識入處界・無所有入處界の此の諸界は、自行[四]正受によりて得。非想非非想入處界は第一有正受によりて得。滅界は有身滅正受によりて得らる』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）一三〇七（四五七）（說經）[五]是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の[六]東園鹿子母講堂に住まりたまへり。爾の時世尊、哺時に禪より覺め、講堂の陰中に於て座を敷き、大衆の前に於て坐し、優檀那の句を說いて諸の比丘に告げたまはく『界を緣ずるが故に說を生ず、界ならざるに非らず。界を緣ずるが故に見を生ず、界ならざるに非らず。界を緣ずるが故に想を生ず、界ならざるに非らず。[七]下

＊原、新俱に第十七

◎原本分類の殘缺、第三因緣誦の第五卷の意なり。

㊃初十經を第二品とす。皆諸界を說く。

【一】S. 14. 11. Sattimā. 光界乃至有滅界あり、何の因緣によりて知られるや、何を正受として得られるやを說く。

【二】光界 ābhādhātu 淨界 subhadhātu 無量空入處界 ākāsānañcāyatanadhātu 無量識入處界 viññāṇañcāyatanadhātu 無所有入處界 ākiñcaññāyatanadhātu 非想非非想入處界 nevasaññānāsaññāyatanadhātu 有滅界 saññāvedayitanirodhadhātu

【三】巴にては光界等の五は想等至によりて得られ、非想非非想處界は行無餘等至によりて得られ、想受滅界は滅盡定によりて得らる。」

【四】正受は samāpatti 精神統一の狀態なり。

【五】S. 14. 13. Giñjakāvasatha 界の上中下に緣りて思想も言語も上中下とある。

【六】巴には Ñātikahi Giñjakāvasathe

じ、意觸を緣じて意受を生じ、意受を緣じて意想を生じ、意想を緣じて意覺を生じ、意覺を緣じて意熱を生じ、意熱を緣じて意求を生ず。是れを比丘の種種の界を緣ずるが故に種種の觸を生じ、乃至種種の熱を緣じて種種の求を生ずと名づく。比丘、種種の求を緣じて種種の熱を生ずるには非らず。種種の熱を緣じて種種の覺を生ずるには非らず。種種の覺を緣じて種種の想を生ずるには非らず。種種の想を緣じて種種の受を生ずるには非らず。種種の受を緣じて種種の觸を生ずるには非らず。種種の觸を緣じて種種の界を生ずるには非らず。但だ種種の界を緣じて種種の觸を生じ、乃至種種の熱を緣じて種種の求を生ずるのみ」と。佛是の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。[七五]

【七五】原新俱に卷の第十六終る二品具略九十五經を攝む。

種種の觸を生じ、種種の觸を縁じて種種の受を生じ、種種の受を縁じて種種の愛を生ずるや。謂ゆる眼界を縁じて眼觸を生ず。眼觸を縁じて眼界を生ずるには非らず。但だ眼界を縁じて眼觸を生ずるのみ。眼觸を縁じて眼受を生ず。眼受を縁じて眼觸を生ずるには非ず。但だ眼觸を縁じて眼受を生ずるのみ。眼受を縁じて眼愛を生ず。眼愛を縁じて眼受を生ずるには非ず。但だ眼受を縁じて眼愛を生ずるのみ。是の如く耳鼻舌身意界縁じて意觸を生ず。意觸を縁じて意界を生ずるには非ず。但だ意界を縁じて意觸を生ずるのみ。意觸を縁じて意受を生ず。意受を縁じて意觸を生ずるには非ず。但だ意觸を縁じて意受を生ずるのみ。意受を縁じて意愛を生ず。意愛を縁じて意受を生ずるには非ず、但だ意受を縁じて意愛を生ずるのみ。是の故に比丘、種種の愛を縁じて種種の受を生ずるには非ず、種種の受を縁じて種種の觸を生ずるには非らず、種の觸を縁じて種種の界を生ずるには非らず。但だ種種の界を縁じて種種の觸を生じ、種種の觸を縁じて種種の受を生じ、種種の受を縁じて種種の愛を生ずるなり。是れを比丘、當に善く種種の界を分別すべしと名づく』と。佛是の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三二) 三〇六 (四五四)[七四](想經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『種種の界を縁じて種種の觸を生じ、種種の觸を縁じて種種の受を生じ、種種の受を生じ種種の受を縁じて種種の想を生じ、種種の想を縁じて種種の欲を生じ、種種の欲を縁じて種種の覺を生じ、種種の覺を縁じて種種の熱を生じ、種種の熱を縁じて種種の求を生ず。云何が種種の界なる。謂ゆる十八界の眼界、乃至法界なり。云何が種種の界を縁じて種種の觸を生じ、乃至種種の熱を縁じて種種の求を生ずるや。謂ゆる眼界を縁じて眼觸を生じ、眼觸を縁じて眼受を生じ眼受を縁じて眼想を生じ、眼想を縁じて眼欲を生じ、眼欲を縁じて眼覺を生じ、眼覺を縁じて眼熱を生じ、眼熱を縁じて眼求を生ず。是の如く耳鼻舌身意界縁じて意觸を生

【七四】 S. 14. 7—10. Saññā. 前前經を更に廣說せり。界→觸→受→想→欲→覺→熱→求。

識界。鼻界・香界・鼻識界。舌界・味界・舌識界。身界・觸界・身識界。意界・法界・意識界なり。是れを種種の界と名づく』と。佛是の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二〇）一三〇六（四五二）[七二]（觸經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『種種の界を緣じて種種の觸を生じ、種種の觸を緣じて種種の受を生じ、種種の受を緣じて、種種の愛を生ず。云何が種種の界なる。謂ゆる十八界の、眼界・色界・眼識界・乃至意界・法界・意識界なり。是れを種種の界と名づく。云何が種種の界を緣じて種種の觸を生じ、乃至云何が種種の受を緣じて種種の愛を生ずるや。謂ゆる眼界を緣じて眼觸を生じ、眼觸を緣じて眼觸より生ずる受を生じ、眼觸より生ぜし受を緣じて眼觸より生ずる愛を生じ、耳鼻舌身意界緣じて意觸を生じ、意觸を緣じて意觸より生ずる受を生じ、意觸より生ぜし受を緣じて意觸より生ずる愛を生ず、諸の比丘、種種の愛を緣じて種種の受を生ずるには非らず。種種の受を緣じて種種の觸を生ずるには非ず。種種の觸を緣じて種種の界を生ずるには非ざるなり。要らず種種の界を緣じて種種の觸を生じ、種種の觸を緣じて種種の受を生じ、種種の受を緣じて種種の愛を生ずるなり。是れを比丘の種種の界を緣じて種種の觸を生じ、種種の觸を緣じて種種の受を生じ、種種の受を緣じて種種の愛を生ずと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二一）一三〇七（四五三）[七三]（觸經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『種種の界を緣じて種種の觸を生じ、種種の觸を緣じて種種の受を生じ、種種の受を緣じて種種の愛を生ず。云何が種種の界なる。謂ゆる十八界の、眼界・色界・眼識界・乃至意界・法界・意識界なり。是れを種種の界と名づく。云何が種種の界を緣じて

【七二】S. 2—6. Samphassa. 界は精神作用の根本なり。界を緣じて觸→受→愛を生ず。

【七三】S. 14. 2—6. Samphassa. 前經を廣說せるのみ。

の流れを超度す。　膠漆は其の素を得　火は風を得て熾然たり。　珂と乳は則ち同色なり。
　衆生は界と倶なり。　相似は共に和合す。　増長も亦復た然なり。

（六）一三〇五二（四四九）[六八]（界和合經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『衆生は常に界と倶なり、界と和合す。是の如く廣說し、乃至勝心生ずる時は、勝界と倶なり。鄙心生ずる時は鄙界と倶なり。殺生の時は殺界と倶なり。盜・婬・妄語・飲酒の心なる時は、飲酒界と倶なり。殺生せざる時は不殺界と倶なり。盜まず、婬せず、妄語せず、飲酒せざれば、不飲酒界と倶なり。是の故に諸の比丘、當に善く種種の界を分別すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七）一三〇五三（四五〇）[六九]（界和合經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『衆生は常に界と倶なり、界と和合す。信ぜざる時は不信界と倶なり。戒を犯せる時は犯戒界と倶なり。慚無く愧無き時は無慚無愧界と倶なり。慚愧心なる時は慚愧界と倶なり。是の故に諸の比丘、當に善く種種の諸の界を分別すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（八—一八）一三〇五四—一三〇六四[七〇]（精進等經）　信不信の如く是の如く精進不精進・失念不失念・正受不正受・多聞少聞・慳者施者・惡慧善慧・難養易養・難滿易滿・多欲少欲・知足不知足・攝受不攝受界倶ふこと、上の經の如く是の如く廣說す。

（一九）一三〇六五（四五一）[七一]（界經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ今當に種種の諸の界を說くべし、諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。云何が種種の界と爲す。謂ゆる眼界・色界・眼識界。耳界・聲界・耳

【六八】　S. 14. 12. Sanidāna 經意同前。勝界、鄙界、飲酒界、不殺界を說く。

【六九】　經意同前。不信界、戒界、無慚無愧界、慚愧界。

【七〇】　說相同前なれば、略說せり。

【七一】　S. 14. 1. Dhātu 十八界を說く。この分別は毘崩伽（Vibhanga）界身足舍利弗阿毘曇等に見るべし。

なり。勝心なる時勝界と倶なり』と。時に尊者憍陳如は、衆多の比丘と近處に於て經行せり。一切皆是れ上座多聞の大德、出家して已に久しく具さに梵行を修せり。復た尊者大迦葉有り、衆多の比丘と近處に於て經行せり。一切皆是れ少欲知足、頭陀の苦行にして遺餘を畜へず。尊者舍利弗、衆多の比丘と近處に於て經行せり。一切皆是れ大智辯才あり。時に尊者大目揵連、衆多の比丘と近處に於て經行せり。一切皆是れ神通大力あり。時に阿那律陀、衆多の比丘と近處に於て經行せり。一切皆是れ天眼明徹せり。時に尊者二十億耳、衆多の比丘と近處に於て經行せり。一切皆是れ勇猛精進にして專勤の修行者なり。時に尊者陀驃、衆多の比丘と近處に於て經行せり。一切皆是れ能く大衆の爲に供具を修せる者なり。時に尊者、優波離、衆多の比丘と近處に於て經行せり。一切皆是れ律行に通達せり。時に尊者富樓那、衆多の比丘と近處に於て經行せり、皆是れ辯才ありて善く說法する者なり。時に尊者迦旃延、衆多の比丘と近處に於て經行せり、一切皆能く諸經を分別し善く法相を說く。時に尊者阿難、衆多の比丘と近處に於て經行せり、一切皆是れ多聞總持なり。時に尊者羅睺羅、衆多の比丘と近處に於て經行せり、一切皆是れ善く律行を持てり。時に提婆達多、衆多の比丘と近處に於て經行せり、一切皆是れ衆の惡行を習へり。是れを比丘の常に界と倶なり。界と和合せりと名づく。是の故に諸の比丘、當に善く種種の諸の界を分別すべし』と。佛此經を說きたまひし時、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（五）〔三〇五〕（四四八）（偈經）[六七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。上の如く廣說し已つて、即ち偈を說いて言はく、

「常に會するが故に常に生ず　相離るれば生則ち斷ぜん　人の小木を執りて　巨海に入らば　人木則ち倶に沒するが如し　懈怠の倶ふも亦た然なり　當に懈怠にして　卑劣なる精進を離るべし　賢聖は懈怠ならず　遠離に安住して　殷懃に禪に精進し　生死

【六七】S. 14. 16. Sagātha. 前前經に同じ。

若し士夫有りて此の藥丸を取りて界界に安置し、能く速かに彼を盡くさしむるも、界界は其の邊を得ざるが如し。當に知るべし諸の界は其の數無量なりと。是の故に比丘、當に界學を善くし、種々界を善くすべし。當に是の如く學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) 一三四八 (四四五) (鄙心經)[六三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『衆生は常に界と俱なり。界と和合せり。云何が衆生は、常に界と俱なるや。謂ゆる衆生不善の心を行ずる時、不善の界と俱なり。善心なる時善界と俱なり、勝心なる時勝界と俱なり。鄙心なる時鄙界と俱なり。是の故に比丘、當に是の善き種種なる界を學することを作すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 一三四九 (四四六) (偈經)[六四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『廣說すること上の如し、差別せば卽ち偈を說いて言はく

『常に會するが故に常に生ず　相離るれば生則ち斷ぜん　人の小木を執りて　巨海に入らば　人木則ち偏に沒するが如し。　懈怠の俱ふも亦た然なり。　當に懈怠にして卑劣なる精進を離るべし。　賢聖は懈怠ならずして遠離に安住し、　慇懃に禪に精進して　生死の流れを超度す。[六五]　膠漆は其の素を得　火は風を得て熾然たり。　珂、乳は則ち同色なり。　衆生は界と俱なり。　相似は共に和合す。　增長も亦復た然なり。

(四) 一三五〇 (四四七) (行經)[六六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『衆生は常に界と俱なり。界と和合す。云何が界と俱なる。謂ゆる衆生不善の心なる時不善の界と俱なり。善心なる時善界と俱なり。鄙心らる時鄙界と俱

【六三】 S. 14. 14. Hīnādhimutti. 衆生は常に善若しくは惡の界と俱なり。
【六四】 S. 14. 16. Sogātha. 經意前同。
【六五】 以下巴になし。素材を得て膠も漆も効あり。
【六六】 S. 14. 15. Kamma. 傾向同一なるもの和合す。

	漢	巴
1	憍陳如	
2	大迦葉	Mahākassapa(3)
3	舍利弗	Sāriputta(1)
4	大目犍連	Mahāmoggalāna(2)
5	阿那律	Anuruddha(4)
6	二十億耳	
7	陀驃	
8	優波離	Upāli (6)
9	富樓那	Puṇṇa(5)
10	迦旃延	
11	阿難	Ānanda (7)
12	羅睺羅	
13	提婆達多	Devadatta (8)

土の如く、是の如く衆生の地獄より命終して、還りて地獄に生ずる者も、亦た是の如し。地獄の如く、是の如く畜生餓鬼も亦爾なり。

(m)甲上の土の如く、是の如く衆生の人道中に沒し、還りて人道中に生ずる者も亦た是の如し。大地の土の如く、其れ諸の衆生の人道中より沒して、地獄の中に生ずる者も亦た是の如し。地獄の如く、是の如く畜生餓鬼も亦た爾なり。

(n)甲上の土の如く、其れ諸の衆生の天より命終して、還りて天上に生ずる者も、亦た是の如し。大地の土の如く、其れ諸の衆生の天上に沒して地獄中に生ずる者も亦た是の如し。地獄の如く畜生餓鬼も亦た是の如し。

(六五) 一二〇三八 (四四三)(四聖諦已生經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ本未だ法を聞かざりし時、正しく思惟することを得て、此れは苦聖諦なり正見已に生じ、此れは苦集聖諦、此れは苦滅聖諦、苦滅道跡聖諦なりと正見已に生じぬ』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(六六—七三) 一二〇三九—一二〇四六 已生の如く、此の如し今生も當生も。生の如く、此の如く起・習・近修・多修・觸・作證も亦々此の如し。

(第三因緣誦、第三[59]界相應、第一部(原第十六の續き))

[60](第 一 品)

(一) 一二〇四七 (四四四)[61](眼藥丸經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば[62]眼の藥丸、深廣にして一由旬ならんに、

(m) cf. S. 56. 61. Aññatra.

(n)

【五九】 S. Dhātu saṃyutta に當る種々の境界分別を說くものとす。

【六〇】 諸界分別に關するもの當卷に攝むる廿二經を第一品とす。

【六一】 界は無量なり。その中當に善界を學ぶべし。

【六二】 眼藥の微小なるものを澤山に。

く聖慧眼を成就せざる者も、亦た爾なり。

(e)甲上の土の如く、是の如く衆生の此の法律を知る者も、亦復た是の如し。大地の土の如く、是の如く衆生の法律を知らざる者も、亦た爾なり。知れるが如く是の如く等しく知り普ねく知りて、法の無間等を正想正覺正解せるも亦た是の如し。

(f)甲上の土の如く、是の如く衆生の父母有るを知れるも亦た爾なり。大地の土の如く、是の如く衆生の父母有るを知らざるも亦た爾なり。

(g)甲上の土の如し、是の如し沙門婆羅門の家の尊長有るを知りて作すべき所を作し福を作し、此の世他の世に、罪を畏れ施を行じ、齋を受くるに戒を持つも、亦た爾なり。大地の土の如く、沙門婆羅門の家の尊長有るを知りて、作すべき所を作し福を作し、此の世他の世に罪を畏れ施を行じ、齋を受くるに戒を持たざるも亦た是の如く說く。

(h)甲上の土の如く、是の如く衆生の殺さず、盜まず、邪婬せず、妄語せず、兩舌せす、惡口せず、綺語せざるも亦た爾なり。大地の土の如く、是の如く衆生の諸の戒を持たざる者も亦た爾なり。是の如く貪恚邪見を離れ、及び貪恚邪見を離れざるも、亦た是の如く說く。

(i)甲上の土の如く、是の如く殺さず、盜まず、邪婬せず、妄語せず、飲酒せず。大地の土の如く、是の如く五戒を持たざる者も亦た爾なり。

(j)甲上の土の如く、是の如く衆生の八戒を持つ者も亦た是の如し。大地の土の如く、是の如く衆生の八戒を持たざる者も亦た爾なり。

(k)甲上の土の如く、是の如く衆生の十善を持つ者も、亦た是の如し。大地の土の如く、是の如く衆生の十善を持たざる者も、亦た是の如し。

(l)甲上の土の如く、是の如く衆生の地獄より命終して人中に生ずる者も、亦た是の如し。大地の

(e)

(f) S. 56. 66. Matteyyā.
S. 56. 67. Petteyyā.

(g) S. 56. 70. Pacāyika.

(h) S. 56. 71. Pāṇa.
S. 56. 72. Adinnam.
S. 56. 73. Kāmesu.
S. 56. 74. Musāvāda.
S. 56. 75. Pesuṇam.
S. 56. 76. Pharusam.
S. 56. 77. Samphappalāpam.

(i) S. 56. 64. Surāmeraya.

(j)

(k)

(l) cf. S. 56. 61. Aññatra.

如く知るも亦復た是の如し。大雪山王の土石の如く、是の如く衆生の苦聖諦に於て實の如し知らず、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て、實の如く知らざるも亦復た是の如し。是の故に比丘、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して増上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（四八―六二）一三〇二―一三〇三（十經）雪山王の如く、是の如く尼民陀羅山・毘那多迦山・馬耳山・善見山・佉提羅迦山・伊沙陀羅山・由揵陀羅山・須彌山王及び大地の土石も亦復た是の如し。梨果の如く是の如く、阿摩勒迦果・跋陀羅果・迦羅迦果・豆果・乃至蒜子の譬へも亦復た是の如し。

（六三）一三〇六（四四二）（爪甲經）[五七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、爪甲を以て土を擎げ已つて、諸の比丘に告げたまはく『意に於て云何。我が爪甲の上の土多しと爲すや、此の大地の土多きや』と。諸の比丘、佛に白して言さく『世尊、甲上の土は甚だ少少なり、此の大地の土は甚だ多く無量にして、乃至算數譬への類も比を無すべからず』と。佛、比丘に告げたまはく『甲上の土の如く、若し諸の衆生の形の見る可き者も亦復た是の如し。其の形微細にして見る可からざる者は大地の土の如し、是の故に比丘、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば當に勤め方便して無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（六四）一三〇七（比類經）[五八] (a)陸地の如く是の如く水性も亦た爾なり。

(b)甲上の土の如く、是の如く人道も亦復た是の如し。大地の土の如く、是の如く非人も亦た爾なり。

(c)甲上の土の如く、是の如く中國に生ずるものも亦た爾なり。大地の土の如く、是の如く邊地に生ずる者も亦た爾なり。

(d)甲上の土の如く、是の如く聖慧眼を成就せる者も、亦復た是の如し。大地の土の如く、是の如

【五七】S. 56. 51. Nakhasikha.
衆生界無量にして、その中見得るものは爪上の土の如く、見えざるものは大地の如し。

【五八】S. 56. 61―77.
(a) S. 56. 65. Odakā.
(b) S. 56. 61. Aññatra.
(c) S. 56. 62. Paccantam.
(d) S. 56. 63. Paññā.

所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三八）三〇二（四〇）（湖池等經）[五三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば湖池深廣にして五十由旬、其の水盈滿せるに、若し士夫有り髮を以ち毛を以ち、或は指端を以て彼の湖水に乃至再三滴らすが如し。云何が比丘、彼の士夫の滴らす所の水の如きは多きや、湖池の水多きや』と。比丘、佛に白さく『彼の士夫の毛髮指端もて再三滴らす水の如きは、甚だ少なり。彼の湖は大水にして其の量無數、乃至算數譬の數も比を爲すべからず』と。佛、比丘に告げたまはく『大なる湖の水は甚だ多く無量なるが如く、是の如く多聞の聖弟子は、見諦を具足し、聖道の果を得、諸の苦本を斷ずるは多羅樹の頭を截るが如く、未來世に於て不生法を成ず。餘の盡くさざるは、彼の士夫の髮毛指端もて滴らす所の水の如し。是の故に比丘、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三九—四六）三〇三—三〇九[五四]（薩羅經等）大湖水の譬への如く、是の如く薩羅多吒迦[五五]・恒伽・耶符那・薩羅遊・伊羅跋提・摩醯及び四大海の其の譬へも亦た上に說けるが如し。

（四七）三一〇（四二）（土經）[五六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、手に園土の大きさ梨果の如きを捉り、諸の比丘に告げたまはく『云何が比丘、我が手中の此の園土多しと爲すや、大雪山の中の土石多しと爲すや』と。諸の比丘、佛に白して言さく『世尊、手中の園土は少少なるのみ。彼の雪山王の其土石は甚だ多く、百千億那由他にして乃至算數譬類もて比べを爲すを得ざるなり』と。佛、諸の比丘に告げたまはく『我れに捉られし園土の如く、是の如く衆生の苦聖諦に於て實の如く知り、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て實の

【五三】 S. 56. 52. Pokkharaṇī. 多聞聖弟子見諦して盡す所の苦本は湖水の如く、盡さざる所は指端の水の如く少し。

【五四】 S. 56. 53—54. Sambhejja

【五五】 Gaṅgā, Yamunā, Aciravatī, Sarabhū, Mahī.

【五六】 S. 56.55—60. Pathavī &c. 衆生にして、四聖諦を知らざる者は大雪山の土石の如く、知れるものは手中の園土の如し。

き所なり。所以は何ん。要らず初陞に由りて然る後次に第二第三第四陞に登りて殿堂に昇るは、是の處有るが故なり。是の如く阿難、苦聖諦に於て無間等になり已つて然る後次第に苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に無間等ならば、斯れ是の處有るなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三六) 一三〇九 (四三八)(衆生界經)[五〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば大地の草木を悉く取りて鏦(ほこ)となし、大海の中の一切の水虫を貫くが如し、悉く能く貫くや不や』と。比丘、佛に白さく『能はざるなり、世尊。所以は何ん、大海の諸の虫は、種種の形類にして、或は細に於て貫く可からず、成は極大にして貫く可からず』と。佛、比丘に告げたまはく『是の如し是の如し、衆生界も無數無量なり、是の故に比丘、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三七) 一三一〇 (四三九)(雪山經)[五一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、手に土石を執りて諸の比丘に問ひたまはく『意に於て云何。此の手中の土石多しと爲すや、彼の[五二]大雪山の土石多しと爲すや』と。比丘、佛に白して言さく『世尊、手中の土石は甚だ少少なり、雪山の土石は甚だ多く、無量百千巨億にして、算數譬の類も比を爲すべからず』と。佛、比丘に告げたまはく『其れ諸の衆生、苦聖諦に於て實の如く知り、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に實の如く知れるは、我が手中に執れる土石の如し。其れ諸の衆生、苦聖諦に於て實の如く知らず、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て、實の如く知らざるは、彼の雪山の土石の如く、其の數無量なり。是の故に比丘、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば、當に勤めて方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛是の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ

【五〇】 S. 56. 36. Pānā 衆生界は無量無邊なれども、四聖諦に於て無間等ならばよく此の衆生界より脫れ得るを以て、宜しく四聖諦を學すべし。

【五一】 S. 56. 49—50. Sineru 四聖諦を實の如く知れる者は手中の土の如く、知らざる者は雪山の如し。

【五二】 ヒマラヤ山なり。巴には Sineru (須彌山)とあり。

り。唯だ譬へに差別あるのみなり。『四の登階道ありて殿堂に昇るが如し。若し說きて、初階に登らずして而かも第二第三第四階に登りて、殿堂に昇りたりと言ふこと有らば、是の處有ること無し。所以は何ん。要らず初階に由り、然る後次に第二第三第四階に登りて、殿堂に昇ることを得ればなり。是の如く比丘、苦聖諦に於て未だ無間等ならずして、而かも苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て無間等ならんと欲せば、是の處有ること無し。譬へば比丘、若し人有りて四階道を以て殿堂に昇るに、要らず初階に由り然る後次に第二第三第四階に登りて、殿堂に昇ることを得たりと言ふが如くんば、應に是の說を爲すべし。所以は何ん。要らず初階に由り然る後次に第二第三第四階に登りて殿堂に昇るは、是の處有るが故なり。是の如く比丘、若し苦聖諦に於て無間等になり已つて、然る後次第に苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て、無間等なりと言はば應に是の說を爲すべし。所以は何ん。若し苦聖諦に於て無間等になり已つて、然る後次第に苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て、無間等ならば、是の處有るが故なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三五) 一三〇八 (四三七)(殿堂經)[四九]　異比丘の問ひの如く、阿難の所問にも亦た是の如く說きたまへり。唯だ譬へのみ差別せり。佛、阿難に告げたまはく『譬へば四の隥梯もて殿堂に昇るに。若し說きて、初隥に由らずして、而かも第二第三第四隥に登り、殿堂に昇りたりと言ふこと有らば、是の處有ること無きが如く、是の如く阿難、若し苦聖諦に於て、未だ無間等ならずして、而かも苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に無間等ならんと欲すとせば此れは說くべからず。所以は何ん。若し苦聖諦に於て未だ無間等ならずして而かも苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て、無間等なりとせば是の處有ること無ければなり。譬へば阿難、四の隥梯に由りて殿堂に昇るが如し。若し人の、要らず初隥に由りて然る後次に第二第三第四隥に登りて殿堂に昇りたりと言ふこと有らば、此れは說くべ

【四九】 S. 56. 44. Kūṭāgāra.
前經に同じ。

れを黠慧と爲す』と。佛、比丘に告げたまはく『善い哉善い哉、苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て實の如く知れるは、是れ則ち黠慧なり。是の故に諸の比丘、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三三) 一二〇〇六 (四三五)(須達經)[四七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり、時に須達長者、佛の所に往詣し佛の足に稽首したてまつり、一面に於て坐し佛に白して言さく『世尊、此の四聖諦は漸次に無間等なりと爲すや、一頓に無間等なりと爲すや』と。佛、長者に告げたまはく『此の四聖諦は漸次に無間にして、頓に無間等なるに非ず』と。佛、長者に告げたまはく「若し說きて、苦聖諦に於て未だ無間等ならずして、而かも彼の苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て無間等なりと言ふこと有らば、此の說は應ぜざるなり。所以は何ん、若し苦聖諦に於て未だ無間等ならずして而かも苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て無間等ならんと欲せば、是の處有ること無ければなり。猶ほ人有り兩つの細かき樹葉を、連ぬ合せて器と爲し、水を盛りて持ち行くに、是の處有ること無きが如く、是の如く苦聖諦に於て、未だ無間等ならずして、而かも苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て無間等ならんと欲せば、是の處有ること無し。譬へば人あり蓮華の葉を取り、連ね合せて器と爲し、水を盛りて遊行するに、斯れ是の處有るが如く、是の如く長者、苦聖諦に於て、無間等になり已つて、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て、無間等ならんと欲せば、斯れ是の處有り。是の故に長者、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三四) 一二〇〇七 (四三六)[四八](殿堂經) 須達長者所問の如く、異比丘の問ひ有りて亦た是の如く說きたまへ

【四七】 四聖諦に於ては漸を以て無間等なることを得。

【四八】 S. 56. 44. Kutāgāra. 四聖諦は漸を以て知り得ること、譬へば殿堂に登らんには必ず先づ初階に登るべきが如し。

以ての故に、或は善趣に生じ、或は惡趣に生ず。是の故に諸の比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤めて方便して增上欲を起こして無間等を學ずべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三〇）一二〇三（四三二）（五節輪經）[四三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく『譬へば五節相續の輪を、大力の士夫は速かに旋轉せしむるが如く、是の如く沙門婆羅門、此の苦聖諦に於て實の如く知らず、此の苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に實の如く知らずんば、五趣に輪迴して、速かに旋轉し、或は地獄に墮ち、或は畜生に墮ち、或は餓鬼に墮ち、或は人、或は天より還りて惡道に墮ちて長夜に輪轉す。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤めて方便して增上欲を起こし無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三一）一二〇四（四三三）（增上說法經）[四四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『如來應等正覺は、[四五]增上に說法したまふ。謂ゆる四聖諦の開示・施設・建立・分別・散說・顯現・表露なり。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。是の故に比丘、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三二）一二〇五（四三四）（黠慧經）[四六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『何等をか黠慧と爲す。此の苦聖諦に實の如く知り、此の苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に實の如く知れりと爲すや。知らずと爲す耶』と。諸の比丘、佛に白さく『我れ世尊の說かせたまふ所を解せるが如くんば、四聖諦に於て實の如く知れるは、此

【四三】四聖諦を如實に知らずんば四趣に輪廻す。

【四四】佛は四聖を增上に說法す。

【四五】强く。

【四六】四聖諦に於て如實に知れる者を黠慧となす。

すべし。所以は何ん。比丘禪思し、內に其の心を寂にするを成就し已らば、實の如く顯現す。云何んが實の如く顯現するや。謂ゆる此の苦聖諦實の如く顯現し、此の苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦・實の如く顯現す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二七) 三〇〇〇(四二九)(三摩提經)[四〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に無量三摩提を修して專心正念たるべし。所以は何ん、無量三摩提を修し、專心正念たり已らば、是の如く實の如く顯現す。云何が實の如く顯現するや。謂ゆる此の苦聖諦・實の如く顯現し、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦・實の如く顯現す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二八) 三〇〇一(四三〇)(杖經)[四一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時佛、諸の比丘に告げたまはく『人の杖を虛空の中に擲げるに、尋いで卽ち還へり墮ち、或ときは根もて地に著き、或ときは腹もて地に著き、或ときは頭もて地に著くが如く、是の如く沙門婆羅門、此の苦聖諦に於て、實の如く知らず、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に、實の如く知らずんば、當に知るべし是の沙門婆羅門は、或は地獄に墮ち、或は畜生に墮ち、或は餓鬼に墮つと。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二九) 三〇〇二(四三一)(杖經)[四二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『人の杖を擲げて虛空の中に置くに、其の必ず還へり墮ちて、或は淨地に墮ち、或は不淨の地に墮つるが如く、是の如く沙門婆羅門、苦聖諦に於て、實の如く知らず、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て、實の如く知らずんば、實の如く知らざるを

【四〇】 S. 56. 1. Samādhi. 三摩提を修すれば四聖諦顯現す。

【四一】 S. 56. 33. Daṇḍa. 四聖諦を如實に知らずんば、或時は地獄に、或時は餓鬼畜生に墮す。

【四二】 cf. S. 56. 33. Daṇḍa. 經意前經に同じ。

(二一) 一二九四 (四三五)(闇冥經)[三六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『小千世界なり數滿ちて千に至る、是れを中千世界と名づく。是の中千世界に於ては、中間は闇冥なり。前に說かれしが如く、乃至四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說を已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二二) 一二九五 (四三六)(闇冥經)[三七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『中千世界より數滿ちて千に至る、是れを三千大千世界と名づく。世界の中間の闇冥處は、日月遊行して普ねく世界を照らすも、而かも彼れ見えず。乃至生老病死憂悲惱苦の大闇冥の中に墮す。是の故に諸の比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二三) 一二九六 (四三七)(聖諦、聞思經)[三八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ今當に四聖諦を說くべし。諦らかに聞け、諦らかに聞きて善く之れを思念せよ。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。是れを四聖諦と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二四―二五) 一二九七―一二九八 當に說くべきが如く、「是の如く有れ」、「是の如く當に知るべし」も亦た上の如く說く。

(二六) 一二九九 (四三八)(禪思經)[三九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に勤め禪思し正方便を起こし、內に其の心を寂に

【三六】 前經の簡略也。

【三七】 四諦に於て無間等を學ばずんば三千大千世界の中間にある闇冥に過ぎたり。

【三八】 S. 56. 29. Pariññeyya 四聖諦を諦かに聞き、善く思念せよ。

【三九】 S. 56. 2. Patisallāna. 禪思し心寂なれば四聖諦顯現す。

の身分を見ざるなり』と。時に異比丘有り、座より起ちて衣服を整へ、佛の爲に禮を作し、合掌して佛に白して言さく『世尊、此れは則ち大闇なり。唯だ此れのみ大闇なるや。復た更らに餘の大闇の、甚だ怖畏す可く此れに過ぐる者有りや不や』と。佛、比丘に告げたまはく『是の如し、更らに大闇の甚だ怖畏す可し、此れに過ぐる者有り。謂ゆる沙門婆羅門、四聖諦に於て、實の如く知らず、乃至生老病死憂悲惱苦の大闇の中に墮するなり。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき

（二〇）一二九三（四二四）[34](闇冥經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『日の遊行して、諸の世界を照らす如く、乃至千日千月は、千世界、千の須彌山、千の[35]弗婆提、千の閻浮提、千の拘耶尼、千の欝單越、千の四天王、千の三十三天、千の炎魔天、千の兜率天、千の化樂天、千の他化自在天、千の梵天を照らす、是れを小千世界と名づく。此の千世界は、中間は闇冥にして、日月の光照大德力有るも、而かも彼れを見ず。其れ衆生有りて、彼の中に生ぜば、自らの身分を見ざるなり』と。時に異比丘有り、座より起ちて衣服を整へ、佛の爲に禮を作し、合掌して佛に白して言さく『世尊、世尊の說きたまふが如くんば、是れ大闇冥なり。復た更らに餘の大闇冥處の此れに過ぐる有りや』と。佛、比丘に告げたまはく『大闇冥の此れに過ぐる者有り、謂ゆる沙門婆羅門の苦聖諦に於て、實の如く知らず、乃至生老病死憂悲惱苦の大闇冥の中に墮する、是れを比丘の大闇冥有りて世界の中間の闇冥に過ぐと名づく。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【三四】 cf. 56. 46. Andhakāra.
cf. A. III. 80.
四聖を知らず、從つて生老病死憂悲惱苦の大闇冥に墮すること、彼の世界中間の闇冥に墮するに過ぎたり。

【三五】 弗婆提 Pūrvavideha 東勝身洲。
閻浮提 Jambudvipa 南贍部洲
拘耶尼 Avaragodāniya 西牛貨洲
欝單越 Uttarakuru 北俱盧洲

彼れは[三〇]生の本なる諸行に於て樂著し、老病死憂悲惱苦の生ずる本なる諸行に樂著して、而かも是の行を作し、老病死憂悲惱苦の行は、轉た增長するが故に、生に於て深嶮の處に墮し、老病死憂悲惱苦に於て深嶮の處に墮す。是の如く比丘、此れは則ち大なる深嶮にして此れよりも嶮しき者なり。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起し無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一八）一二九一（四三二）[三一]（大熱經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[三二]大熱地獄有り。若し衆生彼の中に生ぜば、一向に焖然を與ふるなり』と。時に異比丘有り、座より起ちて衣服を整へ、佛の爲に禮を作し、合掌して佛に白して言さく『世尊の說の如くんば、此れは則ち大熱なり。世尊、唯だ此れのみ大熱なるや。復た大熱の此れに過ぐる者にして、甚だ怖畏す可く過上あるなきもの有りや』と。『是の如し比丘、此れは則ち大熱なり。亦た更らに大熱の此れに過ぐる者にして、甚だ怖畏す可く過上無きもの有り。何等をか更らに大熱の、甚だ怖畏す可く、此れに過ぐるもの有りと爲すや。謂ゆる沙門婆羅門、此の苦聖諦に、實の如く知らず、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に、實の如く知らず、是の如くして乃至生老病死憂悲惱苦の大熱熾然たり。是れを比丘、大熱熾然として甚だ怖畏すべく過ぐるもの有ること無しと名づく。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一九）一二九二（四三三）[三三]（大闇經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『大闇地獄有り。彼の諸の衆生彼の中に生ぜば、自ら

【三〇】 jātisaṃvattanikesu saṅkhāresu abhiramanti.

【三一】 S. 56. 43. Pariḷāha. 四聖を知らざる結果生老病死憂悲惱苦を受く。此の苦に過ぎたるものなし。大熱地獄以上なり。

【三二】 mahā-pariḷāha

【三三】 S. 56. 46. Andhakāra. 四聖諦を知らず、從つて生老病死憂悲惱苦の大闇に墮する怖るべきは、大闇地獄に過ぎたり。

ひ有り、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に、則ち疑惑あらん。若し法、僧に於て疑ひ有らば、則ち苦聖諦に於て疑惑し、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に疑惑せん。若し佛に於て疑惑せずんば、則ち苦聖諦に於て疑惑せず、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に疑惑せざらん。若し法、僧に於て疑惑せずんば、則ち苦聖諦に於て疑惑せず。苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に疑惑せざらん』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所の法を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二六) 一一九八九 (四二〇)(疑經)[二五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し沙門婆羅門、苦聖諦に於て疑ひ有らば、則ち佛に於て疑ひ有り、法、僧に於て疑ひ有り。若し集・滅道に於て疑はゞ、則ち佛に於て疑ひ有り、法、僧に於て疑ひ有り。若し苦聖諦に於て疑ひ無くんば、則ち佛に於て疑ひ無く、法、僧に於て疑ひ無し。集滅道聖諦に於て疑ひ無くんば、則ち佛に於て疑ひ無く、法、僧に於て疑ひ無し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二七) 一一九九〇 (四二一)(深嶮經)[二六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の[二七]迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『汝等共に行いて[二八]深嶮巖に至れ』と。諸の比丘、佛に白さく『唯然世尊』と。爾の時世尊、諸の大衆と、深嶮巖に至り、座を敷きて坐し、周匝して深嶮巖を觀察し已つて、諸の比丘に告げたまはく『此の巖は極めて大なる[二九]深嶮なり』と。時に異、比丘有り。座より起ちて衣服を整へ、佛の爲に禮を作し、合掌して佛に白して言さく『世尊、此れは極めて深嶮なり。然るに復た一の極めて深嶮にして此れよりも極嶮にして、甚だ怖畏すべき者りや不や』と。佛其の意を知ろしめて卽ち告げて言はく『是の如し比丘、此れは極めて深嶮なり。然るに復た大なる深嶮にして此れよりも嶮しきものにして、甚だ怖畏す可き有り。謂ゆる諸の沙門婆羅門、苦聖諦に於て、實の如く知らず、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に、實の如く知らずんば、

【二五】四聖諦に於て疑なくんば、三寶に於て疑なし。

【二六】S. 56. 42. Papāta. 四聖諦を知らずして生死に沈淪するは深嶮巖よりも怖畏すべき深嶮なり。

【二七】巴には Gijjhakūṭa.

【二八】Paṭibhānakūṭa を深嶮巖と譯す。靈鷲山の近くある峰の名なり。岩々聳え立ち大絕壁をなす。

【二九】papāta 絕壁なり。

如如にして、如を離れず、如に異らず、眞實審諦にして顚倒せず、是れ聖の諦めたまふ所なり。是れを世尊の說きたまひし四聖諦を、我れ悉く受持すと爲す』と。佛、比丘に告げたまはく『善い哉善い哉、汝眞實に我が說きし所の四聖諦を持てり。如如にして如を離れず、如に異らず、眞實審諦にして顚倒せず。是れを比丘眞實に我が四聖諦を持つと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一四) 二九六七 (四一八)(受持經)[二二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊諸の比丘に告げたまはく『汝我が說きし所の四聖諦を持てるや不や』と。時に異比丘有り、座より起ちて衣服を整へ、佛の爲に禮を作し、合掌して佛に白して言さく[二三]『唯然世尊、說かれし四聖諦は、我れ悉く之れを持てり。云何が四聖諦なる、世尊の說きたまひし苦聖諦は、我れ悉く之れを持てり、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦は、我れ悉く之れを持てり』と。佛、比丘に告げたまはく『善い哉善い哉、我が說きし所の如き四聖諦は、汝悉く之れを持てり、諸の比丘、若し沙門婆羅門ありて、是の如き說を作さん。沙門瞿曇に說かるゝ如き苦聖諦は、我れ當に捨てゝ更らに苦聖諦を立つべしと。但だ言數有るも、問ひ已つて知れず、其の疑惑を增すのみ、其の境界に非ざるを以ての故に、(又言はん)苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦は、我れ今當に捨てゝ更らに餘の四聖諦を立つべしと。彼れは但だ言數有るも、問ひ已つて知れず、其の疑惑を增すのみ、其の境界に非ざるを以ての故に。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五) 二九六八 (四一九)(疑經)[二四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し比丘、佛に於て疑ひ有らば、則ち苦聖諦に於て疑

【二二】 S. 56. 16. Dhāraṇ. 佛所說の四聖諦の外に四聖諦なるべからず。

【二三】 巴には比丘佛に答へて、「佛所說の第一苦聖諦我受持す。若し誰か沙門婆羅門ありて、沙門瞿曇の所說は是れ第一苦聖諦に非ず。我は此の第一苦聖諦を捨てて、別に第一苦聖諦を立つべしと言はんに、是は理由(處)なし。……。」

【二四】 佛法僧に於て疑惑あらば四諦に疑惑あらん。三寶に疑惑なければ四諦に於て疑惑なし。

所以は何ん。比丘乞食する時は好食を得、又た好色を見、時には好聲を聞き、多人に識られ、又た衣被・臥具・醫藥を得ればなり』と。爾の時世尊、禪定の中に於て、天耳を以て諸の比丘の論說の聲を聞きたまひ、卽ち食堂に詣り、是の如く廣說し、乃至正しく涅槃に向へばなりと。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二二）一二九五（四一六）（受持經）[19] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『汝等我が說きし所の四聖諦を持てるや不や』と。時に異比丘有り座より起ちて衣服を正し、佛の爲に禮を作し、合掌して佛に白さく『唯然世尊、說かれし四聖諦を我れ悉く受持せり』と。佛、比丘に告げたまはく『汝云何が四聖諦を受持せるや』と。此比丘、佛に白して言さく『世尊の說いて、此れは是れ苦聖諦なりと言はゞ、我れ卽ち受持せり。此れは苦集聖諦なり、此れは苦滅聖諦なり、此れは苦滅道跡聖諦なりと、是の如く世尊、四聖諦を說きたまはゞ、我れ卽ち受持せり』と。佛、比丘に告げたまはく『善い哉善い哉、我が說きし苦聖諦を、汝眞實に受持せり。我が說きし苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦を、汝眞實に受持せり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二三）一二九六（四一七）（如如經）[20] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『汝等我が說きし所の四聖諦を持てるや不や』と。時に比丘有り。座より起ちて衣服を整へ、偏へに右の肩を袒にし、佛の爲に禮を作し、合掌して佛に白さく『唯然世尊、說かれし四聖諦は、我れ悉く受持せり』と。佛、比丘に告げたまはく『汝云何が我が說きし所の四聖諦を持てるや』と。比丘、佛に白して言さく『世尊、苦聖諦を說きたまはゞ、我れ悉く受持せり。如如[21]にして如を離れず、如に異らず、眞實審諦にして顚倒せず、是れ聖の諦めたまふ所なり、是れを苦聖諦と名づく。世尊の說きたまひし苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦は、

【一九】 S. 56. 15. Dhāraṇa. 一比丘、世尊所說四聖をそのまま受持す。

【二〇】 S. 56. 20. 27. Tathā. 四聖諦は如にして、如を離れず、如に異らずと知る者は、四聖諦を受持する者なり。

【二一】 Idaṃ dukkhan ti bhikkhave tatham etam avitathaṃ etam anaññatathaṃ etaṃ. 如とは眞實なり。

を饒益するに非ず、智に非ず正覺に非ず、涅槃に向はざればなり。汝等當に說くべし。此れは苦聖諦なり、苦集聖諦なり、苦滅聖諦なりと。所以は何ん。此の四聖諦は、是れ義もて饒益し、法もて饒益し、梵行を饒益し、正智正覺して、正しく涅槃に向へばなり。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こし、無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二〇）一九八三（四一四）（宿命經）[一五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り、食堂に集まりて、是の如き論を作せり『汝等[一六]宿命に、何等の業をか作せし、何の工巧を爲し、何を以て自活せしや』と。爾の時世尊、禪定の中に於て、天耳を以て諸の比丘の論說の聲を聞きたまひ、卽ち座より起ちて、食堂に往詣し、坐具を敷き衆の前に於て坐し、諸の比丘に問ひたまはく、『汝何等をか說きし』と。時に諸の比丘、上に說きし所を以て、具さに世尊に白せり。佛、比丘に告げたまはく『汝等比丘、是く宿命に作せし所を說くを作すこと莫れ。所以は何ん、此れは義もて饒益するに非ず、法もて饒益するに非ず、梵行を饒益せるに非ず、智に非ず、正覺に非ず、涅槃に向はざればなり。汝等比丘、當に說くべし。此れは苦聖諦なり、苦集聖諦なり、苦滅聖諦なり、苦滅道跡聖諦なりと。所以は何ん。此れは義もて饒益し、法もて饒益し、梵行を饒益し、正智もて正覺して、正しく涅槃に向へばなり。是の故に比丘、四聖諦に依りて未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こし、無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二一）一九八四（四一五）（檀越經）[一七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り、食堂に集まりて是の如き論說を作せり。『某甲（それがし）の[一八]檀越（だんのつ）は、麁なる疎食を作せり。我れ等食し已つて、味無く力無し。我れ等彼の麁食を捨てゝ、乞食に行かんには如かじ。

【一五】前生に何等の業を以て生活せしや等と論說するも益無し。宜しく四聖諦を說くべし。
【一六】前生。
【一七】檀越の施物の好惡を論ずる勿れ、無益なればなり。四聖諦應に說くべし。
【一八】施主。

が如し。佛、比丘に告げたまはく『汝等是の論を作すこと莫れ。王事を論說するも……乃至涅槃に向はざるなり。若し論說せんには、應に此れは苦聖諦なり。苦集聖諦なり、苦滅聖諦なり、苦滅道跡聖諦なりと論說すべし。所以は何ん。此の四聖諦は、義もて饒益し、法もて饒益し、梵行を饒益し、正智もて正覺し、正しく涅槃に向ふを以てなり』と。佛此の經を說きたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(八) 二九六一 (四一二)(爭經[一]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り、食堂に集まりて、是の如き說を作せり『我れ法と律とを知れり。汝等は知らず、我が所說は成就せり。我れ等の所說は理と合へり。汝等の所說は成就せず。理と合はず。前說すべきものは、則ち後說に在り。後說すべきものは、則ち前說に在り』と。而かも共に諍論して言はく『我が論には是れ汝等如かず。答へ能はゞ當に答ふべし』と。爾の時世尊、禪定の中に於て、天耳を以て諸の比丘の諍論の聲を聞こしめし、是の如く廣說し、乃至四聖諦に於て、無間等ならんとせば、當に勤め方便を起し增上欲を起して無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九) 二九六二 (四一三)(王力經[二]) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り、食堂に集まりて、是の如き論を作せり『波斯匿王[三]と、頻婆娑羅王[四]と、何れが大力にして、何れが大いに富めるや』と。爾の時世尊、禪定の中に於て、天耳を以て諸の比丘の論說の聲を聞きたまひ、卽ち座より起ちて、食堂に往詣し、坐具を敷き、衆の前に於て坐し、諸の比丘に問ひたまはく『汝等何をか論說せし所なる』と。時に諸の比丘、卽ち上の事を以て、具さに世尊に白せり。佛、比丘に告げたまはく『汝等諸王の大力大富を說くを用ふと爲すや。汝等比丘、是の論を作すこと莫れ。所以は何ん。此れは義もて饒益するに非ず、法もて饒益するに非ず、梵行

【一】 S. 56. 9. Viggāhika. 無益の論爭を廢して、四諦を學すべし。

【二】 諸王の大力大富を論ずるも益なし、宜しく四諦を說くべし。

【三】 Pasenadi (Prasenajit) 憍薩羅と迦尸を領せし王。

【四】 Bimbisāra 摩竭王、阿闍世の父なり。

當に勤め方便して增上欲を起し、無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 二九七七 (四〇九)[七](覺經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。爾の時衆多の比丘有りて、食堂に集まれり。或は[八]貪覺を覺せる者、或は瞋覺を覺せる者、或は害覺を覺せる者有り。爾の時世尊、諸の比丘の心の所念を知ろしめし、食堂に往詣し、坐具を敷き衆の前に於て坐し、諸の比丘に告げたまはく『汝等貪覺の覺を起こすこと莫れ、恚覺の覺を起こすこと莫れ、害覺の覺を起こすこと莫れ。所以は何ん。此の諸の覺は、義もて饒益するに非ず、法もて饒益するに非ず、梵行を饒益するに非ず、智に非ず正覺に非ず、涅槃に向はざればなり。汝等當に苦聖諦の覺、苦集聖諦の覺、苦滅聖諦の覺、苦滅道跡聖諦の覺を起こすべし。所以は何ん。此の四聖諦の覺は義もて饒益し、法もて饒益し、梵行を饒益し、涅槃に向へばなり。是の故に諸の比丘、四聖諦に於て、當に勤め方便して增上欲を起し、正智正念にして、精進して修學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四―六) 二九七八―二九七九(四一〇)[九](覺經)是の如く我れ聞きぬ。一時、上に廣說せるが如し。差別せば、(一)親里覺、(二)國土人民覺 (三)不死覺を起せり。乃至佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(七) 二九八〇 (四一一)[一〇](論說經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り、食堂に集りて、是の如き論を作せり。或は王事・賊事・鬪戰事・錢財事・衣被事・飲食事・男女事・世間の言語事・事業事・諸の海中事を論ぜり。爾の時世尊、禪定の中に於て、天耳を以て、諸の比丘の論說の聲を聞こしめし、卽ち座より起ちて、食堂に往詣し、坐具を敷きて衆の前に於て坐し、諸の比丘に告げたまはく『汝等比丘、衆多聚集して、何の所說を爲せるや』と。諸の比丘佛に白して言さく『世尊、我れ等此に聚集して、或は王事を論說し……』と上に廣說せる

【七】 S. 56. 7. Vitakkā. 欲瞋害の三惡覺をなさず、四聖諦の覺をなすべし。

【八】 此の場合の覺は vitakka (vitarka)なり。思ひ、考への義なり。貪りの思ひ、瞋の思ひ、慘虐なる思ひを三惡覺といふ。

【九】 cf. S. 56. 7. Vitakkā.

【一〇】 S. 56. 10. Kathā. 世間の事を論說すること莫れ、應に四諦說すべし。

戰へり。時に諸天勝を得、阿修羅の軍敗れ、退きて池の一の藕孔の中に入れるなり。是の故に比丘、汝等愼みて世間を思惟すること莫れ、所以は何ん。世間思惟は、義もて饒益するに非ず、法もて饒益するに非ず、梵行を饒益するに非ず、智に非ず覺に非ず、正しく涅槃に向ふに非ざればなり。當に四聖諦を思惟すべし。何等をか四と爲す。苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて歡喜し奉行しき。

（二）二九六（四〇八）（思惟經）[四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り、食堂に集まりて、是の如き論を作せり。或は世間は有常なりと謂ひ、或は世間は無常なりと謂ひ、世間は有常無常なり。世間は有常に非ず無常に非ず、世間は[五]有邊なり、世間は無邊なり、世間は有邊無邊なり、世間は有邊に非ず世間は無邊に非ず、[六]是の命(卽ち)是の身なり、命は異り身は異る、如來は死後有なり、如來は死後無なり、如來は死後有無なり、如來は死後有に非ず無に非ずと、爾の時世尊、一處に坐禪し、天耳を以て諸の比丘の食堂に集まりて、論議せるの聲を聞きたまへり。聞き已つて食堂に往詣し、大衆の前に於て、座を敷きて坐し、諸の比丘に告げたまはく『汝等比丘、衆多聚集して、何をか言說する所なる』と。時に諸の比丘、佛に白して言さく『世尊、我等衆多の比丘、此の食堂に集まり、是の如き論を作せり、或は有常なりと說き、或は無常なり』と說くこと上に廣說せるが如し。佛、比丘に告げたまはく『汝等是の如き論議を作すこと莫れ。所以は何ん。此の如き論は、義もて饒益するに非ず、法もて饒益するに非ず、梵行を饒益するに非ず、智に非ず正覺に非ず、正しく涅槃に向ふに非ざればなり。汝等比丘、應に是の如く論議すべし。此れは苦聖諦なり、此れは苦集聖諦なり、此れは苦滅聖諦なり、此れは苦滅道跡聖諦なりと。所以は何ん。是の如き論議は、是れ義もて饒益し、法もて饒益し、梵行を饒益し、正智もて正覺にして、正しく涅槃に向へばなり。是の故に比丘、四聖諦に於て未だ無間等ならずんば、

【四】 S. 56. 8. Cintā. cf. 56. 41. Cintā. 世間思惟を廢して、四諦を學すべし。

【五】 antavā 有限。

【六】 taṃ jīvaṃ taṃ sarīran ti vā, aññaṃ jīvaṃ aññaṃ sarīran ti vā. 命卽身なりとか、或は命と身とは別異なりとか。

卷*の第十六

雜因誦第三品の四（第三因緣誦、第二四諦相應の續き第二部（原第十六卷））

（第　二　品）

（一）二九七五（四〇七）（思惟經）[一] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、王舍城の迦蘭陀竹園に住まりたまへり。時に衆多の比丘有り、食堂に集まりて、[二] 世間を思惟して思惟せり。爾の時世尊、諸の比丘の心の所念を知ろしめし、食堂に往詣し、座を敷きて坐し、諸の比丘に告げたまはく『汝等比丘、愼みて世間思惟を思惟すること莫れ。所以は何ん。世間思惟は、義もて饒益するに非ず、法もて饒益するに非ず、梵行を饒益するに非ず、智に非ず、覺に非ず、涅槃に順はざればなり。汝等當に正しく思惟すべし。此れは苦聖諦なり、此れは苦集聖諦なり、此れは苦滅聖諦なり、此れは苦滅道跡聖諦なりと。所以は何ん。此の如く思惟せば、則ち義もて饒益し、法もて饒益し、梵行もて饒益し、正智正覺にして、正しく涅槃に向へばなり。過去世の時に、一士夫有り、王舍城より出で、拘絺羅池の側に於て正しく坐し世間思惟を思惟せり。思惟する時に當つて、四種の軍の象軍・馬軍・車軍・歩軍、無量無數にして、皆悉く一の藕孔の中に入れるを見たり。見已つて是の念を作さく、「我れ狂ひて性を失ひ、世間の無とする所を、而かも今之れを見たり」と。爾の時池を去ること遠からずして、更らに大衆有りて、一處に聚集せり。時に彼の士夫、大衆の所に詣り語つて言はく、「諸人我れ今發狂せり、我れ今性を失へり、世間の無とする所を、而かも我れ今見たり」と。上の如く廣說せり。時に彼の大衆皆士夫、發狂し性を失ひ、世間の無とする所を、而かも彼れ之を見たりと謂へり」と。佛、比丘に告げたまはく、然かも彼の士夫は、狂ひて性を失へるに非ず、見る所眞實なり。所以は何ん。爾の時拘絺羅池を去ること遠からずして、諸天阿修羅有り、四種の軍を興こし、空中に於て

※原新俱に第十六卷なり原本分類の殘缺にして雜因誦第三品とは、今云ふ第三因緣誦にして四と云ふは第十二、第十四、第十五、第十六次第する原本の第四卷目なるを示す。

【一】S. 56. 41. Cintā 世間思惟は、饒益する所なきを以て思惟すること勿れ。唯四諦のみ擧すべし。

【二】巴の本文には佛曰はく、「其れ故に比丘達よ、世間思惟を思惟する勿れ。世間は常なり、或は無常なりと。世間は有邊或ひは無邊なりと。命卽身なり、或は命異身なりと。如來は死後有り、或は無しと。有無なり、或は非有非無なりと。」巴の註釋には「世間思惟せりとは、何によりて月日は作られたりや。何によりて大地は作られたりや。何によりて大海は作られたりや。何によりて衆生は生ずるなりや。山は何によるや。菴摩羅、棕櫚椰子は何によるやと。」

【三】巴には Sumāgadhī pokkharaṇī スマーガダといふ蓮池なり。

に漂流して風に隨つて東西す。盲龜百年に一たび、其の頭を出だすに、當に此の孔に遇ふことを得べきや不や』と。阿難、佛に白さく、『能はざるなり、世尊、所以は何ん、此の盲龜、若し海の東に至れば、浮木は風に隨ひて或は海の西に至らん。南北四維を圍遶するも亦た爾なればなり。必ず相得ざらん』と。佛、阿難に告げたまはく、『盲龜浮木は、復た差違すと雖も、或は復た相得ん。愚癡無聞の凡夫、五趣に漂流せば、暫く人身に復すること、甚だ彼よりも難し。所以は何ん、彼の諸の衆生は、其の義を行ぜず、法を行ぜず、善を行ぜず、眞實を行ぜず、展轉して殺害し、强きは弱きを陵ぎて、無量の惡を造るが故なり。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こして無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。[八七]

【八七】原新俱に第十五終る三品六十五經を收む。

(四〇) 一一九七三 (四〇五)(孔經)[八五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、毘舍離の獼猴池の側(ほとり)なる重閣講堂に住まりたまへり。爾の時尊者阿難、晨朝に衣を著け鉢を持ち毘舍離城に入りて乞食せり。時に衆多の離車の童子有り。晨朝に城内より出でて、精舍の門に至り、弓箭(きゆうせん)を持ち競ひて精舍の門の孔を射れり。箭箭皆門の孔に入る。尊者阿難見已つて、以て奇特と爲す、彼の諸の離車の童子は能く是の如き難事を作すと。城に入りて乞食し、還りて衣鉢を擧げ足を洗ひ已つて、佛の所に往詣し、佛の足に稽首したてまつり、退きて一面に住し、佛に白して言さく『世尊、我れ今晨朝、衣を著け鉢を持ち、毘舍離城に入りて乞食し、衆多の離車の童子有るを見たり。城内より出でて精舍の門に至り競ひて門の孔を射るに、箭箭皆入る。我れ是の念を作しぬ。此れ甚だ奇特なり。諸の離車の童子は能く難事を爲すと』と。佛、阿難に告げたまはく、『意に於て云何。離車の童子、競ひて門の孔を射るに、箭箭皆入るを、此れ難しと爲す耶、一毛を破り百分と爲して、一毛分を射るに、箭箭悉く中(あた)るを、此れ難しと爲す耶』と。阿難、佛に白さく、『一毛を破りて百分し、一分の毛を射るに、箭箭悉く中るを、此れ則ち難しと爲す』と。佛、阿難に告げたまはく、『苦聖諦に於て、實の如き知を生ずるには若かじ。此れ則ち甚だ難し。是の如く苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に、實の如く知見する、此れ則ち甚だ難し』と。爾の時世尊、偈を說いて言はく、

『一毛を百分と爲して　一分を射るは甚だ難し　然一一の苦陰を　非我なりと觀ずるの難
きも亦た然なり。』

と。佛、此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四一) 一一九七四 (四〇六)(盲龜經)[八六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、獼猴池の側なる重閣講堂に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば大池悉く大海と成るに、一盲龜有り、壽(いのち)無量劫にして、百年に一たび其の頭を出だすが如し。海中に浮木の止まれる有りて一孔有り、海浪

【八五】 S. 56. 45. Chiggala. 毘舍離の離車の童子精舍の門の孔を射るを見て阿難以て難事とせり。佛四聖諦に於て如實に知るは一毛の百分の一を射るが如く難事なりと說かる。

【八六】 凡夫五趣に漂流せば、人間に再び生れ難きこと、盲龜大海に於て浮木に遭ふが如し。故に四聖諦に於て學すべし。

跡聖諦に於て、順じて知り順じて入りて、諸の有の流れを斷じ、諸の生死を盡くして後有を受けざるなり。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起こし、無間等を修すべし』と。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言はく、

『我れ常に汝等と　長夜に生死を涉る　聖諦を見ざるが故に　大苦日に增長す　若し四聖諦を見ば　有の大流海を斷じ　生死永く已に除こりて　復た後有を受けざらん

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三九) 一二九七二 (四〇四)(申恕林經)[八二] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、摩竭國の人間に在して遊行したまへり。[八三]王舍城と波羅利弗の、是の中間の竹林聚落に、大王、中に於て福德舍を作れり。爾の時世尊、諸の大衆と中に於て止宿したまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『汝等當に行いて共に申恕林に至るべし』と。爾の時世尊、大衆と申恕林に到り、樹の下に坐したまへり。爾の時世尊、手に樹の葉を把りて、諸の比丘に告げたまはく『此の手中の葉多しと爲す耶、大林の樹葉多しと爲すや』と。比丘佛に白さく『世尊、手中の樹葉は甚だ少く、彼の大林の中に樹葉は無量百千億萬倍にして、乃至算數譬類もて比を爲す可からず』と。『是の如く諸の比丘、我れ等正覺を成じて自ら見し所の法をば人の爲に[八四]宣說するに手中の樹葉の如し。所以は何ん、彼の法は義もて饒益し、法もて饒益し、梵行もて饒益し、明慧もて正覺して、涅槃に向へばなり。大林の樹葉の如くなる、我が等正覺を成じて自ら正法を知りて說かざる所の如きは、亦復た是の如し。所以は何ん。彼の法は義もて饒益するに非ず、法もて饒益するに非ず、梵行もて饒益し、明慧もて正覺して、正しく涅槃に向ふに非ざるが故なり。是の故に、諸の比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起して無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【八二】 S. 56. 31. Siṃsapā. 佛の覺知せられし所は廣大なるも、衆生を饒益し、出離に役立つ以外は說き給はず。

【八三】 巴には Kosambiyaṃ Siṃsapāvane.

【八四】 原文、定說に作るも akkhātaṃ の意にて今譯す。

法を聞かんが爲の故に、悉く受くるに堪能せり。所以は何ん、人の世に生れなば、長夜に苦を受くるに、有る時は地獄、有る時は畜生、有る時は餓鬼、三惡道に於て、空しく衆の苦を受け、亦た法をも聞かざるなり。是の故に我れ今無間等の爲の故に、終身三百槍を受くるを以て大苦とは爲さざるなり。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等を得ずんば、當に勤め方便して增上欲を起し、無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三七)〔二九六〕(四〇二)(平等正覺經)[七九]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦に於て、平等に正覺するを、名づけて如來應等正覺と爲す。何等をか四と爲す。所謂苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。此の四聖諦に於て、平等に正覺するを、名づけて如來應等正覺と爲す。是の故に諸の比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して、增上欲を起し、無間等を學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三八)〔二九七〕(四〇三)(如實知經)[八〇]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、摩竭國の人間に在しき遊行したまへり。王舍城と波羅利弗[八一]の、是の中間の竹林聚落に於て國王、中に於て福德舍を造れり。爾の時世尊、諸の大衆と、中に於て宿止したまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『我れ汝等と四聖諦に於て、知る無く見る無く、隨順して覺する無く、隨順して受くる無くんば、應當に長夜に生死に驅馳すべし。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。我れ汝等と四聖諦に於て、知る無く見る無く、隨順して覺する無く、隨順して受くる無くんば、應當に長夜に生死に驅馳すべし。我れ及び汝は、此の苦聖諦に於て、順じて知り順じて入れるを以ての故に、諸の有の流れを斷じ、諸の生死を盡くして後有を受けざるなり。苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道

【七九】 S. 56. 23. Sammāsambuddha. 四聖諦に於て平等に正覺するを如來等正覺と名づく。

【八〇】 S. 56. 21. Vijjā. 佛及佛弟子も四諦を知る無くんば長夜に生死に驅馳せん。四諦を知り學するが故に生死を離る。

【八一】 Pāṭaliputta. 巴には Vajjisu Koṭigāma

門は、諸の論處に至るも、能く屈すること無し。其の心解脱し慧解脱せば、能く餘の沙門婆羅門をして、反つて憂苦を生ぜしむ。是の如く實の如く知り、實の如く見るは、皆是れ先世の宿習なるが故なり。智慧をして傾動すべからざらしむ。是の故に比丘、四聖諦に於て、當に勤め方便して、增上欲を起し、精進して修學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三五) 一一九八 (四〇〇)(燒衣經)[七五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば人有り火もて頭衣を燒くに、當に增上欲を起こし、急ぎ救ひて滅せしむべきが如し』と。佛、比丘に告げたまはく[七六]『是の說を作すこと莫れ。當に頭衣を置き、四聖諦に於て、增上欲を起し、勤加方便して、無間等を修すべし。何等か四なる。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。未だ無間等ならずんば、當に勤めて方便して、無間等を修すべし。所以は何ん。比丘、長夜に熾然たるは地獄畜生餓鬼なればなり。諸の比丘、[七七]極苦を見ずして、如し苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦未だ無間等ならずんば、是の比丘は、當に苦樂憂悲を忍びて、四聖諦に於て、勤加精進し、方便して無間等を修習すべく、應當に學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三六) 一一九九 (四〇一)(百槍經)[七八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば士夫の、年壽百歳なるが如し。人有り語つて言はく、士夫若し法を聞かんと欲せば、當に日日三時に苦を受くべし。晨朝の時に百槍の苦を受け、日中晡時にも、亦復た是の如く、一日の中に於て、三百槍の苦を受け、是の如く日月して、百歳に至り、然して後法を聞きなば、無間等を得ん、汝寧ろ能ふや不やと。時に彼の士夫、

【七五】S. 56. 34. Cela. 四諦を知らざれば長く惡趣の苦を受けん。頭衣の燒くる如きは比較にならず。故に憂苦を忍んで四諦を學すべし。
【七六】比較にならぬとの意。

【七七】極苦も顧みることなく。

【七八】S. 56. 35. Sattisata. たとへ日に三百槍を受くること百歳なりともよく堪えて法を聞き、四諦に於て無間等を得んと學すべし。

になり已り、而かも苦滅道跡聖諦に無間等ならんと欲すと言はば、斯れ則ち善き說なり。所以は何ん、是の處あるが故なり。若し苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦に於て、無間等になり已り、而かも苦滅道跡聖諦に無間等ならんと欲せば、斯れ是の處あるが故なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三三）一二九六（三九八）（因陀羅柱經）[七一]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『小さき綿丸、[七二]小さき劫貝華丸を、四衢道の頭に置くに、四方より風吹けば、則ち風に隨つて去り一方に向ふが如く、是の如く若し沙門婆羅門、苦聖諦に於て、實の如く知らず、苦集聖諦に於て、苦滅聖諦、苦滅道跡聖諦に於て、實の如く知らずんば、當に知るべし彼の沙門婆羅門は、常に他面を觀じて、常に他の說に隨はん。實の如く知らざるを以ての故に、彼の所說を聞き、說に趣いて受けん。當に知るべし此の人は、宿智慧を修習せざるを以ての故なりと。譬へば[七三]因陀羅柱を、銅鐵にて之れを作り、深く地中に入るるに四方より猛く風ふくも、動ぜしむること能はざるが如く、是の如く沙門婆羅門、苦聖諦に於て實の如く知り、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に實の如く知らば、當に知るべし是の沙門婆羅門は、他面を視ず、他の語に隨はず。量の沙門婆羅門は、智慧堅固にして本より隨ひ習ひしが故に、他の語に隨はざるなり。是の故に比丘、四聖諦に於て、當に勤め方便して增上欲を起こし、精進して修學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三四）一二九七（三九九）（論處經）[七四]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば石柱の、長さ十六肘なるを八肘、地に入るるに、四方より風吹くとも、動ぜしむること能はざるが如く、是の如く沙門婆羅門、苦聖諦に於て實の如く知り、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦に於て、實の如く知らば、斯等の沙門婆羅

【七一】 S. 56. 39. Indakhila 四諦を知らざる者は小さき綿屑の風に飛ぶ如く、他人の說になびき從ふ。四諦を知れる者は堅固不動なること銅鐵製の門柱地中深く入れたるが如し。

【七二】 kappāsa, tūla 木綿。

【七三】 indakhila (indrakila) 市の門にある柱。

【七四】 S. 56. 40. Vādino 四諦を知りたる沙門婆羅門は、何處に行くとも他の論者に屈することなし。

ば、須陀洹と名づく。惡趣の法に墮せず、必定して正覺し、七有の天人に趣き、往生して苦邊を作さん。彼の聖弟子は、中間に憂苦を起すと雖も、彼の聖弟子は、欲惡不善の法を離れ、有覺有觀、離に喜樂を生じ、初禪具足して住することを聽されん。彼の聖弟子は、一法として斷ぜざる有りて能く還つて此の世に生ぜしむる者を見ず。此れ則ち聖弟子は、法眼の大義を得たるなり。是の故に比丘、此の四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して增上欲を起し、精進して修學すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（三二）一一九五（三九七）（[六五]佉提羅經）是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『[六六]當に是の說を作すべし。我れ苦聖諦に於て、未だ[六七]無間等ならず、苦集聖諦、苦滅聖諦に未だ無間等ならず、而かも我れ當に苦滅道跡聖諦に、無間等なるを得べしと言はば、此の說は應ぜざるなり。所以は何ん。是の處なきが故なり。若し苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦は、未だ無間等ならずして、而かも苦滅道跡聖諦は無間等ならんと欲せば、是の處あること無し。譬へば人有り、我れ[六八]佉提羅の葉を取り、合集して器を作り、水を盛りて持ち行かんと欲すと言はば、是の處有ること無きが如し。所以は何ん、是の處なきが故なり。是の如く、我れ苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦に於て、未だ無間等ならずして、而かも苦滅道跡聖諦に無間等なるを得んと欲すと言はば、是の處あること無きなり。若し復た、我れ當に苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦に於て、無間等を已に得、復た苦滅道跡聖諦をも得べしと言ふこと有らば、斯れ則ち善き說なり。所以は何ん。是の處あるが故なり。若し苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦に、無間等になり已つて、而かも苦滅道跡聖諦に無間等ならんと欲せば、斯れ是の處有り。譬へば我れ[六九]純曇摩の葉、[七〇]摩樓迦の葉を以て、合集し水を盛りて、持ち行かんと言ふ者有るが如し。此れ則ち善き說なり。所以は何ん。是の處有るが故なり。是の如く若し我れ、苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦に於て、無間等

【六五】S. 56. 32. Khadira. 苦諦、苦集諦、苦滅諦を知らずして苦滅道諦を得ることなし。

【六六】巴には「苦聖諦乃至苦滅道聖諦を如實に了解せずして完全に苦を究竟せんと言はば、其は根據なきなり。」

【六七】無間等ならずは巴の anabhisamecca? 若し然らんには、無間等の意義は了解なり。漢譯にては普通現觀と譯す。

【六八】khadira 檐木、あかしや。

【六九】padumapattam 紅蓮花の葉。

【七〇】māluvāpattam 一種の蔓草の葉。

(二九) 【一九六二】(三九四)[六二](日月經一) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば日出づるに明相先づ起るが如く、是の如く正しく苦を盡くすにも亦た前相の起る有り。謂ゆる四聖諦を知るなり。何等をか四と爲す苦聖諦を知り、苦集聖諦を知り、苦滅聖諦を知り、苦滅道跡聖諦を知るなり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

是の如く知り、是の如く見、是の如く無間等なれと、亦た是の如く說く。

(三〇) 【一九六三】(三九五)[六三](日月經二) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し月日世間に出でずんば、一切の衆星も亦た世間に出でず。晝夜・半月・一月・時節・歲數・尅數・須臾、皆悉く現れず、世間常に冥く、明照有ること無し。唯だ長夜のみ有り、純ら大闇の苦世間に現れん。若し如來應供等正覺、世間に出でたまはざる時は、苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦を說いて、世間に現はしたまはず、世間は盲冥にして明照有ること無し。是の如く長夜に純ら大闇冥世間に現れん。若し日月世間に出づれば衆星も亦た現じ、晝夜・半月・一月・時節・歲の數、尅の數、須臾、悉く世間に現はれ、長夜明照、世間に出づるなり。是の如く如來應等正覺・世間に出でて、說きたまはば、苦聖諦、世間に現じ、苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦・世間に現じ、復た闇冥ならず、長夜照明し純一なる智慧世間に現ぜん』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三一) 【一九六四】(三九六)[六四](聖弟子經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『譬へば日出でて空中を周行するに、諸の闇冥を壞りて光明顯照するが如く、是の如く聖弟子は、所有る集の法を、一切滅し已り、諸の塵垢を離れ、法眼生ずるを得て、無間等を倶ひ、三結斷ず。所謂身見・戒取・疑なり。此の三結盡くれ

【六二】 S. 56. 37. Suriyūpama. 日出づるに先立ちて明相あるが如く、苦を盡すには先づ四諦を知るべし。

【六三】 S. 56. 38. Suriyūpama. 日月出でざれば世間暗黒なるが如く、佛出で四諦を說かざれば世間闇冥なり。逆も言はれたり。

【六四】 四諦を知り得たる聖弟子の果報を說く。

まふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二四) 一二九五七(斯陀含經)[57]『若し三結盡き、貪恚癡薄らぎなば、斯陀含を得る。彼の一切は皆四聖諦に於て、實の如く知るが故なり。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦を知り、苦集聖諦を知り、苦滅聖諦を知り、苦滅道跡聖諦を知るなり。是の如く當に知るべし、是の如く當に見るべし、是の如く無間等なれと。亦た是の如く說く。』

(二五) 一二九五八(阿那含經)[58]『五下分結盡き、般涅槃を生ずれば阿那含にして此の世に還らず。彼の一切は四聖諦を知れるなり。何等をか四と爲す。苦聖諦を知り、苦集聖諦を知り、苦滅聖諦を知り、苦滅道跡聖諦を知るなり。是の如く知り、是の如く見、是の如く無間等なれと、亦た是の如く說く。』

(二六) 一二九五九(阿羅漢經)[59]『若し一切の漏盡き、無漏にして心解脫し、慧解脫し、法を見、自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知れる、彼の一切は悉く四聖諦を知れるなり。何等をか四と爲す、謂ゆる苦聖諦を知り、苦集聖諦を知り、苦滅聖諦を知り、苦滅道跡聖諦を知るなり。是の如く知り、是の如く見、是の如く無間等なれと。亦た是の如く說く。』

(二七) 一二九六〇(辟支佛經)[60]『若し辟支佛道を證するを得たるは、彼の一切は四聖諦を知るが故なり。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦を知り、苦集聖諦を知り、苦滅聖諦を知り、苦滅道跡聖諦を知るなり。是の如く知り、是の如く見、是の如く無間等なれと、亦た是の如く說く。』

(二八) 一二九六一(無上正覺經)[61]『若し無上等正覺を得たるは、彼の一切は四聖諦を知るが故なり。何等をか四と爲す謂ゆる苦聖諦を知り、苦集聖諦を知り、苦滅聖諦を知り、苦滅道跡聖諦を知るなり。是の如く知り、是の如く見、是の如く無間等なれと、亦た是の如く說く』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【五七】四聖諦を知るが故に斯陀含を得。

【五八】四聖諦を知るが故に阿那含を得。

【五九】阿羅漢も亦四諦を知ることによりて得らる。

【六〇】辟支佛も亦四諦を知ることによりて得らる。

【六一】無上正等覺も亦四諦を知ることによりて得らる。

是の如く上の諸の經を重說し悉く繼ぐに偈を以てす。

[五三]『若し苦を知らざれば、　及び彼の衆の苦の因をも、　一切の諸の苦法の　寂滅して永く餘無きをも(知らざらん。)　若し道跡の能く一切の苦を　*息むるものを知らずんば、　心苦より解脫せんや。　慧解脫も亦た然なり。　衆苦を越え　苦をして究竟して脫せしむること能はざらん。

若し實の如く苦を知らば、(從つて)亦た衆の苦の因、　及び一切の諸の苦　永く滅盡して餘無きを知らん。　若し復た實の如く　苦を息むるの道跡を知りなば、　意解脫具足せん。　慧解脫も亦た然なり。　能く衆の苦を越え　究竟して解脫することを得るに堪えん』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三二) 一二九五 (三九三)(善男子經)[五四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し善男子にして、正信より非家出家して道を學べる、彼の一切に應ずる所は、當に四聖諦の法なりと知るべし。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦を知り、苦集聖諦を知り、苦滅聖諦を知り、苦滅道跡聖諦を知るなり。是の故に比丘、四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に勤め方便して、無間等を修すべし。此の如き章句は、一切四聖諦經なり。應當に具さに說くべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三三) 一二九六 (須陀洹經)[五五]『是の如く知り是の如く見、是の如く無間等なるを、悉く當に說くべし。[五六] 又三結盡きて須陀洹を得るは、一切當に四聖諦なりと知るべし。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦を知り、苦集聖諦を知り、苦滅聖諦を知り、苦滅道跡聖諦を知るなり。是の如く當に知るべし、是の如く當に具るべし、無間等なれ」と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせた

【五三】 S. 56. 22. Vijjā(2)
(1) Ye dukkhaṃ nappajānanti,
Atho dukkhassa sambhavaṃ,
Yattha ca sabbaso dukkhaṃ,
asesaṃ uparujjhati.
(2) Tañca maggaṃ na jānanti,
Dukkhupasamagāminaṃ,
Cetovimuttihīnā te,
Atho paññāvimuttiyā,
Abhabbā te antakiriyāya,
Te ve jātijarūpagā.
(3) Ye ca dukkhaṃ pajānanti,
Atho dukkhassa sambhavaṃ,
Yattha ca sabbaso dukkhaṃ,
Asesaṃ uparujjhati.
(4) Tañ ca maggaṃ pajānanti,
Dukkhūpasamagāminaṃ,
Cetovimuttisampannā,
Atho paññāvimuttiyā,
Bhabbā te antakiriyāya,
na te jātijarūpagā.
* 原文、思ふに作る、訛?
【五四】 S. 56. 3—4. Kulaputta. 善男子にして出家せる者の目的は四諦を知るに在り。
【五五】 四聖諦を知るが故に須陀洹を得。
【五六】 見結、戒取結、疑結。

堪能し、方便して修學すべし。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一三)一二九六(三九一)(沙門婆羅門經)[50] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅痆國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。廣說すること上の如し。差別せば、『四聖諦に於て、實の如く知らずんば、當に知るべし是の沙門婆羅門は、沙門數に非ず、婆羅門數に非ず。四聖諦に於て、實の如く知らば是れ沙門數なり、是れ婆羅門數なり』と。乃至佛此の經を說き已りたまひしに諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一四)一二九七(三九二)[51](如實知經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅痆國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『若し沙門婆羅門、苦聖諦に於て、實の如く知らず、苦集聖諦に、實の如く知らず、苦滅聖諦に、實の如く知らず、苦滅道跡聖諦に、實の如く知らずんば、當に知るべし是の沙門婆羅門は、苦より脫することを得ずと。若し沙門婆羅門、苦聖諦に於て、實の如く知り、苦集聖諦に於て、實の如く知り、苦滅聖諦に於て、實の如く知り、苦滅道跡聖諦に於て、實の如く知らば、當に知るべし是の沙門婆羅門は、苦より解脫すと』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一五―二二) 一二九八―一三〇五 [52]苦より解脫せざると解脫するとの如く、(一)是の如く惡趣を捨てて、解脫せざると解脫すると。(二)能く戒の退減を捨つるに堪ゆると、戒の退減を捨てざると。(三)能く自ら過人法を自證することを得たりと說くと、能く自ら過人法を作證することを得たりと說かざると。(四)能く此の外に於て、良き福田を求むると、能く此の外に於て良き福田を求めざると。(五)能く此の外に於て大師を求むると、能く此の外に於て大師を求めざると。(六)能く苦より越えざると、能く苦より越ゆるに堪ふと。(七)能く苦より脫するに堪えざると、能く苦より脫するに堪ふとなり。

【五〇】 S. 56. 22. Vijjā(2)
前經を簡略にしたるものなり。

【五一】 cf. S. 56. 21. Vijjā(1)
cf. S. 56. 21. Vijjā(2)
四諦を知らざれば苦より脫し得ず、知れば脫し得。

【五二】 四諦を知ると知らざるとの相違に就て前經の如くに說く經を略して擧げたり。

良醫善く治病を知り已つて未來世に於て永く動發せざるや。謂ゆる良醫は善く種種なる病を治し、究竟して除かしめ、未來世に於て、永く復た起こらず、是れを良醫善く治病を知り、更らに動發せずと名づく。如來應等正覺の大醫王と爲り、四德を成就して、衆生の病を療したまふも、亦復た是の如し。云何が四と爲す、謂ゆる如來は知りたまへるなり。此れは是れ苦聖諦なりと實の如く知り、此れは是れ苦集聖諦なりと實の如く知り、此れは是れ苦滅聖諦なりと實の如く知り、此れは是れ苦滅道跡聖諦なりと實の如く知りたまへり。諸の比丘、彼の世間の良醫は、生の根本の對治に於ては實の如く知らざるなり。老病死憂悲惱苦の根本の對治をば、實の如く知らざるなり。如來應等正覺は、大醫王と爲りて、生の根本に於て知り、對治するを、實の如く知りたまひ、老病死憂悲惱苦の根本に於て對治を、實の如く知りたまへり。是の故に如來應等正覺を、大醫王と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 一九五 (三九〇)[四九](沙門婆羅門經)　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、若し諸の沙門婆羅門、此の苦聖諦に於て、實の如く知らず、此の苦集聖諦に、實の如く知らず、此の苦滅聖諦に實の如く知らず、此の苦滅道跡聖諦に、實の如く知らずんば、此れは沙門にして沙門に非ず、婆羅門にして婆羅門に非ず、彼は亦た沙門の義、婆羅門の義に於て、法を見自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知らず。若し沙門婆羅門、此の苦聖諦に於て、實の如く知り、此の苦集聖諦に實の如く知り、此の苦滅聖諦に實の如く知り、此の苦滅道跡聖諦に實の如く知らば、當に知るべし是の沙門婆羅門は、沙門の沙門、婆羅門の婆羅門なり、沙門の義婆羅門の義に於て、法を見自ら證を作せるを知り、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に作し、自ら後有を受けざるを知ると。是の故に比丘、四聖諦に於て、無間等に當に增上欲を起し。精勤して

【四九】 S. 56. 22. Vijja(2) 四諦を知らざる者は沙門に非ず婆羅門に非ず、如實に知る者は眞の沙門婆羅門にして、よくその大義を成ず。

是れを聖幢を建立すと名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一〇) 一一九三 (三八八)(五支六分經)[四七] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦有り、何等をか四と爲す、謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。若し比丘、苦聖諦に於て、已に知り已に解し、苦集聖諦に於て、已に知り已に斷じ、苦滅聖諦に於て、已に知り已に證し、苦滅道跡聖諦に於て、已に知り已に修せる、是れを比丘は、五支を斷じ、六分を成じ、一を守護し、四に依猗し、諸諦を捨除し、四衢を離れて諸の覺想を證すと名づく。自身の所作もて心善く解脫し、慈善く解脫し、純一淸白なるを、名づけて上士と爲す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(一一) 一一九四 (三八九)(良醫經)[四八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四法の成就する有らば、名づけて大醫王者と曰ひ、王に應ずる所の具、王の分なり。何等をか四と爲す。一には善く病を知り、二には善く病源を知り、三には善く病を知りて對治し、四には善く治病を知り已つて當來に更に動發せざるなり。云何が良醫善く病を知ると名づくるや。謂ゆる良醫は善く是の如し是の如しと種種の病を知るなり。是れを良醫善く病を知ると名づく。云何が良醫善く病源を知るや。謂ゆる良醫は善く、此の病は風に因つて起これり、癖陰より起これり、涎唾より起これり、衆の冷より起これり、現事に因つて起これり、時節より起これりと知る。是れを良醫善く病源を知ると名づく。云何が良醫善く病を知りて對治するや。謂ゆる良醫は善く種種の病の塗藥すべく、吐くべく、下すべく、鼻を灌ぐべく、熏すべく、汗を取るべきを知り、是の如く比つて種種に對治す、是れを良醫善く知りて對治すと名づく。云何が

【四七】 cf. S. 56. 13. Khandha, 14. Āyatana. 四諦已に得たる比丘の功德。

【四八】 良醫とは、病を知り、病源を知り、病を療し、病を再び生ぜざらしむる者をいふ。然るに世間の醫は老病死憂悲苦惱の根本を對治せず。佛は四諦を以てよく根本の苦惱を治むる大醫王なり。

に於て、已に知り已に斷じ、苦滅聖諦に於て、已に知り已に證し、苦滅道跡聖諦に於て、已に知り已に修せる、是の如き比丘は、邊際究竟し、邊際離垢し邊際梵行已に綵りて純一淸白なり、名づけて上士と爲す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（八）二九四一（三八六）（賢聖經一）[四四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦有り、何等をか四と爲す、謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。若し比丘、苦聖諦に於て、已に知り已に解し、苦集聖諦に於て已に知り已に斷じ、苦滅聖諦に於て已に知り已に證し、苦滅道跡聖諦に於て已に知り已に修せる、是の如き比丘は、關鍵有ること無く、城塹を平治し、諸の嶮難を度り、結縛より解脫せり、名づけて賢聖と爲す、聖幢を建立せり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（九）二九四二（三八七）（賢聖經二）[四五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦有り、何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。若し比丘、苦聖諦に於て、已に知り已に解し、苦集聖諦に於て、已に知り已に斷じ、苦滅聖諦に於て、已に知り已に證し、苦滅道跡聖諦に於て、已に知り已に修せる、是の如き比丘は、關鍵有ること無く、城塹を平治し、諸の峻難を度れり。名づけて賢聖と爲す、聖幢を建立せり。諸の比丘、云何が關鍵有ること無きや。謂ゆる[四六]五下分結を、已に離れ已に知れり。是れを關鍵を離ると名づく。云何が城塹を平治するや。無明は之れ深塹なりと謂ひ、彼の斷知を得れば、是れを城塹を平治すと名づく。云何が諸の嶮難を度るや。謂ゆる際り無き生死の、苦邊を究竟する、是れを諸の嶮難を度ると名づく。云何が結縛より解脫するや。謂ゆる愛を已に斷じ已に知れるなり。云何が聖幢を建立するや。謂ゆる我慢を已に斷じ已に知れるなり、

【四四】 四聖諦を已に知り、解、斷、證、修せる者は賢聖なり。

【四五】 前經をやや廣說せり。

【四六】 三界の中欲界の結惑を下分結といふ。貪、瞋、身見、戒取、疑の五つは欲界に結びつけて解脫し得ざらしむるより五下分結といふ。

聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。若し比丘、苦聖諦に於ては、當に知るべく、當に解すべし。集聖諦に於ては、當に知るべく、當に斷ずべし。苦滅聖諦に於ては、當に知るべく、當に證すべし。苦滅道跡聖諦に於ては、當に知るべく當に修すべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（五）二九三八（三八三）（已知經）[41] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『聖諦有り、何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。若し比丘、苦聖諦に於て、已に知り已に解し、苦集聖諦に於て、已に知り已に斷じ、苦滅聖諦に於て、已に知り已に證し、苦滅道跡聖諦に於て、已に知り已に修せる、是の如き比丘は、則ち愛欲を斷じ、諸の結を轉去し、慢・無明等に於て、苦邊を究竟せり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（六）二九三九（三八四）（漏盡經）[42] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦有り、何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。若し比丘、苦聖諦に於て、已に知り已に解し、苦集聖諦に於て、已に知り已に斷じ、苦滅聖諦に於て、已に知り已に證し、苦滅道跡聖諦に於て、已に知り已に修せる、是の如き比丘は、阿羅漢と名づく、諸漏已に盡き、所作已に作し、諸の重擔を離れ、己利を逮得し、諸の有結を盡くし、正智もて善く解脫せり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七）二九四〇（三八五）（邊際經）[43] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦有り、何等をか四と爲す、謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。若し比丘、苦聖諦に於て、已に知り已に解し、苦集聖諦

【四一】 四聖諦に於て已に知り、已に解、斷、證、修したるものに就て說く。

【四二】 S. 56. 25. Āsavakkhaya. 四聖諦を已に知り、解、斷、證、修せるものは阿羅漢なり。

【四三】 四聖諦を已に知り、解、斷、證、修せるものは邊際を究竟すと說く。

未だ曾て轉ぜざる所なり。饒益する所多く、安樂にする所多からん。世間を哀愍し、義を以て饒益し、天人を利安し、諸の天衆を増益して、阿修羅衆を減損したまへり』と。地神唱へ已つて、虚空神天・四天王天・三十三天・炎魔天・兜率陀天・化樂天・他化自在天に聞こえ、展轉して傳へ唱へ、須臾の間に、梵天の身に聞こゆ。梵天聲に乘じて唱へて言はく『諸の仁者、世尊は波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に於て、三たび十二行の法輪を轉じたまへり。諸の沙門・婆羅門・諸天・魔・梵及び世間聞法の、未だ曾て轉ぜざる所なり。饒益する所多く、安樂する所多からん、義を以て諸天世人を饒益し、諸天衆を増益し、阿修羅衆を減損したまへり』と。世尊、波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に於て、法輪を轉じたまへり。是の故に此の經を、轉法輪經と名づく』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) 二九三五 (三八〇) (四諦經一)[三八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦有り、何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 二九三六 (三八一) (四諦經二)[三九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦有り。何等をか四と爲す。謂ゆる苦聖諦・苦集聖諦・苦滅聖諦・苦滅道跡聖諦なり。若し比丘、此の四聖諦に於て、未だ無間等ならずんば、當に無間等を修すべし、增上欲を起こし、方便し堪能して、正念正知もて應當に覺るべし』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) 二九三七 (三八二) (當知經)[四〇] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈の仙人住處鹿野苑の中に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四聖諦有り、何等をか四と爲す。謂ゆる苦

【三八】所說は前經を簡にしたるものなり。

【三九】四諦學すべし。

【四〇】S. 56. 29. Abhiññeya 四聖諦の當に知るべく、斷、證、修すべきを說く。

だ曾て聞かざる所の法なり。當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。復た次に、苦集滅す。此の[三六]苦滅聖諦を、已に知りなば當に作證せんと知るべしとは、本より未だ聞かざる所の法なり、當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。復た此の[三七]苦滅道跡聖諦を以て、已に知りなば當に修すべしとは、本より未だ曾て聞かざる所の法なり。當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。復た次に比丘、此の苦聖諦を、已に知り、知り已りなば出でて、未だ聞かざる所の法を、當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。復た次に此の苦集聖諦を、已に知り已に斷じなば出でて、未だ聞かざる所の法を、當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。復た次に苦滅聖諦を、已に知り已に作證しなば出でて、未だ聞かざる所の法を、當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。復た次に苦滅道跡聖諦を、已に知り已に修しなば出でて、未だ曾て聞かざる所の法を、當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。諸の比丘、我れ此の四聖諦の三轉十二行に於て、眼・智・明・覺を生ぜずんば、我れ終ひに諸天・魔・梵・沙門・婆羅門の聞法衆の中より、解脫を爲し、出を爲し離を爲すを得ざりしならん。亦た自ら阿耨多羅三藐三菩提を證得せざりしならん。我れ已に四聖諦の三轉十二行に於て、眼・智・明・覺を生ぜしが故に、諸天・魔・梵・沙門・婆羅門の聞法衆の中より出づるを得、脫するを得、自ら證得して阿耨多羅三藐三菩提を成じき』と。爾の時世尊、是の法を說きたまひし時、尊者憍陳如、及び八萬の諸天、遠塵離苦して、法眼淨を得たり。爾の時世尊、尊者憍陳如に告げたまはく『法を知ること未だしや』と。憍陳如、佛に白さく『已に知れり、世尊』と。復た尊者憍陳如に告げたまはく『法を知ること未だしや』と。拘隣佛に白さく『已に知れり、善逝』と。尊者拘隣已に法を知れるが故に、是の故に阿若拘隣と名づけたまへり。尊者阿若拘隣、法を知り已りしに、地神聲を擧げて唱へて言はく『諸の仁者、世尊は波羅㮈國の仙人住處鹿野苑の中に於て、三たび十二行の法輪を轉じたまへり。諸の沙門・婆羅門・諸天・魔・梵の、

【三六】 dukkhanirodham ariyasaccam

【三七】 dukkhanirodhagāmini paṭipadā ariyasaccam

ることを得せしむ。何等をか四と爲す。一には摶食、二には觸食、三には意思食、四には識食なり。諸の比丘、此の四食に於て、貪有り喜有らば、識住增長し、乃至純大苦聚集まる。譬へば比丘、畫師、若しは畫師の弟子の如し。種種なる彩を集め、色に粧畫して、種種の像を作さんと欲するに、諸の比丘、意に於て云何。彼の畫師、畫師の弟子は、寧ろ色を粧(よそほ)ひ能ふや不や』と。比丘、佛に白さく『是の如し世尊。能く色を粧畫す』と。佛、比丘に告げたまはく『此の四食に於て、貪有り喜有らば、識住增長し、乃至是の如く純大苦聚集まる。諸の比丘、若し四食に於て、貪無く喜無くんば、識住增長すること有ること無し、乃至是の如く純大苦聚滅す。比丘、譬へば畫師、畫師の弟子の如し、種種の彩を集め、色を離れて粧畫する所有らんと欲して、種種の像を作すに、寧ろ畫き能ふや不や』と。比丘、佛に白さく『能はざるなり、世尊』と。『是の如く比丘、若し四食に於て、貪無く喜無くんば、識住增長すること有ること無し。乃至是の如く純大苦聚滅す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（第三因緣誦、第二四諦相應、第一部（原第十五卷の續））*

（第七品）

（一）二九三四（三七九）（轉法輪經）[二三]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、波羅㮈の鹿野苑の中なる仙人住處に住まりたまへり。爾の時世尊、五比丘に告げたまはく『此の[二四]苦聖諦は、本より未だ曾て聞かざる所の法なり。當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。此の苦の集、此の苦の滅、此の苦の滅道跡聖諦は、本より未だ曾て聞かざる所の法なり。當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。復た次に苦聖諦智は、當に復た本より未だ聞かさる所の法なりと知るべし。當に正しく思惟すべし。時に眼・智・明・覺を生ぜん。[二五]苦集聖諦を、已に知りなば當に斷ずべしとは、本より未

---

* 初轉法輪に關係し四諦に關するもの四十一經を一品とす。

【二三】 S. 56. 11—12. Tathāgatena vuttā. 佛ベナレス鹿野苑に於て、初めて五比丘の爲に說法せらる。說き給ふ所は三轉十二行法輪なり。

【二四】 dukkham ariyasaccam.

【二五】 dukkhasamudayam ariyasaccam

て、貪無く喜無くんば、前に廣說せるが如く、乃至純大苦聚滅す。譬へば比丘、樓閣宮殿の如き、北西に長廣に、東西に牕牖あり。日東方より出づれば、何所を照らすべきか』と。比丘、佛に白して言さく『西壁を照らすべし』と。佛、比丘に告げたまはく『若し西壁無くんば何所を照らすべきか』と。比丘、佛に白して言さく、虛空を照らし、攀緣する所無かるべし』と。『是の如く比丘、此の四食に於て、貪無く喜無くんば、識の住する所無し。乃至是の如く純大苦聚滅す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（七）二九三二（三七七）（有食經）[29] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四食有り衆生を資益して、世に住し攝受し長養することを得せしむ。何等をか四と爲す。一には摶食、二には觸食、三には意思食、四には識食なり。諸の比丘、此の四食に於て、貪有り喜有らば、識住增長し、乃至純大苦聚集まる。譬へば比丘、樓閣宮殿の如し。北西に長廣に、東西に牕牖あり、日東方より出づれば、應に何所を照らすべきか』と。比丘、佛に白して言さく『西壁を照らすべし』と。佛、比丘に告げたまはく『是の如く四食に、貪有り喜有らば、識住增長し、乃至是の如く大苦聚集まる。若し四食に於て、貪無く喜無くんば、亦た識住增長すること無し。乃至是の如く純大苦聚滅す。[30] 譬へば比丘・畫師・畫師の弟子の如し。種種の彩色を集め、虛空に粧畫せんと欲するに、寧ろ畫き能ふや不や』と。比丘、佛に白さく『能はざるなり、世尊。所以は何ん、彼の虛空は、非色にして[31]無對不可見なればなり』と。是の如く、比丘、此の四食に於て、貪無く喜無くんば、亦た識住增長することなく、乃至是の如く純大苦聚滅す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（八）二九三三（三七八）（有食經）[32] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四食有り衆生を資益して、世に住し攝受し長養す

【二九】 S. 12. 64. Atthi rāgo. 初の部分は前經に同じ、唯畫師の譬を加ふ。

【三〇】 畫師の喩。

【三一】 無對とは障礙することなきなり。

【三二】 S. 12. 64. Atthi rāgo. 喜食の作用を畫師を以て譬ふ。

することを得せしむ。何等をか四と爲す。一には摶食、二には觸食、三には意思食、四には識食なり。若し比丘、此の四食に於て、喜有り貪有らば、則ち識住增長せん。識住增長するが故に名色に入る、名色に入るが故に諸行增長す。行增長するが故に當來の有增長す、當來の有增長するが故に生老病死憂悲惱苦集まる。若し四食に於て、貪無く喜無くんば、貪無く喜無きが故に、識住增長せず。此の識住增長せざるが故に、名色に入らず。名色に入らざるが故に、行增長せず。行增長せざるが故に當來の有生ぜず長ぜず。當來の有生長せざるが故に、未來世に於て生老病死憂悲惱苦起こらず、是の如く純火苦聚滅す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（五）二九三〇（三七五）（有貪經）[二五] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四食有り、衆生を資益して、世に住し攝受し長養することを得せしむ。何等をか四と爲す。一には摶食、二には觸食、三には意思食、四には識食なり。諸の比丘、此の四食に於て、貪有り喜有らば、則ち憂悲有り、塵垢有り。若し四食に於て、貪無く喜無くんば、則ち憂悲無く、亦た塵垢無し』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（六）二九三一（三七六）（有貪經）[二六] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四食有り衆生を資益して、世に住し攝受し長養することを得せしむ。何等をか四と爲す。一には摶食、二には觸食、三には意思食、四には識食なり。諸の比丘、此の四食に於て、貪有り喜有らば、識住增長し、乃至純大苦聚集まる。譬へば樓閣宮殿(ろうかくぐうでん)の[二七]北西に長廣に東西に[二八]牕牖(そうゆう)あり、日東方より出づれば、光り西壁を照らすが如く、是の如く比丘、此の四食に於て、貪有り喜有らば、前に廣說せるが如く、乃至純大苦聚集まる。若し四食に於

【二五】 S. 12. 64. Atthi rāgo. 四食に於て喜貪無ければ、憂悲なく、亦塵垢無し。

【二六】 S. 12. 64. Atthi rāgo. 四食に於て喜貪なければ恰も窓より入りたる光線の壁なくしては止る所なきが如く、識住乃至純大苦聚集ることなし。

【二七】 巴には「東南北に風窓あり、日出づれば風窓より入りて……」

【二八】 vātapāna 風窓。

ん。五欲の功德に貪愛斷ぜは、我れ彼の多聞の聖弟子の五欲の功德の上に於て一結使も、斷ぜざるもの有るを見ざるなり。一結使有るが故に、則ち還つて此の世に生ずるなり。云何が比丘觸食を觀察するや。譬へば牛有り生きながら其の皮を剝ぐに、在在處處に、諸の蟲唼食し沙土坌塵し、草木の針を刺す。若し地に依らば地蟲に食はれ、若し水に依らば水蟲に食はれ、若し空中に依らば、飛蟲に食はれ、臥し起きに常に此の(牛の)身を苦毒すること有るが如く、是の如く比丘、彼の觸食に於て、當に是の如く觀ずべし。是の如く觀ぜば、觸食斷ずるを知らん、觸食斷ずるを知らば、三受則ち斷ぜん。三受斷ずれば多聞の聖弟子は[二二]上に於て復た作す所無し。所作已に作せしが故に。云何が比丘、意思食を觀察するや。譬へば聚落城邑の邊りに火有りて起るも、煙無く炎無し。時に士夫あり、聰明黠慧にして苦に背むき樂に向ひ、死を厭ひ生を樂ひ、是の如き念を作さく、「彼の大火有るも煙無く炎無し。行來するに當に避くべし、中に墮せしむること莫れ、必ず死せんこと疑ひ無し」と。是の思惟を作し、常に思願を生じ、捨遠して去るが如し。意思食を觀ずるも、亦復た是の如し。是の如く觀ぜば、意思食斷ぜん。意思食斷ずれば、三愛則ち斷ず、三愛斷ずれば、彼の多聞の聖弟子は、上に於て更に所作無し。所作已に作せしが故に。諸の比丘、云何が識食を觀察するや。譬へば國王に防邏者有り、劫盜を捉捕し、縛して王の所に送り、前の須深經に廣說せる如く、彼の因緣を以て、[二三]三百矛を受くるに、苦覺晝夜に苦痛するが如し。識食を觀察するも、亦復た是の如し、是の如く觀ぜば、識食斷ずるを知らん。識食斷ずるを知らば、名色斷ずるを知る、名色斷ずるを知らば、多聞の聖弟子は、上に於て更に所作無し、所作已に作せしが故に』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(四) 二九九 (三七四) (有食經)[二四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四食有り、衆生を資益して、世に住し攝受し長養

【二二】 natthi kiñci uttariṃ karaṇīyanti vadāmi. 其れ以上作すべきなしと我言ふ。

【二三】 巴に依れば、王は朝に百矛を以て打たしめてその狀態を問ひ、日中に更に百矛、夕刻に更に百矛を加へしむとあり。

【二四】 S. 12. 64. Atthi rāgo. 四食に於て喜貪無ければ、識增長せず、乃至純大苦聚滅す。

や』と。佛、頗求那に告げたまはく『我れ有なる者有りと說かず、我れ若し有なる者有りと說かば、汝應に問うて言ふべし、誰れか有と爲すやと。汝今應に問ふべし。何緣ずるが故に有ありやと。我れ應に答へて言ふべし。取を緣ずるが故に有あり、能く當來の有を招く觸生ず、是れを有と名づく。六入處有り、六入處は觸を緣じ、觸は受を緣じ、受は愛を緣じ、愛は取を緣じ、取は有を緣じ、有は生を緣じ、生は老病死憂悲惱苦を緣ず、是の如く純大苦聚集する。謂ゆる六入處滅すれば則ち觸滅し、觸滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老病死憂悲惱苦滅す。是の如く純大苦聚の集滅す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三) 二九八 (三七三) (子肉經)[一九] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『四食有り、衆生を資益して、世に住し攝受し長養することを得せしむ。云何が四と爲す。謂ゆる一には麁摶食、二には細觸食、三には意思食、四には識食なり。云何が比丘摶食を觀察するや。譬へば夫婦二人有りて唯だ一子のみ有り。愛念將養せしに、曠野の嶮道難處を度らんと欲し、糧食乏しく盡き、飢餓の困極まり、計するも濟ふ理無し。是の議を作して言はく、「正に一子有り、極めて愛念する所なるも、若し其の肉を食はば、難を度り得可し、此に在りて三人倶に死せしむること莫れ」と。是の計を作し已つて、卽ち其の子を殺し、悲みを含み淚を垂れ、强ひて其の肉を食ひ、曠野を度り得るが如し。云何が比丘、彼の人の夫婦は、共に子の肉を食ひて寧ろ其の味を取り、美樂を貪嗜するや不や』と。答へて曰はく『不なり世尊』と。復た問はく[二〇]『比丘、彼れ强ひて其の肉を食ひて、曠野の嶮道を度ると爲すや不や』と。答へて言はく『是の如し世尊』と。佛、比丘に告げたまはく『凡そ摶食を食するには、當に是の如く觀ずべし。是の如く觀ぜば、摶食斷ずるを知らん。摶食斷ずるを知り已らば、[二一]五欲の功德に於て貪愛則ち斷ぜ

【一九】S. 12. 63. Puttamaṃsa. 四食を如何に觀じ、如何に斷ずべきかを說く。先づ麁摶食に就ては子肉を食する如く思へ。觸食に就ては皮を剝がれたる牛の如く思へ。意思食に就ては火事の如く思へ。識食については執縛せる劫盜の如く思へ。然らば四食を斷じ所作成ず。

【二〇】Nanu te bhikkhave yāvad eva kantārassa nittharaṇatthāyaṃ āhāraṃ āhāreyyunti. 諸比丘、彼等は强ちに曠野を度らんが爲に食物(子肉)を食するを欲せざらん。

【二一】pañcakāmaguṇiko rāgo 五妙欲に於ける貪。

たまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、『四食有り、衆生を資益して、世に住し攝受し長養することを得せしむ。何等をか四と爲す。一には麁摶食、二には細觸食、三には意思食、四には識食なり』と。時に比丘有り、名を頗求那と曰ふ。佛の後に住して佛を扇げり、佛に白して言さく『世尊、誰れか此の識を食するや』と。佛、頗求那に告げたまはく『我れ識を食する者有りと言はず、我れ若し識を食する者有りと言はば、汝應に是の問ひを作すべし。我れは說けり識是れ食なりと。汝まさに問うて言ふべし、何の因緣ずるが故に識食有るやと。我れ則ち答へて言はん。能く未來の有を招き、相續して生ぜしむ、有あるが故に六入處有り、六入處は觸を緣ずと』と。頗求那復た問はく『誰れか觸すと爲すや』と。佛、頗求那に告げたまはく『我れ觸する者有りと言はず、我れ若し觸する者有りと言はば、汝應に是の問ひを作すべし、誰れか觸すと爲すやと。汝應に是の如く問ふべし。何の因緣ずるが故に觸を生ずるやと。我れ應に是の如く答ふべし。六入處、觸を緣ず、觸は受を緣ずと』と。復た問はく『誰れの受と爲すや』と。佛、頗求那に告げたまはく『我れ受者有りと說かず、我れ若し受者有りと言はば、汝應に問ふべし、誰れの受と爲すやと。汝應に問ふべし。何の因緣ずるが故に受有るやと。我れ應に是の如く答ふべし。觸緣ずるが故に受有り、受は愛を緣ずと』と。復た問はく『世尊、誰れか愛すと爲すや』と。佛、頗求那に告げたまはく『我れ愛する者有りと說かず、我れ若し說いて愛する者有りと言はば、汝應に是の問ひを作すべし。誰れか愛すと爲すやと。汝應に問うて言ふべし。何を緣ずるが故に愛有るやと。我れ應に是の如く答ふべし。受を緣ずるが故に愛有り、愛は取を緣ずと』と。復た問はく『世尊、誰れか取ると爲すや』と。佛、頗求那に告げたまはく『我れ說いて取る者有りと言はず、我れ若し說いて取る者有りと言はば、汝應に問うて言ふべし。誰れか取ると爲すやと。汝應に問うて言ふべし。何を緣ずるが故に取有るやと。我れ應に答へて言ふべし。愛緣ずるが故に取有り、取は有を緣ずと』と。復た問はく『世尊、誰れか有と爲す

(二一—二五) 二九〇—二九四[一二] 毘婆尸佛の如く、是の如く尸棄佛・毘濕波浮佛・迦羅迦孫提佛・迦那迦牟尼佛・迦葉佛も亦た是の如く說く。

(二六) 二九五 (三七〇)(十二因緣經)[一三] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、欝毘羅の尼連禪河の側なる大菩提所に住まりたまへり。久しからずして當に正覺を成ずべく、菩提樹の下に往詣し、草を敷きて座と爲し、結跏趺坐し、正身正念たること、前に廣說せるが如し。

(第六品)

(一) 二九六 (三七一)(食經)[一四] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく、四食有り衆生を資益して、世に住し攝受し長養することを得せしむ。何等をか四と爲す、謂ゆる一には[一五]麁摶食、二には細觸食、三には思食、四には識食なり。此の四食は何ぞ因なる、何ぞ集なる、何ぞ[一六]生なる、何ぞ[一七]觸なる。謂ゆる此の諸の食は、受因たり、愛集たり、愛生たり、愛觸たり。此の愛は何ぞ因なる、何ぞ集なる、何ぞ生なる、何ぞ觸なる。謂ゆる愛は受因たり、受集たり、受生たり、受觸たり。此の受は何ぞ因なる、何ぞ集なる、何ぞ生なる、何ぞ觸なる。謂ゆる受は觸因たり、觸集たり、觸生たり、觸觸たり。此の觸は何ぞ因なる、何ぞ集なる、何ぞ生なる、何ぞ觸なる。謂ゆる觸は六入處因たり、六入處集たり、六入處生たり。六入處觸たり。六入處の集は是れ觸の集なり、觸の集は是れ受の集なり。受の集は是れ愛の集なり。愛の集は是れ食の集なり。食、集なるが故に未來世に、生・老・病・死・憂悲・惱苦集す。是の如く純大苦聚集す。是の如く六入處滅すれば則ち觸滅し、觸滅すれば受滅し、受滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち食滅す。食滅するが故に未來世に於て生・老・病・死・憂悲・惱苦滅し、是の如く純大苦聚滅す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(二) 二九七 (三七二)(頗求那經)[一八] 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まり

【一二】 cf. S. 12. 5—9.

【一三】 釋尊も亦菩提樹下座にて十二因緣を觀察せられたること前六佛の如し。

【一四】 S. 12. 11. Āhāra. 四食によりて純大苦聚生ず。四食の因は愛、愛の因は受、受の因は觸、觸の因は六入處なり。六入處滅するが故に觸乃至食、純大苦聚滅す。

【一五】 麁摶食 kabaliṃkāro=āhāro oḷāriko.
細觸食 Sukhumo phasso
思　食 manosañcetanā
識　食 viññāṇaṃ

【一六】 kiṃ pabhavā 何が生起の原因なりや。

【一七】 巴になし。觸とは相關係するなり。即ち「何が關係してゐるや」との意。

【一八】 S. 12. 12. Phagguna. 頗求那四食六入處の因緣の道理を覺らず、「誰か食するや」「誰か觸すと爲すや」「誰の受と爲すや」「誰か愛すと爲すや」「誰か取ると爲すや」「誰か有となすや」等の愚問を發す。世尊は此れは他人の問題ならず、各人の生死流轉と出離得脫の問題なりと示さる。

摩提を修し、專精に繫念し已らば、是の如く實の如く顯現す。云何が實の如く顯現するや。謂ゆる老死實の如く顯現し、乃至行實の如く顯現す。此の諸法は無常・有爲・有漏なりと、是の如く實の如く顯現す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（一〇）二九九（三六九）（十二因緣經）[10]　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『昔者、毘婆尸佛未だ正覺を成ぜざりし時、菩提所に住まり、久しからずして成佛したまへり。菩提樹の下に詣り、草を敷きて座となし、結跏趺坐して、端坐し正念にして、一たび坐すること七日、十二緣起に於て、逆順に觀察したまへり。所謂此れ有るが故に彼れ有り、此れ起こるが故に彼れ起こる。無明を緣じて行あり。乃至生を緣じて老死あり。及び純大苦聚集まり、純大苦聚滅すと。彼の毘婆尸佛正しく七日を坐し已つて、三昧より覺め、此の偈を說きて言はく、

此の如くして諸法は生ず　梵志[11]勤めて思禪せば　永く諸の疑惑を離れて　因緣生の法を知る　若し因より苦を生ずと知り　諸受滅盡すと知り　因緣法盡くと知らば　則ち有漏の盡くるを知らん　此の如くして諸法は生ず　梵志勤めて思禪せば　永く諸の疑惑を離れ　因有りて苦を生ずと知る　此の如くして諸法は生ず　梵志勤めて思禪せば　永く諸の疑惑を離れ　諸受滅盡すと知る　此の如くして諸法は生ず　梵志勤めて思禪せば　永く諸の疑惑を離れ　因緣法の盡くるを知る　此の如くして諸法は生ず　梵志勤めて思禪せば　永く諸の疑惑を離れ　諸の有漏盡くるを知る　此の如くして諸法は生ず　梵志勤めて思禪せば　普く諸の世間を照らすこと、　日の虛空に住せるが如く　諸の魔軍を破壞し　諸の結より覺めて解脫せん。

と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

【10】 cf. S. 12. 4—9. Vipassi-Kassapo. 毘婆尸佛菩提樹下に於て十二緣起の順逆を觀察して偈文を說き給へり。

【11】 梵行を志す者。

「何に緣るが故に此の生あるや」と。尋いで復た正思惟し、無間等に知を起こしぬ「有に緣るが故に生あり」と。尋いで復た正思惟すらく「何に緣るが故に有あるや」と。尋いで復た正思惟し、實の如く無間等に知を起しぬ「取あるが故に有あり」と。尋いで復た正思惟すらく「何に緣るが故に取有るや」と。尋いで復た正思惟し、實の如く無間等に觀察を起しぬ「取の法の味著顧念は、觸の愛に緣りて增長する所なり。當に知るべし、愛に緣りて取あり、取に緣りて有あり、有に緣りて生あり、生に緣りて老病死憂悲惱苦あり、是の如く純大苦聚集まると。[六]譬へば油炷を緣じて燈を然すに、彼れに時時油を增し炷を治めば、彼の燈常に明かに、熾然として息まざるが如し』と。前來の如く譬を歎じて城の譬をもて廣說したまへり。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(三─七) 一二九二─一二九六[七] 毘婆尸佛の如く是の如く尸棄佛・毘濕波浮佛・迦羅迦孫提佛・迦那迦牟尼佛・迦葉佛も皆是の如く說く。

(八) 一二九七 (三六七)[八](修習經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に勤めて方便して禪思を修習し、內に其の心を寂にすべし。所以は何ん、比丘、禪思して內に其の心を寂にし、精勤方便せば、是の如く如實に顯現すればなり。云何が實の如く顯現するや。老死實の如く顯現し、老死の集、老死の滅、老死の滅道跡實の如く顯現す。生・有・取・愛 受・觸・六入處・名色・識・行・實の如く顯現し、行の集、行の滅、行の滅道跡實の如く顯現す。此の諸法の無常・有爲・有漏實の如く顯現す』と。佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

(九) 一二九八 (三六八)[九](三摩提經) 是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『當に無量三摩提を修し、專精に繫念すべし。無量三

【六】 巳に此の喩なし。巳には十二因緣の逆觀を擧ぐ。

【七】 一、毘婆尸佛 Vipassi 二、尸棄佛 Sikhi 三、毘濕波浮佛 Vessabhu 四、迦羅迦孫提佛 Kakusandho 五、迦那迦牟尼佛 Konāgamano 六、迦葉佛 Kassapo 七、釋迦牟尼佛 Sakyamunī

【八】 S. 12. 83. Sikkhā. 緣起を顯現せんが爲に禪思を修習すべし。

【九】 S. 12. 84. Yoga. 緣起を顯現せんが爲には無量三摩提を修すべし。

新訂雜*阿含經（校訂相應阿含經中）

卷の第十五

（第三因緣誦　第一因緣相應の續き、第三部（原第十五卷））

（第五品）

（一）二九〇（三六五）（說法經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『謂ゆる〔二〕見法般涅槃とは云何が如來は見法般涅槃を說きたまふや』と。諸の比丘、佛に白さく『世尊は是れ法根・法眼・法依なり。善い哉世尊、唯だ願くは爲に見法般涅槃を說きたまへ、諸の比丘聞き已りなば、當に受け奉行すべし。云何が比丘は見法般涅槃を得るや』と。佛、比丘に告げたまはく『諦かに聽き善く思へ、當に汝が爲に說くべし。若し比丘有りて、老病死に於て、厭ひ欲を離れ滅盡して諸の漏を起こさず、心善く解脫せば、是れを比丘見法に般涅槃を得と名づく』と、佛此の經を說き已りたまひしに、諸の比丘、佛の說かせたまふ所を聞きて、歡喜し奉行しき。

（二）二九一（三六六）（毘婆尸經）　是の如く我れ聞きぬ。一時、佛、舍衞國の祇樹給孤獨園に住まりたまへり。爾の時世尊、諸の比丘に告げたまはく『〔四〕毘婆尸佛未だ正覺を成ぜざりし時、獨一靜處にて、專精に禪思し、是の如き念を作しぬ。「一切世間は皆生死に入り、自ら生じ自ら熟し、自ら滅し自ら沒す。而かも彼の衆生は、老死の上なる出世間の道に於て、實の如く知らざるなり。卽ち自ら、何に緣りて此の老死有るかを觀察せん」と。是の如く正しく思惟し觀察して、實の如く〔五〕無間等に知を起こすことを得たり。「生有るが故に此の老死有り、生に緣るが故に老死有り」と。復た正思惟すらく

*この雜阿含は校訂せるもので、今は大正藏原本も新訂も俱に第十五なり、第一、五蘊誦、第二、六入處誦に續く第三誦の第一相應の第五品より始まる。第五品は佛の所證、因緣を主とする十六經なり。（一）は品中の經の順位一一九一〇は校訂經の順位（三六五）は大正藏九九雜阿の順位なり。

【一】cf. S. 12. 16. Dhammakathika. 老病死に於て厭ひ、欲を離れ滅盡して諸漏を起さず心善く解脫せば、之を見法般涅槃といふ。

【二】diṭṭhadhammanibbāna 現實に於ける涅槃。

【三】S. 12. 4—9. Vipassi 毘婆尸佛はじめ、過去七佛は、十二因緣の順逆を自ら覺られたり。

【四】Vipassi (vipaśyn) 二十四佛の第十九、七佛の第一。

【五】Samanantara全く其の直後に。

第五道誦（卷二三—二八）

目次

阿含部 二

椎尾辨匡譯

國譯一切經

大東出版社藏版